

地域連携研究

帝京科学大学地域連携推進センター年報 第1巻

目次

巻頭言

「学生を活かし、大学を活かし、社会を活かす」～帝京科学大学における地域貢献活動誕生の経緯～

花園誠…………… 5

教職員の地域連携活動事例報告

オープントップチャンバーを用いたキヌアの大気汚染物質耐性評価

和田龍一・齊藤聖明・谷晃・花園誠・永沼充

田中禅价・大神田良行・杉本公司…………… 9

認定こども園における保育者養成教育実践活動の試行（継続）

木村龍平…………… 13

公園とのパートナーシップによる環境教育教材の開発とプログラムの実践

古瀬浩史…………… 15

薬剤師会と連携による薬物乱用防止教室の指導者養成ための情報提供

小島尚…………… 17

障害児・者に使用可能な馬具の開発及び障害児の乗馬活動支援

石井孝弘…………… 19

学生の地域連携活動事例報告

フリーマガジン『ネコノメ』と『広報うえのはら』を用いた本学と上野原市の情報発信

加賀谷玲夢・高橋留衣…………… 25

山梨県立富士湧水の里水族館との連携活動について

加賀谷玲夢・増田圭…………… 31

障がいのある人を対象とした障がい者乗馬の実践

田口愛…………… 37

特別支援学校における夏季集中療育プログラムの実践

小林旭・千村優馨・金井祐樹…………… 41

上野原自然探検隊部 2016 年度の活動報告

青木優衣…………… 43

障害児者及びその家族とかかわるスタッフへの支援 ～認知症カフェと乗馬活動を通して～

眞田英知・佐藤駿・中村汐里・金井祐樹…………… 45

上野原市内における動物介在活動の実践

注連育美	47
------	----

足立区における飼い主のいない猫を減らすための地域連携活動の実践

三井香奈・田中翔優・加藤翼・山本葉月・加隈良枝	51
-------------------------	----

平成 28 年度 J-DRUMS 地域連携活動報告

恩田翔央・菊池康平・貝塚正明・山田陽菜・瓜生正隆・大島理紗	
正田ちえ・渡邊真美・西島加南子・豊田輝	53

上野原アドベンチャー 年報

内藤優	55
-----	----

その他の研究・報告

「謎解き図書館リアル脱出ゲーム」：「夢の体験教室」における大学施設体験型講座の実践報告

神谷純子	61
------	----

ロールプレイによる認知症高齢者声掛け訓練の実践―足立区認知症高齢者ネットワーク事業と連携して―

吉賀成子	67
------	----

日常生活圏域における生活課題への接近 ―千住地域における地域連携活動―

浅沼太郎	71
------	----

発達障害児に関わる専門職に対する研修会の開催報告

石井孝弘	73
------	----

医療施設が行う治療的乗馬活動におけるプログラム立案への支援報告

石井孝弘	75
------	----

多摩動物公園における遠足の支援実践

清水舞佳・佐渡友陽一・花園誠	77
----------------	----

「青少年のための科学の祭典・山梨大会」の経緯と 2016 年度の成果

花園誠・青木直樹・山田知代・大須賀隆子・木村龍平・花園美樹・榊原健太郎・松影香子	81
--	----

足立区立小学校における生活科授業支援の実践

鯨島豊・榊原健太郎・花園誠	85
---------------	----

廃校を活用した環境教育支援実践と成果

見邊竜太・古瀬浩史・榊原健太郎・青木直樹・花園誠	91
--------------------------	----

夏休み親子教室の実践と成果

花園誠・大海由佳・藤井志帆・望月崇博・木村龍平	
花園美樹・榊原健太郎・馬場千秋・岡本忠典	95

NHK 環境キャンペーンイベントへの出展を通じた社会貢献活動の報告

榊原健太郎・石木めぐみ・佐鳥たみえ・浅見晴香・藤咲舞・花園誠	99
--------------------------------	----

資料

平成 28 年度地域連携推進センター構成員一覧	105
平成 28 年度地域連携推進センター予算	106
平成 28 年度共同研究・協定書取り交わし機関一覧	107
平成 28 年度地域連携推進センター活動統計	108
平成 28 年度地域連携活動記録表	111
地域連携研究投稿規程	195

巻頭言「学生を活かし、大学を活かし、社会を活かす」 ～帝京科学大学における地域貢献活動誕生の経緯～

花園誠(地域連携推進センター)

本学は1990年4月、山梨県北都留郡上野原町に、物質工学科、電子情報工学科、経営工学科、バイオサイエンス学科の理工系4学科から構成される理工学部のみ単科大学として開設された。

一期生を世に輩出した翌年の1994年、技術支援による地域連携を構想し「地域連携協議会」が設置された。これ以降、一時期ではあるが地域との連携方針が定期的に協議されるようになる。そして1999年、上野原キャンパスに隣接した場所に「上野原・東京西工業団地」が完成したとき、企業の研究所を誘致する「テクノリサーチパーク」構想が生まれた。本学がもつ工学系の知的財産による地域貢献が模索され、教員主体での公開講演会も開催された(図1)。

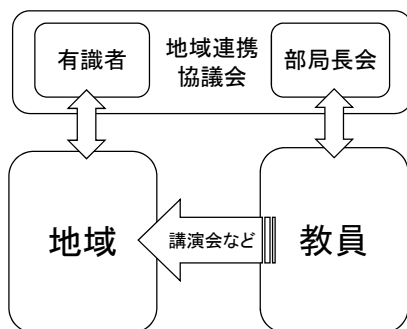


図1. 教員主体の地域貢献体制

しかし、バブル崩壊の余波で金融機関は設備投資に慎重であった。融資がままならず、テクノリサーチパークが建設されるはずの造成地は、研究所誘致が空転してしまう。整備途中で人と車の立ち入り規制がされた広大な空き地は、そのまま荒れ果て、いつしか野生動物の住処となった。テクノリサーチパーク構想の中で、アカデミズムの一翼を担うはずであった本学は、この時、一旦は組織的な地域貢献の機会を失う。

2000年になり、バイオサイエンス学科の中に「動物との共生」を理念とする新コースの新設が構想された。同年7月、その構想は具体化に向けて動き出す。そして翌2001年4月、バイオサイエンス学科にアニマルサイエンス学科の前身である「アニマルサイエンス・コース」が開設された。この時、「学校飼育動物支援」・「上野原ペット楽園化」・「農山村セキュリティ」・「セラピーホース育成」を4本の柱とする新たな地域貢献プランも誕生した。理念を「動物との共生」とするこれらの新たな地域貢献プランは、現在の本学の包括的なイメージである「いのちをまなぶキャンパス」へと発展的に昇華することとなる。

2001年4月、アニマルサイエンスコースの一期生124名を迎え入れた。新興の分野に期待する若者の集団である。彼らを活かすため、志を共にする学生の組織づくりに取り組んだ。今に至るアニマルサイエンス系のサークルの立ち上げである。そして、動物園研究、ドッグ

トレーナー研究、野生生物研究、ビオトープ研究、動物介在活動、馬術、アニマルサイエンス研究(後の猫の目報道部)等の同好会が誕生した。次に、この学生たちの活躍の場所を求め、あらゆるつてをたどり交渉に出向いた。学生を引率し、上野動物園、多摩動物公園、葛西臨海水族園、山梨県動物愛護指導センター、老人養護施設、動物病院等の訪問を繰り返し、活動の受け入れを打診したのである。今日の地域連携活動の過半は、このようにして始まった課外活動の副産物である。大学組織の中で最大構成員である学生を組織化することで「学生の若い力を建設的に地域還元する仕組み」ーいわば「学生運動のルネッサンス」ーが動き出したのである(図2)。折に触れ用いるキャッチフレーズ「学生を活かし、大学を活かし、社会を活かす」はこのときに生まれた。

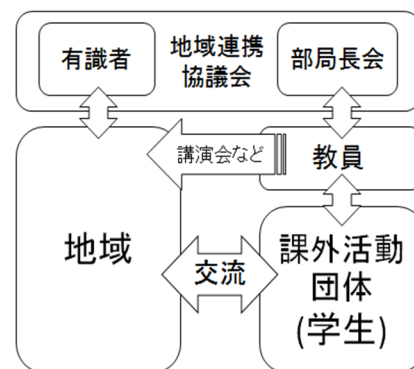


図2. 主戦力学生・教員バックアップの地域貢献体制

2005年、学生主体の活発な地域貢献活動を支援する目的で、「地域連携教育推進センター(初代センター長引馬基彦教授、第2代センター長落合鐘一教授)が設立された(図3)。このとき、学生の地域貢献活動に対して助成金を支給する制度が整備された。年度末には報告会が開催され、学生の活動のみに限定していたが、年次報告書が発刊されるようになった。

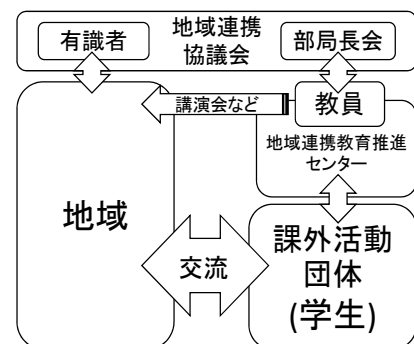


図3. 主戦力学生・教員バックアップの地域貢献(センター設立以後)

2010 年、東京都足立区に千住キャンパスが開設され、「地域連携教育推進センター」の活動を継承・統合した「地域連携推進センター」が発足した。事務局には「地域連携推進室」を置き、専従職員を配置するとともに、これまでの地域貢献活動を「教育推進」・「研究推進」・「社会貢献」の 3 部門に整理し、プロジェクトチームを立ち上げた。そして、各プロジェクトに取りまとめ役のコーディネーターをおいた。地域貢献の組織は全学的になり、機能的に整備され、今日に至る体制が整ったのである(図 4)。

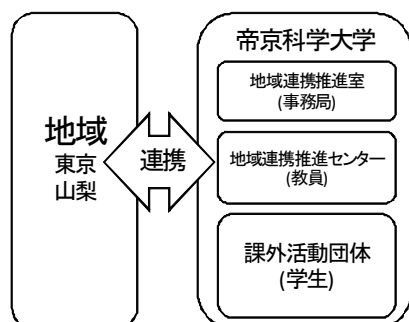


図 4. 地域連携推進センター設立後の地域貢献体制

2012 年、本学は本部を上野原から千住キャンパスに移設した。これに伴い、山梨地域と足立区の地域貢献活動の拡充を図り、地域連携推進センター所属の教員を増やし、「教育推進」・「研究推進」・「社会貢献」の 3 プロジェクトにそれぞれ 1 名としていたコーディネーターを両キャンパスに 1 ずつの配置とした(図 5)。

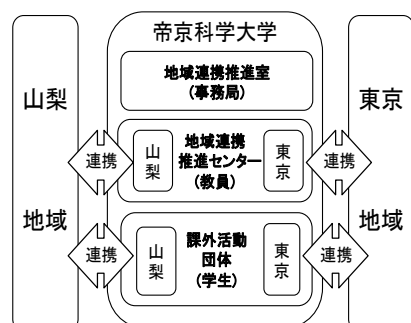


図 5. 現在の地域貢献体制

このようにして「学生を活かすこと」を目的として始まった「地域貢献活動(＝地域における課外活動)」であるが、予想もしない展開もあった。それが「こども学部(2017 年「教育人間科学部」に名称変更)の開設」である。その経緯を簡単に紹介する。

2002 年 4 月のある日、入学したばかりのアニマルサイエンス学科の 2 期生が教員を尋ねてきた。新しいサークルを作りたいという。先週末にアニマルサイエンス学科のサークル説明会を聴いたばかりである。「学校飼育動物の支援をしたいのだけれども、そんな活動目的のサークルはなかった。あたらしいサークルを作りたい。」

彼一人の申し出ではあるが、アニマルサイエンス学科が構想する地域貢献プランの 4 本柱の一つ「学校飼育動物支援」に合致する。さっそく支援することにした。例によって、活動の場所を求め、市内の小学校全てに活動受け入れの交渉したのである。電話交渉の結果、当時

の町内 10 校中の 4 校より活動受け入れの快諾を得ることができた。そして、「一人ではサークル活動にならないから」と活動の主旨に賛同する数名の学生を発起人に「動物介在教育研究会(後の動物介在教育研究部)」を組織し、小学校の訪問活動を開始した。「ふれあい動物教室」の始まりである。

そして 5 年が経過、この活動が累積して 150 回を超えた 2006 年、「動物との共生」を一步進めた「子どもと動物の共生」をコンセプトとする「動物こども学科」が構想された。学生主体の地域貢献活動である「ふれあい動物教室」に対する地域社会のニーズの高まりが確信となり、この構想の具体化を後押しした。翌 2007 年 3 月に「指定保育士養成施設」の設置計画書を、6 月に「学部設置認可申請書」を、7 月に「課程認定申請書」を提出した。そして、2008 年 4 月、こども学部こども学科が開設された。元をたどれば「学生主導で始まった地域貢献活動が、新学部設置へと結びついた」のである。

— 発端は「学生のために」と始めた地域貢献活動であった。しかし、実際に活動に出かけてみると、地域社会が大学に期待することは実に多岐にわたっていることに気が付く。地域連携推進センターの、地域と大学を結びつける役割はますます重要性を帯びてきたと実感する。「本学ではどのような地域貢献活動が実施されているのであろうか。」地域と大学を結びつけるためには、本学の地域貢献活動の実態を広く地域に配信することも重要であろう。この年報が、その一助になれば幸いである。

引用参考文献

花園誠(2005)「課外活動と教育」帝京科学大学教育懇談会記録集

帝京科学大学(2013)「A-2 地域と大学との関係性の強化」平成 25 年度大学機関別県立評価自己点検評価書,pp.78-94.

教職員の地域連携活動事例報告

オーブントップチャンバーを用いたキヌアの大気汚染物質耐性評価

和田龍一・齊藤聖明（生命環境学部 自然環境学科）・谷晃（静岡県立大学）

花園誠（教育人間科学部こども学科）・永沼充（教育人間科学部 学校教育学科）

田中禅价（臨済宗真福寺住職）・大神田良行・杉本公司（上野原ゆうきの輪）

キーワード：キヌア、オーブントップチャンバー、大気汚染物質

1. はじめに

キヌア (*Chenopodium quinoa*) はヒユ科アカザ亜科アカザ属植物に含まれ、我々にとって身近な野菜であるほうれんそう (*Spinacia oleracea*) に分類上近縁とされている。南米アンデス山脈の高地において数千年前から食用として栽培されており¹⁾、疑似穀物（アワやヒエといった雑穀に準じる作物でありソバなどが該当）²⁾に分類される。キヌアは良質なタンパク質、鉄やマグネシウムといった多種類のミネラルやビタミンを多く含んでおり、栄養バランスのよい作物として近年ヨーロッパや日本などで注目され、山梨県にて試験的な栽培が行われている¹⁻³⁾。上野原市においても一昨年本学と包括的な連携協定を結び、キヌアの栽培を地域活性化の柱として積極的に行っているものの（図1）⁴⁾ 日本の気候に適した栽培方法が確立されておらず、またキヌアの大気汚染物質に対する耐性の知見もほとんどない。本活動では、大気汚染物質の一種であるオゾンがキヌアの生育にもたらす影響に関する知見を得ることでキヌア生産方法の確立に寄与し、産官学地域連携活動を学術的な面から推進する。



図1. 栽培したキヌア

2. 活動報告

以下の活動を行った。

- ・3月～5月（場所：上野原キャンパス実験研究棟）
オーブントップチャンバー（OTC）と呼ばれる栽培実験を行うための装置の組み立てと性能評価を実施
- ・5月23日（場所：静岡県立大学）
OTCを用いた栽培実験に関する打ち合わせを静岡県立大にて実施
- ・8月2日（場所：上野原キャンパス 大学裏の圃場）
キヌアの播種を実施
- ・8月12日（場所：上野原キャンパス）
キヌアの苗の鉢への植え替えを実施、除草シート張りを実施
- ・9月30日（場所：上野原キャンパス）

OTC6台を設置、OTCを用いた栽培実験の開始

- ・9月30日～11月15日（場所：上野原キャンパス）
OTCを用いたキヌアの生長観察の実施
- ・11月15日（場所：上野原キャンパス）
生長して子実をつけたキヌアの刈り取りを実施
- ・11月～1月（場所：上野原キャンパス）
キヌアの新鮮重量、乾燥重量、子実収量、1粒重量の分析を実施
- ・2月4日（場所：静岡県立大学）
OTCを用いたキヌアの栽培実験の結果に関する打ち合わせを実施
- ・3月13日（場所：上野原キャンパス）
報告書の提出

3. 結果と考察

大気汚染による植物への影響を評価する方法として、野外の汚染物質を除去した大気を導入する浄化室と、そのままの大気を導入する非浄化室を設置し、この両室内で植物を生育させ、実際の野外における大気汚染による植物影響評価を比較する方法がある。この比較にはオーブントップチャンバー（OTC：図2）と呼ばれる装置が使用されることが多い⁵⁻¹⁰⁾。OTCは天蓋部が解放された形になっており、チャンバ下方から導入された大気は天蓋部から排気される。そのため、この装置内で生長する植物の環境条件は、大気の浄化、非浄化を除いて同一であり、野外の環境下で大気汚染物質が植物に与える影響を評価するのに有効な装置である。本活動では、OTCを用いてキヌアのオゾンによる可視障害、および生長量・子実収量への影響を実験により評価し、大気汚染物質への耐性に関する知見を得る。

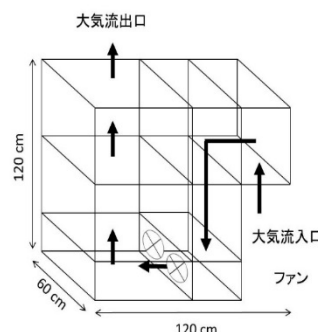


図2. OTCの構造（上）と栽培実験に用いたOTCの写真（下）

OTCのオゾン除去性能評価の実験結果から浄化OTCでは実験期間中、

大気中のオゾンの浄化効率が $77 \pm 7\%$ であることが分かった。OTC 設置日 (2016 年 9 月 30 日) からキヌアの刈り取りを行った日 (2016 年 11 月 15 日) までのキヌア草丈の生長観察を行った。結果、浄化 OTC、非浄化 OTC で生長したキヌアの刈り取り時の草丈に、有意な差は確認されなかった。しかしながら、浄化 OTC で生育したキヌアは非浄化 OTC で生育したキヌアに比べて横方向にも多く成長している傾向がみられた。オゾンによる生理障害により生じることが知られている斑点などの可視被害¹¹⁻¹⁶⁾ は浄化 OTC、非浄化 OTC で生長したキヌアともに確認されなかった。

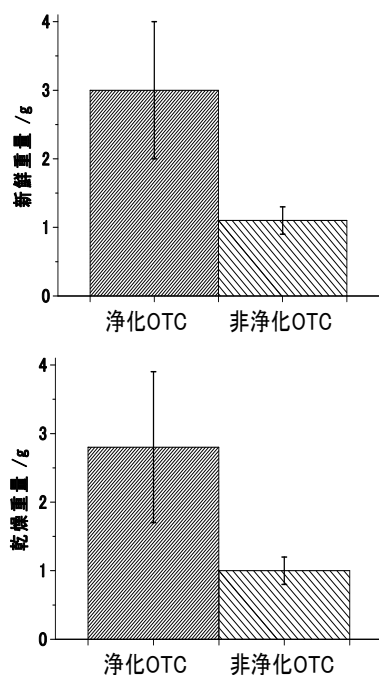


図3. 浄化 OTC と非浄化 OTC で生育したキヌアの新鮮重量 (上) と乾燥重量 (下)

OTC 内で生育後に刈り取ったキヌアの新鮮重量と乾物重量の結果を図3に示す。浄化 OTC と非浄化 OTC で生育したキヌアの新鮮重量はそれぞれ 3.0 ± 1.0 g、 1.1 ± 0.2 g であった。また乾物重量はそれぞれ 2.8 ± 1.1 g、 1.0 ± 0.2 g であった。新鮮重量、乾物重量はともに平均値では浄化 OTC にて生育したキヌアが 2.8 倍大きかった。OTC 内で生育後に刈り取ったキヌアの全子実重量と 1 粒重量の結果を図4に示す。キヌアの全子実重量は、浄化 OTC で 1.3 ± 0.5 g、非浄化 OTC で 0.3 ± 0.1 g であった。全子実重量の平均値は浄化 OTC にて、4.3 倍大きかった。1 粒重量は、浄化 OTC で 3.0 ± 0.4 mg、非浄化 OTC で 1.7 ± 0.3 mg であった。1 粒重量の平均値は浄化 OTC にて非浄化 OTC に比べて 1.8 倍大きかった。浄化、非浄化 OTC で生育したキヌアの重量および子実の重量に有意な差が確認できた ($p < 0.05$)。

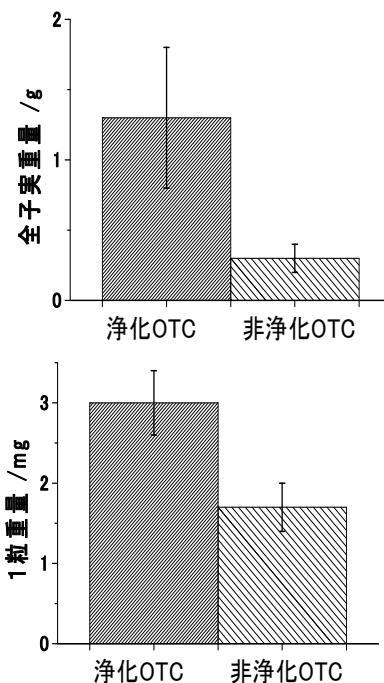


図4. 浄化 OTC と非浄化 OTC で生育したキヌアの全子実重量 (上) と 1 粒重量 (下)

オゾンが植物に悪影響を与える基準として AOT40 と呼ばれる指標が使用される。AOT40 (accumulated exposure over threshold of 40 ppb) は、オゾン濃度のうち 40 ppb を超えた 1 時間値の超過分を積算したドーズ (Dose : 濃度×時間) を表す¹⁷⁾。キヌア生育期間 (2 か月半) における AOT40 は、2.9 ppm h と得られた。この値は UNECE (United Nations Economic Commission for Europe, 2004)¹⁸⁾ が報告している農作物収量が 5% 低下するクリティカルレベルに相当した。上野原市は東京都心とアジア大陸からの影響を複合的に受ける場所であり、オゾン濃度が比較的高く、キヌアの生育がオゾンによって悪影響を受ける可能性が示唆された。

4. まとめ

本活動により、キヌアの大気汚染物質の耐性評価を行った。子実収量に大気汚染物質による有意な影響がみられた。上野原市はその立地から全国的にみてオゾン濃度が高く、上野原市でより高収量のキヌアを栽培するにはオゾン濃度が比較的低い季節での栽培が適している可能性がある。さらに高収量のキヌアの栽培を行う場合、オゾンは反応性が高いため屋内ではオゾン濃度が低くなることからビニールハウスなどの屋内での栽培が適している可能性がある。今後データを積み重ね、栽培方法の特許ビジネスを展開することで、産官学共同にて上野原の特産物としてキヌアの栽培を推進する。

参考文献

- 1) A. Bhargava, S. Shukla, D. Ohri: Chenopodium quinoa - An Indian perspective, *Industrial Crops and Products*, **23**:73-87, 2006.
- 2) 濱岡未恵: 穀物と疑似穀物の特徴, 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要, **2**:87-93, 2005.
- 3) 石井利幸: 山梨県におけるキヌア生産に向けた取り組み, 特産種苗, **8**:17-20, 2010.

- 4) 上野原市役所：キヌア栽培促進に関する情報。 <http://uenohara-job.jp/seminar01/>, 2016.
- 5) A. S. Heagle, D. E. Body, W. W. Heck: An Open-Top Field Chamber to Assess the Impact of Air Pollution on Plants, *Journal of Environmental Quality*, **2**:365-368, 1972.
- 6) B. G. Drake, P. W. Leadley, W. J. Arp, D. Nassiry, P. S. Curtis: An Open-Top Chamber for Field Studies of Elevated Atmospheric CO₂ Concentration on Saltmarsh Vegetation, *Functional Ecology*, **3**:363-371, 1989.
- 7) J. V. H. Constable, M. Litvak, J. P. Greenberg, R. K. Monson: Monoterpene emission from coniferous trees in response to elevated CO₂ concentration and climate warming, *Global Change Biology*, **5**:255-267, 1999.
- 8) 相原敬次, 武田麻由子：可搬型オーブントップチャンバー（OTC）の開発, 神奈川県環境科学センター研究報告, **27**:77-81, 2004.
- 9) T. Vuorinen, A. M. Nerg, E. Vappavuori, J. K. Holopainen: Emission of volatile organic compounds from two silver birch (*Betula pendula* Roth) clones grown under ambient and elevated CO₂ and different O₃ concentrations, *Atmospheric Environment*, **39**:1185-1197, 2005.
- 10) T. Mochizuki, T. Saito, G. Hirai, M. Miwa, T. Yonekura, A. Tani: Development of a reliable method to determine monoterpene emission rate of plants grown in an open-top chamber, *Journal of Agricultural Meteorology*, **71**:271-275, 2015.
- 11) H. E. Heggstad, J. T. Middleton: Ozone in high concentrations as cause of tobacco leaf injury, *Science*, **129**: 208-210, 1959.
- 12) 伊豆田猛：植物と環境ストレス, コロナ社, 東京, 2006.
- 13) 中西準子, 篠崎裕哉, 井上和也：オゾン—光化学オキシダント—, 丸善, 東京, 2009.
- 14) 野内勇：オゾン, PAN の濃度および暴露時間と植物被害, 大気汚染学会誌, **14**:489-496, 1979.
- 15) 久野春子：光化学オキシダントが園芸植物に及ぼす影響, 東京都農業試験場研究報告, **21**:33-166, 1988.
- 16) T. Izuta, K. Takahashi, H. Matsumura, T. Totsuka: Cultivar difference of *Brassica campestris* L. in the sensitivity to O₃ based on the dry weight growth, *Journal of Japan Society for Atmospheric Environment*, **34**:145-154, 1999.
- 17) J. Fuhrer, L. Skarby, M. R. Ashmore: Critical levels for ozone effects on vegetation in Europe, *Environmental Pollution*, **97**:91-106, 1997.
- 18) UNECE, Protocol to Abate Acidification, Eutrophication and Ground-level Ozone, http://www.unece.org/env/lrtap/multi_h1.html, 2004.

認定こども園における保育者養成教育実践活動の試行（継続）

木村龍平（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：認定こども園、保育者養成、実践活動

1. はじめに

本研究は平成27年度に開始し、本年度は2年目となる継続研究である。そのため昨年度研究期間中に明らかとなった課題に対して改善を図りつつ、さらに本年度は、参加学生に対して保育体験活動の教育効果をより高めるために、①園に配置する学部4年生のアシスタント（複数名）への事前指導、②学生アシスタント、園の本活動担当者、及び本研究担当者（申請者）三者間の連携方法、③活動結果の事後授業へのフィードバック方法の三点について工夫を加え実効性のより高いものにしていくことと注力することを目的とした。

当学科では保育・教育実習に先立ち1/2年次生に対し正課で「保育体験活動（動物・ロボット介在保育を含む）」を行い（1年次必修科目「動物・ロボット介在教育演習Ⅰ・Ⅱ」、2年次選択科目「コミュニティワーク演習Ⅰ・Ⅱ」）、保育現場における経験値を高めつつ学習意欲向上を図り、より実りある実習へ接続する教育を行ってきた。そこでは「乳幼児と如何に血の通った保育活動を行うか」に重点をおき、本来的に子どもが好きな当学科学生が余裕のある課題設定の中で楽しさを感じつつも実践的な体験が得られ、学習意欲を高められる。

上野原市内の「こども園」における上記活動は昨年度より開始した。従来は比較的小規模な市立保育所を中心に同様の体験活動を展開してきたが、定員100人規模の園での実施は昨年度からである。そのため派遣学生数を20名としたが、各教室学生配置数が4～5名となり、次のような問題が園から指摘され改善を求められた。

- ・人数が多く教室内でかなりの存在感があり保育指導の障害となった。
- ・不用意な行動を学生がした場合、そちらの指導まで手が回らず児の統制が乱れる。
- ・学生人数が多いため学生間の私語が目立ち、保育体験活動の趣旨から逸脱して「お客さん」に陥ってしまっている学生が見受けられた。
- ・主体的に動けない学生が多い。

以上に対応するため今年度の本研究の目的を遂行するために後述の対応を行うこととした。

本稿では、規模の大きなこども園で保育体験活動を如何に円滑&有意義に導入・実施し教育効果を上げるかについて試行した結果を報告する。

2. 活動結果

活動場所：上野原市立巖こども園

派遣学生内訳：1年次生36名、TA（3年次生）6名

前期前半期間（6/2まで）と後半期間（6/23～7/14）で各10名のべ20名。後期2回の活動は前半期間メンバーのみ派遣。

園行事体験活動：派遣学生7名

活動当日巡回指導教員：本研究担当教員（木村）他、1名（科目担当非常勤講師）

活動対象クラス：園内5クラス（年少2・年中2・年長1）

活動実施日時

＊集合時間9時、解散12時30分

- ・ 5/12、5/19、6/23、6/30、10/20、10/27（一般保育体験活動）
- ・ 6/2、7/14（動物・ロボット介在保育）
- ・ 7/5（園行事体験活動）

＊本活動実施に先立ち平成28年4月に上野原市と本学の間で「保育支援研究契約」を締結した。

3. 結果・考察

3.1 一般保育体験活動

この活動は入学間もない1年生に乳幼児とはどのような存在かを肌身で感じ取ってもらい、保育者へ向け4年間の修学に対するモチベーションを高めると共に、保育/教育実習に備えた経験の積み上げを狙っている。昨年度までは市内各所の幼稚園/保育所に同様の目的・同様の活動を実施してきたが園の規模を考慮し学生派遣人数は4～7人/園であった。本活動では当該園に20人を派遣した。事前の園との打ち合わせでは園長はじめ、このような取り組みは前例・経験がなく円滑な実施に向けた懸念が示された。そのため、当初より予定していた活動サポート・スタッフとして経験豊富な当学科3年次生2名をTAとして派遣、さらに常時、授業担当教員が巡回で活動全体を統括する体制をとることを説明し、派遣学生の名簿やグループ分けなどの情報を園に提供することで、活動当日の（学生指導に対する）園の負担を極力なくすようにすることで、園の理解を得て実施可能となった。

前期前半期間の実施結果は授業内の事前指導（4コマ充当）と初体験となる本活動への事前派遣学生の緊張感から概ね良好であった。しかし、前期後半期間初回（通算4回目の実施回：6/11）では、以下の問題が発生した。

- ・ 学生の身だしなみの乱れ（頭髪の色、服装）
- ・ 遅刻
- ・ 幼児に対する取り組み姿勢：表情、関わりの積極性、声かけ
- ・ 時間進行に対する意識の低さ（次の内容へ移行する際の切り替え、次に自分は何をしなければならぬかの理解と実行）

この状況は当日中にまずTAから授業担当の本活動責任者（木村）へ報告がなされ、これを受け責任者は巡回担当教員と当時の状況の詳細を確認した。特に取り組み姿勢と時間進行に対する問題は、各教室の保育時間の進行に支障をきたし、各クラス担任からクレームが園長に寄せられた状況が把握された。以上の状況を重く受け止めた責任者はすぐに園長と事後対応について協議し、次回活動までの間に再発防止に向けた学生指導を実施することで理解を得た。

これを受けた学生指導では、身だしなみや遅刻の該当者は個別指導を行い、他の問題点については改めて全体指導し厳しく注意喚起した。その結果、次の活動から状況、園の受け止めは大きく改善した。以上のことは、活動実施にあたりTAと巡回教員が現場の状況を複数の目で良く把握できていたことが事態の客観的な状況把握とその後の的確な迅速対応に良く機能したと言える。しかし、TAや巡回教員が問題



図1. 保育体験活動の様子

発生時にリアルタイムに状況改善のための学生指導ができなかった点が今後の改善点である。

3.2 動物・ロボット介在活動

この活動はAIBOをはじめとしたパーソナルロボットやハムスターなどの小動物を使った介在保育を行うものである。園の協力で事前に児を2グループに分け、活動時間の前後半でロボット介在と動物介在を入れ替えて、すべての児が両者との触れ合いを体験できるようにした。この手法自体は当該授業で昨年までに数多く実施しており、経験の蓄積もあったが、本活動初回（5/21）においては以下のような問題が発生し円滑な実施ができなかった。

- ・各クラスの介在活動の時間進行がまちまち
- ・全体的な進行に遅延が発生
- ・動物の搬入・搬出は他園の同介在活動同時実施のため、活動実施人員が不足するため、アニマルサイエンス学科の協力を得たが、園に出入りする関係者が増加したことで、統制が乱れ他学科との連絡連携に支障が生じ、介在活動の開始と終了作業に手間取った。

しかし、児の様子は良好で、事後の保護者の受け止めも好評であった。活動は活動時間が昼食時間に若干食い込んだものの、その他の保育に大きな影響がなかったため園からも問題視はされなかった。しかし運営側として、進行に混乱を生じていたため、対処しなければ次の介在活動で他の問題が発生すれば、いずれ園にも迷惑がかかることは必須であると考え、次のような対応をした。

- ・十分な介在活動計画策定（動物の当日搬入時間の繰上げ）
- ・時間管理者をTA2名のうち1名から選任
- ・各クラスに入る1年生から選任するタイムキーパーには自分のクラスの活動時間管理だけでなく、全体の活動進行についてTA時間管理者と情報共有し足並みがそろよう配慮する

以上により、7/2の2回目の介在活動は運営に関しても円滑に実行することができた。

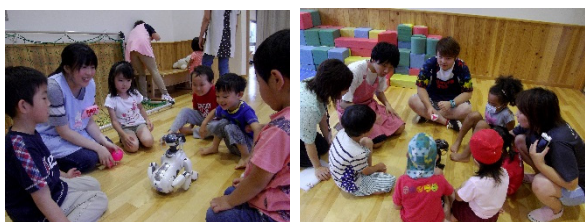


図2. AIBOを用いたロボット介在活動の様子

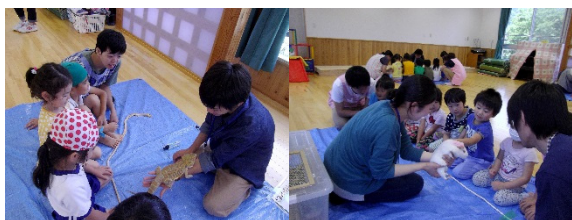


図3. 動物介在活動の様子

3.3 園行事（夏祭り）体験活動

この活動は2年次選択科目で実施するもので、前述までの活動と枠組みが異なる。派遣学生は7名である。少人数であることと、2年生であり、前年に前述の活動経験を他園で得ていることから、TA派遣はない。当日の学生指導は本活動責任者と従来から他園在職時に卒業研究などで懇意にいただき、このような活動における本学当学科学

生の指導において経験が豊富な保育士2名（年長クラス担任）に依頼した（そのため、当学科教員（木村）の巡回は「園行事体験活動」が複数園の同時開催・活動実施のため、短時間の在園による当該保育士との状況確認のみとした）。行事に先立ち、年長クラスの児に対する人間関係構築のため、行事の前週に一般保育時間に参加させた。行事当日は適宜、行事進行、保護者対応を手伝うなかで、保護者も参加する大規模な園行事の実際を体験させた。

実施時期が前述の活動6回のうち5回まで終了した時点であったので、園側も学生派遣による体験活動の実施に慣れてきたためか、問題の発生はなく実施結果は良好であり、園行事を体験させるという目的は達成された。事後学習で省察課題を与え、当該学生には一過性の活動経験で終わらぬよう、得た経験が定着するよう事後指導した。

4. まとめ

本活動では年少から年長まで全5クラスで80人超の児を対象に、派遣学生のべ43名で体験活動を行うという、当学科としては未経験の大規模な学外活動の実施となった。また、当該園は、当学科ではこれまで未経験な（職員数の多い）「こども園」での実施でもあった。

その結果、規模の大きさ（複数クラス同時実施）に起因する種々の問題が活動当日に発生した。しかし、本活動で事前に構築したTAや巡回教員による活動当日のサポート体制が機能し、迅速に事後対応ができ、計画した活動は最後まで実施することができた。以上の結果から、本活動で得たノウハウは次年度以降の継続に生かされるとともに、これからの幼児教育・保育の新しい形態として全国に定着していくであろう「こども園」で、このような学外体験活動が従来と変わらずに実施できたことは、保育者養成学科である当学科の教育活動に大きく貢献したと考えられる。また、今後（平成29年度から）、上野原市の幼児教育・保育施設が当該園を含め、2つの大規模こども園に集約されることを考えると、今後の当学科のこのような教育方法の発展的継続にも大きく貢献したと言える。

子どもの人口減少傾向が強まる中で、幼児教育・保育施設の大規模・集約化は不可避である。このような背景から本来の教育・保育実習もこのような施設で実施することが求められる。そのため履修学生がこれらの実習に先駆けて、このような新しい枠組みの施設で乳幼児と触れ合い、環境に慣れ親しんでおくことは、保育者養成教育にとって大変有意義である。教育・保育実習に先駆けて、本活動のような大規模な学外体験活動を「こども園」で実施した例は数少ない。本活動で得た知見・ノウハウは他校の保育者養成教育にも、今後のモデル・ケースとして有意義であると考えられる。

以上については、今後、本活動責任者が関連学会や全国保育士養成協議会大会等で適宜、報告し情報公開の予定である。

公園とのパートナーシップによる環境教育教材の開発とプログラムの実践

古瀬浩史（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：インタープリテーション、都市公園、プロジェクト・ベースド・ラーニング

1. はじめに

学校や社会教育施設などの教育機関のみならず、都市公園や商業施設、あるいはイベントなどにおいても、自然環境に関する教育プログラムが提供される機会は少なくない。教育のための施設を伴わない公園やイベント会場においては、一時的に展示ブースを設置し、そこを拠点にして来訪者に対しての解説プログラムが実施されることが多い。本学学生が関わる地域連携事業や実習、学祭、オープンキャンパス等においても、展示ブースを拠点とした解説活動がしばしば行われている。公園管理者やイベント主催者にとっては一定の水準を持った展示ブースが学生によって出展されることは運営上のプラスであり、学生にとっても社会参画のよい機会となっている。

このような活動は、大学サイド（学生や教員）と公園等とのパートナーシップを深めることによって、より双方に大きなメリットを生じさせることができると思われる。例えば、現場の必要性をより理解し、それに合ったプログラムを立案することは、現場にとって役立つとともに、学生にはより高度で実践的な企画や運営の機会になる。また継続的なパートナーシップによる活動は、PDCA プロセスの繰り返しによってよりいっそう質の高い活動に発展させることができる。

インタープリテーションを中心テーマとしている古瀬研究室では、近隣の公園や団体等と協働したインタープリテーション・プログラムの計画や実践を行っている。本報告では、2014 年から 2016 年までに実施した公園とのパートナーシップによる活動の成果や課題について報告する。

2. インタープリテーションのための専用車「インタープリター・カー」

山梨県森林公園金川の森は、笛吹市の桂川河畔に広がる平地林の公園である。36ha ある敷地は、河川と高速道路等によって分断されており、一つの公園というよりはいくつかの公園の集合体のような形になっている。このため管理事務所があり、人的なサービスが提供されているエリアに利用者が集中する傾向がある。このような課題状況を踏まえ、公園の様々な場所で機動性を持ってプログラムを展開できることをねらい、インタープリテーションのための専用車「インタープリター・カー」の導入が計画された。このアイデアは公園の事業計画案を作る際に筆者が提案したもので、開発は公園の指定管理者である株式会社アメニス山梨および自然教育研究センターが主体となって行った。当研究室は、教員と学生が開発のためのワークショップに参加し、アイデアの提供や、車に搭載する展示ユニット（後述）の開発に協力した。

インタープリター・カーは2014 年度に検計が始まり、2015 年度に運用が開始され、2017 年現在も運用が続いている。古瀬研究室では2015 年、2016 年度にインタープリター・カーを活用したプログラム運営に協力した。

3. 展示ユニットの開発

インタープリター・カーの企画では、展示やプログラム物品を、関連するテーマでひとまとまりのセットにした「展示ユニット」として作っていくことを想定した。車に常時搭載している基本的な物品（机やタープなど）とは別に、例えば「野鳥」、「昆虫観察」などのテーマで「展示ユニット」を複数作成しておき、季節やイベントの目的に合わせてユニットを載せ替えてプログラムを行うイメージである。古瀬研究室の学生主体の活動として、この「展示ユニット」、すなわち、特定テーマでまとめられた教材セットの開発に取り組んだ。

学生が実習や学内イベント等で自由に制作する展示や教材には創造性に富んだ面白いものがある一方で、共通して感じられる課題もある。その一つは、展示の繰り返し利用があまり想定されていない点である。単発のイベントしてと捉えられるのであれば、繰り返し利用の視点はそれほど重要でないとも言えるが、公園などにおけるインタープリテーションの実務においては、労力をかけて制作するものは、当然ながら繰り返し利用を想定する。たった一回で展示を使い捨てることは効率の面でも、環境的な観点でも好ましくない。また、繰り返し利用する展示や教材では、収納性（一定の規格でコンパクトに収納できる）も重要な視点となる。学生の制作する展示や教材が活動終了後に劣化したものが放置されていることがしばしばあり、この点はとても気になっていた。

そこで、学生には公園とのパートナーシップの中で必然的に求められる要件として、繰り返し利用に耐える耐久性と収納性、またそれに加えて、さまざまな機会に活用できる「汎用性」を提示した。



図1. インタープリター・カーの活動

最初に着手したのは「ドングリ」の展示・教材であった。ドングリが実るブナ科の樹木は、ほとんどの都市公園や緑地にみられ、また堅

果は工作の材料になるなど大人にも子どもにも人気があることから、とても汎用性のある教材となった。前述の金川の森での実践だけでなく、様々なアウトリーチ・プログラムに持ち出され、現在も活用されている。この事例は卒業研究として、楢井¹⁾と宮嶋²⁾が報告した。

2016年度からは、「鳥の羽」と「スズメバチ」をテーマにした展示ユニットの開発にも着手した。これらは、2017年度のゼミ学生が引き継ぎ、使用しながら改良や追加を行っている。

4. 桂川ウェルネスパークにおける犬連れ公園利用に関連したプログラム

(1) 経緯

桂川ウェルネスパークは、大月市にある山梨県立の都市公園であり、本学の複数の実習やサークル活動に活用され、多くの連携実績のある公園である。公園内にはドッグランや教育用に活用できる水田や畑があり、公園主催のインタープリテーション活動も盛んに行われている。2012年前後に、本学ドッグトレーナー研究部の顧問であるアニマルサイエンス学科の藪田氏と、同学科教授(当時)の小林毅氏が同公園を訪れ、本学の犬関係の活動の場としての活用についての相談をし、2013年にはドッグトレーナー研究部が活動を開始している。同公園の2014年から2018年度にかけての事業計画案が検討された際に、筆者は「ドッグフレンドリーパーク」の構想を提案した。「ドッグフレンドリーパーク」は、「愛犬家にも、そうでない方にとっても快適な公園」というコンセプトで、愛犬家にとって便利な施設を設置したり、犬が好きではない方に配慮した公園利用のルールを検討するなど、双方に快適な公園のモデルをつくらうとするものである。アニマルサイエンス学科を持つ本学の専門性を活かして貢献することを想定したものである。その後、公園の事業計画の中にこの構想が記載された。

(2) 愛犬家を対象にした展示の制作

2015年度には学生が主体となり、桂川ウェルネスパークの管理事務所がある棟(里山交流館)で愛犬家向けの展示を企画した。これは犬同伴利用者のセンター施設利用や、愛犬家同士の交流をうながすことを目的としたものであった。アイデア的には面白いものであったが、当初予定された頻繁な展示更新ができずに、年度途中で中止された。

(3) 「ドッグフレンドリーパーク」実現のための調査等

2016年度には、「ドッグフレンドリーパーク」を実現するためにはどのような具体的な取り組みが必要なのかを明らかにするために、ワークショップやアンケート調査が行われた。ワークショップは、ドッグトレーナー研究部と古瀬研究室の合同で企画され、愛犬家の視点で公園に期待する要素のアイデア出し等が行われた。公園利用者を対象としたアンケート調査は、犬を飼っている人、飼っていない人双方の視点で、快適な公園にするための意識調査を行い、犬の排泄の問題を中心にして具体的な対策が検討された。それらは春日³⁾によって卒業論文にまとめられるとともに、公園管理者に報告され、ドッグフレンドリーパーク構想実現に向けたマネジメントの参考にしていただくことが期待されている。

5. 成果と課題

自然公園だけでなく、都市公園においても環境学習が行われるようになるなど、公園はどんどん多面的な機能を持つようになっていく。

この傾向はSDG'sや生物多様性国家戦略といった新しい社会の枠組みの中でより顕著になっていくものと思われる。しかしながら、多くの公園では職員の人数は必要最小限であり、来園者サービスにはなかなか手が回らない現状があると推測される。この点で、大学との地域連携活動に対する公園側の期待は大きい。3年間の活動の中でも、本学が近隣の公園において貢献できることが多くあることが実感できた。

地域連携事業を学生の教育の視点で考えた時に、もっとも大きな意義は、地域社会の課題解決や社会貢献といった実社会の状況において、学生が創造性を持って企画やデザイン、教育実践等を行い、教室で得た知識をリアルな「文脈」の中で再構築できることではないだろうか。学生のプロジェクト・ベースド・ラーニングの機会とするためには、公園サイドの教育に対する理解も不可欠である。継続的な活動で相互理解を深め、パートナーシップを醸成していくことが重要だと考える。本ケースで取り上げた金川の森には本学のOBが職員として勤務しており、桂川ウェルネスパークには非常勤講師を兼務される職員がいるため、良好なパートナーシップができつつある。

課題としてあげられるのは、提供する展示やプログラムの質の向上である。今回報告した多くの事例は3年生が主体となって行ったが、プロジェクトの最初の段階は、質の面でかなり課題がある。学生に経験を積ませる観点では自由に組み立てて失敗から学んでほしいと思いつつも、口を出さざるをえない場合も少なくない。それらを卒業研究で発展させたり、前年度の成果に積み上げていくことによって、質の維持や向上を図っていきたい。

参考文献

- 1) 楢井 美月：都市公園等での活用を想定した、汎用性のある環境教育プログラムの開発 ～どんぐりを題材に～, 帝京科学大学古瀬研究室卒業研究, <https://www.furuse-lab.com/activity/卒業研究の成果/>, 2015
- 2) 宮嶋 健太：都市公園での使用を想定した環境教育プログラムの開発と活用 ～木の実を主要な題材として～, 帝京科学大学古瀬研究室卒業研究, <https://www.furuse-lab.com/activity/卒業研究の成果/>, 2017
- 3) 春日 弘美：犬連れ公園利用に関する研究 ～桂川ウェルネスパークにおける「ドッグフレンドリーパーク」の実現に向けて～, 帝京科学大学古瀬研究室卒業研究, <https://www.furuse-lab.com/activity/卒業研究の成果/>, 2017



図2. ドッグフレンドリーパークに関するワークショップの様子

薬剤師会と連携による薬物乱用防止教室の指導者養成ための情報提供

小島 尚（生命環境学部 生命科学科）

1. はじめに

本事業は薬物乱用防止啓発活動を小学校等の教育現場で確実に実施することを目的に行うものであり、この取り組みを企画するに至った経緯から説明する。

薬物乱用防止啓発教育では低年齢から医薬品の適正使用を含めて繰り返し行うことが重要と言われている¹⁾。現在、文部科学省の学習指導要領には小学校から医薬品の適正使用、また、薬物乱用防止教育を実施するように示されている。例えば、神奈川県では平成13年度、飲酒、喫煙、薬物乱用の実態調査を県内の高等学校で実施した。更に、小学校から高等学校までのそれぞれの段階に合わせた教育マニュアルを作成し、教育委員会と衛生部薬務課が連携、飲酒及び喫煙の防止教育と合わせて積極的に啓発教育の整備を行っている²⁾。都道府県ではそれぞれの地域で対策をたて、覚せい剤をはじめとする薬物乱用防止に取り組んでいる。中でも、薬物乱用防止教育は保健体育及び養護教員のみならず、警察関係者また学校薬剤師が行う機会が多くなっている。しかし、ダメ絶対の言葉のように、禁止、脅しの教育と言われ、マンネリ化さらに指導者不足が指摘されていた。更に、危険ドラッグ（当時、いわゆる脱法ドラッグ）は中枢刺激作用などの毒性が未知であり、法的規ができないことにあった。

2. 薬剤師会との連携に至る基盤的背景

現在の危険ドラッグ、当時は合法ドラッグあるいは脱法ドラッグと呼ばれる中枢刺激性を有する化学物質あるいは植物が平成5、6年ごろから流通していた。いわゆる脱法ドラッグは新規化学物質であることから薬理や毒性作用が不明であるため、その危険性が判断することが困難であった。そこで、著者らは平成8年頃から、いわゆる脱法ドラッグの化学分析及びマウス行動毒性について検討を行い、その危害性を明らかにすることを目的に行っていた。その結果の一部は薬事法指定薬物の科学的根拠となった³⁾。いわゆる脱法ドラッグは新規物質のため中枢興奮作用や依存性などの情報がなく、覚せい剤やシンナーのように危険性を適確に伝えることができない。そのため、従来の乱用薬物とは異なり、いわゆる脱法ドラッグの危険性を自ら判断できるようなことが求められている。

このような背景から、従来の薬物乱用防止教育の教材/資料では不十分であり、指導者が薬物の危険性を理解できておらず、また、指導方法も変更する必要性に迫られていた。

平成22年度から、学振科研費基盤研究C「違法ドラッグ毒性情報を薬物乱用防止教育に活用するための基礎的研究」において、いわゆる脱法ドラッグに関する情報を活用して実効性の高い教育啓発活動を行うための教材や教授法等を検討してきた。また、平成23年4月、本学に著者が着任したことをきっかけに、従来の神奈川県内での活動に加え、足立区及び山梨県と地域と密着した地域に根ざした薬物乱用防止活動をスタートすることとした。

帝京科学大学地域連携公開シンポジウム 「薬物乱用防止教育の実効性を高めるために何ができるか？」 (日本学術振興会科学研究助成金基盤研究講演会)	
開催目的 開催責任者は日本学術振興会科学研究助成金基盤研究「薬物乱用防止教育の実効性を高めるための違法ドラッグ毒性情報の活用に関する基礎的研究」が採択されている。 その一環として、我々のもつ情報を薬物乱用防止啓発活動の指導者に提供し、日常の薬物乱用防止活動に役立てることを目指す。更に、防止教育の実効性を高めるための補完的な資料教材の作成に向け、防止教育での課題等を収集や情報交換を行う。	
開催概要 日程：平成24年2月18日（土曜日）午後2時から5時。 対象：地域(足立区)の教育、薬物乱用防止指導員や薬剤師等の啓発活動指導者。 会場：帝京科学大学千住キャンパス3号館講堂 共催：足立区薬剤師会、 後援：区教育委員会、千住警察署、薬物乱用防止協議会等	
開催内容	
開会挨拶	小島 尚（研究代表者）
1. 背景および趣旨説明	小島 尚
2. 講演	
（1）「足立区の薬物乱用防止啓発活動の概要と今後」	足立区薬剤師会の先生
（2）「オランダを中心とした海外での乱用薬物の現状と危険性」	千葉科学大学薬学部公衆衛生学/衛生学研究室教授 安田一郎（分担研究者）
3. 特別講演	
「救命救急における医薬品や乱用薬物の現状と課題」	北里大学薬学部臨床薬学部門中毒情報センター准教授 福本真理子 先生
4. 総合討論および研究班への要望	
司会	小島 尚
閉会挨拶	藤田義人(足立区薬剤師会副会長)

図1. 地域連携公開シンポジウム開催の案内

図1に示すようなシンポジウムを本学において、平成24年2月に開催した。その目的及び概要は、本学は足立区教育委員会や教育機関とは連携して活発に活動していたことを基盤として、薬剤師会と共催で、足立区衛生部、教育委員会、千住警察署、薬物乱用防止協議会の後援を受けて行った。まず、足立区における薬物乱用防止教育の実態を薬剤師会の活動を中心に報告があった。我が国の乱用薬物に影響を及ぼす海外の状況を、近年の流れから現状までを安田先生が報告された。薬物乱用の問題点は健康影響であり、それを回避するために麻薬や覚せい剤には厳しい法律が設けられている。一方、忘れてはいけないものに、OTCを含む医薬品の目的外使用がある。これら医薬品は合法的に入手でき、個人輸入で医家向け医薬品を個人輸入して乱用されている実態がある。これら薬物の乱用による中毒を含め、救命救急センターにおける中毒実態の現状と課題を解説された。

足立区内の薬物乱用防止教室の実施状況は平成14から22年度各年度、半数（40～60%）のみであることが示された。その要因には指導者の不足があり、また、危険ドラッグを含む新しい薬物の情報も不足していることがあげられた。

表 1. 13 2 年会日本薬学会シンポジウム概要

タイトル	違法ドラッグ（いわゆる脱法ドラッグ）から指定薬物へ～検査から規制へのアプローチ～	
開催日時	平成 24 年 3 月 29 日午後 1 時 30 分から 4 時 30 分	
開催会場	北海道大学高等教育推進機構	
演題番号	演題名	演題名
1	東京都における違法ドラッグ対策の現状と今後の課題	阿部哲也(東京都福祉保健局薬事監視課)
2	違法ドラッグの理化学検査の現状と課題	長谷川貴志(千葉衛研)他 (熊坂謙一(神奈川衛研)、中嶋順一、鈴木仁(東京都健安研))
3	違法ドラッグの高感度選択的分析法の開発を目指して	豊岡利正(静岡県大・薬)
4	コンピュータシミュレーションによる違法ドラッグの活性予測	栗原正明、出水庸介、佐藤由紀子(国立衛研)
5	違法ドラッグ生体影響試験の開発～in vitro 試験系～	佐藤かな子、野中良一、小縣昭夫(東京都健安研)
6	違法ドラッグ生体影響試験の開発～in vivo 試験系～	小縣昭夫(東京都健安研)他、(宮澤真紀(神奈川衛研)、小島尚(帝京科学大))
7	違法ドラッグを取り巻く国内外における現状と規制について	花原(木倉) 瑞理(国立衛研)
オーガナイザー	佐藤かな子(東京都健安研)、小島 尚(帝京科学大・医療科学)	

また、薬学会ではいわゆる脱法ドラッグに関する実態及び研究成果を、表 1 に示すようなシンポジウムを開催して、司法、行政、警察のみならず、大学等に整理して提供した。その詳細は総説等にまとめられていることから参考とされたい。当時、危険ドラッグに関する情報を、本学に着任後も警視庁や各県警察本部や科捜研等からの頻繁に問合せや情報提供に協力していた。教育現場では危険ドラッグに関する正確な情報が乏しく、また、新規物質に対する対応などに混乱と不安があり、児童生徒に適切に説明する手法や教材が求められていた。

3. 最新の薬物情報が求められる背景と課題

危険ドラッグの乱用が原因となった犯罪や交通事故が多発したことから、厚生労働省、文部科学省に加え、警察庁や内閣府も本格的に危険ドラッグ対策を推進した。名称も危険ドラッグとなり、新規薬物の規制をより柔軟に積極的に行うため法律（旧、薬事法）を改正して迅速に指定薬物とし、警察による取り締まりの強化が大きな効果を示した。その結果、平成 27 年には店舗での危険ドラッグの購入は東京都内及び近県では不可能となり、急速に危険ドラッグは収まりを見せた。しかし、今後とも新たな薬物や新手の乱用法などが流行る可能性は否定できない。危険ドラッグの経験では新規薬物はインターネットなどから情報が得られるとともに簡単に入手でき、法律による規制が後追いとなる。そのため、法律で規制されているから薬物は危険、ダメ絶対、脅しの防止教育ではなく、健康を害するものを避けるような健康教育としての薬物乱用防止教育が必要となる。

更に、薬物乱用防止教育に関するシンポジウムの結果等から、薬物乱用防止教室を実施できる指導者を養成する必要が明らかとなった。健康や薬物に関する知識を持っている薬剤師、養護教員、保健体育教員などに指導者として協力を得ることが考えられた。薬剤師は、学校には学校医とともに学校薬剤師が配置されていることから、薬剤師会と学校や教育委員会とのつながりも強い。そこで、薬剤師会と連携して指導者の養成を行うことを目指して活動することになった。

4. 薬剤師会における大学との連携協力の推進

薬剤師会は平成 26 年度から本学との連携して行っている事業を大学連携事業と位置づけられた。また、本学でも薬剤師会と勉強会や行事に参加していることから、「足立区薬剤師会と地域連携事業に関す

る総合提携協定」を平成 27 年 10 月に結んだ。

危険ドラッグは警察庁による取締りまた医薬品医療機器等法（旧薬事法）の規制強化により急速に乱用が減ってきている。一方、医薬品の乱用や規制薬物、大麻や覚せい剤の乱用が増加するといった、新たな動きがおこなっている。薬物乱用や医薬品の不適切な使用は健康被害のみならず、薬物にかかわる犯罪を増大させ社会的な混乱も引き起こすことになる。小学生から正しい医薬品の使用方法と、いわゆるドラッグの健康影響を周知するように努めることが求められる。そこで、低年齢層への指導に参考となる資料を、勉強会を開催あるいは薬剤師会で実施される集会等に提供することとした。

参加した行事には、10 月 15 日北千住駅前で実施した「薬と健康フェアー薬物乱用防止キャンペーン」、1 月 28 日 薬剤師会との勉強会、3 月 12 日、帝京大学板橋キャンパスで日本社会薬学会が開催した薬教育指導者養成ワークショップに参加、また、3 月 28 日、医薬品適正使用に関する情報交換会などをおこなった。

5. まとめ

現在、医薬品乱用が社会的にも問題となっていることから、薬剤師の基本である医薬品に関する「くすり」教育の効率的な習得が一つの課題としてあげられる。また、薬物乱用防止教育では麻薬や覚せい剤の危害性を周知できているが、緩和医療においてモルヒネへの嫌悪感を生んでいる。そのため、がんなどで疼痛治療を必要になった場合に拒否することから、QOL が低下していること、また、医療関係者の間でも拒否する傾向にある。

今後、医療科学部及び教育科学部とも連携して教育現場から在宅現場まで、一貫した啓発活動のモデルを作成できると考えられる。

引用文献

- 1) 薬物に対する意識等調査報告書、平成 14 年 3 月、文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課。
- 2) 喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育指導資料～心と体の健康のために～（改訂版）、平成 23 年 3 月改訂、神奈川県教育委員会。
- 3) 小島尚 他、中毒研究、17、71-72、2004。小島尚 他、中毒研究、18、83-85、2005。

障害児・者に使用可能な馬具の開発及び障害児の乗馬活動支援

石井孝弘（医療科学部 作業療法学科）

キーワード：障害児、障害者乗馬、乗馬療法、鞍、手綱

1. はじめに

1、 障害児・者に使用可能な馬具の開発

障害児が乗馬活動に参加する機会は本学では大きなイベントとして年2回開催している。主な参加対象児は発達障害児が多いが以前は肢体不自由児の参加もあった。

肢体不自由児が騎乗する際に最も注意を払わなければならないことは落馬などの事故である。さらに騎乗することが身体機能への負担とならないことなども考慮すべきことである。肢体不自由児が日常生活を行う上で、基本的な姿勢として床座位、椅子座位などがあるが、脳性麻痺により姿勢保持が困難な障害児がいる。乗馬活動の中でも騎乗することが姿勢機能に効果的であることはよく知られている。しかし、馬上では姿勢保持が困難なことも多く、姿勢保持をサイドウォーカーに頼らざるを得ないこともある。サイドウォーカーが姿勢保持について介入する際、障害が重度であればその負担は非常に大きなものとなる。

その負担を少しでも軽減することで姿勢保持に対するアプローチを容易にし、かつサイドウォーカーの負担を軽減し、結果として安全な乗馬活動につながる。

今回、肢体不自由児の姿勢保持を支援する鞍を開発した。

騎乗する際に馬を操作するために重要な馬具として手綱がある。障害児・者の騎乗の際、引き馬では手綱を使うことはないが、スポーツとして障害児・者が騎乗する際や上肢の操作性の向上と、日常生活に視点を当てた上肢機能の目標達成のために手綱操作を行うことも少なくない。

肢体不自由児の場合には通常の手綱では保持することが困難であったり、たとえ保持することが可能でも馬の頭の動きで、手綱が手から離れたりすることもあり、再び適切な長さで手綱を保持しなおすことは容易ではない。

また発達障害児は身体全体の使い方が不器用であったり、特に上肢操作が不器用な発達障害児もいる。麻痺はないものの、手綱の長さ調整をしながら手綱を保持し、手綱操作をすることが困難な発達障害児もいる。

今回、肢体不自由児の障害程度に合わせて、騎乗時でも容易に手綱の長さ調整が可能であり、保持も握りやすい筒状のものとした特殊な手綱を開発した。

鞍と手綱は騎乗する際に馬との非言語的なコミュニケーションを行ううえで非常に重要な馬具であり、障害児・者が騎乗する際にもこれらの馬具は重要である。しかし通常の手綱は、障害児・者が騎乗する際に不都合な点もある。そこで、今回開発した特殊な鞍と手綱について若干の考察を述べるとともに報告する。

肢体不自由児及び発達障害児の乗馬活動支援を行った。

本活動は、肢体不自由児及び発達障害児の障害特性の把握とその障害に適した乗馬活動プログラムの立案のために進めている活動である。

障害児が乗馬活動に参加することが、心身機能に対して効果があるとして、現在地域における発達支援、放課後等デイサービスとして乗馬活動に取り組んでいる施設がある。

その際に、より適切な乗馬活動を行うためには個々の障害児に対する、心身機能の評価を適切に行い、さらにその障害状況に適した乗馬活動のプログラムを立案することが重要である。馬とかわかることが良いからといって、個々の障害の状況把握を行わずに乗馬活動を行うことは逆効果となるリスクがあることを認識する必要がある。

今回地域連携として山梨県に在住している発達障害児を対象として、障害状況の評価から乗馬活動のプログラム立案、実際の乗馬活動を行ったので報告する。

また障がい状況の評価結果を踏まえたうえで、開発した鞍の使用、及び手綱を使用した結果についても併せて報告する。

2. 実施結果および考察

1、 障害児・者に使用可能な馬具の開発

(1) 鞍

鞍については2016年に数回企業との打ち合わせを行った。特殊な手綱に関しては筆者が主に研究開発した。図1及び図2が開発した鞍である。

鞍は肢体不自由児の体幹の立ち直りや平衡反応を引き出すことを目的に、鞍の左右の中心部分から鉛直線と騎乗する肢体不自由児の体幹の正中線が一致することを目的に作成した。主なパーツは通常のウエスタン鞍に固定した背もたれと体幹ベルトである。

背もたれは、上下、前後、背もたれの矢状面での角度調整が可能となるように作成した。

さらに体幹の固定を行うために体幹ベルトを装着し、騎乗者の立ち直り、平衡反応に合わせて締め付けを調整可能となるようにした。

鑑に関しては、鑑の高さ調整により、足部の高さを固定した。その結果、骨盤、股関節、膝関節の角度が一定に保つことが可能となった。しかし、鑑自体は、前後に自由に動くために、骨盤が後傾してしまい体幹の同時収縮が得られないため、鑑の前後動を固定することとした。鑑の固定に関しては試作品が完成しており、実際に使用しながらさらに現在企業と検討中である。

(2) 手綱

2、 障害児の乗馬活動支援

手綱は、銜環への装着はナスカンを用いた。ナスカンを用いたことで容易に手綱の交換が可能である。丸環及びナスカンにより両側にハンドルを取り付けることができるようにした。脱着を可能にすることでハンドル部分のパーツを変更することが可能になった。騎乗する障害児・者の障害は種々あることが予測可能である。例えば前腕切断であれば、肘関節を屈曲した状態で前腕断端部分で輪を引くことが可能であることから、ハンドルを輪に変えることで対応可能となる。

最も重要な手綱の要素には銜環からハンドルまでの長さがある。この長さに関しては使用する馬と騎乗者の組み合わせが同一であっても、騎乗する位置、馬の体調、騎乗者の体調、コースの違いなどいろいろな要素が関与している。騎乗開始時に手綱の長さを微妙に調整し保持しなければならない。通常はその都度騎乗者が手綱の握る位置を微妙に変えて握ることで、可能であるが、障害児・者の場合にはそれが困難な場合がある。

今までの特殊な手綱は、長さの調節が困難か、もしくは調整ができて無段階の調整は困難であった。さらに手綱の長さを調整するには、騎乗者が保持している手綱を放さなければならない。

開発した手綱は、長さの調整は無段階であり、馬を止めることなく調整が可能である。さらに騎乗者が保持しているハンドルを手から離す必要もない。騎乗しながら最適な長さに調整可能である。これらの点が今までの障害者用に作られた手綱と大きく異なる点である。

American Hippotherapy associationに障害者に使用可能な馬具として提案し、特許の可能性を探る予定である。これらの馬具としての特長な鞍、特長な手綱はまた開発途中である。

特に特長な手綱はアメリカの4施設で使用してもらっているが、ある施設では、「sliding reins」と呼び名をつけている施設もあった。

商品となる可能性が高い。日本においてもいくつかの施設で試用しているが、今後情報収集していく予定である。

2、障害児の乗馬活動支援

(1) 帝京科学大学 馬事介在活動センターでの乗馬活動支援

日程：2016年5月に2回実施。7月に2回実施。合計4回実施した。

場所：帝京科学大学 上野原キャンパス 馬事介在活動センター
対象児：山梨県内の発達障害児4名、4回で延べ16名が参加した。主な障害は発達障害

大学のスタッフとして、生命環境学部アニマルサイエンス学科教員及び作業療法学科の学生がボランティアとして参加した。

活動内容詳細は以下のとおりである。
本学の特徴である、動物、自然、障害支援の連携活動として、山梨県内に在住する障害児に対して、乗馬療法を実践した。その際には乗馬活動プログラム立案のための個々の障害の評価を行い、障害の状況に沿って効果的な乗馬療法を行った。

全4日間の実施で述べ16名が参加した。全員が発達障害もしくはその傾向がある児である。知的障がいは軽度であり、全員が言語によるコミュニケーションが可能であった。保護者からの情報収集で

は、手先が不器用、体の使い方が不器用である。など身体全体の動かし方に問題を抱えている児がいた。また授業中椅子に座っていることができない、離席する、着席しているが常に身体のどこかを動かしているなどの児がいた。またコミュニケーションの問題を抱えている児も多く、自分からは話しかけてくるものの言葉のやり取りが困難な児がいた。

これらの児に対して、感覚統合理論に基づいて評価を行い日常的に困っていることや問題点の原因を明らかにした。

多動の傾向がある児の感覚特性として前庭刺激に対する低反応性、もしくは固有受容覚刺激に対する低反応性が認められた児が存在した。手の使い方、体の使い方の問題を抱えている児の中には、触覚刺激に対する低反応性もしくは過反応性が認められた児が存在した。これらの原因を明らかにしたうえで、乗馬活動プログラムを立案し、乗馬活動を行った。その結果、全員が騎乗することができた。個別の障害の状況に合わせて行ったことで、騎乗の方法は違っていたが、騎乗している子どもたち全員に笑顔が観察された。これは脳にとって必要な刺激が受容できたといえる。

(2) 学外の馬牧場施設における乗馬活動支援

日程：月に2回程度の実施であるが不定期の開催。

場所：群馬県伊勢崎市H馬牧場

対象児：群馬及び近隣県の肢体不自由児及び発達障害児

活動は、筆者に加えて、都内及び群馬県内の理学療法士・作業療法士養成校の学生、帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科の学生がボランティアとして参加した。大

活動内容詳細は以下のとおりである。

重症心身障害の女児2名及び発達障害児数名を対象とした。

重症心身障害の2人は両者ともに独力で座位保持は困難であり、1人は未定額である。他の1人は立ち直り平衡反応が出現しない状態であった。

特殊鞍は肢体不自由児にとっては騎乗姿勢確保するために非常に有効であった。またサイドウォーカーによって横から姿勢保持を行うときに負担が少なくなった。サイドウォーカーの負担が少なくなったことは騎乗者への適切な介助につながったと思われる

詳細な持続時間の測定は行っていないが、未定額の対象児は馬が止まっている時よりも常歩で移動している時のほうが、頸を中間位に持続的に保持していることが可能であった。図3は頸を保持して騎乗している場面である。



図1. 特殊な鞍と手綱



図2. 特殊な鞍と手綱 斜め後方より



図3. 特殊な鞍を用いての騎乗姿勢

本児は日常的に車いすもしくはバギーでの外出を行う程度であり、日常的に種々の感覚刺激を受容する機会は少ないと思われる。馬上での馬の動きにより前庭刺激を受容することとなり。その結果、馬上で頸の中間位保持が可能となっていると思われる。

3. 今後に向けて

商品・サービス等の開発、特許ビジネスへの展開に向けて、今後、障害児・者に乗馬活動を提供する際に、必要な評価の実施、個々にあった、鞍の使用、姿勢保持を支援する鞍の使用、個々に合わせた手綱の使用と開発などが可能である。

現在試用品をアメリカの施設に預け使用してもらっている。さらに日本でも障害児対象の乗馬施設において試用している。概ね好評を得ている。今回の活動においても、より良いものへとなるように改造を加えることにより、広く社会に広まる可能性は高いと考えている。

学生の地域連携活動事例報告

フリーマガジン『ネコノメ』と『広報うえのはら』を用いた 本学と上野原市の情報発信

加賀谷玲夢（総合教育センター）・高橋留衣（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：フリーマガジン、WEBサイト、上野原市、情報発信、動物、デザイン、学科猫、猫部屋

1. はじめに

2001年、本学の生命環境学部アニマルサイエンス学科は、理工学部バイオサイエンス学科アニマルサイエンスコースとしてスタートし、翌2002年に学科として独立した。「人と動物の共生」を理念に掲げ、イヌやネコ、ウマ、小動物などのコンパニオンアニマルや、野生動物、展示動物などを対象とする、日本初の画期的な学科として華々しく誕生したが、一方で、それまで工学的な色が強かった本学にはそれらの動物もいないし、動物を飼育できるスペースもなく、それどころか学生の活動の場すら不十分であり、1期生からは大きな不満の声が聞こえてくる有様だった。

そのため学科は学生たちの希望を聞きながら、彼らが動物や動物関連分野に接することのできる機会を作るために、動物系の課外活動団体を積極的に立ち上げ後押しをしてきた（図1）。これがいわゆる「アニマル系団体」の始まりである。学内の環境が整備された現在においても、これら「アニマル系団体」は動物関連教育の実践の場として非常に有効に機能していると言える。



図1. アニマル系団体設立の説明会（2001年7月3日）

全てはここから始まった。参加者は後にアニマル系団体の幹部となる。

「ねこの目報道部」は最初の「アニマル系団体」のひとつとして2001年に誕生した。今年2017年は創部から17年目にあたる。当初は「アニマルサイエンス研究会」という名前の同好会であったが、当初から「団体の目的」を「アニマルサイエンスに関わる広報活動」としており、情報交換や情報発信などを通じて、アニマル系団体の取りまとめ的な役割を担うことも期待されていた。実際、この団体の呼びかけによって、アニマル系団体の定期連絡会が月に一度のペースで開催されていた時期もある。

また2003年10月にはWEBサイト「ねこの目通信」を開設して、学科関連の活動を内外に周知する活動も続けていた（図2）。2005年には部活動に昇格し、その際に現在の「ねこの目報道部」に改名して現在に至っている。



図2. WEBサイト『ねこの目通信』

左側は2003年10月から2005年7月まで、右側は2005年11月から2007年5月まで更新。

ねこの目報道部は実験研究棟に設置された「アニマルサイエンス学科準備室」、通称「猫部屋」を活動の拠点としている。猫部屋はアニマルサイエンス学科の正課の準備をする部屋であるだけでなく、「アニマル系団体」の支援も行っており、各団体が自由に使えるボックスやテーブル、PCなどを設置してある（図3）。このため、猫部屋には多くの学生や教職員が訪れ、日々様々な活動が行われている。



図3. 猫部屋の様子（2011年6月2日）

様々な課外活動の本拠地であり、学生たちはここから外に飛び出していく。

猫部屋では2匹の「学科猫」（ニャンチュウとサスケ）が飼育されており、「ねこの目報道部」という名前は「この猫たちが日々目にしている学生たちの活躍」を報道するという意味が込められている（図4）。

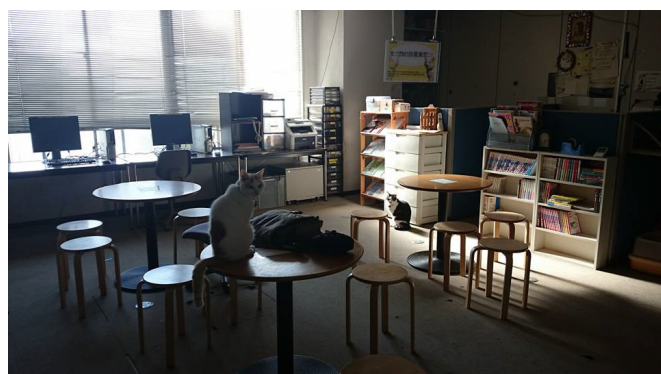


図4. 猫部屋には2匹の猫がいる

手前がニャンチュウ（猫虫）。奥にいるのがサスケ。

ねこの目報道部はしばらくの間はWEBサイトの作成を中心に広報活動をしてきたが、ITの知識量やWEBサイト作成能力は個人差が大きいと、代替わりの際の引継ぎが難しく、WEBサイト「ねこの目通信」は2007年の5月に更新を停止してしまった。この当時、廃部の危機を救ったのが、中途入部した新部長のY氏である。

ねこの目報道部はY氏のアイデアによって方針を一転し、印刷媒体での広報活動を開始した。これがフリーマガジン「ネコノメ」の誕生秘話である。フリーマガジン「ネコノメ」Vol. 1は2007年11月1日に初版が発行され、その後は毎年2号のペースで続き、2017年は刊行10周年を迎える。2017年8月現在ではVol. 1. 22まで発行されている。

部員たちは編集会議を開き、表紙のデザインから特集の内容まで、全てを自分たちで決めて作成している。毎号毎号が部員のアイデアと創意工夫が詰まった作品として仕上がっている。

例えば、2011年には千住キャンパスに「イヌノメ同好会」が発足したが、それを受けて2012年3月発行のVol. 1. 11は上野原と千住の合同の冊子となった。また東日本大震災の1年後であることから福島に被災動物を訪ねる取材旅行が行われ、特集記事となった。



図5. フリーマガジン『ネコノメ』Vol. 1～Vol. 22

号外の7. 5号と9. 5号も含めれば24冊となる。

本学では動物や自然環境分野の非常に魅力的な活動が、毎日のように数多く行われている。しかしその活躍の様子はメンバー以外にはなかなか知られにくく、これは非常にもったいない状況にあると言える。ねこの目報道部は、前身の「アニマルサイエンス研究会」の時代から、それらを学内外に周知することを主な活動目的としている。活動の柱としては、次のものが挙げられる。

1. 情報収集
2. データベース作成
3. 広報活動
4. イベント企画
5. 各同好会との連絡、橋渡し役
6. 上野原の自然、町の紹介、暮らしに役立つ情報などの紹介

ねこの目報道部は前述のように、学科に関わる情報の発信を目的としたフリーマガジン『ネコノメ』を制作、発行している。これは1、2、3にあたる。

また、アニマルサイエンス学科の「基礎ゼミ」等の時間を利用して、「活動紹介会」などのイベント企画・運営なども行っている。これは4と5にあたる。

そして2012年からは、6にあたる「地域の情報」もフリーマガジンに取り上げるようになった。本学は地方出身の学生も多いため、特に上野原周辺の地域の情報が不足しがちである。このような情報を学生に提供していきたいと考えたからである。この頃から学内だけでなく、上野原周辺地域の活動やスポット等の取材も始め、フリーマガジンに掲載している。

また、学内の情報を地域へ発信するために、完成したフリーマガジンは学内だけではなく、市役所や商店、市内の施設、取材先等に置いてもらうこともしている（図6）。



図6. フリーマガジン『ネコノメ』は学内と市内各所で配布

2014年には上野原市企画課からお誘いを受け、市の広報誌である『広報うえのはら』2014年6月号に「ねこの目報道部」特集が掲載された（図7）。

また、同年8月号からは隔月で1ページを担当させていただいており（図8）、2015年度末までの間に9回にわたって掲載された。内容は上野原の自然や文化の紹介、学生の声や帝京科学大学のニュースなどが主であった。

2016年度も『広報うえのはら』版ネコノメは、引き続き隔月で6度、掲載されている。



図7.『広報うえのはら』の「ねこの目報道部」特集号（2014年6月号）

表紙も含めて3ページにわたり、ねこの目報道部が紹介されている。部員の紹介やフリーマガジンの内容、活動の目的などが掲載された。



図8.『広報うえのはら』版ネコノメVol. 1. 1～9（2014年8月号～2016年3月号）

ほぼ隔月のペースで掲載が続いてきている。記事は上野原の自然や文化、イベントの紹介、大学のニュースなどが多い。

なお、地域の取材を始めた2012年度からは地域連携推進センターの支援を受けて印刷を行っている。印刷は上野原キャンパスのすぐ近くにある、上野原・東京西工業団地内にある地元企業、プリントネット株式会社に発注している。

2. 2016年度の地域連携活動について

2016年度の「ねこの目報道部」の活動は、①アニマル系課外活動団体紹介会の企画・運営、②先輩による新入生向けの講演会『僕らの体験記』企画・運営、③フリーマガジン『ネコノメ』Vol. 1. 21制作・配布、④フリーマガジン『ネコノメ』Vol. 1. 22制作・配布、⑤『広報うえのはら』記事作成などが挙げられる。

①アニマル系課外活動団体紹介会は、毎年4月に新入生向けに開催されるイベントである。いわゆるアニマル系の活動との出会いの場として用意されている。②は熱心な先輩達による活動のヒントを紹介す

る講演会で、5～6月頃に開催している。いずれもアニマルサイエンス学科の基礎ゼミに組み込まれている。

本報告では主に、より地域連携活動に関連の深い③、④、⑤について、以下に詳しい内容を記載する。

③ フリーマガジン「ネコノメ」Vol. 1. 21制作・配布



図9.『ネコノメVol. 1. 21』 目次（左） 表紙（右）

製作期間2016年4月～2017年1月

発行：2017年1月17日（初版第1刷）

目的：学内外の情報発信

活動内容：企画、取材及び記事作成、学内外での配布

発行部数：1000部

予算：地域連携推進費

地域連携特集

特集『北杜市オオムラサキセンター』



図10.『北杜市オオムラサキセンター』の特集ページ

山梨県北杜市のオオムラサキセンターに勤務する卒業生を取材した。

その他の記事一覧

- ・そうだ 洞窟、行こう。
- ・news neko
- ・アクアリウム実習
- ・日本の郷土料理 ～沖縄県編～

- ・「catcafe てまりのうち」訪問！！
- ・若者たちよ！集まれ！ ～野菜直売所&ミニ水族館～
- ・学園七不思議
- ・〇研 Yamamoto Lab.
- ・編集後記

配布場所（カッコ内は部数）

学内（300）、上野原市役所（100）、秋山温泉（100）、上野原動物病院（30）、びりゅう館（100）、桂川ウェルネスパーク（100）、中華スパル（20）、北杜市オオムラサキセンター（50）

エピソード

外部へ取材に行く機会が多かったため、まず部内でメール作成や取材方法などの練習を行った。そのおかげで外部の方々との取材がスムーズに行えたと思う。

冊子制作の面では、自分自身で背景やイラストなどの素材を作ったり、資料を参考にしながらページのレイアウトを行ったりするなど、部員一人一人がより良い冊子を作るために行動することができた。

自己評価・反省点

どの施設の方々も、突然の取材申し込みにもかかわらず、快く取材を受けてくださったおかげで、学内だけではなく山梨県内の施設や、冊子ネコノメでは初となる猫カフェの特集など、様々な情報が詰まったフリーマガジンを作成することが出来た。

今回の冊子は、少ない人数の中での作成となったため、部員一人一人が複数の企画を掛け持ちする形での作成となった。そのため、ページの作成や取材先との連絡のやり取りに時間がかかってしまい、製作期間が長引いてしまった。

④ 活動名：フリーマガジン「ネコノメ」Vol. 22制作・配布



図11. 『ネコノメVol. 22』 目次（左） 表紙（右）

制作期間：2017年1月～7月

発行：2017年7月28日（初版第1刷）

目的：学内外の情報発信

活動内容：企画、取材及び記事作成、学内外での配布

発行部数：1000部

予算：部費

地域連携特集

特集『猿橋を訪ねて』



図12. 『猿橋を訪ねて』の特集ページ

日本三大奇橋として有名な大月市の猿橋を取材した。大月市は上野原の隣町。

その他の記事一覧

- ・特集 登ろう！高尾山
- ・NEKONOME×NEWS
- ・CAT COLLECTION 2017
- ・上野原の鳥たち ～とりとりクエスト～
- ・～上野原キャンパス～ 先生方のお勧めの一冊！
- ・〇研 Shimada Lab.
- ・日本の郷土料理 ～青森編～
- ・編集後記

配布場所（カッコ内は部数）

学内（300）、上野原市役所（100）、秋山温泉（100）、上野原動物病院（30）、びりゅう館（100）、桂川ウェルネスパーク（100）、中華スパル（20）

自己評価・反省点

フリーマガジン「ネコノメ」Vol. 21の製作期間が延びてしまったため、着手が遅くなってしまい、年度を超えての発行になってしまった。

⑤ 『広報うえのはら』版ネコノメ作成

掲載号：

平成28年4・6・8・10・12月号

平成29年2月号

目的：学内外への上野原市の情報発信

内容：企画、取材及び記事作成

記事内容

<2016年>

4月号 鳥の紹介

6月号 風の子フヘスケの紹介

8月号 上野原キャンパスうまセンター紹介 夏編

10月号 科大祭でのわんわんパレード、ドッグショーの紹介

12月号 花園先生へのインタビュー

<2017年>

2月号 うまセンターの新メンバー紹介

エピソード

うまセンターや科大祭でのドッグショーなど、地域の方が学内で目にしやすいものを中心に記事を作成した。また、主に上野原市内で活動をしているサークルの取材を行った。



図13. 2016年6月号(左) 2016年4月号(右)

上野原の野鳥や身近な野草を取り上げた。



図14. 2016年10月号(左) 2016年8月号(右)

うまセンターやドッグトレーナー研究部の活動を紹介した。



図15. 2017年2月号(左) 2016年12月号(右)

本学の地域連携活動や、うまセンターの新しい馬を紹介した。

3. 今後の展望

2015年度に引き続き、2016年度も外部へ出て取材に行く機会が多かった。2016年度は上野原市内だけでなく、県内、中央線沿いなど、「地域」の幅を少し広くとらえて取材を行った。これらの「地域」の情報は、うまく学内の学生や市民の方々に発信することができたと思う。また同時に、より広い地域の方にも、ねこの目報道部の存在や帝京科学大学の活動を認知していただくこともできたのではないかと考えている。

学内で行われている魅力的な活動や、そこで活躍する情熱的な人々の存在を、学内外の様々な人たちに知ってもらいたい、という思いが私たちの原点であり活動目的だ。すなわち逆説的だが、魅力的な活動が無ければ広報活動もできないのである。アニマル系課外活動団体の『紹介会』(図19)や、『僕らの体験記』(図20)は、そういう活動の芽を育てる目的で開催している。これも大切な「ねこの目報道部」の仕事であり、存在意義であると考えている。

私たちは、今後もフリーマガジン『ネコノメ』や『広報うえのはら』などを通して、「地域」や帝京科学大学で日々行われている魅力的な活動を、広く発信し続けていきたい。



図16. 猫部屋での編集会議の様子

ねこの目報道部全体で開催される編集会議や、記事の担当者ごとに行われる打ち合わせがある。



図 17. オオムラサキセンターの取材中

説明を聞きながらメモを取り、どのような記事の構成にするかを練っていく。



図 18. 開封の儀

完成したフリーマガジン『ネコノメ』は、大学に隣接する工業団地内の印刷会社まで自分たちで受け取りに行き、みんなで開封する。



図 19. 関連活動紹介会（2016年4月9日）

4月には基礎ゼミの時間を使い、新入生にアニマル系団体の紹介をしている。



図 20. 僕らの体験記2016（2016年6月2日）

面白い活動をしている先輩から、新入生向けにメッセージを送るイベント。すでに10年以上も続いている。

4. 謝辞

上野原市及び上野原市企画課の方々、また上野原市民の方々には、貴重な広報誌のページを頂きましたこと、ねこの目報道部の活動に対して多大なるご支援、ご指導を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、フリーマガジン1000部の印刷代金は高額であり、学生団体である「ねこの目報道部」の部費のみで負担することは困難です。2016年度に印刷代の支援をしていただいた帝京科学大学地域連携推進センターには、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

5. リンク

- 1) 上野原市WEBサイト『平成28年度 広報うえのはら』
<https://www.city.uenohara.yamanashi.jp/gyosei/docs/koho-h28.html>

山梨県立富士湧水の里水族館との連携活動について

加賀谷玲夢（総合教育センター）・増田圭（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

キーワード：山梨県立富士湧水の里水族館、ボランティア、山梨県、環境教育、水生生物

1. はじめに

「水と水の生き物のすばらしさを伝える会AQUASHIP」は、2005年に同好会「水族館研究会」として発足した後、翌年には活動を水族館だけに限定せず、鯨類、魚類、ウミガメ、環境教育などにも広げた上で団体名を「AQUASHIP」に変え、2007年には部活動に昇格して現在の名称になった。

本学の生命環境学部アニマルサイエンス学科（当時は理工学部バイオサイエンス学科アニマルサイエンスコース）は、2001年の設立当初から学生たちの活動・教育等の実践の場として、動物に関連する課外活動団体を積極的に立ち上げ後押しをしてきたが、2005年当時は、まだ水族館に関わる団体は誕生していなかった。水族館に興味があったり、進路として考えたりする学生は潜在的には数多く存在しており、当時の新入生が有志を募ったところ多くの賛同者が集まって発足に至った。2006年には会員数は120名を超えていた。活動内容は水族館をはじめとする各種施設やクジラ解体などの見学会、日本動物園水族館協会のハンドブックを教材とした輪読会、部門ごとの勉強会、ダイビングのライセンス取得支援、水生生物の飼育、イベントへの積極的な参加（図1）など多岐にわたっており、卒業生として水族館の職員や飼育員、イルカトレーナーなどを輩出している。



図1. 地域の子どもと親を対象にした「夏休み親子教室 明日の風」へのブース出展（場所：帝京科学大学 本館、2006年7月30日）

2017年現在においても活動は活発であり、富士湧水の里水族館でのボランティアをはじめとして、水族館ツアーやダイビング合宿、勉強会、見学会、学内での魚類や両生類、爬虫類の飼育などが行われている。2017年のダイビング合宿は八王子のダイビングクラブの協力の元に伊豆で行われ、31名もの部員が参加した。

山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動は、2005年からすでに開始されており（図2）、12年目の2017年現在に

至るまで続いている。活動は毎週末に行われ、一日あたり数名の部員が担当する。内容は水族館業務全般であり、魚類をはじめとする展示動物やバックヤードの動物の飼育管理、水質管理や水槽等の清掃などの保守作業、イベントの司会進行や解説、工作コーナーなどでの参加者（主に子どもたち）への対応、人工授精などの繁殖に至るまで、様々な体験をさせていただいている。また、山梨県内各地での「移動水族館」の補助や、河川での生物採取の補助なども活動として行われている。富士湧水の里水族館は2015年、2016年に本学の大学祭「科大祭」へも出展しており、まさに連携といえる関係が10年以上も伝統として続いてきている。



図2. 山梨県立富士湧水の里水族館への「水族館研究会」としての最初の見学と実習打ち合わせの様子（2005年5月8日）

「森の中の水族館。」富士湧水の里水族館は、富士北麓に位置する山梨県南都留郡忍野村の「さかな公園」内に設置された、山梨県立の施設である。「さかな公園」は忍野村の恵まれた自然を後世に伝えていくことを目的に2001年に誕生した村立の施設であり、「森の学習館」（図3）や「芝生公園」などを有している¹⁾。湧水の里水族館はその中核施設として山梨県が整備したものである。また県の水産技術センター忍野支所も隣接している。山中湖を源流とした桂川（相模川）はこの「さかな公園」の側を通り、富士吉田市、都留市、大月市を經由して本学上野原キャンパスのすぐ横を流れ、相模湖、津久井湖、そしてやがて相模湾に注ぎ込む。本学上野原キャンパスとは、桂川（相模川）の流域という点において共通の自然環境を有しているわけである。湧水の里水族館は山梨県内に生息する淡水魚を中心に展示しており、透明度の高い富士の湧水を使用した二重回遊水槽を特徴としている。2008年度までは山梨県が直接運営していたが、現在は指定管理者として山梨県の有力企業である桔梗屋が運営している²⁾。2017年現在、本学の卒業生2名が飼育職員として勤務しており、いずれもA

QUASHIPのOBである。



図3. 忍野村立「さかな公園」内の「森の学習館」

新入生がボランティアの説明を受けている。(2017年5月21日)

2. 2016年度の地域連携活動について

2016年度の、水と水の生き物のすばらしさを伝える会AQUASHIPの部としての活動は、①山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動、②山梨県立富士湧水の里水族館の大学祭出店補助、③山梨県立富士湧水の里水族館の移動水族館(県内各地)の補助、④足立区立小学校の遠足での環境教育活動などが挙げられる。また、⑤山梨県立富士湧水の里水族館の飼育職員との合同採集会、⑥部活内での勉強会、⑦希望者によるダイビングライセンスの取得支援等も実施している。本報告ではこのうち、地域連携活動に関連の深い①、②、③、④について詳細を記載する。

① 山梨県立富士湧水の里水族館におけるボランティア活動

2016年度の湧水の里水族館でのボランティア活動は2016年4月3日から2017年3月26日のうち、原則として日曜日に行われた。活動日は54日であり、のべ185名が参加したが、実際に参加したのは28名であった。最も多かった2名は26回参加しており、1回のみ参加も4名いた(図4)。

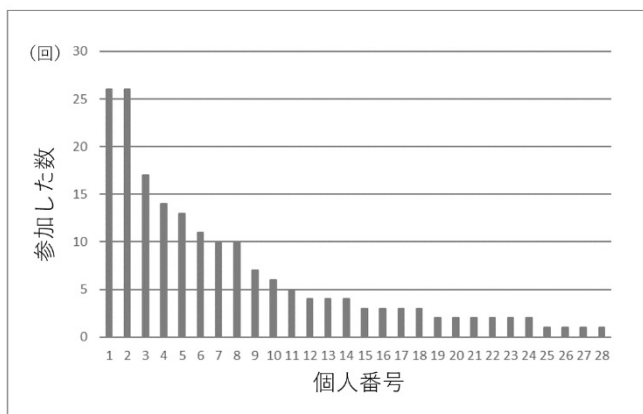


図4. 2016年度にボランティアに参加した28名の参加回数

一日の参加人数は季節によっても異なるため1~8名と幅が広く、平均は3.4名であった。2016年度の各月ののべ参加者数は、年度末と年度初めの2~4月に落ち込んでいる。また夏期休暇中の8月も若干下がっている。月による活動日数(例えば日曜日の数)の違いを考慮して計算しても同様の傾向になる。これは部員の

世代交代や、地方へ帰省したり定期券の期限が切れたりするなどして、参加できなくなる部員が多い時期だからかもしれない(図5)。

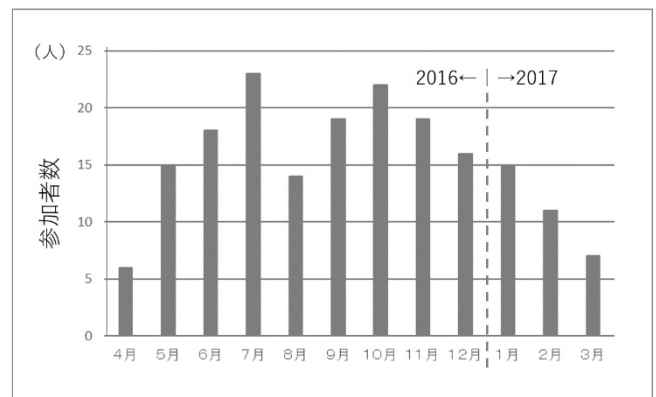


図5. 各月ごとのボランティア参加者数(2016年度)

ボランティア当日は、午前は10時から12時、午後は13時から17時に作業を行った。12時から13時は昼休みだった。

富士湧水の里水族館までの交通手段は、高速バス(上野原~忍野入口)、電車(JR中央線、富士急行線)、学生の自家用車などを利用した。交通費は個人負担、部費からの補助と共に、地域連携推進費を活用させていただいた。

ボランティアの主な活動内容は次のとおりである。

(1) 二重回遊水槽「エサやり体験」司会・進行・解説

AQUASHIPのメンバーは、毎週日曜日の午前11時から及び午後2時から行われる二重回遊水槽の「エサやり体験」イベントの司会、進行、解説を担当している。

まず「エサやり体験」をするにあたって気を付けるべき注意点や、餌のあげ方などを説明する。また、このイベントで給餌する対象である二重回遊水槽の仕組の説明や、この水槽に展示されているニジマスやイトウ、チョウザメなどの魚類の特徴や生態についても解説する(図6)。



図6. 「エサやり体験」イベントの司会進行及び解説の様子

二重回遊水槽内側の階段に、毎回、子どもたちが長蛇の列を作る。

(2) 「貝殻工作体験」進行

ボランティアの部員は、毎週日曜日の午前10時から午後3時まで行われる「貝殻工作体験」コーナーの進行も担当している。この「貝殻工作体験」は、貝殻・ビーズ・石などを使用して、水に住む生きものの形を作ってもらうコーナーであり、進行を担当するメンバーは参加者に材料の説明、貝殻の枚数の説明、組み立ての際に使用するグルーガン（ホットボンド）の使用法の説明をし、必要に応じて工作の補助も行っている。

この工作体験コーナーで使用する貝殻・ビーズ・石などの材料、グルーガンなどの道具については、富士湧水の里水族館側が用意している（図7）。



図7. 「貝殻工作体験」のブースの様子

主な参加者は子供たち。材料や道具についての説明や補助も行う。

(3) 給餌

水族館で飼育している生物は魚類だけではない。爬虫類、両生類、昆虫など多種多様な動物が展示水槽はもちろん、バックヤードなどでも飼育されている。また、動物の餌用の生物の飼育管理が必要な場合もある。バックヤードでは病気になった動物の治療が行われていることもあり、これらに対応できる知識や技術の習得も求められる。

特別展などの際には、普段展示している種とは異なる動物が飼育されることもある（図8）。これらの動物は、イベントが終わった後も引き続きバックヤードなどで飼育されることもあり、それぞれの生物に合った適切な給餌方法を学ばなくてはならない。



図8. 特別展「ヘビ展」（2017年3月1日～7月3日）

富士湧水の里水族館で飼育されているのは魚類だけではない。特別展が終わっても引き続き飼育されることもある。

(4) 水槽等の清掃作業

水槽等の清掃も日常的な管理業務として大切な仕事であり、水族館の飼育職員さんの指示に従って行われている。

一般家庭でも使われているような30～60cmの小型の水槽から、中に入って清掃しなければならない大型水槽まで、大小様々な種類の水槽が対象である。家庭用水槽を用いた魚類飼育の場合は、水質の悪化を防ぐために、定期的に水替えをする必要があり、これらの作業も行われる。また、水槽に付着しているコケを落とす作業や、砂利の中のフンやゴミなどを取り除く作業も行っている（図9 a b c）。

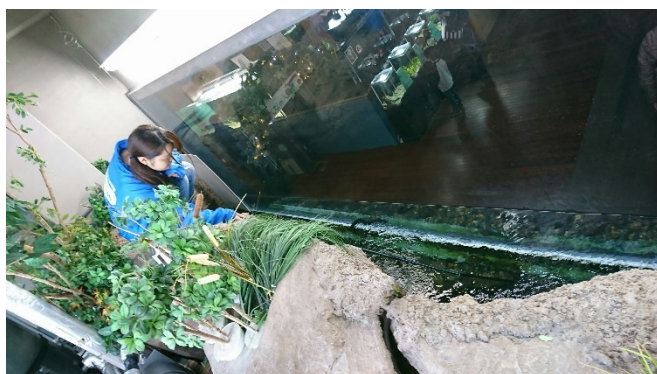


図9. a 水槽掃除の様子

大型水槽の清掃はかなりの重労働である。雨合羽、ホース、スポンジ、デッキブラシなどを駆使して清掃を行う。

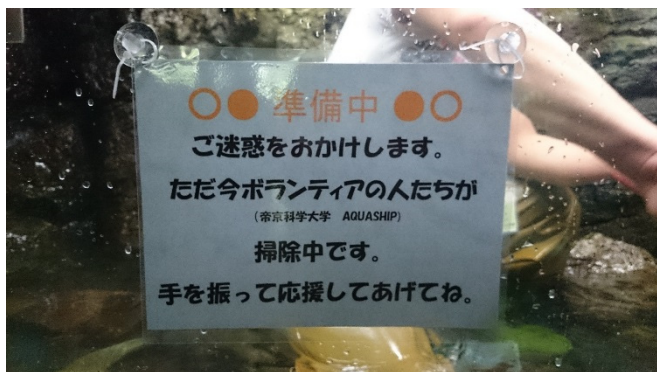


図9. b 営業時間中に水槽を掃除する場合の掲示物



図9. c バックヤードでの水槽掃除及び水替え作業

(5) 人工採卵・検卵・水質検査

10月16日、23日、12月4日の山梨県立富士湧水の里水族館のボランティアにて、人工採卵体験を実施した。10月16日、23日にはニジマスとアマゴ、12月4日にはカワマスの採卵を行った。人工採卵の作業は、親魚から卵と精子を取り出し、人工的に授精させる。AQUASHIPのメンバーは、この作業の補助を毎年させていただいている。その後、健康な卵と受精がうまくいかなかった死卵とを分ける検卵、水質検査などの作業を行って、今年度も無事に稚魚まで成長させることができた。成長した稚魚は移動水族館などでも展示される(図10)。



図10. 人工採卵の様子

② 山梨県立富士湧水の里水族館の大学祭への出展補助

2016年10月8日に本学で行われた大学祭に、山梨県立富士湧水の里水族館が出展した。AQUASHIPでは出展の支援を行い、水槽5つ、計10匹の生き物を展示した。ふれあい体験と称しザリガニのタッチングも実施し、AQUASHIPのメンバーがタッチングの仕方や、水槽にいる魚についての解説も行った。学生だけでなく外部からたくさんの方が来てくださり、山梨県立富士湧水の里水族館やAQUASHIPの活動に興味、関心を持っていただく事ができた(図11)。



図11. 本学の科大祭へ富士湧水の里水族館が出展

③ 山梨県立富士湧水の里水族館の移動水族館(県内各地)補助

2016年7月18日には、「夏休み自由研究プロジェクト」という

イベントが山梨県立産業展示交流館アイメッセ山梨にて開催され、富士湧水の里水族館が移動水族館を出展した。AQUASHIPメンバー1名も、これに参加させていただいた(図12a b)。

また、11月12日、13日に甲府市の小瀬スポーツ公園にて開催された「山梨県民の日」のイベントにも湧水の里水族館が出展した。このイベントにもAQUASHIPのメンバーが、両日とも1名ずつ、手伝わさせていただくことができた。



図12. a 移動水族館の補助(県民の日イベント、アイメッセ山梨)



図12. b 水族の生体展示だけでなくパネル等も設置

④ 足立区立小学校の遠足での環境教育活動

本学の地域連携推進センターでは、地域連携活動の一環として、本学千住キャンパスがある東京都足立区の小学生たちを上野原に遠足として受け入れており、このイベントには上野原キャンパスの複数の課外活動団体が協力し、様々な体験活動を提供している。

2016年は9月1日、2日、8日、9日に遠足の受け入れが行われたが、AQUASHIPも団体として参加し、のべ22名が子どもたちに環境教育活動を行った。その内容は次のとおりである。

(1) 「川ガサ」体験

子供たちにバケツを渡して、川に住む小さな昆虫やカニなどを採集してもらった。採集した動物は観察した後川に返した。AQUASHIPのメンバーは川に入る際の注意点や、「川ガサ」のやり方を教え、子供たちをサポートした。また、観察の際には採集した生き物につい

て解説も行った。事前に昆虫やカニなどの名前を記載したビンゴカードを作成しておき、実際に採集した生き物のシールを貼っていくビンゴゲームも行い、好評だった（図13）。



図13. 「川ガサ」体験の様子

(2) 水槽展示

AQUASHIPが飼育管理している、上野原に実際に棲んでいる魚などの水槽を展示した。展示するだけでなく解説も行い、小学生に魚の魅力を伝えた（図14）。



図14. 上野原に生息する魚の水槽展示

3. 2016度を振り返って

2016年度も2015年度と同様に、山梨県立富士湧水の里水族館でのボランティア活動をはじめとして、水族館の飼育職員の方との合同の採集会、部活内での勉強会、希望者によるダイビングライセンスの取得支援（図15）など、様々な活動を行ってきた。特に採集会では、飼育員の方に近隣の山や川、湖に、あるいは伊豆の海にまで連れて行っていただき、固有の両生類や伊勢エビ、イシダイ、ガンガゼ、カニ等の採集や調査を行うなど、非常に有意義な体験を得ることができた。

それに加え、大学祭への山梨県立富士湧水の里水族館の出展や、富士湧水の里水族館の県内各地への移動水族館の出展補助、足立区立小

学校の遠足での体験コーナー出展など、環境教育活動にも多く携わることができた。これらの活動によって、部の正式名称であり理念でもあるように、より多くの方に水と水の生き物のすばらしさを伝えることができたと自負している（図16）。

また、それだけでなく、部員個々の意識の向上にも、これらの活動は非常に大きな影響を与えているように思う。自分たちの知識、技術の向上が、子どもたちの驚嘆や歓声などの反応を引き出すことに直結するという目に見える事実が、部員たちのさらなる意欲を掻き立てるのだと思う。



図15. ダイビング（ライセンス取得支援）合宿



図16. 富士湧水の里水族館の「チョウザメタッチング」イベント

4. 今後の展望

2017年を迎え、「水族館研究会」の創立から12年目になる。2016年度もAQUASHIPは様々な活動を行ってきたが、とりわけ山梨県立富士湧水の里水族館でのボランティア活動では、今まで以上に多くの作業をやらせていただけるようになったと感じている。単なる「お手伝い」の域を超えて、戦力として認めていただけているのだとしたら、これ以上嬉しいことはない（図17abc）。

マス類の採卵や人工授精、検卵、肥育など、専門知識と技術が必要な作業も任せていただけるようになっており、部員も経験を積み成長してきている（図18）。

2017年度もまた世代交代によって新たな部員が加わり、中心メンバーも代わっていく。今までにない斬新なアイデアが生まれ、このAQUASHIPを活性化していくことを期待したい。

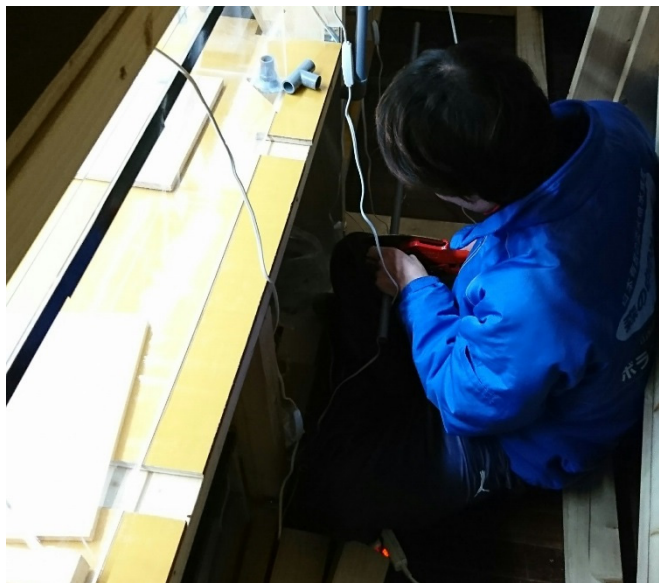


図 17. a 飼育ケージの加工などの作業も



図 17. b 展示水槽の壁の装飾を作成中



図 17. c 実際に両生類の展示で使用されている



図 18. 採卵及び人工授精の様子

近年、再びAQUASHIPの活動全体が活発になってきている感があり、今後も勉強会を増やすと同時に、水族館の飼育職員の方による講演会も実施したいと考えている。また、そのような機会を設けることでメンバー内の知識の向上や情報の共有を図りたい。そのためには、今後もますます山梨県立富士湧水の里水族館と連携を強める必要があると思う。

ボランティア活動などの恒常的活動に加え、水族館の飼育職員の方との合同の採集会といったフィールドワーク活動も行い、水生生物の生態を直接学び、来館者に水生生物の生態、魅力などを伝えていく環境教育活動を行っていきたいと考えている。

5. 謝辞

「森の中の水族館。」山梨県立富士湧水の里水族館及び、スタッフの方々には、AQUASHIPの活動に対して、またボランティアのメンバーひとりひとりに対して、多大なるご支援、ご指導を賜りましたこと、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、富士湧水の里水族館がある忍野村は上野原キャンパスから約50kmも離れており、学生団体であるAQUASHIPにしてみれば、富士湧水の里水族館での活動は、とにかく交通手段（すなわち交通費）の確保ができないと維持することが難しく、例年、最大の制限要素となっています。2016年度に交通費の支援をしていただいた帝京科学大学地域連携推進センターには、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

6. 参考

- 1) 忍野村観光協会WEBサイト「富士忍野高原 おしのナビ」
http://www.oshino.jp/spot_sakana.php
- 2) 山梨県WEBサイト「山梨県立富士湧水の里水族館について」
<http://www.pref.yamanashi.jp/kakinousui/suizokukan.html>

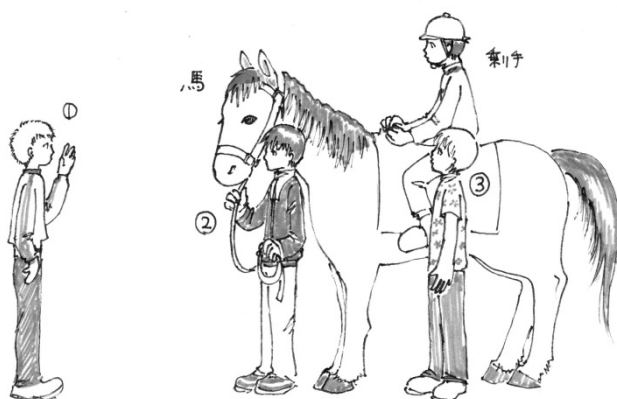
障がいのある人を対象とした障がい者乗馬の実践

田口愛（障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」実行委員会）

キーワード：乗馬体験、レクリエーション

1. はじめに

障がい者乗馬は日本ではまだ一部の人々の間にしか普及していませんが、ヨーロッパでは障がいのある人たちのリハビリとしても広まってきています。安全を期して、良く調教された馬を使い、乗馬時は、下図のようにそれぞれ役割を持った人が付きます。



①インストラクター：全体を見て指示をする。

乗馬をするうえで中心的な人

②リーダー：馬を誘導する人

③サイドウォーカー：常に乗手のサイドにつき、サポートする人

図1. 障がい者乗馬におけるそれぞれの役割

（図、RDA活動のためのハンドブック（1））

乗馬会に参加する障がいをもつこどもを乗手さん、全体の指示をする人をインストラクター、馬の誘導・管理をリーダー、乗手の補助をする人をサイドウォーカーと呼んでいます。本学の乗馬会では、インストラクターとリーダーは馬事介在活動センター（通称うまセンター）の職員や学生スタッフにお願いしております。サイドウォーカーはうまセンター学生スタッフや委員やボランティアが補助をします。乗馬をすることで身体の機能回復のための訓練になったり、豊かな感情の変化が見られたりといった効果が報告されています。また、リハビリ面だけに限らず、動物とのふれあい、スピード感、今までに経験しなかった高い視野などを味わう楽しみの場ともなっています。

（RDA活動のためのガイドブック（1））

障がい者乗馬にはヒポセラピー、セラピューティックライディング、レクリエーションとしての乗馬の3つがあり、本学の乗馬会はレクリエーションとしての乗馬を行いました。レクリエーションとしての乗馬には「身体機能の改善」「感情表現が豊かになる」「身体面・心理面・社会面」に効果があります（RDA活動のためのガイドブック（1））。本学の障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」実行委員会は、

「障がい者乗馬の実施」「ヒトとヒト、ヒトと動物との交流の場」「障がい者乗馬の普及・啓発」の3つの理念のもと、現在、18歳以下の障がいのある子どもを対象に活動を行っています。春季と秋季の年2回行われている乗馬会では毎回テーマを設け、そのテーマに沿う企画や装飾をして、乗手（乗馬する方）に楽しんでもらうような工夫をしています。また、本学の乗馬会の特徴は乗馬体験だけでなく、学内の多くの課外活動団体（サークル）が様々な出し物を用意しているところにあります。当日はお祭りのような雰囲気なのか、乗手だけでなくご家族にも楽しんでいただける、本学ならではの特徴を活かした乗馬会を開催するために、日々活動しています。

2. 活動報告

乗馬会を開催するにあたり、約2か月と2週間前から企画会議を始めます。乗手さん楽しんでいただけるよう、季節ごとのテーマとそれに沿った装飾や企画をします。2か月前から乗手さん、ボランティア募集を、1か月前には乗手さんに向けた資料作成や郵送をしたり、ボランティアに向けた講習会や打ち合わせなどをします。1週間前には、ご協力していただくうまセンターの職員さん、学生スタッフ、先生方とのスケジュール確認をし、当日に臨みます。当日を終えると乗馬会委員とうまセンターと先生方を含めた反省会をし、準備期間や当日の反省を次に活かせるよう、話し合います。その後、ご協力いただいた先生方に感謝とご報告も込めて報告書を毎回作成し、お渡ししています。

2016年度は6月と11月の計2回開催しました。以下は、回ごとの内容とアンケート結果と考察を報告します。

第23回（2016年6月開催）

【活動内容】

昨年、一昨年と6月の乗馬会は雨に見舞われ乗馬を行うことができなかったため、第23回では、初めての試みとして「予備日」を設けました。幸い天候に恵まれ、予備日にはならなかったのですが、この試みは、乗手さんの親御さんや教員の皆様からお褒めの言葉をいただきました。昨年に引き続き、アニマルサイエンス学科だけでなく、作業療学科やこども学科、また、外部の大学生にボランティアとして参加していただきました。本学では、毎回乗馬会後に、乗手の保護者と学生ボランティアを対象にアンケートを行っています。第23回では参加した乗手の保護者15名の方に対し実施しました。

【乗手の病名・障がい名】

自閉症	10人	知的障害	1人
脳性麻痺	1人	発達障害	1人
肥大心筋症	1人	VATER症候群	1人

※乗手16名のうち、「てんかん」は6人。

【アンケート結果】

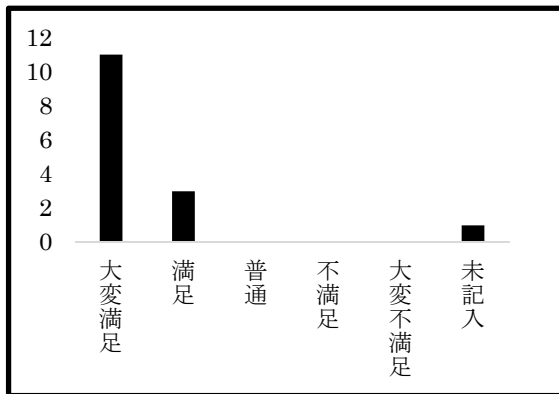


図2.「本日の乗馬会はいかがでしたか。」

図2の項目では、ほとんどの方に「大変満足」・「満足」と回答していただきました。

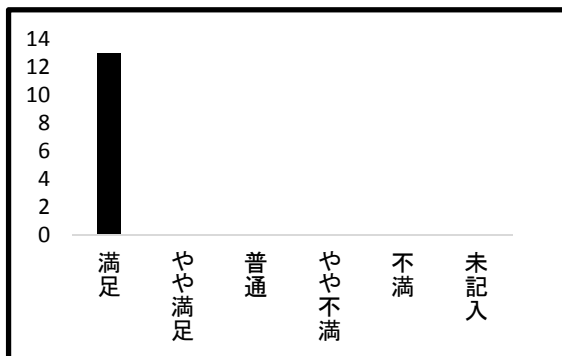


図3.「学生の対応はいかがでしたか。」

図3からわかるように、回答者の全員に満足と回答していただきました。自由記述欄に記入してくださった方の中に「とても親切に、友好的であり明るく楽しく接していただきました。」「ボールプールなどでたくさん遊んでもらい楽しそうでした。」との回答をいただきました。

【考察】

第23回は例年に比べ乗手手の参加人数が少なかったことから学生と乗手手の交流がより濃く行われたと推測します。また、学生と乗手手の保護者との交流も増え、より「ヒトとヒトとの交流」が行われた場でもあったと考えられます。

秋ミニ乗馬会（2016年11月開催）

【活動内容】

11月の乗馬会では、馬事介在活動センターをメイン会場とした“ミニ乗馬会”を開催しました。第23回に比べ規模は小さいですが、より乗手個人にあったプログラム内容で新しい乗馬プログラムも行いました。

うまセンター職員による馬の管理のもと、作業療法学科の石井孝弘先生や顧問の小川家資先生、みなさまのご助力により、大きな事故も

なく無事に終了することができました。職員、先生方には当日だけでなく、私たち実行委員会の話し合いにも何度となくご助言をいただき、まことに感謝しております。また、うまセンターの学生スタッフにも準備の段階から当日まで、様々な面で協力していただきました。毎回、乗馬に関して意見をいただいたり、安全な乗馬を行うために曳き馬やサイドウォークの練習を行っていただいたり、開催のために多くのお力添えをいただいております。アンケートは秋ミニ乗馬会に参加した乗手手の保護者8名に実施しました。

【乗手手の病名・障がい名】

四肢体幹マヒ 1人 自閉症 5人

肥大大心筋症 1人 VATER症候群 1人

※乗手手8名のうち、「てんかん」は4人。

【アンケート結果】

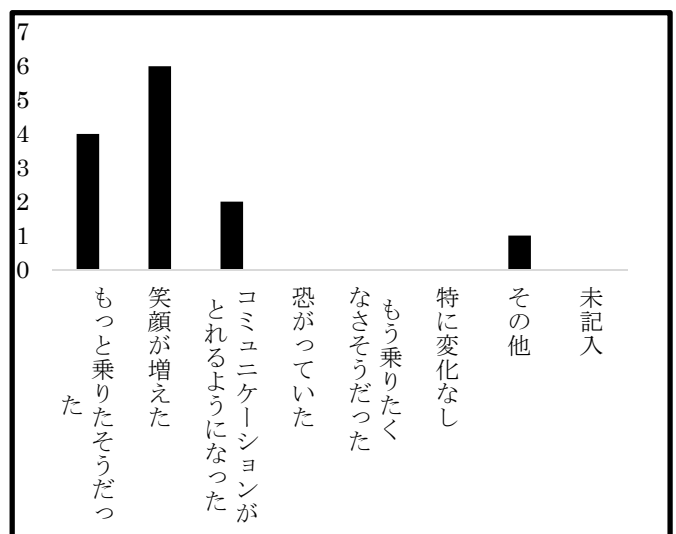


図4.「乗馬前後のお子様の変化や感想などありましたら、教えてください。（複数回答可）」

図4に示す通り8名中6名に笑顔が増えていたと回答していただきました。

このほかにも、自由記述欄には『入院生活の長かった息子にとって、初めての遠出がこちらの乗馬会（第一回）でした。その経験に力を得てその後色々なことにトライできました。』『いつも楽しく参加しています。もう体重制限にひっかりそうなので、大人のための乗馬会もあると良いなあと思っています。』などのお声をいただきました。

【考察】

今回の秋ミニ乗馬会では、参加人数が少ないこともあり、乗馬のみならず人参あげ、馬房掃除など乗手個人に合わせたプログラムを行いました。図3より乗手手に満足していただけているとわかります。当実行委員会は平成28年度で12年目を迎えます。今後も帝京科学大学ならではの環境を活かし、乗手にとってだけでなく、乗手手の家族、参加していただくボランティア全員に楽しんでもらえる乗馬会を企画、運営していきたいと思ひます。

3. 今後の展望

私たち障がい者乗馬会は、職員、先生方、学生の多くのお力添えいただき、無事に開催することができております。今年度限りで、乗馬会を支えてくださったうまセンター職員の今野直人氏、前原裕紀子氏のご退職なされ、これまで乗馬会で活躍してくれていたポニーのピノも退廃します。来年度は今までとは環境が変わり、一から始めなければいけないことが多くなるでしょう。しかしながら、当実行委員会は12年目を迎えます。継続して開催するにあたり、参加者に毎回楽しんでもらえるよう、より乗り手さんの目線に立ちながら乗馬内容や企画などの工夫を凝らして運営し、新しい事への挑戦もしていきたいと思っております。

まだまだ未熟な我々ですが、今後も乗り手や保護者、そして参加者全員に心から楽しんでいただける乗馬会を目指してまいりますので、これからも変わらぬご支援をよろしくお願い致します。

障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」

実行委員会

アニマルサイエンス学科4年

秋山真裕子 浅見晴香 齋藤智仁
佐々木晃大 中地瑞貴 林佑
平山ちひろ 二木菜月 山内愛実
吉田泰大

アニマルサイエンス学科3年

青木瞳 阿部匠 岩倉未幸
上田桃子 白田智映 田口愛
野田直子

アニマルサイエンス学科2年

池谷尚斗 竹内涼 林姫花
平田達稔 福士佳寿真

アニマルサイエンス学科1年

浅川響 今泉彩音 佐々木愛
高橋涼太 山田玲花

参考文献

- (1) 特定非営利活動法人 RDA Japan : RDA 活動のためのガイドブック 2005 年版

特別支援学校における夏季集中療育プログラムの実践

小林旭・千村優馨・金井祐樹（ノーウォーリーズ）

キーワード：地域連携、障害児支援、感覚統合療法 動物介在活動

1. はじめに

特別支援学校における夏季短期集中療育として児童生徒に対する集中療育、及び特別支援学校の教員と本学学生とのケース検討を主な活動として行った。

さらに、昨年度に続き3月に乗馬活動を行う予定である。その結果、特別支援学校教員及び保護者より高評価を得ることができた。乗馬活動は昨年度の続き2回目の取り組みだが、教員・保護者は実感としてその効果を認識する機会となった。

視覚障害生徒に対する乗馬活動は、視覚障害のある生徒が馬に触れあうことや、騎乗する経験がない中での実施を考えていたが、日程の調整がつかずに今年度は行うことができなかった。

2. 目的

目的は以下のとおり設定した。

- I. 感覚統合理論や動物セラピーに基づく児童・生徒支援を行う。
- II. 専門家の行う児童・生徒支援から特別支援学校の教員が指導の方法を学習する。
- III. 教員とのミーティングを行うことで今後の児童・生徒支援や指導に生かす。
- IV. 通学児童生徒、及び隣接している福祉型障害児入所施設、障害者支援施設の児童生徒への乗馬活動による支援を行う。
- V. 視覚障害特別支援学校での乗馬活動の実施により、日ごろ経験することのない大型動物としての馬とのふれあい、騎乗を行う。

3. 期日・場所等

I. 夏季集中療育

3日間連続で行うことでより効果が期待できると考え以下のとおり設定した。

日程：平成27年8月17日(水)～19日(金)

場所：東京都立N特別支援学校 プレイルーム等

II. 乗馬活動

夏の集中療育から半年期間をおいて実施した。

日程：平成28年3月11日(土)

場所：東京都立N特別支援学校 校庭

4. 参加児童生徒

I. 夏季集中療育

この活動に参加した特別支援学校児童生徒は12名だった。

本学から教員として、石井孝弘教授・小橋一雄准教授（医療科学部作業療法学科）、花園誠教授（教育人間科学部こども学科）に協力していただいた。

本学の参加学生は医療科学部作業療法学科、生命環境学部アニマ

ルサイエンス学科の学生が参加した。特別支援学校の教員の参加は10名から15名、日程により人数に違いがあった。

II. 乗馬活動

この活動に参加する特別支援学校児童生徒は、自宅生30数名、施設入所生30数名、合計約60数名が参加した。

特別支援学校教員10名程度が参加した。

施設職員約10名程度が参加した。

本学から教員として、石井孝弘教授、本学の医療科学部作業療法学科、生命環境学部アニマルサイエンス学科の学生が参加した。

5. 日程・内容

I. 夏季集中療育

スケジュールは表1のとおり、3日間ともに同じスケジュールで行った。

表1. スケジュール

時刻	活動	内容	備考
9:00	スタッフ集合	打ち合わせ	
10:00	セッション1	遊びまたは動物のセッション	児童・生徒第1グループ参加
11:00	セッション2	遊びまたは動物のセッション	児童・生徒第2グループ参加
12:00	休憩（昼食）		
13:00	セッション3	遊びまたは動物のセッション	児童・生徒第3グループ参加
14:00	カンファレンス	カンファレンスと翌日準備	
16:00	終了		

12名の児童生徒を1グループ4名として、3グループに分けて、各1時間を遊びのセッションとして一日3セッション行った。1日目と3日目を遊びのセッションとして、2日目を動物との触れ合いのセッションとして実施した。

a. 遊びのセッション(1日目、3日目)

主な目標を児童生徒が、遊びに能動的に関わることができ、効果の指標として、児童生徒が笑顔を呈してくれるように考えた。遊びの提供は主に感覚統合理論を背景として、遊びを通して以下の刺激が提供できるようにおこなった。

- i. 聴覚 : 音を感じる感覚
- ii. 前庭覚 : 重力や回転、加速を感じ取る感覚
- iii. 視覚 : 光刺激によって生じる感覚
- iv. 触覚 : 物に触れたときに起こる感覚
- v. 固有覚 : ①位置覚（身体各部の位置）
②運動覚（運動の状態）
③抵抗覚（身体に加わる抵抗）
④重量覚（重量を感じる）

また、これらの刺激を提示することのできる遊びとして表2の遊具を用いた。

表2. 遊具

シーソー、段ボールの大型滑り台、ボールプール、トランポリン、太鼓橋、パルーン、スクーターボード、ボルスターシング、フレサースイング、クッション、米のプール

これらの遊具を用いることで得ることのできる刺激及びその効果は以下のとおりである。

- i. 前庭刺激を刺激として感じにくい低反応性のあるとき、耳石器・蝸牛から伝わってくる前庭刺激を感じにくい。そのために加速度・回転を求めていることから、日常的に多動となることがある。
(シーソーを強くこぐ、トランポリンを高く激しく飛ぶ、スクーターボードに腹ばいで乗り速度をあげて高い場所から滑らせる。滑り台を腹ばいで滑る。)
- ii. トランポリンは前庭刺激筋や関節運動から伝わってくる固有受容覚刺激を得られる。
- iii. 触覚刺激については、クッションやボールプール、布団などを用いて提供可能であった。触り心地の良いものを用いて圧迫刺激を共に提供することで鎮静化につなげる。また、快の刺激として取り込む事なども行った。
- iv. 身体の動きの学習に困難さを抱えている児童生徒に対しては、フレサースイングなどを用い、前庭刺激を受容しながら、落ちないように体を使う(運動企画)。また、太鼓橋なども用いて、身体の使い方が上手くない子どもに対して行った(運動企画能力の問題解決)。

b. 動物のセッション(2日目)：

今年度も昨年度同様に子どもがいろいろな動物に触れ合う際にブースを移動することなく経験できるようにした。1ブースに爬虫類、ハムスター、モルモットなど異種の動物を配置した。学校教員が子どもにつきながら動物との触れ合いを支援した。

II. 乗馬活動

3月11日(予定)のスケジュールは表3のとおりとした。

表3. スケジュール

時刻	活動
9:15	スタッフ集合
9:30	馬到着
9:50	開会挨拶(特別支援学校校長、副校長、牧場長) 注意事項説明：石井教授
10:00	乗馬活動開始(施設生)※
11:00	休憩と馬ににんじんをあげる時間
11:10	乗馬活動開始(自宅生)※
12:50	閉会挨拶(特別支援学校校長、副校長、牧場長、石井教授)

※乗馬は1周約70メートルのコースを1人1周行う。その後馬へのご褒美として、にんじんを馬にあげた。

6. 考察

今年度は日程の都合により実施が3月中旬となってしまった。年度終了間際であるが、小学校では終業式が3月末でありその間授業が行われていることもあり日程の設定が難しい。また近年は休日に職員が出勤することなども難しく日程設定が難しい。

特に特別支援学校などでは、一人一人の子どもの障害が異なることから、イベント等を行う際には、いつ、どこで、だれを対象とするのかについての十分な検討が必要となる。今回実施を考えていた視覚障害特別支援学校は都内にあり、通学生徒は都内全域からの通学であること、さらに視覚障害があることから、休日開催はなかなか難しく、学校教員からもぜひ行いたいとの声があったが実施できなかった。

新年度が始まる以前に日程調整が必要であることが分かった。今後継続して行うにはこれらのことを十分に検討しなければならぬと思われた。

上野原自然探検隊部 2016 年度の活動報告

青木優衣（上野原自然探検部）

キーワード：自然体験、上野原市

1. 「上野原自然探検部」とは

上野原市内の小学3年生～6年生を対象として、9月と12月を除いた年間10回の活動を実施している。主な活動内容は上野原市内の山野と溪流をフィールドとした自然体験である。これからの社会を担っていく子どもたちが、環境に対して意識の高い大人に成長できる一つのきっかけづくりとするのがねらいである。

帝京科学大学の学生は、活動のサポーターとして参加し、自然体験プログラムを企画・運営している。企画を立てるに際しては、企画会議を週3回の頻度で開催する他、入念にフィールドを実地踏査し、自然体験の安全管理には万全を期している。

2. 活動目的

表1. 2016年度の活動日と活動内容

日程	内容
4月 9日	説明会・自己紹介・ネームプレート作り・アイスブレイク・根本山ハイキング
5月 7日	ハイキング・ネイチャーゲーム・自由遊び
6月 11日	カエルとホタルの観察・夜の森探索
7月 2日	樹海探索・自然探索・富士山科学研究所見学
8月 19、20日	キャンプ・野外調理・川探索・ネイチャーゲーム・自由遊び
10月 1、2日	冒険ハイク・高原散策・プラネタリウム・自由遊び
11月 5日	ハイキング・自然観察
1月 14日	水鳥の観察・林間での自然体験
2月 4日	ネイチャーゲーム・アウトドアクッキング
3月 4日	1年間の振り返り、卒団式

*登山・ネイチャーゲーム

4・5・11月での活動は、アイスブレイク・ネイチャーゲーム・自然観察を通してサポーターや他学年・他学校との関わり・子どもたちが環境に対する意識を高められるような展開を積極的に取り入れようと考えた。例えば、ネイチャーゲームを行い班対抗のゲーム展開を毎月実施し、他者との関わりや協力を取り入れた。また、班ごと登山を行うため学年による体力の差による歩くスピードや休憩のタイミングを高学年が低学年を配慮できるようサポーターからの声掛けの方法も意識しながら行動した。さらに、自然観察は学年問わず楽しみ・理解できるようプログラムの企画を考えた。例えば、11月では雁ヶ腹

子どもたちが楽しく継続的に自然体験できる場を提供することで、以下の事を目的とした。

- 1) 次世代を担う子どもたちの環境に対する関心を高める。
- 2) 自然に対する感性を培い、豊かな心を育てる。
- 3) 季節を感じ、上野原市のフィールドで友達と楽しむことや自然の大切さを実感する。

3. 活動内容

1) 班構成

班構成は4年生1人・5年生3人・6年生1人・サポーター2人を一班とし、全体を四班の小班編成として、子どもたちの活動しやすさと、他学年との関わりに配慮した。

摺山で秋に観察できる植物を見つけ4種類を観察した（ススキ・クリ・銀杏・トリカブト）。また、観察の後はパネルを使い4種についてのクイズや解説を行った。クイズでは、個人で考えるもの2問・班で考えるもの2問を用意し、自分の考えと他者との意見を融合して考え・発言することを目的とし、展開した。解説中には子どもたちがフィールドノートにメモを取る様子が見られた。我々が行った活動に対して、自然への興味・関心がより一層深まったのではないかと考える。結果として、サポーターにも子どもたちにも有意義な活動になったと思われるような様子だった。



観察した植物をノートへ書き込む



触ってかぶれないようウルシについて説明

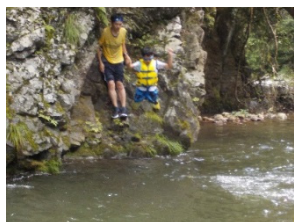


ノートに植物をこすりだしている様子

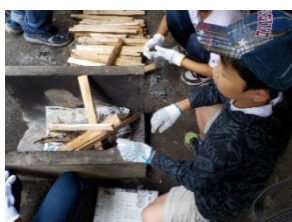
*キャンプ

8・2月での活動は、8月に一泊二日のキャンプを行いゆずり原少年自然の家で川遊びや野外炊事を中心に実施した。2月にはディキャンプを行い同様のフィールドでネイチャーゲームや野外炊事を行った。8月では火付けや飯盒炊飯を行い飯盒でのお米の炊き方を体験させ、キャンプスキルを修得させた。魚さばきでは、実際に生きている魚をさばいてもらいさばき方を身につけさせた。さらに普段生活する上で食べるために自分たちの手で命を奪うことはない。我々も含め、そんな子どもたちが食べるために魚さばきを行った。子どもたちは生きて

いる魚を見て驚いていたが、一人一人が真剣に命について考えながら取り組むことができた。川遊びではザイルを使用して水に流されたり、飛び込みを行った。自由遊びを中心に子どもたちが主体となり遊びを考え、実践していた。さらに、子どもたちは川にいる生物の観察を行っていた。アユや石の裏に付着しているトビゲラを観察し体の特徴や大きさの違いを見つけ、共有していた。川遊びでは、具体的な企画は行わなかったが子どもたちが自由遊びや観察を行う事で自然への興味・関心をより深めることができた実感した。



川へ飛び込み



火おこし



魚さばき

*観察活動

6・1月で観察活動を実施した。6月では中山川でカエル（4種）とホタル（2種）の観察・勉強会を行い、1月では大野貯水池の水鳥（10種）の観察・クイズを行った。各フィールドで観察できる動物を図鑑にまとめ、子どもたちに配布した。図鑑の内容としては学名・体長・食性・住処・雄雌の違いを記載した。6月の活動では、パワーポイントでカエル・ホタルの基礎的な知識をまとめ、子どもたちと室内で勉強会を行った。1月では野外での活動だったため、パネルを制作シク

イズを行った。また、双眼鏡の使い方を説明し観察に役立てた。どちらの活動も勉強会で学んだことや観察中に気づいたことがあれば、フィールドノートにメモを取る様子が見られた。さらに、昨年度も活動に参加していた子は、昨年メモをしたノートや図鑑をもって観察を行っていた。これは、子どもたち自身が動物に興味を持ち、勉強したことを今後の活動に生かしているということがわかる。この事を通して今後、我々もより環境や動物について考え、勉強していかなければならないと感じた。



水鳥についての説明



聞いた知識を図鑑へ書き込む



パワーポイントを使用し
カエルとホタルの勉強

4. まとめ

今年度は合計10回の活動を行う事ができた。子どもたちの入団者数も20人と最大人数で活動を行う事ができ、帝京科学大学の学生15人（男子：7人、女子：8人）で子ども一人一人の様子を見ることができた。上記の活動報告のように登山やキャンプ・観察活動を通して同じ学校以外の子とも関わり、自然についての意識を高めることができた。3月の活動では一年間の振り返りを行った。さらに、活動をまとめた文集も制作し子どもたちに配布した。文集には子どもたちが書いた作文が含まれており、楽しかった事や感じたことの感想が書かれていた。一番は8月のキャンプで行った川遊びだ。この文集により、子どもたちが求めている体験や活動の在り方を改めて確認すること

ができる。子どもたちから生の感想が聞けるこの文集はとても意味のあるものとなっている。

5. 自己評価・反省

今年度の活動は学生が15人と、子どもたちの安全管理上十分な人数で企画・運営を円滑に進めることができた。しかし、来年度も同じ人数の学生が集まるかは定かではない。毎年行っている企画を当たり前と思わず、学生の人数を考え安全第一で企画・運営を今後も行っていきたい。さらに、上野原には素晴らしいフィールドがたくさん存在している。地域活性化の効果も踏まえ、今後も上野原のフィールドで子どもたちと自然観察を行っていきたいと考えている。

障害児者及びその家族とかかわるスタッフへの支援 ～認知症カフェと乗馬活動を通して～

眞田英知・佐藤駿・中村汐里・金井祐樹（地域支援活動サークル Playing）

キーワード：地域連携、認知症、障害児、乗馬活動、カフェ

1. 認知症カフェ

I. はじめに

地域包括ケアは「要介護状態になっても可能なかぎり、住み慣れた地域や自宅で生活し続け、人生の中の最期の時まで自分らしく生きたい」と望む人が、医療や介護など必要なサービスを受けながら、在宅で自立した生活を続けられるように、地域ぐるみで支えるという考え方である。我が国における、認知症高齢者は推定460万人、予備軍も合わせると約840万人に達し、今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者が住み慣れた地域で生活することを支えるために、様々な取り組みが必要とされている。

本学では今年度よりNPO法人さいはらの協力のもと、上野原市と連携しつつ「高齢者の交流拠点を作り、介護予防に資する」取り組みを、認知症地域支援モデルケースとして、上野原市西原地域に認知症カフェを設置し参加している。

このように、地域で高齢者に接して、地域支援モデルに参加し実践例に触れることで、学生は地域社会の多様なニーズを汲み取り、地域に住む人々の認知症に対する意識や、認知症予防を具体的に学ぶことが可能になる。

II. 目的

- ①認知症を持つ本人の役割や人とのつながり、生き甲斐などを知り、高齢者の地域生活支援のあり方を探る。
- ②西原地区の住民の方々に、認知症への理解や地域支援の在り方、介護、予防ケアなどについて情報提供を行う。

III. 方法

- ① 開催時期：4月～3月に月1回、計12回開催する。
- ②会場：羽置の里 びりゅう館
- ③対象地域：原則、西原、桐原地域。上野原市全体から参加希望があれば受け入れ
- ④対象者：上記対象地域の認知症本人およびその家族を含む住民

IV. 結果

本年度は、合計12回を予定していたが、諸事情により、3回しか開催されなかったため、当大学も3回の参加となった。以下に参加した結果を述べる。

- 1) 実施日時：4月24日（日）9:30～16:00

実施内容：

11:00～ 学生による認知症予防体操

13:00～ 認知症ミニ講座

参加者：男性2名

- 2) 実施日時：5月29日（日）9:30～16:00

実施内容：

10:00～ 回想法的なコミュニケーションと脳活性化の体操(作業療法学科)

11:00～ 介護保険と高齢者福祉サービス事業(地域包括支援センター加藤保健師)

13:00～ 回想法的なコミュニケーション

日常生活の変化についてお話

参加者：男性2名

- 3) 実施日時：6月26日（日）9:30～16:00

実施内容：

11:00～11:45 ミニ講座「認知症予防とカラオケの効果」
(医療科学部 作業療法学科 小橋准教授)

13:30～15:00 カラオケ会

- ・おしゃべりコーナー…参加者と小橋先生、スタッフとの交流
- ・介護予防相談コーナー…少人数のためミニ講座や参加者との交流の中での相談

参加者：男性2名

※5月に行われた会議の結果、今年度のカフェ「かいこや」は7月以降休業となった。

V. まとめと考察

上野原版認知症カフェとは、認知症の予防やその進行の遅延をねらいとすることから、広く地域のお年寄りが気軽に楽しく集える場とし、認知症本人およびその家族も意識せずそこに参加、交流できる形態とする事業である。

実施計画として、開催時期を4月～3月に月1回、計12回開催とし、会場を西原地区にある「羽置の里 びりゅう館」とした。実施結果としては、5月と6月に開催した。5月の開催内容は回想法的コミュニケーションや認知症予防体操、介護保険について等を実施した。6月の開催内容は認知症予防とカラオケの効果についての講義や回想法的コミュニケーションを実施した。

活動をしていく中で、西原地区に住む高齢者にとって優先される活動は、畑仕事などの役割・生産的活動、地域に住む高齢者の交流場面であり、認知症への興味や関心があるものの、天候に左右される畑仕事や他の予定を考慮すると、参加困難であると考えられる。また、開催場所がびりゅう館のみであり、移動手段の有無や気軽に足を運べないのではないかと考えられる。

そのため、西原で平日活動を行っている「元氣いきいき教室」や老人会などのイベントと合わせて行うことが、認知症への理解につながりやすいと考えられる。それに加え、びりゅう館だけでなく、人が集まりやすい場所で活動することが望ましいと考えられる。

2. 障害児乗馬キャンプ

I、はじめに

動物介在教育・療法として、人が動物とかわかることが心身へ良い影響をもたらすといわれている。その中でも馬とのかわわりは対象者が騎乗できることなど他の動物とは違うかわわりを持つことができる。

本学でも以前より地域の障害児に対して乗馬活動の機会を提供している。方法などはまだ確定的なものはなく、それぞれの団体や乗馬クラブ、牧場などが独自に行っていることも少なくない。

乗馬療法は、特に医療に位置づけられ対象者の評価及び、乗馬活動の治療的意味等を明らかにして、その両者の結果をもとに効果的な方法で行うものである。

今後日本でも障害児・者の乗馬の機会は増加していくものと思われる。

学生が地域と連携し、これらの活動を支援していくことは、非常に重要な経験といえる。

II、目的

1泊2日で乗馬活動の提供を行う。

乗馬活動の提供のみならず、馬の準備、飼い付け等を行うことでトータルな支援活動を行う機会とする。

牧場スタッフと学生が交流を行うことで、相互理解と知識技術を共有する。

III、方法

平成29年3月4日(土) 13:00～5日(日) 13:00

場所：群馬県伊勢崎市平井町1448-2 ホースパラダイス群馬

参加者：騎乗者 3月4日(土)小学生約60人、5日 障害児5名
ボランティア 5名

他大学学生等 ボランティア4名(高校生)

帝京科学大学 作業療法学科4年生1名、3年生1名

スケジュール：

3月4日(土)

10:00 小学生に対する乗馬体験、リーダーとサイドウォーカー、
その他の準備など

12:00 昼食

15:30 研修会(乗馬、馬の理解、馬の世話、調教等)

17:00 夕食

19:00 学習会、交流会

3月5日(日)

4:00 馬の飼い付け

7:00 朝食

8:00 馬場準備、馬準備、調教、馬の特性に関する学習

10:00 個別乗馬療法支援

12:00 食事

13:30 反省会

IV、結果

4日：

午前中の乗馬体験は主にリーダーとサイドウォーカーを担当した。対象は小学生総数は64名。教員が指導しながらボランティア、学生が対応したが特に問題となることは無く対応できていた。騎乗している小学生以外の支援としてはヘルメットの着用等を行った。保護者との会話や騎乗している小学生との会話なども経験することができた。

午後は教員がボランティアの学生へ馬装方法やその意味などを指導した。障害に関する知識は作業療法学科の学生は知識と技術を実践する場となった。夜間は教員による馬の特性、手綱に関する研修を行った。

5日：

個別に来る障害児に対する乗馬活動の提供を行った。対象は脳性麻痺、発達障害、自閉症スペクトラム障害、ADHDなどである。

各学生が個別での乗馬活動にリーダー及びサイドウォーカーを担当した。個別にどのように対応したらよいのかなどを考えながら対応した。

前日に加えて調教、馬の特性に関する学習を午前中に行った。

V、考察

今回、一般の小学生への乗馬体験の支援及び障害児・者の乗馬活動への支援を行った。障害のない小学生と何らかの障害のあるお子さんへの支援についてリーダー、サイドウォーカーに関してはその方法に大きな違いはなかった。しかし、コミュニケーションの取り方では障害のあるお子とコミュニケーションがとることができないこともあり苦労した。

発達障害、肢体不自由に関しては、机上での学習を実際に見ることができてよかった。

上野原市内における動物介在活動の実践

注連育美（動物介在活動部）

キーワード：動物介在、高齢者、上野原市、認知症

1. はじめに

わたしたち動物介在活動部は、現在上野原市大野に所在する特別養護老人ホーム「桜の里」にて定期的に動物介在活動を実施しています。この活動は2014年から学生を中心に始まりました。

上野原市では現在高齢化が進んでおり、人口の約3人に1人が高齢者にあたります。この現状を受け、市内を中心に在宅医療を行っている内科医の上條医師は、特に認知症高齢者への取り組みを模索していらっしゃいました。そこで、大学という資源が上野原市にある事、またそうした機関と関わる事による地域活性化をねらいとし「上野原市でのアニマルセラピーの実施」を大学へ提案して下さいました。そして当時の横山研究室所属の4年生が教員方を介しこの話を受け、卒業研究として取り組み、次年度より動物介在活動部として後輩へと引き継がれ現在へと至ります。

このような経緯から、この部活動の最終目的は「上野原市における継続的な認知症高齢者へのアニマルセラピーの実施」です。

2014年の1年間の卒業研究としての活動から、この目的に近づくためには単に動物介在活動を実施するのみを考えていくのではなく、「動物と学生が施設に出向き動物介在活動を実施することで、そこに参加した施設入居者さんに少しでも“楽しいと感じてもらえるもの”や“喜んでもらえるもの”を作ること」が必要なのではないかとの結論が得られました。

つまり、この私たちの実施する動物介在活動の中心は、動物でも学生でもなく「施設の入居者さん」であり、「桜の里で暮らしている〇〇さん」です。活動の実施の際にはこうしたテーマを念頭に置いた企画に毎回取り組んでいます。

2. 活動紹介

2-1. 活動場所

2014年当初から、上條医師の管轄内である「地域密着型特別養護老人ホーム 桜の里」で活動をしています。現在30名ほどの高齢者が暮らしており、半数以上の方が認知症と診断されています。認知症とはいろいろな原因で脳の細胞が死んでしまったりしたためにさまざまな障害が起こり、生活する上で支障が出ている状態のことを指します。たとえば物忘れは物事全体がすっぽりと抜け落ち、ヒントを与えても思い出すことができません。本人に自覚はありませんが進行性であり、日常生活に支障をきたします。施設内は10人ほどからなる3つのユニットと、入居者さんごとの個室が設けられており、入居者さんは各々の時間をそこで過ごされています。

2-2. 活動形態

活動日程調整から実行までを部員が企画しています。活動当日は施設内にある広間をお借りし、動物ごとにブースを設け入居者さんには

自由にブースを回ってもらうかたちを取っています。入居者さんには1人ずつ部員が付き添い、移動の補助や会話をしながらその方の意思に沿って一緒にブースを回ります。

活動に同伴する動物に関して、現在は動物介在教育研究部やアニマルサイエンス学科の卒業生で介在活動に携わっている方々に依頼をしています。

また、活動のテーマとして掲げている「施設入居者さんに楽しんでもらうこと、喜んでもらうこと」に沿った企画として、動物以外にも（施設という環境では一年を通してあまり季節を感じられる機会がないため）開催時期の季節に沿ったブースや、動物が得意でない方のためのブース、その方の昔好きだったものに関するブースも取り入れ、色々な方面から楽しんでもらう工夫にも取り組んでいます。

この他にも、基本的には動物を介在した活動をメインに行っていますが、テーマにある「対象者を知る、交流する」に沿って、週1、2回動物を連れて行かず部員のみでの施設訪問にも取り組んでいます。1回1時間ほどの中で各々入居者さんと会話をします。その人の思い出や今日の出来事などを自由に話すことで、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解でき、その人のための活動であることを意識することが出来ています。

3. H28年度の活動報告

3-1. 動物介在活動

アニマルセラピーとは、動物介在療法のことです。広い意味では動物との関わりが人間の健康の質を向上させる場合を指します。アニマルセラピーと一口に言いますが、種類があります。ひとつは動物介在療法(Animal Assisted Therapy=AAT)です。動物介在療法は治療上のある部分で動物が参加することが不可欠であり、医療側の専門職、作業・心理・言語療法士などがボランティアの協力のもとに治療のどこで動物を参加させるかを決定します。治療のゴールが存在し、活動においては記録が必要であり進捗も測定されなくてはなりません。一方、動物介在活動(Animal Assisted Activity=AAA)では基本的にペットと人間が表面的に触れ合う活動で、病院や施設などでの特別なプログラムの中に存在するものではありません。治療上の特別なゴールが計画されず、活動する人たちも詳細な記録はとらなくてよいとされています。私たちは後者の動物介在活動としてのアニマルセラピーを実施しています。

桜の里での動物介在を含む活動は以下のように5月、6月、8月、12月の計4回を企画し実行しました。

〇5月1日(日) 参加者：入居者8名、学生16名

参加した犬によるドッグダンス（ドッグダンスとは、犬と人が一緒に音楽にあわせて楽しく踊るスポーツのこと）では、季節感を出す事をねらいとし曲を「こいのぼり」にしました。馴染みのある曲で口ず

さむ入居者さんもいらっしゃいました。ダンスは踊るスペースを参加者で囲む形で鑑賞し、フラフープを入居者さんに持ってもらい、その間を犬が飛ぶなど、ダンスに協力して頂くかたちで盛り上がりました。

○6月25日(土) 参加者：入居者さん8名、学生15名

梅雨の時期ということもあり、てるてる坊主を作るブースを設けたり、雨の歌を流したりといった企画を実行しました。手先の作業が難しい方がおり、作業の難易度は要検討でした。ヘビやトカゲを連れて行くと、もの珍しそうに触れ合う様子もありました。別の場所ですぎのブースも設け、生体のみでなく壁に掲示した写真やうさぎのプロフィールも好評でした。

○8月13日(土) 参加者：入居者15名、学生16名

市内の他施設の高齢者も数人参加したため、全体数の多い活動でした。犬たちと触れ合うなかで昔飼っていた犬を思い出し、涙する方もいらっしゃいました。また、上野原市では昔養蚕業が盛んであったため、入居者さんの中には蚕をみると懐かしく感じる方もいるのではないかと考え、以前から蚕の生体を活動に用いています。今回も養蚕業をしていた方でその思い出を話される方がいらっしゃいました。他にも、時期である市内の夏祭りや海の写真を大きくパネル展示し、目の不自由な入居者さんにも分かりやすいように工夫したところ、話が盛り上がり好評でした。

○12月17日(日) 参加者：入所者9人、学生9人

初めて動物介在活動に参加する方や、うさぎ好きの方を中心に実施しました。他にも単に動物たちと触れ合うのみでなく、お話することが好きな方向けに椅子を用意し談笑スペースを設け、さらに話のきっかけとして12月にちなんだ物も設置しました。

3-2. 施設への訪問活動

H28年度は5月から12月の間で計22回実施しました。1月から3月の期間には感染症予防のため活動は控えました。また、11月20日(日)には各ユニットの入居者さんの情報をまとめ、その方に関する質問表を学生が作成し実際に入居者さんとお話することでその表を埋める活動に試みました。普段以上にお話する時間が設けられたことでじっくり入居者さんとの交流の時間を作ることが出来ました。

訪問活動では、その日会話した内容を入居者さんごとにノートに書き起こし、何を話したか、その方について知ることが出来た点や話していて楽しかった点などをまとめ部員内で共有しています。

この訪問活動では、実際に入居者さんと直接コミュニケーションをとることで、対象者である入居者さんの名前と顔を覚える事が出来ました。さらにその方の聞こえづらい耳の側に立って話しかけないようにするといった注意点や、感情の起伏が激しい入居者さんへの接し方など、活動をする上で活かせる点が多くありました。

一方で、認知症である方とのコミュニケーションをとることの難しさも実感しました。対話が思うようにいかない場面、こちらの問いかけに対して反応が得られない場面などもあり、なるべくはっきりと分かりやすい言葉を用いること、上から威圧的に話しかけないようにすることや、大きい身振りや相づちなどを心がけるようにしています。

さらに、こうした訪問を続けることで、普段の表情と活動時の動物を前にした場面での笑顔の多さの違いにも気づくことが出来ています。最初は手探りでどんなことを話しかければいいのかわからない部

員たちも入居者の方とお話する機会が増えるうちに自然と、会話するのに適切な姿勢や話すスピード・声の大きさを身に着けることができています。ただ日々のことを聞くにしてもどんな話題をふってどうやって話を広げるべきか悩むことも多いです。動物介在時には目の前に動物がいるので、その動物がした動きや見た目について話せるため会話が成り立ちやすいと感じます。また、犬嫌いだと話されていた対象者の方も実際に犬を見るとかわいいねと喜んでくださったり、自発的に動物に触ったりといったことがありました。

普段、人とコミュニケーションをとるときは同じ内容を繰り返しがちな対象者の方も動物とのふれあいを通しては、かわいいねといった発言やこちらが質問したことに対して受け答えもスムーズにできていました。訪問活動で私たちが訪れたときのことは記憶にない方も、近々ふれあい活動があると予告させていただくと、「この前も私、犬に触ったんだよ。かわいいかったね。」と前回の活動について思い出しながら話していただけることもありました。動物を連れていくことだけがすべてではなく、対象者の方の普段の様子も知っているからこそ気づかされる部分があります。

また、施設へ定期的に足を運ぶことは施設職員の方へわたしたちの活動が継続的なものであることを認知して頂くにも繋がります。これは活動を続けていく上で重要であると実感しています。

3-3. 介在動物の導入

活動の継続にあたり、H28年度は他団体に動物を依頼するのみでなく、部でも介在動物を飼育し活動に向けたハンドリングやトレーニングを学びたいと考えました。5月から介在動物の導入に向けて準備を進め、活動での入居者さんの反応が良い事、鳴き声や飼育費用の面の検討の結果から、うさぎの導入を決めました。部内で各自テーマを決め調べたことの発表やうさぎ専門店勤務の卒業生をお招きしての勉強会の開催、ペットショップや専門店での必要な飼育用品の検討、教員の飼育するうさぎをお借りしての施設での介在方法のシミュレーションなどを経て、10月末にうさぎを1羽導入しました(図1)。以降学内に活動に向けて飼育しています。



図1. 介在活動動物のうさぎ(ごまろ)

3-4. 外部セミナーへの参加

外部で催される動物介在活動や福祉分野に関わるセミナーや報告会への参加を部員に呼びかけ、有志で参加し知識を深めました。今年度は9月下旬に行われた日本臨床獣医学フォーラム年次大会、10月中旬に行われた日本動物病院協会の人と動物のふれあい活動(CAPP 活動)報告会に参加しました。

4. H28 年度の活動反省と来年度の展望

私たちの部では、「活動の対象者である施設入居者さんに楽しんでもらうこと、喜んでもらうこと」に基づいた活動を日々考えています。そのためには単に動物介在活動や訪問活動の実施のみを考えるのではなく、さらに入居者さんに関わる周囲の方々と協力・連携していくこと、部の基盤を作ることなど、多面的に考えた活動の継続が必要であると考えます。

来年度で4年目を迎える動物介在活動部はまさに基盤作りの最中であり、今年度の活動においてもそれに伴った活動に取り組んでいけたのではないかと振り返ります。来年度は今年度の活動でみえた動物介在活動中の各ブースの改善点の見直しや活動後の施設職員の方との反省点の共有・意見交換、うさぎの飼育環境見直しなど、部の発展に繋がる事項についてさらに掘り下げ、深めていきたいと考えています。また、こうした基盤作りをしていく事で、市内の他施設へ活動範囲を広げられれば、さらに地域との繋がりが生まれるのではと考えています。

引用文献

「ペットクリニック・ドットコム ドッグダンスを知っていますか？」

<http://www.pet.jp/c/column/news-bin/Detail.cgi?rgst=00000408&CatgM=4>, 2017. 8. 28

「認知症とは？原因・症状対処法から予防まで」

<https://info.ninchisho.net/mci/k10>, 2017. 8. 28

「動物があなたを癒す？アニマルセラピーをご存知ですか」

<http://www.health.ne.jp/library/5000/w5000331.html>, 2017. 8. 28

足立区における飼い主のいない猫を減らすための地域連携活動の実践

三井香奈・田中翔優・加藤翼・山本葉月・加隈良枝（野良猫調査隊）

キーワード：野良猫、地域猫、足立区

1. はじめに

平成28年度の環境省の調査によると、全国の自治体における猫の引取り数は約7万3千頭であり、その内の約6万2千頭（85%）が所有者不明の野良猫となっている。飼い主のいない野良猫の対策として、環境省では「地域猫活動」という野良猫を地域住民の認知と合意の上で共同管理するという活動を推奨している。環境省の「住宅密集地における犬猫の適正飼養ガイドライン」によると、地域住民と飼い主のいない猫との共生をめざし、不妊去勢手術を行ったり、新しい飼い主を探して飼い猫にしていくことで、将来的に飼い主のいない猫をなくしていくことと定義されている。

本学千住キャンパスがある足立区内でも、飼い主のいない猫の存在が長く問題とされており、ボランティアを中心に保護譲渡活動が行われてきた。区は「足立区猫の適正飼育ガイドライン」を制定しているほか、「地域猫活動支援モデル事業」や「猫の不妊去勢手術費助成制度」を実施してきた。しかし、それらの効果が明らかになっていないため、私たちが野良猫の実態について学びながら専門的な知識や技術を活用し、地域の実際の問題に取り組むことができないかと考え、活動を始めた。

2. 活動のねらい

- 1) 足立区内の野良猫の数や生態を把握すること。
- 2) 地域の飼い主のいない猫を減らすための活動を行うこと。
- 3) 学外のコミュニティとの交流を通じて、動物福祉や動物愛護の現状を知り、情報発信すること。

3. 団体構成

野良猫調査隊は、動物福祉サークル「アニマルライフ」に所属しているメンバーの中で構成され、千住キャンパスのアニマルサイエンス専攻・学科の大学院生2名と学生19名が所属している。部署を運営部、調査部、総務部の3つに分け、各部署にリーダーと副リーダーがいる。部署によってそれぞれ異なった役割があるが、調査は全部署で行っている。

4. 活動報告

平成28年度の主な活動として、活動のねらい1)と2)に関連して、足立区内2カ所の野良猫調査を実施したほか、3)に関しては、足立区の行政やボランティアに対して野良猫調査の報告を行ったほか、学外の団体とイベントでの連携活動、及び民間の動物保護譲渡施設の見学を行ったので、以下に詳細を記す。

1) 野良猫調査

まず、調査実施に先立ち調査方法の勉強会を開き、月1回/年8回

の定例会議を行って運営方針の決定を行った。

平成28年度は、地域猫活動が実施されていない大学周辺と地域猫活動が実施されているN地域を調査場所とすることとした。地域猫活動地域の町名等は区が公表していないため、N地域とした。2016年6月から、月に6日間（1地域3日間）、午前10～12時、午後16時～18時のうち40～50分間を1回とし、1日に2回ルートセンサスを行った。ルートセンサスとは、野生動物などの個体数や生息密度を測る際によく用いられ、決まったルートを調査者が一定の時間内に歩き、個体数を記録する方法である。

二つの地域ともに約2kmと距離を統一したルートを設定して踏査し、屋外でみられた野良猫を識別シートに記録した。識別シートには「写真の有無」「個体No.」「時刻と観察場所」「柄と色」「尾の長さ」「首輪の有無」「年齢（大きさ）」「性別」「耳カット」「外傷の有無」「特徴」「行動や姿勢」「ルートからの距離」の情報を記入し、写真撮影と地図プロットにより個体識別をした。

大学周辺は、調査部1名と他部署から1～2名で行い、調査日に天候の記録（気温・湿度・天候・日の出時間・日の入り時間）を記入し、猫の記録（写真の個体番号、ノラ猫識別シートの情報をエクセルへ入力）を行った。N地域は大学院生が主に担当し、作業は同様であった。各月ごとの猫の記録を調査部がまとめ、月1回の定例会で調査部が成猫の発見数・子猫の発見数の発表をした。

調査日程は表1の通りであった。大学周辺は29日間、N地域は24日間調査した。表1の括弧内は午前か午後のみ調査した日程を示した。悪天候で調査できなかった場合や調査技術を磨くための練習のために予備日を設けた。

表1. 調査日程

	大学周辺	N地域
6月	17、20、(21)、28日	1、15、27日
7月	11、12、21、(28)日	27、28、30日
8月	16、24、25、26日	5、8、15日
9月	13、15、23、26日	5、12、27日
10月	12、19、25日	6、12、14日
11月	18、22、25日	2、4、8日
12月	(7)、9、16、21日	1、7、15日
1月	11、13、25日	6、17、24日

調査結果については、2017年2月15日18時半～20時半に足立保健所で開催された「飼い主のいない猫をなくす会議」に一部の学生が参加して報告した。この会議は足立区生活衛生課が年に3回開催しているもので、同課職員のほか、猫の保護活動を行うボランティア（個人・団体）、足立区獣医師会、区議会議員、帝京科学大（野良猫調査隊メンバー）が参加していた。



図 1. 調査の様子

2) その他の活動

動物保護活動に関する現状を知ることが目的として、学外の施設見学を行い、3名が参加した。2016年9月7日11時～13時に、イオンペット株式会社のベテモ LIFE HOUSE 横須賀店を見学した。この施設は民間企業が開設している猫の保護譲渡施設であり、企業担当者の説明を聞きながら活動現場を見せてもらった。

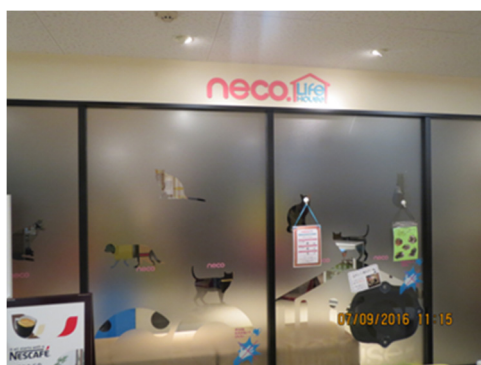


図 2. 保護譲渡施設

また、学外の団体との連携によりイベントに参加する活動も行った。2016年11月23日10～16時に足立区生物園主催により開催された「第2回わんフェス」というイベントにおいて、NPO法人あだち動物共生ネットワークによる動物愛護に関する普及啓発活動のスタッフとして7名が参加し、犬の譲渡会、物販や写真撮影の補助を行った。

5. 結果と考察

1) 野良猫調査

大学周辺の総数の月平均は30.5頭で最大総数は6月、最小は12月であった。一方、N地域は11.9頭で最大総数は11月、最小は1月であることが把握できた。これにより、去勢避妊手術の割合の高いN地域が大学周辺よりも猫の個体数が少ないことが分かった。成猫、子猫の数についても、大学周辺よりもN地域の方が少なく、地域猫活動の効果が考えられた。以上の結果の一部は卒業研究や修士研究に活用された。保健所の会議での調査結果の概要の報告に対しては、他の参加者より、今後も野良猫調査を続け、さらに野良猫で困っている区内の別のエリアでも活動をしてほしいといった要望をいただいた。

2) その他の活動

民間企業が開設している猫の保護譲渡施設の見学では、動物を譲渡するための工夫や、保護譲渡施設の存在意義などについての知識を深めた。施設内はとても清潔感もあり、猫も純血種のみであった。一般的な保護譲渡施設というよりは猫カフェに近い雰囲気であった。

足立生物園での「わんフェス」への参加により、実際のイベントの実施方法を経験したほか、多くの団体の協働について知ることができた。動物がいることで会場が盛り上がっていたものの、正式譲渡は数件と知り、動物愛護団体の努力と労力を実感した。また、譲渡を成立させるための民間団体の工夫や募金活動などについて学ぶことができた。

6. まとめ

野良猫調査の結果の一部を、実際に困っている学外の地域の関係者へ報告して還元することにより、サークル内での学生の調査に対する意識が高まり、モチベーションにもつながった。しかし、区内では調査地以外にも野良猫が多いとされる地域がいくつもあり、区内の野良猫個体数の把握は十分にできていないことも示唆された。

今後も引き続き足立区内での野良猫調査を行い、地域の野良猫の生態を明らかにしていきたい。初年度ということもあり、試行錯誤しながら活動してきたが、情報共有の工夫や、調査の負担を均等にするなど、各部署の役割の明確化を進めていきたい。また足立区内の動物保護活動団体の連合組織であるNPO法人あだち動物共生ネットワークとの連携を更に深め、他の動物愛護団体とも協力して様々なイベントの補助をしながら、動物愛護や動物福祉の現状を知り、理解を深めるとともに、情報発信にもつなげたい。最後に、野良猫の生態などの専門知識や野良猫調査の結果を公表することで足立区内の飼い主のいない猫の数を減らす活動に貢献していくことを今後も目指す。

7. 謝辞

NPO法人あだち動物共生ネットワークのご協力により、多くの調査や活動をスムーズに行うことができた。活動を支援して下さった本学地域連携推進センターの皆様にご心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 環境省 (2016) : 犬・猫の引取り及び負傷動物の収容状況 .
https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/statistics/dog-cat.html
 2017.10.31 参照
- 2) 環境省 (2010) : 住宅密集地における犬猫の適正飼養ガイドライン .
https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/h2202.pdf
 2016.11.24 参照

平成 28 年度 J-DRUMS 地域連携活動報告

恩田翔央・菊池康平・貝塚正明・山田陽菜・瓜生正隆・大島理紗・正田ちえ・渡邊真美・西島加南子

豊田輝（和太鼓サークル）

キーワード：和太鼓、地域交流

1. はじめに

平成 26 年度に発足した和太鼓サークル（サークル名：J-DRUMS）は、足立区を中心に地域で開催されるイベントや本学の大学祭などにおいて和太鼓の演奏を通じて地域交流および活性化を目的に活動している。

2. 平成 28 年度地域連携活動報告

発足以来、本サークルは、上記の活動目的に即した活動を展開した。この活動を更に発展させるため、平成 28 年度地域連携推進センターの助成を受けたので以下に報告する。

平成 28 年度は、2 回の演奏会を開催した。1 回目は、足立区内にあるサービス付き高齢者向け住宅「ハートランド足立」からの演奏依頼を受け、平成 28 年 7 月 30 日に施設内での演奏会を開催した。2 回目は、平成 28 年 10 月 30 日に本学の桜科祭で演奏会を開催した。

「ハートランド足立」と「桜科祭」での演奏会では、3 曲（曲名：「水駆（スイク）」、「旋風（ツムジカゼ）」、「双星（ソウセイ）」）演奏した。「水駆」は、本サークルメンバーのひとりがこれまで和太鼓指導を受けてきた方から本サークル発足を記念して提供いただいた曲である。「旋風」は、本サークルが発足した時に本サークルメンバーが作曲したものであり、「双星」は、平成 28 年度地域連携活動における演奏会のために本サークルメンバーが作曲したものである。

<水駆の紹介>

中太鼓 3 台、締め太鼓 1 台、大太鼓 1 台から演奏できる曲である。水駆の曲イメージは、葉から一粒の雫が水面におち、それが川となり上流から下流へ流れ、それが大海へ広がっていく状況を表現している。また、本曲は、初心者でも和太鼓の楽しさを実感できる難易度であるため、本サークルに入会した際に最初に覚える基本の曲となっている。

<旋風の紹介>

中太鼓 5 台、締め太鼓 1 台、大太鼓 1 台から演奏できる曲である。旋風の曲イメージは、はじめは小さい旋風がまわりを巻き込み、次第に成長していくという状況を表現している。本曲が作曲された当時は、太鼓もなくサークルメンバーも少ない状況であった。この状況において、地域を活性化できるような活力のある和太鼓サークルを目指すため、学科や学部、大学という枠を超えて多くの人を巻き込みながらサークルを発展させたいという願いを込めて作られた曲である。また、演奏中にも、観客と一緒に巻き込みながら楽しめるようなことをイメージして作曲した。

<双星>

中太鼓 2 台、締め太鼓 1 台から演奏できる曲である。双星は、本サークルオリジナル曲の 2 曲目として、切磋琢磨するライバルをテーマにしている。メンバー同士がお互いに刺激し合い、競い合うことで、

技術や表現といったパフォーマンスを高め合う姿を表現する一方、ライバル同士が相手との間合いを意識することで呼吸を合わせ協力していく姿もイメージして作られた曲である。

3. 結果と考察

「ハートランド足立」では、約 30 人の高齢者に対して演奏会を開催した（図 1）。参加者からは、「太鼓の音が懐かしい」、「響いてきて心地よかった」、「楽しい時間を過ごせた」、「昔を思い出した」、「演奏に圧倒された」、「また、来年も来てほしい」など地域交流のきっかけとなったのではないかと考える。次年度の開催において、更なる地域交流および活性化を目指すため、演奏会の前後で施設住居者に向けたボランティア活動なども合わせて実施することにより、施設職員からの要望以外に施設住居者ご自身からの要望を聴取し、本サークルメンバーが出来ることや新しい曲作りなどに活かしたいと考えている。

「桜科祭」では、約 50 人の地域住民に対して演奏会を開催した（図 2）。参加者からは、「初めて和太鼓の演奏を聴いて楽しかった」、「久しぶりに和太鼓演奏を聴けて懐かしかった」、「演奏が心に響いた」、「迫力が凄かった」、「自分の地域の祭りにも来て欲しい」など和太鼓を通じて地域交流を図れる可能性を感じられる機会となった。次年度の開催において、更なる地域交流および活性化を目指すため、本サークルメンバーの技術向上は勿論のこと、地域住民が集う祭りや会合などの機会に出席できるよう、広く地域住民に向けた広報活動の方法も検討する予定である。



図 1. 「ハートランド足立」での演奏後の本サークルメンバー



図2. 桜科祭での演奏風景

4. まとめ

日本における和太鼓の歴史古く、縄文時代には既に情報伝達の手段として利用されていたとされる。その後、戦国時代になると大名が自軍の統率を図るために太鼓を利用した陣太鼓、江戸時代では、祭礼行事の伴奏としての太鼓演奏や太鼓好きが集まって太鼓を打つ「のら打ち」など“ヒトとヒト”を繋ぐコミュニケーションツールとして利用されてきた。また、近年では、温泉地などで観光客向けに披露される地元の太鼓演奏や町おこしや青少年の育成などに和太鼓が広く用いられている。このように和太鼓は、地域交流や活性化を目的とする活動にとって、利用価値は非常に高いと考える。

このような意義のある和太鼓を活用して、本サークルでは、本学と地域を繋げ、更には地域住民同士の交流や活性化に繋がる機会を創出したいと考えている。具体的には、平成28年度の活動機会のほか、地域住民の集うイベントに参加し、和太鼓演奏や実際に参加者に和太鼓を打ってもらう体験会などを開催することを予定している。また、本サークル活動を広く地域住民に知っていただくための広報活動として、本学ホームページにおけるサークル紹介や地域連携推進活動報告書などを通じて広く周知していきたいと考える。

上野原アドベンチャー 年報

内藤優（教育人間科学部 こども学科）

1. 団体の紹介

現在子ども自身や育成環境において、様々な問題が生じ深刻化している。その中の一つとして体力低下の問題が挙げられる。その一因としてテレビ・ゲーム等による室内遊びの増加により、外遊びや運動時間が減少していることが指摘されている。さらに体力低下による危険性が増して遊具などが原因で安心して遊べる公園等が減少しているなどの事象も関連しており、様々な問題が原因として絡み合っている。そこで本学が在所属する山梨県上野原市という豊かな自然に恵まれた環境の中で体を動かす楽しさを味わえるような子どもを対象としたイベントを企画、開催すれば外遊び、体力向上のきっかけになるのではないかと思います、ボランティア団体を立ち上げた。

2. 活動報告

山梨県上野原市秋山にある秋山温泉の敷地を借りて、活動を行った。

活動回数	日程	活動内容	対象年齢
1	8月 6日（土）	秋山大自然探検	小3～小6
2	10月24日（土）	ハロウィンイベント	なし
3	3月18日（土）	春の大運動会	なし

①第一回秋山自然探検では秋山温泉周辺の自然に木登り、水鉄砲、輪投げ、宝探しの4つの自然に関わるブースを設置し。ミッションを達成しながらゴールである温泉を目指す活動を行った。それぞれのブースで獲得できる動作が異なり、多くの動作を獲得できるようなミッションを考えた。それぞれ子どもたちが飽きないよう、装飾や移動中クイズを出し楽しめるよう、またミッションのルールも全学年が楽しめるよう考え、学生がサポートを行った。



図1. ツリークライム（木登り）



図2. シューティングストーン（水鉄砲）



図3. 自然輪投げ



図4. 宝探し

イベント後参加者にアンケート調査を行うと、「普段では体験できないことができて、とても楽しかった」「などと子どもたちからのメッセージを頂いた。また保護者からは「子どもたちもすごく楽しかったようです。自然のものを使って遊ぶことはよいことだと思います。次回も参加したいです。」「物事にあまり興味を示さない子なのでこの

ような機会設けていただいて本当に良かった」「学生さんの対応がとても良くて安心して遊べました」とお褒めのお言葉を頂いた。

また運営スタッフとして動いている学生たちは、将来保育者になるうえで、子どもたちと関わり、イベントの運営をしていくことはとても良い機会になったのではないかと思います。子どもたちがどんな工夫をすれば安全且つ全力で楽しめるかを考えることができ、保護者からも高評価を頂き、子どもたちにも保護者にも学生にとっても良い活動になったのではないかと思います。

②ハロウィンイベントでは製作ブース、身体を動かす体験ブースの2つに分け、イベントを開催した。10月29日は秋山温泉の健康癒しフェスも開催され、コラボイベントとして開催することとなった。製作ブースでは、ペーパーバック作り、ハロウィンキャンドル作り、ダーツの3ブースを設けた。各ブース学生5人程で役割分担をし、子どもたちに対応できるようにした。ペーパーバック作りでは作ったキャンドルや配布した飴などを持って帰れるような物を作成した。キャンドル作りでは火を使うため、学生を多く配置し、子どもが怪我ややけどをしないよう気を付けながら行った。この2つのブースは季節を感じ、形として残るものを提供したいと思い企画した。ダーツブースではハロウィンにちなみ、カボチャに見立てたボールを蜘蛛に目がけて投げ、倒すというストーリーもので行った。蜘蛛の前には毛糸で作った蜘蛛の巣を設け、それに当たらないよう声をかけた。蜘蛛の巣に引っかかり、悔しがる姿も見られたが、最後は蜘蛛に当てることができて楽しんでいる様子だった



図5. ペーパーバック作りの様子



図6. キャンドル作りの様子



図7. スパイダーエスケープ (ダーツ) の様子



図8. スタッフ仮装

体験ブースでは、講師を招き、本格的なダブルタッチが体験できるようブースを設けた。11時から入門編、13時から応用編と分け、誰でも体験できるよう工夫した。多くの方に参加していただき、子どもだけでなく、保護者や学生も参加した。参加者ほとんどが初めて体験するものの、みるみる上達し、跳ぶことに喜びを感じている姿が見られた。子どもたちは縄跳びや大縄跳びはしたことあるが、縄が2本あるダブルタッチは初めてで、周りの参加者が見ている中で引っかけ

てしまい恥ずかしがっている姿も見られたが楽しみながら繰り返し挑戦することができた。



図9. 3歳の子がダブルタッチに挑戦し、学生が手を取りサポートしている様子。

また、上野原市内にある障害児施設に通所している子どもたちも、気分転換の散歩をかねて活動に参加して頂けた。障害児保育という授業の一環で実習に行かせていただいた際に、見てきた姿とは違い、外での活動ということもあり、のびのびと参加している様子が見られた。職員の方からは普段体験できないようなことばかりで、子どもたちにいい刺激になったとお褒めの言葉を頂いた。実習で関わってきた分、外での活動と施設内の様子の違いも見ることができ、自分たちが目標としてきた自然と触れ合いながら、体を動かす楽しさを味わってもらうことができた。

③春の大運動会は旧桜井小学校の体育館をお借りし、3月18日に開催をした。7種目の競技を企画し、既存の種目に新たな要素を加え、より楽しめるよう工夫をした。さらに、運動神経の良し悪し関わらず大人から子どもまで誰もが楽しめるような工夫をした。玉入れ、台風リレー、障害物競走、借り物競争、運が良ければ長くなる、しっぽ取り、ボール運びの全7種目を実施した。



図10. 甲州弁バージョンでのラジオ体操にて準備体操

【種目例】



図11. 種目：玉入れ



図12. 種目：台風リレー



図13. 種目：借り物競争



図 14. 種目：運が良ければ長くなる



最後の最後まで接戦となり、この活動を通して体を動かす楽しさを味わってもらえた実感することができた。時には悔しがる顔も見ることができ、子どもたちのとびっきりの笑顔も見ることができた。計画通り進まないことも多くありました。しかしこれまでの3問題発生時、現状をきちんと把握することができ、適切な改善を行うことができた。今までの2回のイベントで学んできたことを活かし、スタッフそれぞれが培ってきた対応力により、無事終了することができ、各スタッフの成長を感じるイベントにもなった。

その他の研究・報告

「謎解き図書館リアル脱出ゲーム」： 「夢の体験教室」における大学施設体験型講座の実践報告

神谷純子（教育人間科学部 学校教育学科）

キーワード：地域連携事業、小学生、教員養成課程

1. はじめに

地域連携事業「夢の体験教室」は、足立区内の小学校高学年を対象として、本学の児童教育学科（現在は学校教育学科）が2011年より実施してきた体験講座である。足立区教育委員会との連携のもと、大学という学びの場への興味関心を高め、将来の進路を考える機会を提供することを目的のひとつとして開催され、今年で6回目になる。

本稿では、2016年度の夢の体験教室で実施した施設体験型講座「謎解き図書館リアル脱出ゲーム」の概要を報告する。この講座は、参加対象である小学校高学年の児童が、大学図書館の施設および蔵書に触れ、親しむことを目的として企画されたものである。本学の千住キャンパス（東京都足立区）は2010年4月に開設された。学校教育学科の学生たちが主に利用し、夢の体験教室の会場となる7号館（2015年4月完成）3階には、話し合いをしながら仲間同士で学べるラーニング・コモンズやグループ学習室を備えた新しい私たちの図書館が併設され、蔵書の利用は学外者にも開放されている。

2. 実施概要

2.1 「夢の体験教室」

2016年度は6月25日（土）午前中、本学千住キャンパス7号館にて、区内小学校高学年の児童300余名が参加して行われた。応募した児童については事前に調整を行い、準備された11講座のうち各々2講座の受講が決まっていた。大学では、学校教育学科1年の学生（約100名）が中心になって企画運営を担う。本稿で報告するのは、筆者のゼミの学生5名が、1年次必修の基礎ゼミの時間を使って準備を進めてきた講座の概要である。

2.2 本講座の構成

「謎解き図書館リアル脱出ゲーム」は、図書館の蔵書を手がかりにクイズに答え、脱出に必要な鍵を手に入れるという筋立てになっている。2016年度は、児童が体験する2講座のうち、前半（10:10-11:00）の時間帯に実施した。32名の児童が参加し、4名ずつ8グループに分けて活動を行った。以下がその進め方である。

図書館に入場してきた児童は、ラーニング・コモンズのテーブルを囲んで着席するように誘導される。児童が揃ったら、スライドを使い、講座のミッション（表1）を示す。

表1. ミッション

1. 図書館脱出の鍵を手に入れろ！5つのキーワードを探して、鍵のありかを示す指令書をゲットせよ。
2. キーワードを探すには本が必要。本の場所はヒントカードに書いてある。
3. ヒントカードの色はグループごとに違う。カードは図書館のどこかにある。

ヒントカード（図1）には、ある図書の請求番号がクイズ形式で記されている。クイズを解いて請求番号を明らかにし、それに従って図書を探すと、図書が手がかりとなってひとつのキーワードが手に入る。5つのキーワードが揃ったところで、最終指令書（図2）を示す。ここに、入手した5つのキーワードを記入すると、指令書の点線の囲みに「門番」の名前（愛称）が出てくる。さらに、指令書に従い顔写真を手がかりにこの「門番」を探し出すと、図書館を脱出するための鍵（缶バッチ）が貰える。

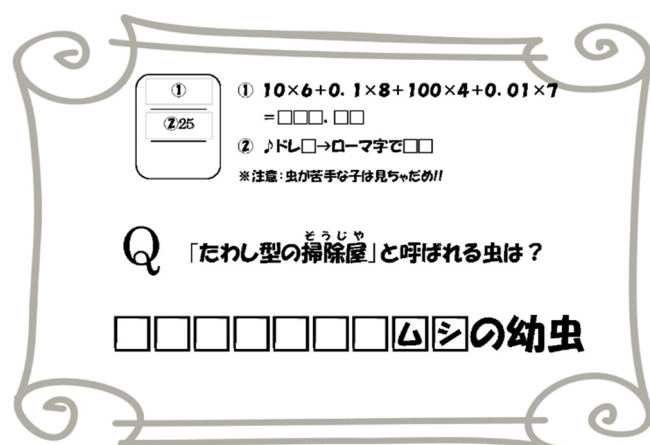


図1. ヒントカード（例）



図2. 最終指令書（例）

3. 事前準備

参加する児童の各グループに対し、以下を事前に準備した。「門番」の顔写真、ヒントカード5枚（計40枚；グループごとに画用紙の色を変えて印刷）、最終指令書1枚（計8枚；ヒントカードと同色の画用紙に印刷）、鍵（缶バッジ）4個（計32個）。

3.1 「門番」の設定

最終指令書には脱出のカギを渡す門番の名前（愛称）が示される。門番になる学生には、各々5文字で愛称を決めさせた。併せて、児童が門番を探す際に参照する顔写真を撮影した。写真には、人物が即座に特定されない程度の加工を認めた。

3.2 図書の選定

児童は、図書を手がかりにしてクイズの解答を探す。この解答が最終指令書を解くキーワードになる。

本学図書館には、多様な学科構成を反映して様々な専門書が並架されている。図書を選定する際には、参加する小学校高学年の児童の関心を引きやすい図表や写真、挿絵があるものを選ぶように学生に助言した。また、当日、参照する図書が重複して見あたらない、という事態が起こらないように、1冊の図書は1回しか使用しないというルールを徹底し、さらに、前日準備で図書が貸し出されていないかを確認した。

3.3 ヒントカードの作成

ヒントカードには、①図書の請求番号を示す小問、②図書を手がかりに解答する大問が記されている。①②は、参加者である小学校高学年の児童の知識のレベルや興味関心を考慮して作成するように助言したが、大学入学直後で小学生と接した経験が少なく、クイズの難易を調整できない学生もいた。

①小問（数題）

請求番号は分類番号と図書記号で構成される。これをクイズ化した小問数題を学生に作成させた。児童は、小問を解くことによって手がかりとなる図書の請求番号を知ることができる。計算問題のほか、漢字の語呂合わせや画数、年号や年齢等に関するクイズなど、様々な工夫が見られた。

N①	① 語×点×点=□□□ ※計算してね！
②17	② 巢のつぎのひらがなをローマ字で → □□
③	③ 中学校を卒業するとき、みんなは何歳？

図3. 小問（例）

①	① 無詩語・無 → 数字で□□□. □
②③	② よく台所に出る嫌われ者の黒い虫の頭文字をアルファベットで → □
	③ セブン×イレブン=□□ ※計算してね！

図4. 小問（例）

②大問（1題）

大問の解答が最終指令書で門番の名前を示すキーワードとなる。したがって、上記①の請求番号で指定した図書を手がかりとし、解答となるワードに門番の名前の一文字が含まれるように学生にクイズを作成させた。

3.4 最終指令書の作成

最終指令書は、クロスワードパズルになっている。クイズに解答して入手した5つのキーワードをパズルに記入すると、点線の囲みの中に門番の名前が出てくる。さらに、グループの仲間と一緒にその門番を探すようにという指示と、手がかりとなる門番の顔写真が貼ってある場所も記しておいた。

指令書は、ヒントカードと同色の画用紙を使い、裏面には図書館の利用案内図を印刷した。この案内を上向きにして事前にラーニング・コモンズのテーブルに貼っておいた。

4. 当日の様子

5階アリーナでの開講式が終わると、児童は学生の誘導にしたがって各講座の教室へ移動を始める。図書館にも参加児童の一群が到着する。本講座では、一人で参加した児童も楽しむことができるよう、最初に児童をグルーピングし直した。一緒に移動し並んで図書館に入ってくる児童同士は同じ小学校出身の友達である可能性が高いと考えて、入場の際に児童の名札にランダムに丸シールを貼り、ラーニング・コモンズへ進んだのちに、名札のシールと同色のシールが貼ってある椅子に座らせるという方法を使った。

全員が揃うのを待ち、ナビゲーター役の学生がスライドを使用して講座の導入を行った（図5）。児童にゲームのミッション、本の探し方、ルール等を伝え、合図とともにゲームをスタートした。制限時間は30分とし、モニターを使って残り時間を提示した。

児童はグループ毎にヒントを解いて示された図書を探し、キーワードを集める（図6、7）。児童が小走りに館内を行き来し、場は一気に活気づいた。写真から門番を探し出すのは意外に難しく、片っ端から学生に声をかけて確認する児童もいた。手がかりとなる図書が見あたらないなどのトラブルのため作業の終了が若干遅れたグループもあったが、前半の講座が終わる時刻までにはすべてのグループが門番を見つけ、鍵を貰うことができた。



図5. スライドを使った導入

表 2. 講座進行表

時間 (分)		参加者	学生
		5 階アリーナ→図書館へ移動	誘導
10:10	7	図書館入場	丸シール貼り 4 色×8 名ずつ
		ゲート入って右手の基地 (丸テーブル) へ	誘導
		丸シールの色に従い 4 名ずつテーブルを囲んで着席。 (自己紹介) ● 筆記用具のみ机の上に、ほかの荷物はまとめて床におろす。 ● 話を聞く体制を作ってから始める。	着席指示

○導入

10:17	8	スライドによる導入 ○ミッション 1. 図書館脱出の鍵を手に入れろ！5 つのキーワードを探して、鍵のありかを示す指令書をゲットせよ。 2. キーワードを探すには本が必要。本の場所はヒントカードに書いてある。 3. ヒントカードの色はグループごとに違う。カードは図書館のどこかにある。	スライド
		○鍵を手に入れるには～本の探し方 ● 本のシール (請求番号) の見方 ● 館内案内図 (基地と書架の場所を示す)	
		○進め方～スタートしたら、やることは 3 つ。 ①ヒントカードを探す。 ②本を探す。 ③本からキーワードを探す。	
		○ルール～基地から捜索隊を派遣する。ただし、以下のルールを守ること。 ● 捜索隊は、必ず誰かと一緒に行動する。 ● ヒントカードや本を見つけたら、基地に持ち帰る (本は棚に返さない)。 ● 鉛筆が使えるのは基地だけ。鉛筆を持って動かない。	
		○最後に 図書館内では「走らない」。相談するときは「ひそひそ声で」。	
		制限時間は 30 分。では、スタート！	「1 枚目のヒントカードは...、 テーブルの裏だ！」

○展開

10:25	30	● いちどに複数のカードを基地に持ち帰ってもよい。 ● ヒントの解読は基地で行う。(基地以外で作業をしていたら、いったん基地に戻るように言う。) ● 筆記用具は基地でのみ使用可。	タイマー表示 ● 巡回支援 時間内に終わるように支援する。 ルールを守るよう声をかける。
10:50		机の上にヒントカード (キーワード記入済) 5 枚、本 5 冊そろったら、担当の学生に合図する。	カードと本を確認して、最終指令書の場所を教える。

○終わり

10:55	5	最終指令書 (クロスワード) 解読 「門番」の顔写真を確認	ホワイトボードの裏に顔写真を貼っておく。
		門番を探して、鍵をもらう。	グループの 4 名全員揃っていることを確認して鍵を渡す。
		荷物をまとめる。 脱出 (退場) の合図があるまで、テーブルで待機。	荷物をまとめ、皆でゲート前に集合するよう伝える。
11:00		グループごとに見送りの学生に鍵を見せて、ゲートから脱出 (退場)。 講座②へ移動。	見送り 誘導



図 6. 基地（ラーニング・commons）でヒントカードの解説



図 7. 書架で図書を探す

5. 考察

講座後のアンケート（別添）では、56 件の自由記述において、「楽しかった（52%）」「おもしろかった（20%）」または「よかった（9%）」と、本講座は概ねポジティブに評価されていた。謎解きや図書を探す作業が「難しかった（36%）」「大変だった（5%）」または「もう少し簡単に（5%）」という記述も散見されたが、一方で、「ヒントを解くのがむずかしかった。でもそこがおもしろいです。（No.18）」のように、難しさに謎解きの手応えが感じられたという「難しさ」「楽しさ」の双方を含む記述（29%）も多くあった。難易度が高めで、時間内に作業を終えられなかったグループもあり、時間の不足（14%）を訴える声も出ていたが、当日の全体の様子からは、30 分という時間制限は適切であったと思われる。時間切れについては、クイズの難易度の調節や学生の支援の工夫で対処できるだろう。時間内に鍵を入手できず残念がる児童がいる一方で、結果にこだわり過ぎず作業のプロセスを楽しんだ記述「最後までクリアできなかったけど楽しかった。（No.41）」「全部解けなかったけど面白かった。（No.56）」などは注目されてよい。また、図書を使う「謎解き」の作業が、学習に対する苦手意識を和らげたと思われる記述「頭を使うのは苦手だったけど、楽しかった。（No.42）」も特筆に値するだろう。

想定外だったのは、グループ活動の意義に言及する感想が少なからず見受けられたことである（表 3）。

表 3. 児童感想（抜粋）

1	謎解きが難しかったけど、みんなと協力したからすごく楽しかった！またやりたいです！
10	4 人で協力できて面白かったです。
16	他学校の人たちと協力してできたし、仲良くできたので、楽しかったです。
29	みんなが楽しくやっていたので、とても楽しかったです。
35	難しかったけど仲間とやったら楽しめた。
46	問題はとっても難しかったけど、はじめて会った子と問題を解いてとっても楽しかったです。
52	皆（他の小学校）の人と協力できて楽しかった。
53	難しかったけど、皆で協力して解いてとても楽しかったです。

講座を運営した側としては、一人で参加した児童にも楽しんでもらうため、一緒に参加した友達同士でグループを組まないようにシールを使ってランダムなグルーピングを行った。また、作業中のルールとして、探索隊は、必ず誰かと一緒に行動するように児童に声をかけた。これらの配慮が功を奏し、仲間と謎解きに取り組む感覚を生み出したのだと考えられる。

以上の考察より、本講座が、大学図書館の施設および蔵書に触れ、親しむという当初の目的を十分に果たしたことは確かである。また、本学学校教育学科の教員養成課程に属し、教員をめざす学生たちにとっても大変有意義な体験であったと言えるだろう。

謝辞

本講座は、筆者のゼミ生 5 名、大日向浩先生（学校教育学科中高理科コース）、ならびに大日向ゼミの学生 4 名とともに企画したものである。特に、本講座の名称は、大日向ゼミの学生の発案による。また、本学千住キャンパス図書第 1 係長の高嶋秀介様（2017 年 3 月ご退職）、缶バッジのデザイン・作成は江田慧子先生（学校教育学科小学校コース）に多大なるご助力をいただいた。この場を借りて、皆様に御礼を申し上げる。

(別添資料) 児童感想

1	謎解きが難しかったけど、みんなと協力したからすごく楽しかった！またやりたいです！
2	時間がなくてアセった～。
3	1 問目はむずかしかったけど 2 問目からはやり方がわかって楽しかった。
4	色々、なぞを解いて、図書館を脱出できて良かったです。本当に楽しかった。
5	脱出ゲームで、時間切れになりそうでしたけど、おもしろかった。なぞときやコナンが好きなのでおもしろかった。
6	問題がむずかしかったです。本当に頭と体を使いました。
7	思ったより、かんたんで、やりやすかった！もう一回やりたいくらい楽しかったです。
8	グループのみんなと協力して、なぞをといて、図書室から出ることができて良かったです。時間内におわれなかったのでもうやしいです。
9	問題が少しむずかしかったけど、楽しかった。
10	4 人で協力できて面白かったです。
11	おもしろい
12	なぞときがたのしかった
13	楽しかった。いちばんはやく終わったのにごほうびをもらえなかった。
14	図書館で本をさがすためのヒントをさがしてなぞをとくところが楽しかった。
15	たくさんのなぞを解くのが楽しかったです。
16	他学校の人たちと協力してできたし、仲良くできたので、楽しかったです。
17	たのちかった
18	ヒントを解くのがむずかしかった。でもそこが面白いのです。
19	一番さいしょにおわったし、もんだいとかなぞときがすきだから。
20	図書室に行ってやったので、本が好きなので、とても楽しかったです。
21	さがすのがたいへんだったけどよかった
22	みんなで協力してできてよかった
23	むずかしかった
24	なぞなぞみたいでおもしろかった。
25	なぞときが面白い。
26	本をさがすのがたいへんだったけど楽しかったです。
27	本をさがすのは大変だったけれど、おもしろかった。

28	おもしろかった・かんたん・楽しかった
29	みんなが楽しくやっていたので、とても楽しかったです。
30	最後の生き物の問題はすごく難しかった。
31	とても楽しかったけど時間が足りなくて最後まで出来なかったのがとても残念だった。次回は時間に余裕を持ってやってほしい。でもとても楽しかった。内容は少し難しかった。
32	最後まで出来なくて残念だったけど楽しかった。
33	もう少し時間がほしかった。
34	問題を解くことが楽しかった。難しい問題がたくさんあった。
35	難しかったけど仲間とやったら楽しめた。
36	もう少し簡単にしてほしい
37	本の場所がわからなくて難しかった。
38	楽しかったけど、問題を解くのが難しかった。
39	難しいけど、楽しくできたので良かったです。
40	問題がとても難しく解けなかった。
41	最後までクリアできなかったけど楽しかった。
42	頭を使うのは苦手だったけど、楽しかった。
43	時間が足りなかったけど、とても楽しかった。
44	もう少し時間を増やしてほしい。合計 1 時間 30 分やりたかった。
45	時間が短く感じた。もう少し問題が簡単だったら...
46	問題はとっても難しかったけど、はじめて会った子と問題を解いてとっても楽しかったです。
47	もう少し簡単だったらもっと楽しく出来たと思う。また、このような講座があったら参加したい。
48	なかなか本が見つからなくて難しかったけど、いろいろなことで頭が楽しく使えて面白かった。
49	謎解きが面白かった。
50	謎の答がなかなか導けなくてとても残念でした。またやってみたいです。
51	難しかったです。けど楽しかったです。
52	皆（他の小学校）の人と協力できて楽しかった。
53	難しかったけど、皆で協力して解いてとても楽しかったです。
54	難しかった。
55	本を探すのが難しい。
56	全部解けなかったけど面白かった。

注) 誤記と思われる箇所も改変を加えずにそのまま掲載した。

ロールプレイによる認知症高齢者声掛け訓練の実践 —足立区認知症高齢者ネットワーク事業と連携して—

吉賀成子（医療科学部 医療福祉学科）

キーワード：認知症、声かけ訓練、足立区

1. はじめに

わが国における認知症の人の数は、厚生労働省の報告によると、平成24（2012）年時点で462万人と推計され、65歳以上人口の15%程度を占め、それ以外の軽度認知障害（MCI：mild Cognitive Impairment）約400万人を含めると、800万人以上の高齢者が認知症であることが推計されている。また、団塊の世代が75歳以上となる平成37（2025）年には、認知症の人の人数は700万人を超えるとの推計値が出され、65歳以上の高齢者のうち5人に1人に上昇すると見込まれている¹⁾。学生の中にも祖父母が認知症であるという者や、アルバイト先のコンビニエンスストアに認知症と思われる高齢者が来店し接客することもあるという者もあり、いまや認知症は誰もがかわる可能性のある身近な病気となっている。

そこで国は、認知症施策を加速するため平成27（2015）年に厚生労働省と11の関係省庁と共同で新たな戦略「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」²⁾を策定した。「認知症の方の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会を実現することを目指す」ことを基本とし、7つの柱³⁾の1つ目に認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進をあげ、認知症サポーター⁴⁾の目標人数を600万人から800万人に引き上げるなど、認知症サポーターの活動の支援にこれまで以上に重点を置いている。足立区でもこれを受けて足立区認知症高齢者ネットワーク事業を推進している。

一方、本学医療福祉学科で学ぶ学生は福祉専門職を目指している。専門科目の中には「認知症の理解Ⅰ・Ⅱ」という科目も配置されており、いずれ認知症について専門的に学んでいくことになるが、1年生の前期の時点においては、まず地域の中で一市民としての役割を果たせるようになることが求められる。

今回は、認知症を理解した上で、高齢者が安心して外出できるような地域を多世代で作っていく意識付けを行うこと、認知症高齢者の気持ちに配慮した対応の仕方を体験することを目的として、足立区を行っている認知症高齢者支援事業と連携し、学生・地域住民向けに認知症高齢者を支える啓発授業を行ったので報告する。

2. 活動報告

(1) 活動の概要

①実施日時：平成29年7月14日（13：10～14：40）

平成29年7月21日（13：10～14：40）

②実施場所：帝京科学大学 千住キャンパス

③参加者：1年生 41名、2年生3名、地域住民15名

④活動内容：「認知症サポーター養成講座」「認知症サポーターステップアップ講座」（1日目）「認知症高齢者声かけ訓練」（2日目）

(2) 活動の様子

「認知症サポーター養成講座」では、1年生を対象に認知症地域支援推進員⁵⁾が講師となり、認知症の基礎知識や対応するときの基本的なポイントなどについて、分かりやすい講義が行なわれた（写真1）。



写真1. 認知症サポーター養成講座（1日目）

「認知症ステップアップ講座」では、昨年度サポーター養成講座を受講した2年生と、同じく昨年度サポーター養成講座を受講した地域住民を対象に、認知症についてさらなる理解を深め、地域で認知症やその家族の方を支援する活動等についての講義が行われた（写真2）。

1日目の講義が終わった時点で、認知症高齢者の概要、対応のポイント、声掛けのヒントが書かれたプリントを配布し、次週行う声掛け訓練のための事前学習をしてもらうこととした。



写真2. ステップアップ講座（1日目）

2日目の認知症高齢者声掛け訓練は、足立区内にある地域包括支援センターの主任ケアマネジャー15名の協力を得て実施した。1日目の講義を受講した学生・地域住民が2人1組となり、認知症で徘徊する

高齢者に扮したケアマネジャーに、1組5分程度を目安に声掛けを実施した。実施していないときは他の人たちの声掛けの様子を見て学習することとした。各グループには見守り役のケアマネジャーが付き、受講者が声掛けに行き詰まった時に声掛けのポイントのアドバイスをしながら同時に次の拠点への誘導を行い、演習がスムーズに進行できるように配慮をした。

学生は初めてのことで、おそろおそろ声をかける一方、地域の方の声かけは自然体で積極的に声掛けをする様子が見られた。また、高齢者の持ち物から連絡先などのヒントを得られた組もあれば、目的地まで一緒に行くという結論になり、見守り役のケアマネジャーに「バスに乗るお金を本人が持っていないからどうするの?」と言われて答えに詰まる組もあった(写真3)。



写真 3.2人1組で声掛け訓練（2日目）

声掛け実践終了後、認知症高齢者役からの感想発表、グループごとの意見交換(写真4)、グループ発表を行った。意見交換では、学生からは、「どう声をかけたら良いのか難しかった」という声が多く聞かれた。認知症高齢者役のケアマネジャーからは、「暑い中体調を気遣う態度が良かった」「対応に困ったら周囲の人に頼ることも大事」「相手は人。正解はない。皆さんが地域に関心を持ち、見守る姿勢が一番大切」などのアドバイスがあった。



写真 4.声掛け訓練後のグループで意見交換（2日目）

3. アンケート調査結果

2日目の講座終了後、アンケートを配布し、その場で回収した。

① 声掛け訓練に参加して良かったですか？

大変良かった・・・34名 まあ良かった・・・5名
 どちらとも言えない・・・0名 あまり良くなかった・・・0名

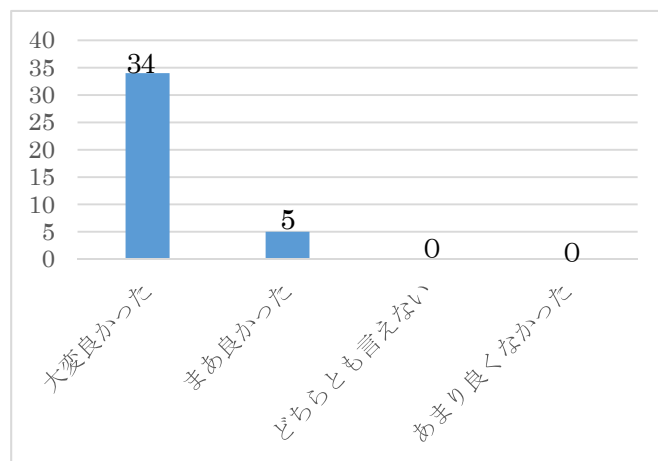


図 1.声掛け訓練に参加して良かったか

② 認知症の人への声掛けは難しかったですか？

とても難しかった・・・27名 少し難しかった・・・10名
 どちらとも言えない・・・0名 あまり難しくなかった・・・2名
 難しくなかった・・・0名

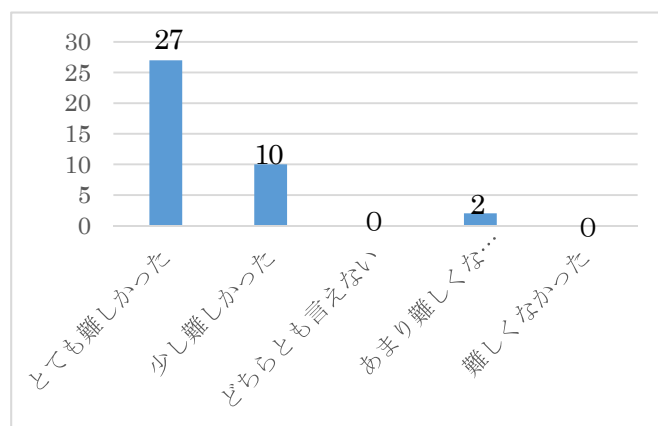


図 2.認知症の人への声掛けは難しかったか

③ 今後、認知症と思われる人や困っている人を見かけたら声をかけることはできますか？

できる限り声をかけたい・・・29名 むずかしい・・・6名
 どちらとも言えない・・・4名

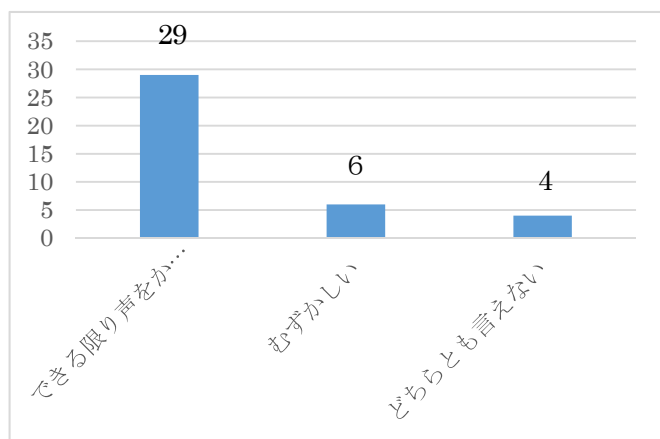


図3.声掛け訓練を行なったほうが良いと思うか

④ 今後も声掛け訓練を行なったほうが良いと思いますか？

行ったほうが良い・・・36名 どちらとも言えない・・・3名
(理由)

- ・分からないことが多く、話しかけても自分が困ってしまうかもしれないから。
- ・もっと練習をした方が、自信にもつながるから。
- ・訓練をしておいて損はないから。
- ・一人でも多くの方の手助けになればと思うから。
- ・人によって対応の仕方が違ってくるので、慣れておきたいから。
- ・知識を深めても、経験を積まないと技術向上につながらないから。
- ・実際に、躊躇せず自ら声をかけられるようになりたいから。
- ・今後認知症の方が増えると思うから。
- ・実際にやってみると難しいから。
- ・一度だけでは、訓練としては不十分だと思ったから。
- ・今後の介護実習に活かしたい。

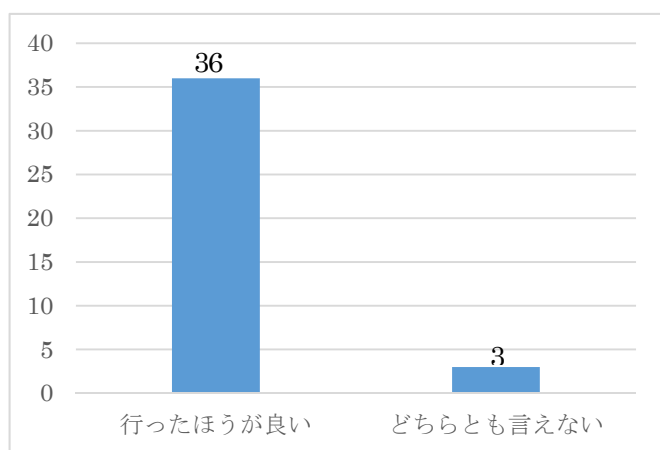


図4.声掛け訓練に参加して良かったか

4. 考察

学生のアンケート結果からは、声掛け訓練に参加して良かったですかの問いには、良かった、まあ良かったと回答した者を合わせると100%であり、良い体験ができたことが伺えた。

認知症の人への声掛けは難しかったですかの問いには、とても難しかった27名(69%)、少し難しかった10名(26%)で、2名(5%)の学生が難しくなかったと回答した。難しくなかったと回答した2名は、何らかの形で認知症高齢者に関わっていると推測され、日ごろから高齢者とかかわることの少ない学生にとっては、声掛けは難しかったと思われる。

今後、認知症と思われる人や困っている人を見かけたら声をかけることはできますかの問いに対しては、29名(74%)の学生ができる限り声をかけたいと回答し、難しいと回答したものが6名(15%)、どちらとも言えない4名(10%)であった。学生からは「声掛け訓練をしたので、これから街で認知症高齢者を見たら声をかけることができるのではないかなと思う」「認知症サポーターになったので、徘徊している高齢者などを見かけたら、声をかけて交番に案内するなどしようと思う」というような意見を多く聞くことができた一方、認知症高齢者への声掛けは難しいと感じ、まだ自信を持つまでにいたらず、「声をかけられるようになりたい」「今からの勉強が必要だ」と感想を述べた学生もいた。

今後も声掛け訓練を行なったほうが良いと思いますかの問いには、行ったほうが良い36名(92%)、どちらとも言えない3名(8%)で、講義を聞くだけでなく、実際に声掛け訓練をしたことで、声掛けの難しさや自分の知識のなさを体感したと同時に、このように話しかければよいのだという経験ができ、認知症高齢者への漠然とした不安がなくなったと推測される。

以上のように、今回の実践が概ね学生から高い評価を受けることのできた要因には、毎日認知症の高齢者にかかわっている地域包括支援センターの主任ケアマネジャーが認知症高齢者役を演じることで、現実味があった。住民の方と一緒に学ぶため、学生の緊張感があった。声掛けについては、住民の方の経験値が光り、学生の考えのみでは思いつかない対応の仕方もあり、学生にとって勉強になった。見守り役の主任ケアマネジャーが各グループに付いており、どのように対応してよいかわからなくなった時に的確な指導を受ける事ができた。15人のケアマネジャーの協力が得られた上に、入念な打合せをして実施したことなどがあげられる。

また、地域住民からも、「学生と住民が真剣に話しあうことができてよかった」と良い評価が得られた。

実施時期については、気温が32℃を超える猛暑日で、当初計画していた戸外での実施を屋内に変更した。そのため声掛け拠点間の間隔が狭なり、声が聞き取りにくくなったとの意見もあり、再考する必要がある。

5. 結論

学生たちは、決して上手い声掛けができたとはいえなかったが、一生懸命に困っている認知症高齢者をどうにかして助けたいという気持ちで関わっていた姿が印象的であった。

認知症の方が住み慣れた地域で安心して暮らし続けていくためには、専門職の支援はもちろんのこと、近隣に住む顔なじみの知人や友人、地域住民の支援も必要である。しかし、実際に中度や重度の認知症の人はコミュニケーションをとることが難しい。どのように声をかけたら良いのだろうか。声掛けだけで聞きたいことが引き出

せるとは限らない。むしろ、状況によっては認知症高齢者をさらに混乱させる要因になる可能性もある。

認知症の人への支援を行うために、私たちは、まず、認知症を正しく理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、応援者になることである。正しく理解すれば、偏見を持つことも恐れることもなく、自然に声をかけることができるようになるはずである。

学生たちは、サポーター養成講座のみだけでなく声掛け訓練を行なったことにより、具体的なイメージを持つことができ、街で認知症高齢者と思われる方に会ったら声をかけてみようという気持ちが持てたことが確認された。

今回、地域住民と学生がともに学べたことは互いに刺激を受け合う良い機会になったと考えられる。今後も工夫を重ねながら、この企画を継続していきたい。

注釈

- 1) 「日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究」(平成26年厚生労働省科学研究費補助金特別研究事業)長期の縦断的な認知症の有病率調査を行っている久山町研究のデータから、新たに推計した認知症の有病率に当てはめて出された数値である。
- 2) 「認知症の人の意思が尊重され、出来る限り住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らしを続けることが出来る社会を実現する」ことを目的に、団塊の世代が75歳以上になる2025年に向けて策定された施策。認知症高齢者にやさしい地域づくりに向けて、認知症という病気に対する啓蒙も含め、医療・介護・介護予防・住まい・生活支援を包括的にケアするための戦略である。
- 3) 「認知症高齢者等にやさしい地域づくり」を推進していくための柱で、1. 認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進、2. 認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供、3. 若年性認知症施策の強化、4. 認知症の人の介護者への支援、5. 認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進、6. 認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進、7. 認知症の人やその家族の視点の重視の7つをいう。
- 4) 2005年より認知症サポーター養成を開始した。認知症に関する正しい知識と理解をもって、地域や職場で認知症の方やその家族の方を手助けする。わか国が誇る普及・啓発の取り組みといえる。
- 5) 認知症の医療や介護の専門的知識及び経験を有する医師、保健師、看護師、作業療法士、歯科衛生士、精神保健福祉士、社会福祉士、介護福祉士または認知症の医療や介護の専門的知識及び経験を有すると市町村が認めた者で、認知症の人の状態に応じて必要なサービスが適切に提供されるように、医療機関や介護サービス、地域の支援機関の間の連携支援や、認知症の人やその家族を対象とした相談業務などを行う者のこと。平成30年4月までに、すべての市町村が、認知症施策担当課や地域包括支援センター、民間の医療機関、介護保険事業所などに設置することとされている。

日常生活圏域における生活課題への接近 —千住地域における地域連携活動—

浅沼太郎（医療科学部 医療福祉学科）

キーワード：日常生活圏域、地域セーフティネット

1. はじめに

本学に医療福祉学科が設置されて2年目となる2017年度、2年生の必修科目「健康福祉科学セミナーⅠ」が始まった。医療福祉学科では週2回、このセミナーⅠと連続する時間帯にもう1時限を充てて、地域連携活動を実施している（学生は週1回いずれかの曜日のセミナーⅠを履修、小グループに分かれて活動）。

本学科では、社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得することが可能で、講義科目とともに実習、演習科目が整備されている。領域ごとに専門的な学習を深める一方で、目の前の地域が置かれた現実と向き合うことで、生活問題・課題を直接的に学ぶことをセミナーⅠでは意図している。

社会福祉の専門職（ソーシャルワーカー）を目指す学生にとって、制度化された枠組みにとどまらず、少子高齢化が急激に進展する身近な地域の実態から学ぶ経験は、柔軟な感性が刺激されて実践的な視点を養うことにつながるだろうと期待している。

2. 地域連携活動の目的

行政・地域団体組織・住民の協力のもと、学生と教員が足立区、とくに千住地域を中心とした生活の場（日常生活圏域）に継続的にかかわり、地域セーフティネットづくりへ参画することに、地域連携活動の目的はある。

この狙いは次のような内容で学生に説明している。「足立区で暮らす住民の方々が直面している生活問題に対する取り組みに参加し、まだ組織的な支援ができていない生活課題に接していくこととなります。したがって、とてもニーズが強い、つまり生活上の切実な課題を抱えた住民の方々の要望や期待に取り組んでいくことになります。このような意味において、大学内での既定の教育を受講することとはまったく異なった場面に遭遇することが、必ず起こります。

大事なことは、このような問題や課題にしっかりと正面から向き合うことです。地域の現状は、わたしたちの想像をはるかにこえて激変しています。その中に立ち入り、その実状に住民や団体機関とともに取り組むことから、みずから今後の社会や日本の在り方が見えてくるはずなのです。」¹⁾

3. 行政機関、地域団体組織との事前調整

健康福祉科学セミナーⅠは本学科の全教員が担当しており、初年度となる2016年より準備を進めてきた。足立区役所の関係部署、住区センター、町会・自治会組織、足立区社会福祉協議会、地域包括支援センター、商店街、民生委員などとの話し合いを重ね、活動内容の準備、調整を行った。

次のところで協力を得て、活動を開始する見込みとなった。

- 団地自治会、集会所でのサロン活動、団地住民の支援
- 住区センター、活動への参加・協力
- （精神保健福祉領域）グループホーム、生活支援
- （高齢領域）グループホーム、活動支援
- 地域包括支援センター、活動の企画運営

4. 実施状況

2016年～2017年度前期までの実施状況である。

〈2016年12月〉

- ・住区センターへの訪問・見学（2回）
 - ・団地集会所でのサロン活動（2回）
 - ・福祉事業所への訪問・見学（1回）
- はじめて住民と交流をもった学生は「私たちも地域に貢献したい」「地域の課題に、私たちが何をできるのか考えたい」「こういった場所（住区センター、団地集会所）があると知らなかった。必要とされていると思った」等の感想を述べた。

実際に学生が体験し、地域の方（団地住民、住区センタースタッフ）から直接話を聞いたことは、学習の動機づけになった。たとえば、団地集会所で「エステに行ってみよう」という女性の話から「遠方に出かけられない高齢者がリラクゼーションできる支援」を考え始めた学生がいた。住区センターでは「男性の来所者が少ないことが課題」「若い感性で、よい企画があれば考えてほしい」という話を受けて、来年度の活動イメージを膨らませた学生もいた。

〈2017年1月〉

- ・認知症サポーター養成講座への参加（2日間）
- 地域住民40名、本学科の1年生35名が参加し、認知症の特徴やサポート方法を学んだ。「暮らし続けることのできる地域のあり方」についての議論では、10代の学生から80代の地域住民が数名ずつグループになり、講座のサブタイトルである「深い知恵と若い力」というテーマで活発な意見交換を行った。学生は住民から「住区センターで会ったね」等と声をかけられ、地域にかかわる実感を得る機会ともなった。
- ・餅つき大会への参加（1回）
- 高齢単身等の理由から参加が難しい方には、町会の女性部が中心となって、お餅とけんちん汁の宅配を行っていた。学生・教員が同行し、小地域の見守り活動について話を聞きながら町会活動を体験した。終了後の反省会では「こういう機会（餅つきなど地域のイベント）がないと、なかなか外に出なくなった」等、参加住民の声が紹介された後、居住地域の近況を共有していた。

〈2017年2～3月〉

- ・団地集会所でのサロン活動（計4回）

4月からの授業実施に向けて、セミナーⅠの授業時間帯（15時～）にあわせてボランティア活動を実施した。参加した住民は10名以上で、概ね同じ方である。活動目的の一つである「福祉サービスの利用もなく、孤立しがちな住民」の参加には至っていない。活動内容は、前半の時間帯にレクリエーション、体操、音楽などを行い、後半は住民と学生の交流（お茶を飲みながらお話）を行った。

〈2017年4月〉

はじめの2週はオリエンテーションを実施して、活動時の留意事項、目的の確認などを行い、3週目以降に活動を開始した。活動拠点を訪問し説明を受けて、学生が地域住民の生活実態に学び、地域から必要とされる活動を検討した。

- ・住区センターへの見学（2回）
- ・（精神）グループホーム訪問（2回）

〈2017年5月〉

- ・団地集会所でのサロン活動（2回）

団地役員会での説明を経て、学生は住民との関係づくりを目的に、戸別ポストへのチラシ配布、ポスター貼りを始めた。

- ・住区センターの夕食会に参加（1回）

住区センターの利用者約30名との交流（歌・踊り）。学生は、住民から直接いろいろな話を聞いた。

- ・地域包括支援センター、（高齢）グループホームへの訪問・見学（1回ずつ）
- ・（精神）グループホーム訪問、活動に同行（6回）

3回活動を実施した後、1回は大学で担当教員と振り返りを行っている。

〈2017年6月〉

学生が各拠点で、後述する「カレー甲子園」のご案内を配付した。

- ・団地集会所でのサロン活動（4回）、戸別訪問のチラシ配布、7月からの映画会実施のチラシ配布
- ・（精神）グループホームでの活動（7回）
- ・（高齢）グループホームでの活動（2回）
- ・住区センター、7月の活動に向けてレクリエーションの準備
- ・地域包括支援センター、9月以降の交流会を企画

〈2017年7月〉

- ・団地集会所でのサロン活動（4回）
- ・住区センターでの夕食会に参加（1回）、レクリエーションの実施
- ・（精神）グループホームでの活動（5回）
- ・（高齢）グループホームでの活動（3回）
- ・団地住民を対象とした映画鑑賞会の実施（4回）
- ・地域包括支援センター、9月以降の活動準備、チラシづくり

2017年度前期は地域連携活動が始まったばかりで、活動内容を模

索している時期にある。継続的に活動している拠点もあれば、定期的な活動が難しいところもあった。こうした状況のなかで、多くの学生が積極的・意欲的に取り組んでいた。地域の生活課題に直面し活動を検討・工夫する過程で、学習をより深めていけるだろうと考えている。自治会や福祉事業所など地域と連携しながら、活動を継続する予定である。住民との関係づくりを中心に、徐々にさまざまな生活課題にアプローチしていきたいと考えている。

教員側の課題としては、活動目的の共有が挙げられる。たとえばレクリエーションの実施自体は本来の目的ではなく、住民と出会うための手段である。はじめにサロン活動を始めたところも、地域セーフティネットの一端を担うという目的のもと、活動内容は変化していくこともあるだろう。教員にとっても未知の経験となるが、日常生活圏域で学生が生活課題を経験するという方向性を見失わないように心がけたい。

5. カレー甲子園の実施

2017度は基礎ゼミナール（1年生必修科目）の一環として、地域交流・連携を目的に「カレー甲子園」というイベントを開催した。はじめて実施した2016年と同様に、足立区の福祉関係の職員や近隣の地域住民を招待したところ、学外から45名の参加があった。

1年生6グループに2年生有志の1グループが加わり、創意工夫したカレーを振る舞った。学生は事前に用意した質問を来賓に伺い、「千住地域」と「実際の生活」についてお話を伺った。来賓のアンケート（自由記述）では、学生の姿勢・様子、地域と交流するイベントを積極的に評価する記述が多く見られた。「優しく丁寧」「社会福祉の仕事への意欲を聞いて感心した」「地域のお祭りや行事にも沢山参加していただけるとうれしい」「地域の方が大学に入ってこられるような活動、また学生さんが地域に出て行く活動によって、だんだん距離が縮まり地元へ根づく」「学校に地域の方を招き入れる今回のような取り組みが増えれば、地域の人も身近に感じると思う。地域の活性化に期待しています。」等である。

なお2017年度より足立区社会福祉協議会の後援を受けており、地域関係者への案内等、ご協力をいただいた。

参考資料

- 1) 山田健司教授による説明資料

発達障害児に関わる専門職に対する研修会の開催報告

石井孝弘（医療科学部 作業療法学科）

キーワード：発達障害、乗馬活動、ホースセラピー、専門職、障害理解

1. はじめに

動物を介在した取り組みとして、動物介在活動、動物介在教育、動物介在療法、などがある。特に用いる動物が馬である際には、馬介在活動、治療的乗馬、乗馬療法、さらに、ホースセラピー、セラピューティックライディングなど様々な言い方が存在する。それぞれ具体的な方法には違いが存在する。動物介在療法、治療的乗馬、乗馬療法、ホースセラピー、セラピューティックライディングは治療的な意味合いが含まれていることから、それぞれの障害の特性を把握したうえで行う必要がある。

目的を楽しい経験として乗馬活動として行う場合であっても、個々の障害特性が異なれば、楽しく感じる乗馬活動も異なる。それゆえ、個々の障害状況を把握したうえで乗馬活動を行うことが重要である。

児童福祉法に基づいた発達支援施設、医療型児童発達支援施設、放課後等デイサービスなどの施設(以下施設とする)で乗馬活動をプログラムに取り入れている施設がある。

このような施設では職員である保育士、指導員等が障害児・者への乗馬活動を担っていることがほとんどである。つまり、個々の障害の状況に適した乗馬活動を提供するためには、それぞれの施設職員である保育士、指導員等が障害の状況把握の方法を身に付けていかなければならない。

本学と協定を締結し、筆者が関わっている施設が平成26年度及び27年度の2年間、職員等に対して動物介在活動、動物介在療法の実践に必要な知識技術の習得のため講習会及び研修会(以下講習会とする)を開催した。

今回、講習会の内容等も含めて活動の報告を行う。

2. 活動報告

1、対象

対象は本学と協定を締結している特定非営利活動法人の職員及び近隣の施設職員等が講習会へ参加した。

平成26年4月から平成28年3月まで「発達障害児のための乗馬による感覚統合療法研究事業」として行った。

2、講習会のテーマと内容

講習会のテーマと内容は表1に示すとおりである。それぞれの講習内容について説明する。

表1. 講習会のテーマと内容

発達障害児のための乗馬による感覚統合療法研究事業		
	講習会テーマ	実施回数
26年度講習	対象児の評価と乗馬療法プログラム立案	6
	乗馬療法の治療原理の理解	1
	乗馬療法を行う際に知っておくべき馬の心理の理解	1
	平成26年度ふりかえりと平成27年度計画打ち合わせ	1
27年度講習会	5か所の乗馬施設で発達障害児及び馬の心理に関する講義	5
	乗馬療法実践研修会	3
	研究事業まとめ	1
	発達障害児のための乗馬療法についての報告会	1

講習会テーマ

「対象児の評価と乗馬療法プログラム立案」

対象施設では発達障害児もしくはその傾向がある児に対する支援を行っている。

学齢期の児を対象として、放課後デイサービスとして乗馬活動を行っている。

施設職員が対象児の個別支援計画を立てて、日々の支援を行っているが、乗馬活動を行う上で必要な障害の状況の把握について、個々のケースを上げて、評価を行い個別に乗馬活動のプログラムを立案した。この講習会は全6回行い各回復数名を対象とした。

主な障害は発達障害として自閉症スペクトラム障害、ADHD等である。診断名が確定していない対象児もいることから「発達障害の傾向がある」等、医師から伝えられている対象児も含まれている。

対象児の評価に関しては、感覚統合発達記録、感覚統合臨床観察、また南カリフォルニア感覚統合検査の下位検査を一部用いた。これらの結果を用いて使用する馬の決定、乗馬活動の方法等を決定するまでを講習した。

講習会テーマ

「乗馬療法の治療原理の理解」

治療、療法などはその治療原理を理解することは重要である。乗馬療法についても同様のことが言える。単に乗馬活動を行うのではなく、対象児の日常生活上における適応行動の問題の理解、その適応行動上の問題の原因把握、原因に対する支援方法の原理、さらに騎乗した際に受容可能な感覚刺激、馬のブラッシングや馬房掃除など騎乗以外の活動に含まれる受容可能な感覚刺激、これらの感覚刺激をどのように療法として用いるのか等について講習を行った。

この原理を理解することで初めて対象児の障害の把握が可能となる。

講習会テーマ

「乗馬療法を行う際に知っておくべき馬の心理の理解」

この講習会は、馬の心理について熟知している、ホースクリニシャンが担当した。

馬の心理状態の把握は、馬とかわる者にとっては熟知しているべきことである。具体的な馬の行動とその時の馬の心理状態について関連付けることが可能になることを目的に講習会を開催した。

乗馬活動を行う際に最も注意を払わなければならないことに安全の確保がある。対象児の落馬や活動時の事故は対象児のみならず、かわる職員にとっても事故等はあってはならないことである。馬の力は人では抑制することが困難であることから、馬の心理状態の把握、馬とのコミュニケーションの取り方、馬の心理に合わせて指示を行うことは重要である。

講習会テーマ

「5か所の乗馬施設で発達障害児及び馬の心理に関する講義」

本学と協定を締結している特定非営利活動法人が存在する県内にある5施設で発達障害の理解と馬の心理と行動理解のための講習会を開催した。これは、今後、障害児・者を対象として乗馬活動を通しての支援を行おうと考えている施設を公募した際に応募してきた乗馬施設である。

これらの施設ではこれまでも障害児・者を対象として乗馬活動を行ったことのある施設もあれば、全く障害児・者を対象としての活動を行っていない施設も含まれていた。

発達障害について、特徴や適応行動上の問題の原因の理解、感覚統合理論について基礎的な学習を行った。

また、馬の心理に関する講義は、前述したホースクリニシャンが担当した。

馬の心理に関する講義は実馬を用いながらその行動と心理状態の関連性について、また、実際に馬をどのように動かすのかについて講義した。

講習会テーマ

「乗馬療法実践研修会」

この時期までに行ってきた講習会を踏まえて、乗馬療法の実践を行った。対象児の日常生活における適応行動上の困難さに視点を当てその原因を評価により明らかにする。

明らかにされた原因を解決するために必要な馬と騎乗以外の乗馬活動を選択し、プログラムを立案する。立案したプログラムを実施する。

実施した結果について討議を行う。最終的には効果についての考察を行った。

結果は、一回の乗馬療法では期待することは困難であるが、今まで行ってきた講習会での学習をもとに対象児の評価からプログラム実施まで行った。

学習のための講習会とは異なるが、初年度終了時に次年度に向けての打ち合わせを行った。研究事業まとめ、発達障害児のための乗馬療法についての報告会も行った。

3. 結果と考察、

講習会へは主催した特定非営利活動法人の職員はもとより、近隣の施設職員、また県内の乗馬施設の職員も講習会へ参加した。参加した職員は少なくとも乗馬活動を通して、発達障害児にとって何らかの効果があると認識していると思われる。

健康器具として馬の動きを模したものも市販されていることから、騎乗することでの効果については一般的にも以前と比較すると認識されてきていると思われる。

講習会の開催は障害児・者に対する乗馬活動に必要と思われる知識技術の学習の場の提供にはなりえたと思われる。しかし、その結果、参加者が障害児・者に対する乗馬活動を対象児の評価に基づいて効果的なプログラムを立案し実施できているのかについては検証していない。今後の課題である。

筆者はこれまでに種々の施設職員に対して、対象となる発達障害について講習会を通して話してきた。しかし、その施設職員による対象児・者の障害把握は十分とは言えない。また乗馬活動のプログラムの立案に関しても、十分といえないのが実状である。これらは、かわる専門職の職域の問題もあると思われる。対象児に関わっている施設職員が対象児・者の評価からプログラム立案まですべてを行うことは職域の観点から、また、業務負担から考えると負担が重くなってしまうと思われる。

発達障害児に対する支援を行っている施設職員がすべてを行うのではなく、協業として、種々の職域の職員が関与することが必要と思われる。

特に対象児・者の障害の把握に関しては、医療の専門職がかわり、馬の取扱い等に関しては馬の専門家が担当することが重要と思われる。

アメリカでは、Hippotherapy(乗馬療法)に関与する専門職として、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士としている。日本では、これらの職種は医療の専門職として認識されている側面が強く、さらに働く分野も医療分野が圧倒的に多い。動物介在療法、馬を用いた乗馬療法に携わる認識が不十分であるといえる。

今後日本においてもこの分野で活躍する医療の専門職が増えることは期待されていると思われる。

まとめ

地域連携活動として、本学と協定を締結している特定非営利活動法人が主催する事業として講習会を開催した。筆者は講習会講師として参加した。講習会は事業のまとめ、打ち合わせ、報告会を含めて全19回行った。

主催する特定非営利活動法人の施設職員に加えて近隣地域、県内施設職員が参加した。

知識技術の講習は行ったものの、施設職員が十分に知識技術を習得したかについての検証が今後の課題である。

職員の業務負担、専門職としての協業の観点から、多職種との連携が必要と思われる。

職員の行動については一部変化したが、障害の状況把握等の行動変化は不十分であった。現状では専門的な知識技術を持った人との協業が必要と思われた。

医療施設が行う治療的乗馬活動におけるプログラム立案への支援報告

石井孝弘（医療科学部 作業療法学科）

キーワード：病院、治療的乗馬、障害児、乗馬

1. はじめに

障害児・者が馬とかわることで何らかの効果を期待する活動が行われている。海外では Hippotherapy (以下乗馬療法) と言われ、日本語訳では乗馬療法と訳されるのが一般的である。

障害児・者が馬とかわる活動はほかにもいくつか存在する。海外では、乗馬療法は医療の分野として行われる。国により違いはあるが、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などがその専門職として関わっている。医療としての乗馬療法とそれ以外の馬とかわる活動は海外では一線を画している。しかし、日本では障害児・者が馬とかわる際の呼び方は種々存在し、使用する人によってその解釈は違う場合がある。日本でも乗馬療法という言い方を用いることがあるが、医療の分野として用いられているものではない。ただし、理学療法士、作業療法士等がかかわっている場合もあるが、それだけで医療の分野として行っているとは言い難いのが現状である。

また、障害児・者の乗馬活動に医師が関与していることはあるが、個人としての依頼を受けて参加している域を超えていないと思われる。

都内にある医療財団kでは、馬の心理についての専門家を講師として、職員研修を行っている。馬の生態、習性、群をなして生きる動物としての行動などを通して人とかかわりなどを学習するものである。研修は長野県にある財団が所有している牧場で行われている。

この医療財団が地域の障害児を対象として乗馬活動を2015年4月より提供している。医療財団が主体となって障害児に乗馬活動を提供することは日本では類を見ない。乗馬療法は医療の一環として行うことから考えると、医療財団が障害児を対象として乗馬活動を提供する際には、医療の専門職が関与することは難しくないことは容易に想像可能である。

この活動当初より筆者は作業療法士として関与しているが、今回その活動の具体的な内容等について報告する。

2. 結果

1、活動の目的

この活動を行う前に、進め方に関する検討を行った。

対象に関しては、同じ県内にある障害児施設に通所している肢体不自由児とした。施設を選択した理由には互いの施設長が以前より知合いであることで連絡調整が容易であることが主な理由である。

この活動が目指すところ、目的及び具体的な方法などを検討すると同時にこの活動の呼称にも検討した。

目的は医療財団が主体となって行うことから、単なるレクリエーションではなく最終的には療法として行うことが挙げられた。しかし現状では、対象児の評価方法、馬の選択方法を含めて具体的な方法が明らかにされていない状態であり、開始時より療法として行うことは無

理があると思われた。これらを踏まえて、治療的なかわりとなることが検討の結果確認された。その結果、活動の呼び方を治療的乗馬とすることになった。

2、方法

対象児の評価を作業療法士である筆者が担当した。評価方法は American Hippotherapy Association (AHA アメリカ乗馬療法協会) の乗馬療法士講習会テキスト及び感覚統合療法に用いる感覚統合発達記録、感覚統合臨床観察サマリシートを適宜抜粋して用いた。その結果から、日常生活における適応行動上の問題点の改善を図ることが可能となるよう乗馬活動プログラムを立案した。

馬の選定に関しては、ホースクリニシャン、及び医療財団の厩務活動担当者との協議の上決定した。

直接乗馬活動に携わるスタッフは、リーダー、サイドウォーカー2名、インストラクターの合計4人が行った。

2名の対象児を屋内馬場で同時に行った。

1セッションの時間は60分とし、馬との触れ合い騎乗をその時間内で行った。

セッション開始前に直接かわるスタッフ間での注意事項の確認などを行った。またセッション終了後には保護者へのセッションに関するフィードバックを行った。

全プログラム終了後にスタッフ全員での反省会と今後に向けての話し合いを行った。

3、日程

2015年度から2年間を合計10回同じ対象児に対して活動を行った。

2015年度

日程：2015年4月から10月まで 合計5回実施

2016年度

日程：2016年4月から10月まで 合計5回実施

4、開催場所

長野県蓼科にある医療財団が所有している乗馬施設である。

5、対象児

長野県内にある障害児施設に理学療法もしくは作業療法に外来通院している障害児7名(男児1名、女児6名、年齢8.7±1.1)である。障害は全員が肢体不自由児であり、かつ情緒的な不安定さを併せ持っている児がいた。

参加については、担当の療法士から乗馬活動についての説明を受けたうえで、希望してきた児及びその家族である。

6. スタッフ

医療財団の職員が中心となり、ボランティア、筆者を含めた外部からの協力者により構成された。

職種は、医師、看護師、心理士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ホースクリニシャン、ドイツ国家認定馬介在治療教育的支援士、事務職員もボランティアとして参加した。

帝京科学大学のアニマルサイエンス学科教員、と同学科の学生、作業療法学科学生もボランティアとして参加した。

7. 乗馬活動

馬との触れ合いと乗馬の活動で合計 60 分行った。

主な活動内容は以下のとおりである。

1) 自己紹介

対象児、保護者、馬、スタッフとすべてが初めての対面であることから、相互に緊張する場面である。対象児に関しては事前に情報を得ていたことからそれをもとに対面した。対象児全員が違いはあるものの言語でのコミュニケーションをとることが可能であった。セッション開始から比較的早い段階で対象児とスタッフの関係をとることができた。

馬と対象児の関係は、対象児は馬の特性はわかっていないので、どのように接したらよいのかは、ホースクリニシャンが馬の横に立ち対象児と馬が問題なく触れあうことが可能となるように馬の行動をコントロールした。

6 人中 5 人は特に問題なく導入可能であったが、1 名の女兒は母親から離れることが困難であり、抱かれたままで過ごすこととなった。

2) 馬の準備としてのブラッシング、蹄の裏掘り

対象児にとっては馬のケアなどは初めて見ることになる。馬の準備としてのケアとしてブラッシングは馬に直接触れることになり、触覚刺激の受容の機会となる。

対象児と馬にとって、相互の非言語的なコミュニケーションとなり心理的な距離を知覚するために行うことは重要である。

3) 騎乗

治療的乗馬や乗馬療法として騎乗することで受容可能な刺激として前庭刺激が主なものになる。また視覚刺激としては、日常的な視線よりも騎乗することで高い位置の視線になる。

騎乗することで、姿勢が崩れるが、平衡反応の出現により、姿勢は良好に保持可能であった。

4) 修了の馬との触れ合い

騎乗後は、馬に対して愛撫として馬の頸部や体幹部分を平手でタッチングすることを行うが、これも騎乗前に行う馬との非言語的なコミュニケーションの意味が含まれている。

5) 保護者への活動に関するフィードバック等

保護者は乗馬活動が自分自身の子どもにとってどのような意味があるのかは、姿勢等についてはある程度見て知ることが可能であるが、

詳細に関しては、活動後にインストラクターが説明することで理解することが可能である。説明を受けることで自分自身の子どもの変化を意識化することが可能となる。

3. 考察

対象児が肢体不自由であることと情緒的な不安定さ抱えていた対象児に焦点を当てて考察する。

肢体不自由児特に脳性麻痺児の日常生活における問題として、姿勢保持の困難さを挙げることができる。

脳性麻痺児の定義には、脳の器質的な障害により姿勢及び運動の困難さがあると記されている。これらの問題は異常な筋緊張により本来出現する立ち直り反応及び平衡反応が機能しない状況にある。立ち直り反応、平衡反応が出現しなければ、姿勢保持は困難であり、その結果目的的に手を使用することが困難になってしまう。

この立ち直り反応、平衡反応が出現するために必要な刺激は前庭刺激である。騎乗時に前庭刺激を、馬の動きとして前後左右、さらに回旋の動きとして受容することが可能であり、その結果として立ち直り反応、平衡反応が出現することで姿勢保持が可能となる。

この活動においても対象児の姿勢保持能力は観察上改善されていると思われた。

対象児 6 名中 1 名の女兒が初回に母親から離れることが困難であり、一度騎乗したが泣いてしまいすぐに下馬せざるを得ない状況になってしまった。2 回目も同様に騎乗することは困難であった。

情緒的な不安定さの原因として乳幼児期からの触覚刺激に対する調整機能に問題がある場合がある。その際には、対象児にとって快刺激となる触覚刺激の提示と同時に圧迫の刺激の提示が重要である。3 回目以降、母親と兄弟がタンデムで騎乗しその間に対象児を挟むように座ることで、非常に強力な触覚刺激と圧迫の刺激を同時に加えながら騎乗することで、笑顔も観察することができた。

その後 4 回目 5 回目と騎乗し、特に 4 回目には単独での騎乗が可能であった。

4. まとめ

障害児はその特性が個々によって違うことから、その対応方法も異なる。重要なことは個々の障害特性を把握したうえで、適切な乗馬活動を提供することである。そして、その乗馬活動は、「馬とかかわることや騎乗することが可能になった」ととどまることなく、日常生活上の困難さに対してアプローチすることであり、その問題が解決することである。そこで初めて治療的乗馬、もしくは乗馬療法ということが言えると思われる。

今後に関してはそれぞれの専門職の専門性を活かし、参加する対象児の障害特性を明らかにし、より効果的な乗馬活動を行うことができるようにしていきたい。

多摩動物公園における遠足の支援実践

清水舞佳（動物介在教育研究部）・佐渡友陽一（総合教育センター）

花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：遠足・生活科・校外学習・動物園

1. 本実践の発足の経緯

動物園の目的は、「研究」・「教育」・「種の保存」・「娯楽」の4つとされている。小学校の教育課程に「生活科」や「総合的な学習の時間」が設置されてからは、これらのうち「教育」目的の小学校教諭による動物園利用が増加した。

本学では2005年度より上野原小学校の2年生を対象とした動物園における教育支援活動を実践している。場所は東京都日野市の「多摩動物公園」（東京都日野市程久保7-1-1）である。同園は多摩丘陵地帯に立地しているが、多摩動物「園」ではなく、あえて多摩動物「公園」と標榜していることが物語るように、丘陵地帯の起伏に富む地形を生かした園内は敷地面積60haと広大で、かつ樹木が生い茂り、非常に緑豊かである。上野原市からは大型バスでも、あるいはJRと京王線を利用しても片道1時間の距離にある。「環境エンリッチメント」を取り入れた様々な展示の工夫により動物の魅力が引き出され、遠足の地として人気のスポットである。

多摩動物公園における校外学習の授業支援を目的とした企画に先立ち、2003年より生活科の授業支援として「ふれあい動物教室」を実践していたが、その打ち合わせ時に「生きた動物について子どもたちが学ぶ機会」を当方より尋ねた際に、「動物園に遠足で行くときぐらい」とのお応えをいただいたのがこの企画立案のきっかけであった。さらに何うと、事前に十分な動物園の検分ができるわけでもなく、いかに「グループ行動」するが主目的となってしまうとのことであった。目の前に野生下では見ることが難しい生きた教材がいるのにも関わらず、それらを教育目的で活用しきれないのである。そこで、本学の動物介在教育（Animal Assisted Education: 以下AAEと略）研究会（後のAAE研究部）が中心となり、動物園研究部との共同で、上野原小学校2年生に対する「多摩動物公園遠足支援」を企画、提案した。

小学生4～5名に対しAAE研究会の学生2名を配置する手厚い支援体制と、動物園研究部の学生によるガイドの実施が大好評で、今日まで続く毎年恒例行事となった。2016年でこの支援実践も17回目となった。そのうち、2005年、2006年、2007年、2008年、2009年、2010年の6回は研究室に配属された学生に「ゼミの一環として」企画を担当させ、実践の成果を研究会発表に結び付けた。指導教員としては卒業研究の事前指導となり、一石二鳥の実践であった。

2011年以降は、学生の発案で、AAE研究部の2年生が企画を担当するように移行した。AAE研究部の課外活動としての取り組みとしたのである。児童・学生と合わせて100名以上の集団を、予行練習なしにスケジュールどおりに動かすのである。AAE研究部の学生にとって、実践力の鍛錬のためにこの上ない企画となった。2012年にこの企画を統率した2年次の学生は、その2年後の2014年、この企画を卒業研究として取り上げた（今井ら、2015）。

以上、多摩動物公園における遠足支援のこれまでの経緯を概観した。単なる地域貢献活動に留めず、必ず「教育と」あるいは「研究と」兼ね合わせていることがお分かりいただけたであろうか。なにしろわが身は一つである。使える時間も体力も限られている。省力化を求め（手抜きではない）、一つの活動で二つ・三つのことが兼ねられるようにと、「地域」・「大学」・「学生」の三者のコーディネートには恒に留意している。言い換えると、「一つの地域貢献活動で、研究も、そして教育も兼ねること」を理想としている。そのため、いつ何時でも広くアンテナを張り巡らし、周囲の状況に対し感度を保つ努力を心掛けている。

2. 2016年の活動実践

1) 事前準備

本学の教員と学生にとっては毎年恒例行事であるが、2年生の担任教諭は毎年変わるため、遅くとも遠足実施の3週間前には小学校まで赴き、事前の打ち合わせを実施する。

どのようなことを動物園で教えるか（どの展示動物を教材とするか）については、担当する学生が打ち合わせの事前に動物園を現地踏査、その情報を基に担任教諭と協議したうえで決定する。

2) 対象児童

対象児童は、市立上野原小学校（山梨県上野原市上野原3454）の2年生で、2016年の児童数は3学級68名（男子37名、女子31名）であった。上野原小学校の教諭6名が児童を引率し、多摩動物公園までは大型のチャーターバスを利用した。

3) 参加学生

2016年の参加学生数は44名で、その過半が小学生対象の実践経験が豊富なAAE研究部の学生であった。

学生が担う役割とその人数は、全体の統括や活動時の連絡・調整を担う「フリー」が5名、児童に持たせた「学生自作のスタンプラリーカード」に「動物の解説とクイズ実施場所」で動物のスタンプを押す「スタンプ係」が4名とした。その他の35名は、児童と一緒に動物園を回る「班付き（引率役）」を担った。

4) 遠足の実施日

遠足の実施は、5月の連休明けが慣例である。前年度の3月には小学校教諭により日が決定される。2016年は5月12日であった。このとき、予備日は設けない。雨天であっても、順延・中止とはせず、決行する。この支援実践の開始当初は、慣例にしたがい、雨天順延とされていた。ところが、ある年、天候不順が続き、2度の順延、3週目にようやく実施に漕ぎつけたことがあった。このとき、先方も当方もその都度のスケジュール調整にたいへん苦慮した。そこでこの翌年、「雨の日の動物園は、来園者がいないためなのか、動物がゆった

りのんびりとくつろいでいて、面白いから。」と小学校教諭を説得、「雨天でも決行」のルールとした。

2010年、かなりの雨降りの中、遠足を決行したことがあった。園内にはほぼ来園者がいない。団体客は我々のみである。いつもは放飼場の奥でじっとしているだけの動物が、このときには活発に行動する様子が観察できた。そして、時には手が届きそうなところまで来てくれたので、児童にも教諭にも、そして学生にも大好評であった。雨中の動物園はお勧めである。論より証拠で一度行ってみたい。

5) 活動順路とタイムテーブル

5月は遠足のハイシーズンである。小学校・幼稚園等の団体で園内は大賑わいである。そこで、他団体との干渉を避けるため、活動は正門より遠いところから始めることとしている。入園してすぐに最奥部を目指してひたすら歩くのである。そして「始めの会」は、最奥部手前の「ワシ・タカ広場」で実施する。他団体は大抵の場合、正門から奥へと順に観覧するので、そこに我々以外の来園者はいない。気兼ねすることなく広場を占拠できる(図1)。



図1. ワシタカ広場で始めの会

児童は木柵に入るよう留意している。

活動時の児童の所持品はしおり、画板と筆記用具、水筒のみである。残りの荷物は「ワシ・タカ広場」の一角にブルーシートをひいてから班ごとにひとまとめとしておく。そしてインドサイ展示場前に移動し、各クラスの集合写真を撮影する(図2)。その後は、いよいよ班単位で園内最奥部のアジア園とオーストラリア園巡りである(図3、図4)。



図2. インドサイ展示場前で集合写真

タイミングよくインドサイが手前に来てくれた。



図3. 班単位で移動

児童は遠足のしおりと画板、水筒のみの軽装で活動。

児童5~6名を学生2名で引率する。



図4. オランウータンの展示施設前

環境エンリッチメント(動物のための飼育の工夫)について学生から説明をうける。

午前の活動後は「ワシ・タカ広場」にもどり、荷物をもって園の中ほどの「さくら広場」に移動、そこで班単位の昼食をとる(図5)。

午後は荷物を持ちながらであるが、チンパンジーの展示場を経由して、正門に近いアフリカ園を目指す。そして「終わりの会」はアフリカ園から正門に通じる園路脇の休憩所で実施する。14時に児童は帰路に着く(図6)。園の最奥部から始めて、正門近くで終わりとする順路である。



図5. さくら広場で昼食

学生との大切な交流のひと時である。



図 6. お見送り

学生がつくる「アーケード」をくぐってお別れ。

表 1 は 2016 年の遠足のタイムテーブルである。事前に上野原小学校の 2 年生の担当教諭と打ち合わせをして決定した。

表 1. タイムテーブル

時間	場所	内容
9:00	多摩動物公園園前	学生集合
9:30	ワシ・タカ広場	児童と合流
10:00～10:15	ワシ・タカ広場	始めの会
10:15～10:55	インドサイ展示施設	写真撮影
10:55～11:40	アジア園・オーストラリア園	午前プログラム
11:40～12:20	さくら広場	昼食
12:20～13:40	アフリカ園	午後プログラム
13:40～14:00	正門に通じる園路脇の休憩所	終わりの会
14:00		解散

6) 進行の管理

午前はシフゾウ、オランウータン、アカカンガルー、午後はチンパンジー、キリン、ライオンと巡る。スポットは決めているが、巡るペース、そして順路が複数の場合、どのように行動するかは児童に考えるように促し決定させる。学生はなるべく口出しをしない。ただし、班付き学生 2 名のうち 1 名はトランシーバー（特定小電力トランシーバー:DJ-P921, ALINCO, 大阪）を装着、「フリー」の学生からの進行の指示を受ける。2012 年から導入した時間管理の工夫である。遠足時に移動する場合、拡声器をもった教諭が「大声で」指示し、集団を動かすのが通常であろう。遠足で浮足立った気もそぞろの児童を集団行動させる教諭の苦労は絶えない。声を枯らして時間通りに進行を管理しようとする光景を園内でもよく見かける。対比すると、トランシーバーを通じて進行管理した場合、はた目からは誰の指示も受けずに全体がきれいに同調して整然と移動するという、不思議な光景が展開される。班ごとの個々勝手な活動のように見えて、実は、厳正に時間管理されているのである。引率の学生は時間を意識しているが、さりげなく児童の行動をうながす。この場合、児童には「時間に追い立てられ

ている」という感覚は希薄なはずで、その分、目の前の動物に集中できる。このトランシーバーを活用した進行管理のシステムは実に有効である。

7) 活動プログラムの内容

(1) 午前のプログラム

児童には学生が自作した「たまどうぶつこうえん えんそく」のしおり（図 7）を事前に配布した。このしおりを使用し、午前はアジア園のシフゾウ、オランウータン、そしてオーストラリア園のアカカンガルーそれぞれの展示施設を巡る。展示施設前では学生の支援をうけつつ、対象動物の行動を観察する。しおりには対象動物で頻繁に観察できる行動が、あらかじめ記載されている。その行動が観察できたらしおりに○を付けていく。その他に観察できた行動があれば、ページ下の長方形の□の中に記入する（図 8、図 9、図 10）。



図 7. しおりの表紙

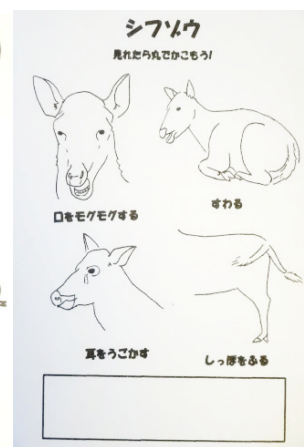


図 8. シフゾウ



図 9. オランウータン



図 10. アカカンガルー

(2) 午後のプログラム

午後はアフリカ園のチンパンジー、キリン、ライオンそれぞれの展示施設を巡る。展示施設前では学生の支援を受けながら動物を観察し、しおりに記載されているキリン、チンパンジー、ライオンの動物クイズに回答する。それぞれの動物についてのクイズについてはその場で答え合わせをする。そして、スタンプラリーの台紙（図 14）に動物（チンパンジー・キリン・ライオン）のスタンプを押してもらって終了である。

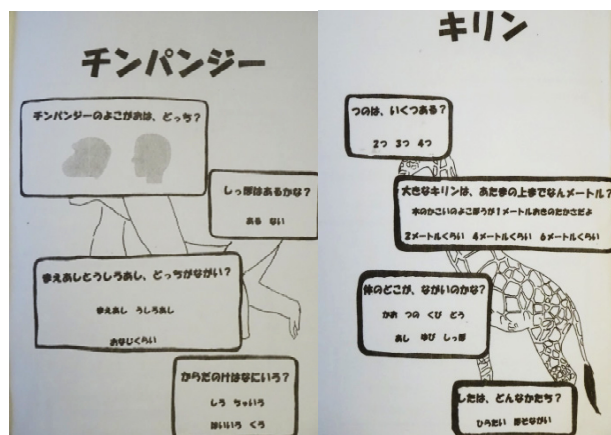


図 11. チンパンジー

図 12. キリン

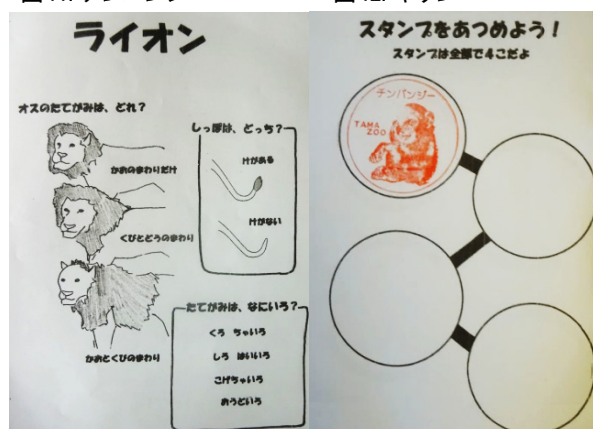


図 13. ライオン

図 14. スタンプラリー台紙

3. 動物園と教育

動物園に潜在する教育的な価値は大きい。なにしろ多摩動物公園だけに限ってみても、ユキヒョウやコウノトリ、そしてインドサイなどの野生下ではまずお目にかかれないような希少野生動物を「間近に」そして「安全に」気のすむまで観察することができるのである。指導者は、児童に対して適切な観察の視点を与えさえすればよい。児童は野生下ではまず体験できない貴重な発見をすることができる。能動的な発見の体験は、動物に対するよりいっそうの興味や関心へと発展していくに違いない。

また動物園で得られる発見は、体の大きさや特異な外観だけにとどまらない。昨今の動物園は、動物のもつユニークな生態を活かした展示の工夫を取り入れている。なぜこのような展示施設のつくりになっているのか、深い洞察が必要であるが、そこに思いが及ぶことにより、動物の生態についての発見にと結びつくであろう。それは動物が暮らすもとの野生の自然環境に関心が向く契機となるはずである。動物園は、動物そのものから派生して、環境教育も可能な場所なのである。

4. 今後の展望

こども学科は、即戦力となる学生を世に輩出すべく、実践教育に重きをおく。そのため、「ふれあい動物教室」等、アニマルサイエンス学科の学生が核となり立ち上げた既存の地域貢献活動のいくつかは、教員養成のための正規のカリキュラムに取り入れている。

2017 年、こども学科に「小幼コース」が開設した。この「多摩動物公園の遠足支援」についても演習授業のテーマに取り上げ、教員養成のための教育に活用することを構想している。動物園は小学校の遠足の地として人気のスポットである。どこの小学校に着任したとしても児童とともに動物園に行く機会はあるに違いない。「この企画に携わった経験が実際に役立った」そう思ってもらえるように活用していきたいと考えている。

5. 謝辞

本実践を行うにあたりご協力いただいた、上野原小学校の教諭の皆様様に厚く御礼申し上げます。

6. 参考文献

今井唯太, 北田拓海, 花園誠 (2015). 「大学生による動物園遠足支援の実践と成果」. 『帝京科学大学紀要』, 11, 215-222.

「青少年のための科学の祭典・山梨大会」の経緯と2016年度の成果

花園誠・青木直樹・山田知代・大須賀隆子・木村龍平・花園美樹（教育人間科学部 こども学科）

榎原健太郎・松影香子（総合教育センター）

キーワード：体験学習、科学、理科

1. 「青少年のための科学の祭典」

1) 祭典の趣旨

我が国日本は少資源国家である。石油、希土類等の工業原料は、ほぼ輸入に依存している。そのハンディが故に、国際社会を相手に渡り合うためには、科学技術での立国を目指さねばならない。「科学的思考を持つ人材育成」は必須である。「青少年のための科学の祭典」は、その目的で始まった戦略的取り組みである（日本科学技術振興財団HP）。主催は「公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館」、スタートは1992年である。

この取り組みは、その後、全国に展開し、20世紀最後の2000年になり、甲府市にある山梨県立科学館でも「青少年のための科学の祭典・山梨大会」が開催された。今から17年前である。大会期間は、毎年11月の第三もしくは第四週の、週末2日間（土・日曜日）である。2016年は11月19・20日であった。

「青少年のための科学の祭典」の設立趣旨を日本科学技術振興財団HPより引用する。

科学のおもしろさ、実感することへのときめきに満ちた子どもたちの笑顔に、もっと出会いたい……。そんな熱い思いを込め、試行錯誤を繰り返しながらネットワークをつくり上げてきました。私たちは、「青少年のための祭典」を通じ、子どもたちの可能性を広く、大きく伸ばしていきたいと考えています。

表1は、2015年の山梨大会の後援団体一覧である。文部科学省を筆頭に、関連学会がそれぞれ目白押しで、「国を挙げての」教育的な科学のイベントであることが読み取れる。

表1. 「2015 山梨大会」の後援団体

文部科学省・全国科学館連携協議会・全国科学博物館協議会・NHK・日本物理教育学会・日本生物教育学会・日本地学教育学会・日本理科教育協会・日本基礎化学教育学会・日本科学教育学会・日本理科教育学会・一般社団法人日本地質学会・日本生物物理学会・一般社団法人日本物理学会・公益社団法人応用物理学会・公益社団法人日本化学会・一般社団法人日本機械学会・公益社団法人日本アイソトープ協会・(社) 日本理科教育振興協会・一般財団法人日本私学教育研究所・(社) 日本植物学会・(社) 日本動物学会・(社) 日本天文学会・公益社団法人日本工学会・一般社団法人電気学会・日本エネルギー環境教育学会

2) 本学の参加経緯

2000年、本学は、理工学部だけの「理系大学」であった。翌年に

はバイオサイエンス学科に「アニマルサイエンスコース」の設置が予定されていた。そこに着任予定の筆者は、「コースから次年度の学科昇格」の準備に多忙な毎日を送っていた。そんな折に当時の教務課長より『「アニマルサイエンスコース」の開設に向けて、宣伝も兼ねて出展してもらえないか。』との急な要請を受けた。

そもそもの高邁な祭典の趣旨はさておき、県内最大の科学のイベントに来場の青少年たち(将来の受験生)を目当てに、祭典の場をアニマルサイエンスの広報活動に利用しよう、という算段である。筆者は、「アニマルサイエンスの宣伝ということならば」とそのコンセプトを反映したブースとして講座名「動物の行動を科学する」を起案。そして、配属されたばかりのバイオサイエンス学科の6名の3年生と、早速、準備に取り掛かった。

さて、動物の行動をテーマとしたからには、そこに生きて動き回る動物がいないことには話は何も始まらない。そこで、その当時入手可能であった小動物(実験動物)の一そろいを実験動物会社に発注した。モルモット(Hartley系統)・シリアンハムスター(Syrian系統)・スナネズミ(MON/Jms系統)(以上3種は日本SLC株式会社より購入)、そして、マウス(C3H系統・ICR系統・C57BL系統)・ジャコウネズミ(以上3系統1種は日本クレア株式会社より購入)の5種7系統である。

着任当時に研究室としていただいた大学院棟の一室(セミナー室: 現ヒューマンファクター研究室)で動物を飼育し習性を観察・記録する一方で、その学習能力を行動学的に評価、その結果をポスター発表することとした。

そして「現物がいたほうが、子どもは説明されていることに実感もわくであろう」との思いから会場に動物を生体展示することにした。

この時以来、科学の祭典に生きた動物を持ち込むのが本学の十八番となる。科学館の職員曰く、「全国の科学の祭典を見渡してみても、生きた動物を使用しての出展は極めて珍しく、山梨県立科学館の祭典の特徴として報告書に記載している」とのことである。

以下は「青少年のための科学の祭典 2012 山梨大会」の報告書からの抜粋である。

1.1. 山梨大会の特色

山梨大会の特色として、つぎの3つをあげることができる。

- 1) 学校との連携 2) 生物系ブース 3) 館全体を使った運営
- 2) 生物系ブースの充実 帝京科学大学による出展は15ブースあり、その内、10ブースは動物を扱った内容であった。これらのブースではブタやハムスター、ウコッケイなどの動物を館内に持ちこみ、来場者に生きた動物との触れ合いを提供した。来場者は、普段触ることのできない動物を触ることができ、驚いた様子であった。生命や環境を考えるきっかけを提供するこ

とができた。

3) 科学の祭典の出展形態

実験演示形式は「ブース」である。「お祭りの出店のような形状」で、実験台(サイズは概ね幅1,800mm×奥行1,200mm×高さ700mm)を挟み、実演・説明者と来場の子どもたちが向かい合う形を基本としている。

子どもに実験を体験させる時には、支援の必要から、実演・説明者の立ち位置を隣り合わせとしたり、背後に回ったりと臨機応変に動き回る必要がある。「青少年のためのー」と銘打っているので、小学生・中学生に合わせた内容を出展するが、未就学児童の体験希望も多い。その時には、学生がマンツーマンで、まさに手取り足取りの支援が必要となる。

指導法は、ブース受け入れキャパシティの上限人数(実験台のサイズで規定され、概ね10名程度)を一まとめにした「一斉」から、「少人数のグループ」、「ペア」、「個別」と自由度は高い。実験目的に応じた使い分けが可能である。

未就学児童や小学校低学年児童の場合、保護者の同伴が普通である。また、「ただ見ていてだけでなく、やってみたい。」と自ら体験を希望する積極的な保護者も多い。保護者に対する説明も発生するのである。時には明らかに研究職もしくは技術職に就いていると思われる保護者から、専門的な質問を受けることもある。参加する学生には、「正確な知識」に基づく「正確な説明」が求められる。そして、子どもに説明する時と、保護者に説明する時と瞬時の切り替え(言葉の使い分け)が必要な場面が度々発生するので、学生は大変である。将来教育現場に就いた時の保護者対応のよい訓練になっているはずである。

第一回目の出展に際し、会場の雰囲気も、どのくらいの来場者が来るのかも、皆目見当がつかなかったこともあり、ポスターと自作の生体展示ケースを用意しただけで、プレゼンテーションについては学生に指導しなかった。

ところがふたを開けてみると、祭典は大賑わいであった上に、「生体展示」の人気は、予想をはるかに超えていたのである。老若男女、我らがブースを訪れる来場者は後を絶たず、学生は繰り返しの説明に追われた。最初は、戸惑いながら・言葉に困りながらの説明であったが、それでも懸命に繰り返すうちにプレゼンテーションが滑らかになり、2日目には、相手に合わせての臨機応変の説明ができるようにまで上達した。実践の、「習うより慣れろ」の効用を、このとき正に実感したのである。

祭典も佳境にさしかかった頃、時の山梨県知事が職員に案内されて来場した。見学コースと、説明を受けるブースは事前に申し合わされていたようで、見ていると、知事に説明するに相応そうな貫禄のある年配の出展者(大学の教授などの)が運営するブースにのみ立ち寄り、説明を受けていた。「我々のブースは、素通りだな・・・」と思ったその瞬間、件の知事が生体展示に目を留め、職員の「次へ」の促しを遮り、「これはどういう動物ですか。ここでは何の展示をしているのですか。」と学生に説明を求めてきた。暫しの間、学生と知事との間で質疑応答のやりとりがあった。そうしてから「先へ」と職員に促され、ようやく次のブースにと立ち去った。動物のもつ「人を惹きつける力」を実感したのもこの時である。

4) こども学科の教育課程における位置づけ

こども学科学生は授業の一環で出展した。1年生は「こども文化教育演習Ⅰ」、2年生は「地域コミュニティワーク演習Ⅱ」、4年生は「保育・教職実践演習」である。

学生には「この出展では、特に保護者対応について学んでほしい。」と目標を伝える。そして、出展内容に応じて保護者向けのパネル、そしてハンドアウトを作成するようにと指導する。そして、子どもに対しては「難しい専門用語は使用せず、平易な言葉で説明する方法」を考えさせる。大学で得られる知識は、「専門用語」をちりばめられている。高等教育なので、当たり前のことである。難しいことを、教わったとおりに(専門用語で)難しく説明するのは容易い。しかし、「平易な言葉で」と制限されると、実は分かっていたはずのことについて、理解が浅いこと(=概念形成が不十分であること)に気付かされる。生物・物理・化学的な現象について、原理を理解していなければ(真の意味で理解していなければ)平易な言葉への適切な言い換えはできない。子どもにどうやって説明するかを考えることは、期せずして学生にとっては「学びなおし」になるのである。

5) 過去5年間の出展実績～「エネルギー」「粒子」系の充実

上述したように、アニマルサイエンス学科の宣伝目的からの出展であったので、参加当初は、生物系に出展内容が偏っていた。しかし、過去5年間に限ると、化学系・物理系と、初等理科教育分野の全域に出展内容が拡充してきているのが特徴である。そこで、文部科学省「学習指導要領解説 理科編」を参照にして整理した、「ブース出展内容」と「初等理科の『エネルギー』『粒子』『生命』『地球』を柱とした内容の構成」の照合結果を表2に示す。

生命系に関しては、内容から複数の学年にまたがっていると判断されるブースが多い。

また、整理・分類した結果、内容区分「地球」に該当すると判断できる出展は認められなかった。理系教員2名が学生指導に当たってきたが、それぞれの専門は、1名は物理系、もう一名は生物・化学系であった。出展内容にはまだ「偏りがある」ことが明らかになった。

表2 初等理科の内容区分と出展ブース内容の照合結果

	エネルギー	粒子	生命
3年	紙コップでロケットを作ろう 空気の流れを知ろう 発泡スチロールの蝶々を作ろう 光の世界～万華鏡を作ろう 体験!極小のカミナリ	気分の不思議	魅力発見!生き物展示 不思議発見!生き物展示 楽しさ発見!生き物展示 カイコとふれあおう 虫の観察とふれあい体験
4年	発泡スチロールの蝶々を作ろう	空気の流れを知ろう 不思議!超低温の世界 浮力マジック アロマキャンドルを作ろう	魅力発見!生き物展示 不思議発見!生き物展示 楽しさ発見!生き物展示 腐葉土と愉快的仲間たち
5年	ピタゴラ装置で遊ぼう	不思議!液体のヒミツ スライムを作ろう	魅力発見!生き物展示 不思議発見!生き物展示 楽しさ発見!生き物展示 腐葉土と愉快的仲間たち ミクロの世界の真実
6年	ピタゴラ装置で遊ぼう 体験!極小のカミナリ 発泡スチロールの蝶々を作ろう パーソナル・ロボットと遊ぼう	不思議!超低温の世界	スナネズミのおうちを作ろう!! ハムスターのおうちを作ろう!! 腐葉土と愉快的仲間たち 鳥獣保護って何?

2. 2016 年度の出展

1) 概要

2016 年度は本学より 20 ブースの出展があった(図 1)。内訳は、課外活動が 7 ブース(動物介在教育研究部 4 ブース、環境教育研究部 3 ブース)、研究室が 6 ブース、残り 8 ブースは全てこども学科の学生による出展であった。

11 月 18 日(金)の午後、大学より「動物運搬車(2t トラック)」に荷物満載で科学館に乗り入れ、教員と学生が共同して祭典準備に取り掛かる。ただし、祭典当日は、学生に運営を任せ、教員は口出し・手出しをなるべく控える。その方が学生にとって勉強になるからである。そして、2016 年度は、欠けていた内容区分「地球」に相当するブー

スを出展した。

- 2) 「岩石標本作りに挑戦」(「地球」第六学年「土地のつくりと変化」)
- 2)-1. 主題「山や川から採集してきた様々な岩石片を取捨選択するとともに分類し、自分だけの岩石標本を作る。」
- 2)-2. ねらい「土地を作る岩石には、川の働きでできたものと、火山の働きでできたものがあることを学ぶ。」
- 2)-3. 教育法の工夫「岩石のでき方についてイラストを用い視覚的に解説する。取捨選択した岩石片に対応する名称を書いたラベルを与え、水の働きでできた岩石片のラベルは青で、火山の働きでできた岩石片は赤でマークさせる。」

2)-4. 本時の展開

過程	指導内容	学習活動	指導形態	支援・留意点	評価の観点
導入 5分	岩石片の説明	岩石片を手に取り、対比しながら観察する。岩石には2通りのでき方があることを学ぶ。	全体	様々な岩石片を実際に手に取って観察するように促す。 パネルを使用して岩石には川の働きでできたもの(堆積岩)と、火山の働きでできたもの(火成岩)があることを説明。	火成岩と堆積岩の両方に関心を示したか。

展開 10分	岩石標本作り 岩石片の選別	提示された12種類の岩石片から10種類を選 択する。	個別	どの岩石片を選んでも標本箱の1マス (縦4.5cm×横4cm×高さ2cm)に収ま るように大きさをそろえておく。 川の働きでできた岩石片と、火山の働 きでできた岩石片を混同しないよう にラベルと対応させる。 2通りのでき方の岩石片が選別できるよ うに配置を考えさせる。 川のはたらきでできた岩石(堆積岩) は「青」、火山のはたらきでできた岩石 (火成岩)は「赤」とその都度繰り返し 口頭で説明し印象付ける。	2通りのでき方がある岩石 片を整理して配置できる か。
	岩石片の配置	各岩石片を4cm四方の黒い厚紙に糊付けし、標 本箱の配置を考える。 配置が決まったら、厚紙の裏面を両面テープで 標本箱に固定する。			
	ラベルはり	川のはたらきでできた岩石のラベルは青、火山 のはたらきでできたラベルは赤でマークする。			
まとめ 5分	考察・結論	パネルを見ながら、それぞれの岩石片がとれた 場所について学ぶ。	全体	パネルを提示しながらそれぞれの でき方について解説する。	パネルを注視し、説明を聴 く。

2)-5. 結果

採取してきた岩石は、縦4.5cm×横4cm×高さ2cmのマスに収まるように、事前に砕いておいた。そのため、どの岩石片を手にしても新鮮な(風化していない)組織の観察が可能であった。特に花崗岩はキラキラと輝く鉱物の様子が「きれい。宝石みたいだ。」と人気であった。

また、同じ岩石でも割れ方で違った組織が観察できるので、同じ岩石を2つ3つと選択する子どももいた。他の体験ブースに比べると保護者の参加も多く、それぞれの標本づくりに励んでいる親子もいた。ある保護者からは「岩石や鉱物に興味をもってもらいたいと思っていたので、ありがたい」との感想もいただいた。

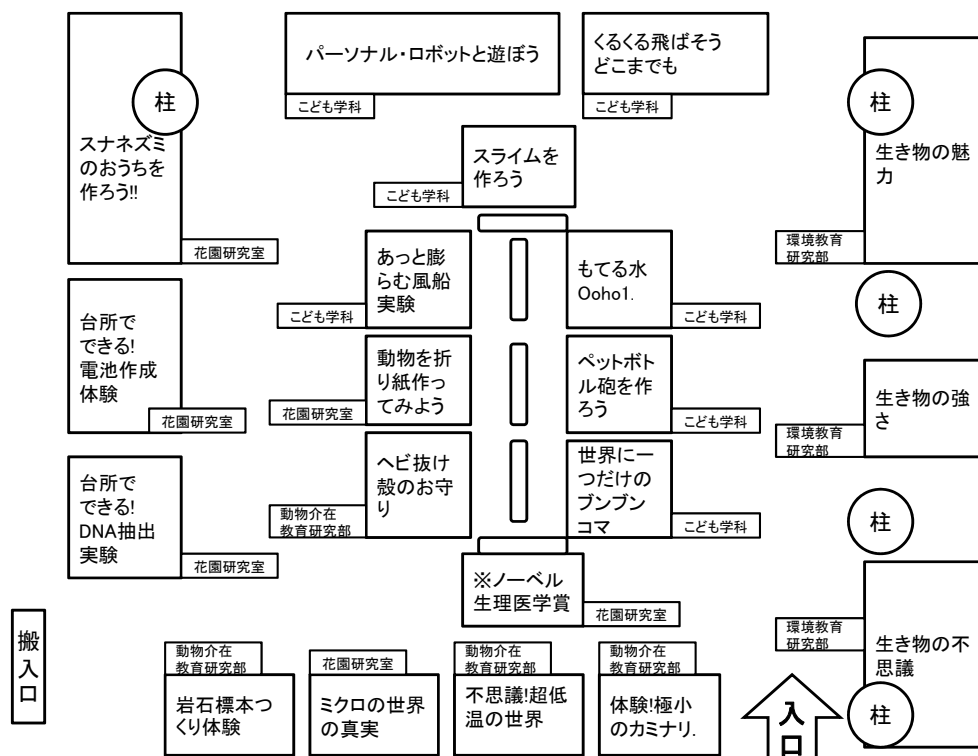


図1. 2016年度の出展ブース配置

全て、1階の多目的ホール内に配置した。

※「ノーベル生理医学賞」は19日のみの出展。20日は「プラ板を使ってキーホルダー作り」(こども学科の出展)に差し替え。

3. 今後の展望

このイベントには色々な学年の児童が訪れる。新しく開発した教材

を、理科教材としてどのように学年に合わせていくか、今後の課題である。そして、このイベントを小学校教員の養成のために活用していきたい。

足立区立小学校における生活科授業支援の実践

鮫島豊（動物介在教育研究部）・榊原健太郎（総合教育センター）・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：ふれあい動物教室・生活科・ふりかえり・P4C

1. 足立区における「ふれあい動物教室」の概要

2010 年度より生活科の授業支援として実施している。2010 年度は「おためし」ということで、足立区からの予算支援がないまま試行的に実施した。初回は千寿桜小学校で実施し、足立区の教育委員会からは、当時の教育長、各課の課長、そして当時の校長会の会長も視察に訪れた。TOKYO MX の取材も受けた。ずいぶんと注目を集めた中での実践であった。もう7年前になるが、当時の映像はYoutube で今でも視聴できる。「足立区」＋「動物ふれあい教室」と検索すると、タイトル「足立区 大学生が教える『動物ふれあい教室』」にヒットする。1分25秒の映像である。児童にもインタビューしているので、授業等で活用している。2010 年度(本学が千住にキャンパスを開設した年)は、動物ふれあい教室5回(6校)、体験1日大学生1回、上野原にお招きしての大学遠足4回(5校)(以上、全て花園が企画)の全てを、予算化されてない状況で実施した。

「動物ふれあい教室」を担うのは動物介在教育(Animal assisted education:以下「AAE」と略。)研究部である。所属学生は、ほぼアニマルサイエンス学科とこども学科の学生で占められている。アニマルサイエンス学科は、山梨県の上野原市の上野原キャンパスと、東京都足立区の千住キャンパスの両方にまたがっているため、両キャンパスの学生が所属している。毎年多少の変動はあるが登録学生数100～150名程度であり、文科系の部としては、本学最多の部員数である。

実施日は所属学生の都合を最優先し、時間割の隙間を縫って、最大公約数的に決定する。とはいえ、小学校の正課に対する授業支援であるため、月から金曜日の実施が大前提である。時間割に多少の余裕がある3、4年生はまだしも、1、2年生は共通科目や学科必修科目で時間割がほぼ埋まっているので、参加できる学生が上級生に限られてしまっていた。部で積み上げてきた実践のノウハウは、いつの日からか、実践活動の場で「習うより慣れよ」方式で、先輩から後輩へと継承していくのを「部の伝統」としていたので、活動水準の維持に、顧問教員としてはいつも腐心していた。うわさを聞きつけて、見学の申し込みも多い。そして、活動要請も増える一方の窮状であった。

2. 2016 年度の「ふれあい動物教室」の改変

2016 年度の実施日決定に際し、足立区小学校が「ゆとり脱却」を目指して、土曜日授業を開始していることを聴き及び、チャンスとばかりに、メールではあるが、「一それから『ふれあい動物教室』ですが、来年度からは全日程を土曜日に設定させてください。平日では千住の学生グループの参加が困難で、これ以上の継続が難しい状況です。」と、全日程の土曜日実施を申し入れた。以下、当方からのお願いの抜粋である。

大きな理由は、千住グループが属する「動物看護コース」が「動物看護師の国家資格化」を目指し、2015 年度より科目を大幅に

増やし、カリキュラムを厳格化したためです。

(中略)そのため、今年度の1年生は、平日参加が不可能でした。それでもなんとか遣り繰りしました。カリキュラムは年次進行しますので、来年度は、1・2年生が、再来年度は、1・2・3年生が参加不可能になります。そしてその翌年は全学年が不可能となるでしょう。そうすると、上野原の学生に完全にたよるしかありません。しかし、上野原の学生グループは、千住のこの活動以外に、実に年間60回以上の活動を抱えています。

(中略)今後、足立区におけるこの活動を継続するには、抜本的な改革が必要です。それが「土曜日実施」です。足立区内全ての小学校で月1回でも土曜日授業を実施しているのであれば(そう聞きました)、そこに活路があると思いました。理由は、そこにまで大学の授業は予定されてないからです。

この後先方より4回の返信、当方より7回の往信を(送信メール文面の総文字数5,000字超)経て「アニマルサイエンスの学生だけでなく、こども学科の学生も参加し易くなる。」からと、「全日土曜日実施」に漕ぎつけた(表1)。

2016 年度からの大きく改変したことがもう一つある。「同日同時間帯に、2校同時の実施」としたのである。学生数、動物数ともに、単純にいつて今までの二倍必要である。上野原キャンパスでは、幼稚園・保育園を対象に「4園同時」とときには「5園同時」での実践経験はあったが、1園当たりの幼児数が少ないので、1園当たりの実践規模も少なく済んだので可能であった。しかし、小学校ではそうはことが重ならない。教育の質を落とさないためには、学生の人数が必要である。平日では時間帯を午前・午後とずらしての同日実施の実践経験はあったものの、同時時間帯の実施はまず不可能であった。土曜日の実施としたことで、部に所属するほとんどの学生の参加が可能となった。

表1. 2016年の概要

月	日	所※1	対象者(人)※2	運営スタッフ(人)※3	動物※4
4	16	西伊興	2年84・支援5	千19(児1)・上24(こ3)・ア2	ハム・モル・ヌード・スナ・アオ・フト
5	14	寺地	2年54	千8・上20(こ3)・ア2	ハム・モル・蚕・鶉・犬
		弘道	1年46・2年44	千8(児1)・上22(こ6)・ア1	ハム・モル・蚕・スナ・鶉
6	11	西新井第二	2年62	千9(児1)・上21(こ2)	ハム・ヌード・スナ・蚕・鶉
		興本	2年77	千5・上19(こ4)・ア3	ハム・モル・蚕・鶉・犬
7	9	六木	2年75・支援2	千6・上22	ヌード・スナ・蚕・鶉・アオ・フト
		東伊興	2年104	千15(児1)・上22(こ3)・ア3	モル・スナ・蚕・鶉・犬
9	10	千寿常東	2年102・支援11	千5・上27(こ3)	モル・スナ・蚕・アオ・フト
		大谷田	2年44	千4(児1)・上11・ア3	モル・鶉・犬
10	15	花畑西	1年59・2年70	千13(児1)・上26(こ3)・ア3	モル・スナ・鶉・犬・アオ・フト
11	12	関原	1年59・2年70	千6(児1)・上19(こ2)	ハム・モル・スナ・鶉
		鹿浜五色桜	2年56	千5・上37(こ2)・ア3	ハム・ヌード・スナ・鶉・犬
12	10	東栗原	1年65・2年64	千4・上25(こ2)	ハム・モル・蚕
		足立	2年96・支援10	千5(児1)・上20(こ2)・ア2	モル・スナ・蚕・犬・アオ・フト

脚注※1: 全て足立区立の小学校。※2: 「1年」は1年生・「2年」は2年生・「支援」は特別支援学級。略号後の数字は人数。※3: 「千」は千住キャンパス・「上」は上野原キャンパス所属のAAE研究部部員(「児」はその内の児童教育学科学生、「こ」はその内のこども学科学生)・「ア」はアニマルシップ社員。「数字」は人数。※4: 「ハム」はハムスター・「モル」はモルモット・「ヌード」はヌードモルモット・「アオ」はアオダイショウ・「フト」はフトアゴヒゲトカゲ・「スナ」はスナネズミ。

3. 2016年度の概要(表1)

当方より希望日を伝えた2か月後の3月15日、4月から7月までの前期の実施校決定の連絡を受けた。後期に関しては、7月8日に希望日を伝達、後期初回の9月実施校についてののみ先行して決定、10月以降に関しては、9月12日に連絡を受けた。

4. 「ふれあい動物教室」の概要

実施するのは大抵の場合体育館である。全体を6班に分けて整列させ、「始めの会」からスタートする(図1)。このとき、動物ふれあいをする際の注意を全体に伝える。お約束は、「やさしくさわる」・「大きな声をださない」・「お兄さんお姉さんの言うことを聴く」の三つである。



図1. 始めの会の様子

体育館内は視界を遮るものもなく、ステージに登れば全体を一望できるので、時間管理がしやすい。また、体育館程度の広さであれば各ブース内で発生する学生とのやり取りが互いの進行の妨げになることもない(図2)。



図2. 体育館内にブースを配置した様子

児童は学生に引率されて順にブースを巡る。各ブースでも必ず開始時には「よろしくお願いします」、終了時には「どうもありがとうございました」と挨拶をさせる(図3)。

各ブースでは、実際の動物や頭骨などの標本を教材とした体験的な学習の他、副教材として説明用のパネルも使用する(図4)。



図3. ブース開始前の挨拶



図4. パネルを使用した解説

4. プログラムの概要

(1) 「動物ふれあい」を主としたプログラム

標準的なタイムテーブルを表2に示す。移動時間は10分程度ととてあるので、1ブース当たり10分の組み立てである。実施したのは弘道小学校のみであった。

表2. 「動物ふれあい」のみのタイムテーブル

時間	内容	備考
7時30分	小学校到着	荷物搬入・会場設営
8時30分～8時35分	はじめの会	学生が司会進行
8時35分～9時15分	ふれあい 動物教室前半	1ブース10分×3ブース (ブース間移動計5分)
9時15分～9時25分	休憩	トイレ等の対応
9時25分～10時	ふれあい 動物教室後半	1ブース10分×3ブース (ブース間移動計5分)
10時～10時5分	おわりの会	学生が司会進行
10時5分～10時20分	片付け	荷物搬出・会場の撤収と清掃
10時25分	小学校出発	

(2) 「動物ふれあい」に「振り返り」を組み入れたプログラム

西伊興小学校で実施したタイムテーブルを、代表例として表3に示す。一連の「動物ふれあい」を終了したあと、「振り返り」を組み入れたのは、西伊興小学校の他、寺地小学校・西新井第二小学校・六木小学校・千寿常東小学校・鹿浜五色桜小学校の6校であった。

「振り返り」は「P4C (philosophy for children: 子どものための哲学) 法」を参照して実施した(後述)。

表3. 「動物ふれあい」＋「振り返り」

時間	内容	備考
7時30分	小学校到着	荷物搬入・会場設営
8時45分～8時50分	はじめの会	学生が司会進行
8時50分～9時30分	ふれあい 動物教室前半	1ブース10分×3ブース (ブース間移動計10分)
9時30分～9時40分	休憩	トイレ等の対応
9時40分～10時20分	ふれあい 動物教室後半	1ブース10分×3ブース (ブース間移動計10分)
10時20分～10時32分	振り返り	班ごとに実施
10時32分～10時37分	おわりの会	学生が司会進行
10時40分～10時55分	片付け	荷物搬出・会場の撤収と清掃
11時	小学校出発	

(3) 「動物ふれあい」に「ドッグショー」を組み入れたプログラム

興本小学校で実施したタイムテーブルを、代表例として表4に示す。一連の「動物ふれあい」を終了したあと、「振ドッグショー」を組み入れたのは、興本小学校の他、東伊興小学校・大谷田小学校・花畑西小学校・足立小学校の5校であった。

表4. 「動物ふれあい」＋「ドッグショー」

時間	内容	備考
8時20分	小学校到着	荷物搬入・会場設営
9時10分～9時15分	はじめの会	学生が司会進行
9時15分～9時45分	ふれあい 動物教室前半	1ブース10分×3ブース (ブース間移動計10分)
9時45分～9時55分	休憩	トイレ等の対応
9時55分～10時25分	ふれあい 動物教室後半	1ブース10分×3ブース (ブース間移動計10分)
10時25分～10時30分	おわりの会	学生が司会進行
10時30分～11時	ドッグショー	1年生、3年生、4年生も参観。 ショー自体は15分間。学生が司会進行
11時15分	小学校出発	

(4)「動物ふれあい」に「鳴き声クイズ」を組み入れたプログラム
実施したのは東栗原小学校のみであった(表5)。

表5.「動物ふれあい」+「鳴き声クイズ」

時間	内容	備考
7時30分	小学校到着	荷物搬入・会場設営
8時35分～8時40分	はじめの会	学生が司会進行
8時40分～9時10分	ふれあい 動物教室前半	1ブース8分×3ブース (ブース間移動計6分)
9時10分～9時20分	休憩	トイレ等の対応
9時20分～9時50分	ふれあい 動物教室後半	1ブース8分×3ブース (ブース間移動計6分)
9時50分～10時10分	鳴き声クイズ	学生が司会進行
10時5分～10時10分	終わりの会	学生が司会進行
10時15分～10時35分	片付け	荷物搬出・会場の撤収と清掃
10時40分	小学校出発	

(5)「動物ふれあい」を学年別で実施したプログラム

実施したのは関原小学校のみであった(表6)。

表6.「動物ふれあい」を学年別で実施

時間	内容	備考
7時30分	小学校到着	荷物搬入・会場設営
8時40分～8時45分	はじめの会	学生が司会進行
8時45分～9時20分	1年生:ふれあい 動物教室 2年生:クイズ	1ブース8分×4ブース (ブース間移動計3分)
9時20分～9時30分	休憩・移動	トイレ休憩と1・2年生の入れ替え
9時30分～9時35分	はじめの会	学生が司会進行
9時35分～10時10分	2年生:ふれあい 動物教室 1年生:クイズ	1ブース8分×4ブース (ブース間移動計3分)
10時10分～10時15分	終わりの会	学生が司会進行
10時15分～10時30分	片付け	荷物搬出・会場の撤収と清掃
10時36分	小学校出発	

5. P4C法を導入した生活科授業支援実践の試み

(1)はじめに

2008年に告示された「新学習指導要領」では、生活科の目標及び内容として「動物の継続的な飼育」が明記された。日本の初等教育の現場には、明治以来の「学校飼育動物」の伝統がある。正に児童の「動物の継続的な飼育」のための存在である。飼育されている主要動物はウサギやニワトリである。しかし、教材として十分に活用されているかというと、甚だ心もとない現状である。筆者は小学校教員の養成課程に問題があると考えている。不思議なことに我が国では「教育学部」は、高等学校においてはたいていの場合、文系生徒の選択肢とされているのである。過去に大学に入りたての文系大学の1年生に対して動物観(動物に対する価値観)についてアンケート調査したところ、概して動物に対する関心が薄かった。

この母集団に対して、教員養成課程では「動物の飼育について」などの知識・技能も教授せずに、学生を世に送り出してしまふ。赴任し

た小学校に「学校飼育動物」がいたとしよう。それはお荷物扱いされていて、お世話は新任教諭の役回りとされているケースも多いと聞く。「手に負えぬしごと」の若年者への押し付けである。

この状況に負の要因として「鳥インフルエンザ」騒動がのしかかり、「学校飼育動物」を巡る現状はますますお寒い状況となった。人畜共通感染症の恐れが、動物を小学校で飼育しないことに、正当性を持たせてしまったのである。そして初等教育の現場で、児童が動物と出会う機会をは得難いものになってしまった。この現状の打開策として本学が実践するAAE(Animal assisted education:動物介在教)が脚光を浴びるようになった。本学のAAE部は、2003年より小学1・2年生を対象に動物ふれあい教室という形で生活科の授業支援の実践を開始した。年間に受ける活動件数は、それこそ右肩上がり、活動初年度の2003年は9件の活動にとどまったが、2008年には年間48件、そして2013年以降は年間80件程度で推移している。地域貢献として受け入れられる上限だからである。残念ながら「日程が合わない」と依頼を断るケースも多くなってきた。

(2)2016年の新たな試み

生活科の学習目標には「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気づいたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることが出来るようにする。」と記載されている。しかし、本学の動物ふれあい教室は「動物の前では大きな声を出さない」・「お兄さんお姉さんの言うことを聞く」というルールを徹底している。動物と児童の双方に対するリスクマネジメントからのお約束である。しかし「児童を受動的にしている」ことが現行の学習指導要領が目指す学力の重要な3要素の一つ「知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をはぐくむ」を必ずしも整合しないことを、本学で実施しているふれあい動物教室の弱点として考えていた。何か、現行のプログラムに重ねて、児童の能動性を引き出すような工夫はないだろうか、と考えていた時に着目したのがP4C法(philosophy for children:子どものための哲学)である。

P4C法はアメリカの哲学者・教育学者であるマッシュュー・リップマンが1970年代に開発した教育実践で、こどもを「対話による探求」に誘う手法である。「どうということ」で意味を問い、「なぜ」で理由を問い、「たとえば」で具体例を尋ねる。これをキーワードにした「振り返り」をふれあい動物教室のプログラムに組み入れたのである。

(3)実践対象校

P4C法を実施したのは、足立区内の寺地小学校2年生(1組27名、2組27名)、西新井第二小学校2年生(1組31名、2組31名)、六木小学校2年生(1組26名、2組25名、3組24名)、千寿常東小学校2年生(1組33名、2組34名、3組35名)、鹿浜五色桜小学校2年生(1組29名、2組27名)の5校で、総児童数は349名であった。

(4)P4C法を参照した振り返り

振り返りの実施時間は10分間。最後のブースが終了したのち、班付きの学生を中心に輪になる。学生をインタビュアーとし、ふれあい動物教室での体験による動物に対する印象の変化と、その理由につい

て聞く。書記は子どもの発言を記録する(図5)。



図5. 振り返りの様子

(5) 児童の発言内容について

振り返りで動物を「好きになったか」「嫌いになったか」を個別に尋ねたところ、「好きになった」は94%(349名中328名)、「かわらない」は2%(同7名)、「嫌いになった」は4%(同14名)であった(図6)。

「嫌いになった」動物とその理由を表7に示す。

前年度までは、児童より個別の感想を聴くことは実施せず、「ふれあい動物教室」の効果を集団全体でのみ評価していたが、個別にインタビューすることで全体からすると4%(14名)と少数ではあるが、「ふれあい動物教室」により動物を嫌いになってしまう児童もいることが明らかになった。

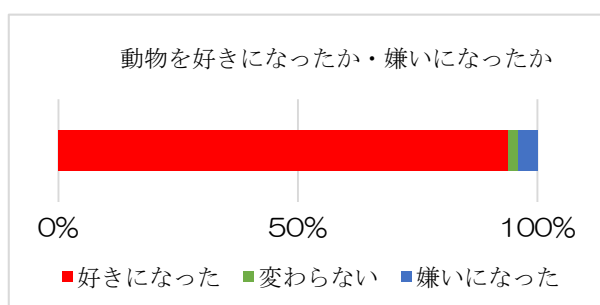


図6. 動物を「好きになったか」「嫌いになったか」

表7. 嫌いになった動物と理由

動物	嫌いになった理由
イヌ	犬に触るとノミがつくから嫌い。
モルモット	モルモット撫でるとき噛みつきそうだった。 モルモットが恐ろしかった。 モルモットの目が怖かった。 (モルモットが) なんかデブくて嫌だった。
カイコ	芋虫見て嫌いになった。 幼虫が好きだったけど、気持ち悪くて怖かった。 虫のせいで大っ嫌いになった。 蚕が怖かった。

次に、発言内容から各動物についてどの体験内容が言語化の要因になっているかを分析した。その結果、全ての動物で「へビがツルツルしていた」、「モルモットがモチモチしていた」、「カイコがプニプニし

ていた」、「イヌがフワフワしていた」、「ハムスターがモフモフしていた」などの、「感触」に起因する発言が最も多かった(図7)。

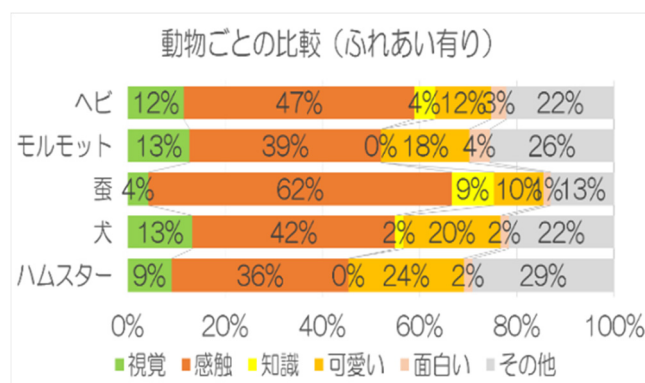


図7. 動物種ごとの言語化の要因

6. 謝辞

本実践を行うにあたり、小学校教諭の皆様には色々と便宜を図っていただきました。心からの御礼を申し上げます。また、本実践は足立区教育委員会からの助成を受けて実施いたしました。

参考文献

- 文部科学省 (2013) 「小学校学習指導要領 生活編」
川崎 惣一 (2015) 「子どもの哲学 (P4C) の意義について」

廃校を活用した環境教育支援実践と成果

見邊竜太・古瀬浩史（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）・榊原健太郎（総合教育センター）

青木直樹・花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：環境教育、足立区教育委員会連携事業、廃校

1. はじめに

環境教育支援のために活用している桜井小学校の開校は1875年(明治8年)にさかのぼる。その後、1887年(明治20年)に秋山第二尋常小学校、1892年(明治25年)に桜井尋常小学校、1941年(昭和16年)に桜井国民学校と名称が変遷、第二次世界大戦の終戦を迎える。児童は、金山、小和田、古福志、桜井、一古沢、富岡、安寺沢より通い、開校当初より、地域の小学校として大切にされてきた。

昭和58年、現在の耐震基準を満たした鉄筋コンクリート3階建の校舎に建て替えられた。2001年(平成13年)、桜井小学校は、秋山村内の浜沢小学校、栗谷小学校と合併し、秋山小学校に名称変更した。翌2002年(平成14年)、秋山村の西方に校舎が新築され、廃校となった。2008年(平成20年)、上野原市の教育委員会と交渉し、市内の小学生の体験活動の拠点として本学による活用が始まった。

2. 2016年度の受け入れ校

足立区の教育委員会と提携して足立区立小学校の4年生を対象とした環境教育支援事業(通称「大学遠足」)が始まったのは2010年(平成22年)からである。2016年度は全6回実施し、6校を受け入れた(表1)。

表1. 2016年度の受け入れ校

回	月日(曜日)	小学校名	児童数
1	6月23日(木)	千寿小学校	72名
2	9月1日(木)	千寿常東小学校	84名
3	9月2日(金)	中島根小学校	79名
4	9月8日(木)	西伊興小学校	61名
5	9月9日(金)	平野小学校	60名
6	9月20日(火)	関原小学校	69名

3. プログラムの概要

1) 班編成

この活動では、自然体験の場所までが一行隊で進むしかない小道であること、体験活動の場所自体が狭いことが主な制限要因である。そこで学年全体を12班に分け、屋外での活動がやりやすいように小班編成としている。

2) プログラムの構成

台風等による暴風雨が予想されるときを除き(過去に一度だけ台風による中止あり)、雨天であっても「大学遠足」は決行される。児童は小学校がチャーターした大型バスで来訪する。聞くとバスチャーター代は児童数(+添乗の教諭数)で割り、均等負担であるらしい。だか

らというわけでもないが、片道少なくとも(順調にいっても)2時間以上かけての足立区から上野原市への遠征である。「来てよかった。」「また来たい。」と思ってもらえるように、どんな天候であっても、そして途中でどのように天候が急変しても、体験活動は途切れることなく継続し満足して帰ってもらえるように配慮している。

(1) 晴天プログラム

全12班を6班ずつに分け、午前の1～6班は山側に配置した6つの体験学習ブースをローテーションで巡り、7～12班は廃校前より50メートル程度降りた溪谷の河原で「川の生き物探し」等の自然体験をする。昼食をはさみ、午後は体験活動を入れ替える。

(2) 小雨プログラム

雨降りて川の増水が予想されるとき、そして、晴天であっても前日までの雨降りのため、川の増水が収まっていないときは、リスクマネジメント上の配慮から、川での体験活動は中止とする。その代わりに、校舎の2階・3階の教室に設けたコーナーで体験学習を提供する。

(3) 豪雨プログラム

この時は、屋外の活動をすべて中止とする。午前の1～6班には、体育館に設営した動物を主テーマとした体験活動を、7班～12班には校舎の2階・3階の教室に設けた体験活動を提供する。そして、昼食(体育館でとる)をはさみ、午後は活動を入れ替える。このプログラムは突然のゲリラ的豪雨に対する備えでもある。山の天気は変わりやすい。屋外の活動をすべて中断し、校舎内に引き上げる。そして、川で体験活動していたグループは2階・3階に、山側で活動していたグループは体育館に移動して体験活動を継続する。過去に1度だけ、天候急変で切り替えたことがあったが、いつでも受け入れられるように準備してあるので、移動時間のロスだけで、体験活動を継続することができた。

4. 2016年度に設営した体験学習

1) 6月23日「千寿小学校」

2016年度では唯一、初夏のプログラムを設営した。

(1) 山側の体験ブース

① カエルの変態の観察

オタマジャクシからカエルになるまでの変化が一目でわかるよう、グラウンド周辺のたまり水から捕獲した生体を展示。

② 腐葉土中の生き物探し

道路側溝に積もった腐葉土の中にいる生き物を探し出し観察する。

③ 里の暮らしと獣害

桜井山から秋山の景観を観察、野生動物と人の生活の関係や獣害について解説する。

(2) 校舎内3階の体験ブース

①音楽室「富岡の棚田」

音楽室の東側と南側の窓からは、秋山川対岸の富岡地区の棚田が一望できる。富岡の棚田の歴史、棚田の生態的な意義について解説する。

②6年生教室「上野原の食文化」

上野原は水田に不向きな傾斜地が多く、畑から獲れる麦類の他、雑穀類を利用する食文化が発達していた。雑穀類の実物を展示して、昔の食生活について解説する。

③5年生教室「秋山川の自然誌」(水族館研究部 AQUA SHIP 担当)

上流域河川の特徴について解説し、足立区内を流れる荒川や隅田川と対比する。また、秋山川には清流域の環境指標生物であるカワゲラ・ヘビトンボ等の幼生が生息していることから、秋山川が清流であることを説明する。

④4年生教室「秋山の野生動物」(環境教育研究部風の子フ〜スケ担当)

模型を使いながら野外における生物の観察法について体験的に学ぶ。

⑤理科室「淡水のプランクトン」

フィールドには、いたるところに池、たまり水が点在する。そこにいる多種多様な水生プランクトンが教材である。ミジンコ等の、かうじて肉眼で確認できるものを実体顕微鏡で観察。接眼画像をモニターに映すスコープと組み合わせ、「ミクロの生息環境」に対する気づきを促す。また、目に見えない世界を提示することで、目に見えることだけが現実ではないことを教える。

(3) 校舎内2階の体験ブース

①図工室「上野原の養蚕文化」

養蚕に使用した古民具を提示しながら、かつて養蚕で栄えた上野原の歴史について解説する。

②図書室「馬がいたくらしと秋山の民話」

道路が未整備であった時代、秋山の人々の暮らしは馬とともにあった。フィールド内には「馬頭大士」が点在している。日本独特の「動物供養」の伝統と、人と動物とが共生していた時代について解説する。また、秋山村教育委員会が編纂した民話集より、かつての暮らしぶり、人と動物の関係がうかがえる民話を紹介する。

③3年生教室「里山と農業」

秋山の農業は、里山の恵みにより支えられている。生態系と人の生活のつながりを解説、自然環境の恩恵に気づかせる。

④2年生教室「森林と酸素循環」

液体窒素を用い、酸素を視覚化する。そして、酸素供給における森林の重要性を解説、森林保全の重要性に気づかせる。

⑤家庭科室「淡水域の漁業」

上野原市内を流れる桂川は、アユ釣りが盛んである。その誕生の歴史的経緯と、アユの生態について解説する。

(4) 川の体験ブース

①秋山川の特徴

上流域河川の特徴について解説。足立区内を流れる荒川や隅田川と対比する。

②秋山川の水棲生物

川べりから河原の石回りを中心にして清流域の環境指標生物となるカワゲラ・ヘビトンボ等の幼生を探し、秋山川が清流であることを体験的に確認する。

(5) 体育館の体験ブース

生活科の授業支援で実践している内容を4年生向けにアレンジ。

① モルモット

モルモットの形態の観察とふれあい体験。

② ウズラ

ウズラの卵の模様を使用した化学実験と、模様の生態学的な意味について解説する。

③ は虫類

アオダイショウの生態観察とふれあい体験。

④ 心音

モルモットの心音を聴診、心拍と寿命の関係について解説する。

⑤ ハムスター

ハムスターの習性についての解説とふれあい体験。

⑥ 頭骨

イノシシ、オオアライクイ、ジャガー、バク、カピバラ等の動物の頭骨を用い、歯の形状と食性について解説する。

2)9月1日「千寿常東小学校」・9月2日「中島根小学校」・9月8日「西伊興小学校」・9月9日「平野小学校」

校舎内の体験ブース、川の体験ブース、そして体育館の体験ブースの内容は6月23日と同様である。「山の体験ブース」のみ「初秋でも可能な内容」に差し替えた。以下の通りである。

(1) 山側の体験ブース

①「白墨と生き物の不思議な関係」

チョークをベイトトラップに使用し、ダンゴムシがそれを食べることから、ダンゴムシは「甲殻類」であることを教える。

②「自然浄化の秘密・森の掃除屋」

腐肉をベイトトラップに使用し、シデムシ類等が集まることから、森の中には動物の死体や排泄物を処理する色々な昆虫が生息していて、その働きで自然はきれいに保たれていることを教える。

③「古代の蓮」

体験学習をするエリアには「オオガハス」がたくさん植えられている。その生命力の強さを教えるとともに、その葉を用い、ハスの葉の「超撥水効果」について実験、その表面構造がヨーグルトの蓋の裏に应用されていることから「生体模倣工学」について教える。

④「桜井隧道」

トンネルの前にたち、トンネルから吹き出す冷風を体験する。そして、地中の温度は気温に比して「夏は冷たく・冬は暖かい」ことを解説。さらに、この原理は省エネの冷暖房に应用されていることを教える。

⑤「桜井山からの景色」

地形と地形図を照らし合わせ、地形図の読み方、等高線の意味について教える。

⑥「山腹の鹿垣」

山腹に広がる耕作放棄地と、それを囲むトタン塀を見ながら、獣害

について解説、野生動物とせめぎあう里の農業について教える。

いることにある。

3) 9月20日「関原小学校」

(1) 山側の体験ブース

さらに日中の平均気温が低下、「白墨と生き物の不思議な関係」は「岩壁の湧水」に、「古代の蓮」は「杉と檜、里の山林物語」に差し替えた。他は同様である。

①「岩壁の湧水」

旧桜井小学校の校庭は、沢を埋め立てて造成された。沢の水源は校庭の北東の一角に今でも残っており、岩壁から水が染み出す様子が観察できる。そして、岩壁の上は森林である。それを題材に「森林の水涵養」について解説する。

②「杉と檜、里の山林物語」

校舎裏山の桜井山は、かつて植林事業が展開されていた。山肌の中腹には檜の林、谷合には杉の林が確認できる。檜と杉の原木を輪切りにして、手触り・匂いを体験してもらうとともに、年輪の読み方と樹木の育成には長い年月がかかることを教える。

5. 2016 年度に実施した体験学習

1) 6月23日「千寿小学校」、9月1日「千寿常東小学校」、9月8日「西伊興小学校」、9月20日「関原小学校」

雨天であったため「小雨プログラム」を実行した。したがって実施したのは、前述した体験ブースのうち「①山側の体験ブース」と「②-1. 校舎内3階の体験ブース」ならびに「②-2. 校舎内2階の体験ブース」である。

2) 9月2日「中島根小学校」

雨脚が朝から強く、全て屋内の「豪雨プログラム」を実行した。したがって実施したのは、前述した体験ブースのうち「②-1. 校舎内3階の体験ブース」と「②-2. 校舎内2階の体験ブース」、そして「体育館の体験ブース」である。

3) 9月9日「平野小学校」

2016年度では唯一「晴天プログラム」を実行した。したがって実施したのは、前述した体験ブースのうち「①山側の体験ブース」と「③「川」の体験ブース」である。

雨天であったため「小雨プログラム」を実行した。したがって実施したのは、前述した体験ブースのうち「①山側の体験ブース」と「②-1. 校舎内3階の体験ブース」ならびに「②-2. 校舎内2階の体験ブース」である。

6. 2016 年度の活動総括

1) プログラムの運用および安全管理の観点からの評価

「全天候型体験プログラム」の運用面における精度及び練度が高まっていることが窺える。

例えば、運用面においては、学生スタッフにおける全天候へのシミュレーション(学習)が効果的に図られていることや、(天候の変化に伴う)プログラムの変更時における教育支援姿勢の切り替えの迅速さやタスクの確認の的確さに見て取ることができるだろう。また、安全管理の面においては、(教員を含む)スタッフ間において児童の体調管理についての細やかな連絡や、安全確認の声掛けの徹底が図られて

2) 参加学生における「環境」理解の深まりに関する評価

学生が本実践に参加することが、学生スタッフ自身の「環境」への興味関心への拡大や、「環境」についての理解の深まりに対して、どの程度(どのような)効果的な影響をおぼしているか、より総合的に評価する手法を構築することが望ましいのではないかと。

例えば、テーマの題目(各ブース等のテーマ)への興味・関心のあり方が事前事後において(また年度をまたぐ場合は経年的な次元において)変容する様態について、より多角的に捉える視点を確保したい。自らの教育支援活動の経験と技能を振り返る視野を確保することが、次の教育支援活動やその他の学修や活動へ関わる有効な指標となりうるだろうからである。

他方、テーマの題目を自然科学的説明(科学・技術的/合理的な話法など)と人文社会科学的説明(神話・物語という話法など)との区別の上に理解し直したうえで、児童を対象とするテーマの題目の教育支援活動における説明の仕方(話し方)を捉え直すことも有意義であろう。学生自身の正課学修との関連を再考する機会を生み出すだろうからである。

6. 今後の展望

2017年度より、こども学科に幼少コースが設置され、小学校の教員養成が始まる。廃校を拠点とした体験プログラムについて、学習指導要領に照らし合わせ、小学校のカリキュラムにより一層適合させていくことが望まれる。フィールドの何を教材として取り上げ、そしてその教材を活かすためにどのような副教材が必要とされるのか、今後の課題である。そして、廃校を活用した環境教育支援を、小学校教員養成のための仕組みとして整備していきたい。

7. 参考文献

- 花園誠, 金子智恵理, 河合樹菜, 蛭田多美慧, 青木直樹, 榊原健太郎, 古瀬浩史 (2015). 「足立区の小学生を対象とした環境教育の実践と成果」. 『帝京科学大学紀要』, 11, pp201-213.
- 花園誠, 木村龍平, 青木直樹, 榊原健太郎, 古瀬浩史 (2015). 「足立区の小学校4年生を対象とした環境教育の実践と成果」. 『帝京科学大学教職指導研究』, 1(1), pp237-244.

夏休み親子教室の実践と成果

花園誠・大海由佳・藤井志帆・望月崇博・木村龍平・花園美樹（教育人間科学部 こども学科）

榎原健太郎・馬場千秋（総合教育センター）・岡本忠典（総務課 企画評価・地域連携室）

キーワード：体験学習・親子教室・大学開放

1. 親子教室の変遷

1) 第一期「親子科学教室」の展開(表1)

新設のアニマルサイエンス学科を中核とした活発な課外活動により校風が刷新されようとしていた2004年、「親子教室」の前身である第一回目の「親子科学教室」が開催された。この時、A講座として「ロボットづくり」が、B講座として「犬のしつけと動物の行動」が企画された。B講座担当のアニマルサイエンス学科教員は、教員主導ではなく、校風刷新の原動力である学生の総力を結集して「親子科学教室」を実施することを提案した。そしてリーダー格の学生は、本館棟2・3階の全教室を使用した「アニマル・さいえんす!?!『動物も人間も・・・仲間!』」を企画した。そこに担当教員の呼びかけに応じ、100名余の学生が参加、当初予定の1講座を「ペットの環境エンリッチメント」・「マウスの行動実験」(動物園研究)/「犬との交流」・「犬のクッキー作

り」(担当:ドッグトレーナー研究)/「AIBO ロボ登場」(担当:動物介在活動)/「乗馬疑似体験」(馬術)と拡充した。表1にこの2004年度(第一回目)から2012年度(第九回目)までの講座の変遷を示す。

2004年度は全て「インドア」の企画であったが、2005年度(第二回目)からは「アウトドア」の企画「自然体験」も加わった。担うは野生生物研究部、ビオトープ研究部、そして新設の環境教育研究部「風の子フヘスケ」である。「自然体験」は当時の環境教育研究部代表学生の発案により、平成2006年度(第三回目)からは「朝・昼・夜の自然体験」と実施の時間帯・内容ともに拡大し、今日に至る。2012年度(第九回)からはB講座「動物を知ろう」に含まれていた「初等理科教育法を開発・実践するためのブース『科学の世界』シリーズ」を、独立の1講座(講座名「科学に親しもう」)とした。

表1. 第一回(2004年)～第九回(2012年)の概要

年	講座名	対象	募集人数	内容	担当教員
2004	A:メディア・ロボットづくり	小4・5・6年 中学生	親子20組 20名	リモコン・ボクシングロボットの製作 サッカーロボットの製作	木村・山本
	B:アニマル・サイエンス	小学生全学年	定員なし	犬と交流・模擬乗馬・行動実験・環境エンリッチメント等	木村・山本 花園
2005	A:メディア・ロボットづくり	小学4年以上	40組	プログラミングロボットの製作	木村・山本
	B:アニマル・サイエンス	小学生全学年	50組	犬と交流・ネコの科学・小動物とのふれあい・クラフト等	花園
	C:自然体験	小学4年以上	20組	川遊び体験・溪流の水棲生物観察	花園
2006	A:メディア・ロボットづくり	小学4年以上	25組	6足ロボットを製作、サッカーに挑戦	山本・斉藤
	B:アニマル・サイエンス	小学生全学年	50組	犬と交流・小動物のふれあい・ヘビの科学・クラフト等	花園
	C:自然体験1.朝/2.昼/3.夜	小学4年以上	各5組	1.朝の自然観察/2.溪流の生物観察/3.夜の自然観察	花園
2007	A:電子工作入門	小学4年以上	25組	1.午前:電子キット工作/2.午後:レゴサイエンス	内田
	B:動物を知ろう	幼児～小学生	50組	犬と交流・小動物のふれあい・爬虫類の科学・クラフト等	花園
	C:自然体験1.朝/2.昼/3.夜	小学4年以上	各5組	1.野鳥・昆虫観察/2.溪流の生物観察/3.夜行生物観察	花園
	D:植物と遊ぶ	小学4年以上	10組	光合成を利用した葉のプリント・葉脈のしおりづくり	別府
2008	A:小さな科学者養成講座	小学4年以上	10組	1.午前:レゴサイエンス/2.午後:車輪型ロボット制御	内田
	B:動物を知ろう	幼児～小学生	50組	1.ふしぎな動物の世界(犬・小動物・爬虫類・昆虫類) 2.ふしぎ体験!科学の世界	花園
	C:自然体験1.朝/2.昼/3.夜	小学4年以上	各5組	1.野鳥・昆虫観察/2.溪流の生物観察/3.夜行生物観察	花園
	D:伝統的な植物細工	小学4年以上	10組	麦わら細工で作るホタル籠・動物	別府
2009	A:麦わら細工を楽しもう	小学4年以上	15組	麦わら細工で作るホタル籠・動物	別府
	B:動物を知ろう	幼児～小学生	50組	1.ふしぎな動物の世界(犬・小動物・爬虫類・昆虫類) 2.ふしぎ体験!科学の世界	花園
	C:自然体験1.朝/2.昼/3.夜	小学4年以上	各5組	1.昆虫観察/2.溪流の生物観察/3.夜行生物観察	小林・花園
	D:小さな科学者養成講座	小学4年以上	10組	1.午前:レゴサイエンス/2.午後:車輪型ロボット制御	内田
2010	A:麦わら細工を楽しもう	小学4年以上	15組	麦わら細工で作るホタル籠・動物	別府
	B:動物を知ろう	幼児～小学生	50組	犬と交流・小動物のふれあい・爬虫類の科学・クラフト等	花園

	C:自然体験1.朝/2.昼/3.夜 D:ペットボトルロケット	小学4年以上 小学4年以上	各5組 15組×2	1.昆虫観察/2.溪流の生物観察/3.夜行生物観察 空気圧で水を噴射し飛ぶロケットを作製	小林・花園 内田
2011	A:麦わら細工を楽しもう B:動物を知ろう C:自然体験1.朝/2.昼/3.夜 D:ペットボトルロケット	小学4年以上 幼児～小学生 小学4年以上 小学4年以上	15組 50組 各5組 15組×2	麦わら細工で作るホタル籠・動物 1.ふしぎな動物の世界(犬・小動物・爬虫類・昆虫類) 2.あそんで親しむ!科学の世界 1.昆虫観察/2.溪流の生物観察/3.夜行生物観察 空気圧で水を噴射し飛ぶロケットを作製	別府 花園 小林・花園 内田
2012 ※1	A:動物を知ろう B:自然体験1.朝/2.昼/3.夜 C:ペットボトルロケット D:科学に親しもう	小学4年以上 幼児～小学生 小学4年以上 小学4年以上	50組 各5組 15組×2 定員なし	犬と交流・行動実験・環境エンリッチメント・爬虫類観察 1.昆虫観察/2.ネイチャーゲーム/3.夜行生物観察 空気圧で水を噴射し飛ぶロケットを作製 液体窒素実験・浮沈子による浮力実験・顕微鏡で観察	花園 小林・花園 内田 花園

注)※1 2012年度の会場は秋山地区の廃校「旧桜井小学校」。

2) 第二期「親子科学教室」から「親子教室」へ (表2)

2013年、第10回目の開催年となった節目の年、当時の地域連携推進室長の発案により、「親子科学教室」から「科学」の二文字を外し、「親子教室」へと名称を変更した。この教室がスタートした当初、本学は理工系の単科大学であったが、2013年には3学部11学科と拡充、専任教員の専門も多様化した。『科学』の二文字を外して理系色を薄

め、人文科学分野の教員の参加を促し、講座を充実させる。」との意図があった。そして総合教育センターより2名の教員が参加。「カリグラフィカードを作ろう」と「手づくり楽器を作ろう」の2コースが加わった。そして、2014年には「LetitGoを英語で歌おう」が、2015年にはこども学科の音楽担当教員が企画した「音楽を楽しもう」が加わり、これまでの理科系一色から脱却した。

表2. 第十回(2013年)～第十二回(2015年)の概要

年	講座名	対象	募集人数	内容	担当教員
2013	A:動物を知ろう B:自然体験1.朝/2.昼/3.夜 C:カリグラフィカードを作ろう D:手づくり楽器を作ろう E:科学に親しもう	幼児～小学生 小・中学生 小・中学生 小・中学生 小・中学生	50組 各5組 10組×2 10組×2 定員なし	犬と交流・模擬乗馬・行動実験・環境エンリッチ 1.昆虫観察/2.ネイチャーゲーム/3.夜行生物観察 カード作りで学ぶ西洋習字 廃品で楽器を作り、みんなで合奏 液体窒素実験・浮沈子による浮力実験・顕微鏡で観察	花園 花園 馬場 榊原 花園
2014	A:生き物を知ろう B:自然体験1.朝/2.昼/3.夜 C1:カリグラフィカードを作ろう C2:LetitGoを英語で歌おう D:手づくり楽器を作ろう E:科学に親しもう	幼児～小学生 小・中学生 小・中学生 小・中学生 幼児～中学生 小・中学生	50組 各5組 10組 10組 10組 定員なし	犬と交流・模擬乗馬・行動実験・環境エンリッチ 1.昆虫観察/2.ネイチャーゲーム/3.夜行生物観察 カード作りで学ぶ西洋習字 映画のヒットソングを英語で合唱 廃品で楽器を作り、みんなで合奏 液体窒素実験・浮沈子による浮力実験・顕微鏡で観察	花園 花園 馬場 馬場 榊原 花園
2015	A:生き物を知ろう B:自然体験1.朝/2.昼/3.夜 C1:カリグラフィカードを作ろう C2:英語でディズニーソング D:手づくり楽器を作ろう E:科学に親しもう F:音楽を楽しもう	年長～小学生 小・中学生 小・中学生 年長～中学生 年長～中学生 年長～中学生 年少～小3	50組 各5組 10組 15組 10組 定員なし 10組	犬と交流・模擬乗馬・行動実験・環境エンリッチ 1.昆虫観察/2.ネイチャーゲーム/3.夜行生物観察 カード作りで学ぶ西洋習字 みんなが知っているディズニーソングを英語で歌う 廃品で楽器を作り、みんなで合奏 液体窒素実験・浮沈子による浮力実験・顕微鏡で観察 楽器・人形・歌などを用いたリトミック	花園 花園 馬場 馬場 榊原 花園 大海

2. 2016 年度の活動報告

1) 活動の概要(表 3)

この年、子ども学科より造形担当教員と体育担当教員が参加、造形担

当教員は「段ボール織りで作る My 草履」を、体育担当教員は「運動遊びでコミュニケーション」を企画、全 11 コースに拡充した(表 3)。

表 3. 2016 年度の概要

年	講座名	対象	募集人数	内容	担当教員
2016	A:生き物を知ろう B:自然体験 1. 朝/2. 昼/3. 夜 C1:カリグラフィカードを作ろう C2:英語で歌を歌おう D:手づくり楽器を作ろう E:科学に親しもう F:音楽のいろいろな表現を楽しみましょう G:段ボール織りで作る My 草履 H:運動遊びでコミュニケーション	年長～小学生 小・中学生 小・中学生 年長～中学生 年長～中学生 年長～中学生 年少～小 3 年長～小 6 年少～小 4	50 組 各 5 組 10 組 15 組 10 組 定員なし 10 組 10 組 15 組	犬と交流・模擬乗馬・行動実験・環境エンリッチ 1. 昆虫観察/2. ネイチャーゲーム/3. 夜行生物観察 カード作りで学ぶ西洋習字 みんなが知っているディズニーソングを英語で歌う 廃品で楽器を作り、みんなで合奏 液体窒素実験・浮沈子による浮力実験・顕微鏡で観察 楽器・人形・歌などを用いたリトミック 簡単に作れる段ボール織機で布草履作りを体験する 運動しながら親子でしか味わえないコミュニケーションを楽しむ	花園 花園 馬場 馬場 榊原 花園 大海 藤井 望月

2) 活動の成果

2)-1. 参加者の感想

体験学習の終了後、教育事務所スタッフより参加者(保護者と児童・生徒)全員に対してアンケートが実施された。「参

加してたのしかったこと」「初めてしたこと」「おどろいたこと」「うれしかったこと」などについて、感想を自由記述してもらった形式である。主な回答をコースごとに記す(表 4)。

表 4. 2016 年度の参加者の感想

コース	講座名	児童・生徒の感想	保護者の感想
A	生き物を知ろう	ドッグショーを体験したり、近くで見られたこと。犬とふれあえたこと。 一番楽しかったのは動物の塗り絵です。 スキニーギニアピッグ(ヘアーレスモルモット)を観察したり、触れたりしたこと。 ヤギに餌やりができて楽しかった。	ヘアーレスモルモットに初めて触れました。とても勉強になりました。時間が足りないくらいでした。 ドッグショーが楽しかったです。私も犬を飼っているので色々と勉強になりました。 学生さんとの交流も楽しかったです。
B	自然体験	(川のなかで)魚がたくさんいて、知らないものもよくわかりました。 セミの羽化を初めて見ました。	たくさんの大学生が説明を丁寧にしてくれたり、よく面倒もみてくれて楽しかったです。 セミの羽化を観察できたこと、初めて見る虫もたくさんいて楽しかったです。
C	英語で歌を歌おう	英語で歌ったり踊ったりできて楽しかったです。	
D	手づくり楽器を作ろう	楽器を作ってとても楽しかったです。	カズーやパチカなど身近なもので楽器が作れてよかった。
E	科学に親しもう	楽しかったことは「スライムづくり」です。 液体窒素を見て驚いた。 静電気の実験が面白かったです。	学生さんとの交流も楽しかった。 榊原先生が最後におっしゃったように「できない体験」も大切だなと思いました。
F	音楽のいろいろな表現を楽しみましょう	はじめて触る楽器があって楽しかったです。	学生さんとの交流も楽しかったです。
G	段ボール織りで作る My 草履	上手にかわいく作れてよかったです。	布草履づくりはとても難しく、子供と片一方ずつつくりましたが、大きさがだいぶ違っていました。親切に最後まで面倒を見てくださって、思いでに残る作品になりました。
H	運動遊びでコミュニケーション	親子で楽しく運動ができてよかったです。 サッカーが楽しかった。今度は勝ちたいです。	普段親子で遊ぶ時間がないので、一緒に体を動かすことができたり、楽しそうな子供の笑顔が見られたりしてよかったです。

寄せられた感想を見ると、体験した内容に加え、「学生との交流」を「楽しかった」とあげている保護者が多かった。また、アンケート回答者のほぼ全員が「また来年も参加したい」と回答していた。

「新しく開いてほしい、してみたい『親子教室』があったら教えてください」という質問に対しては、「泳ぎの練習」「ヨガ教室」などの運動系、「夜の天体観測」「液体を使った実験」などの理科系、「ペーパークラフト」「木工細工」などの造形系、「馬とのふれあい体験」「乗馬

体験」などの動物介在系の体験教室についてのリクエストがあげられていた。

その他、保護者からの意見としては「幼稚園児が参加できる講座を増やしてほしい」との要望や、「少人数のお勉強教室があったらうれしい。」などの声が寄せられた。新しく体験したい「親子教室」の内容を企画していくことに加え、多様な親子のニーズにどのように応えていくか、今後の課題としたい。

NHK 環境キャンペーンイベントへの出展を通じた社会貢献活動の報告

榊原健太郎（総合教育センター）

石木めぐみ・佐島たみえ・浅見晴香・藤咲舞（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

花園誠（教育人間科学部 こども学科）

キーワード：社会貢献活動、いのちと環境、ライフスタイル、社会的還元、多世代交流

1. はじめに

本学の地域連携推進センターでは、2016年度の活動の一つとして、NHK 主催イベント「渋谷 DE どーも 2016」への出展を通じた社会貢献活動を実施した。本報告では、本活動の概要や出展内容などについて報告する。

2. 活動の概要

2.1 活動の期日

本学の地域連携推進センターの社会貢献プロジェクト（社会貢献関連分野）では、2016年5月3日（火・祝）・4日（水・祝）・5日（木・祝）に東京・渋谷のNHK 放送センターで開催されたNHK 主催イベント「渋谷 DE どーも 2016」における「体験！エコゾーン」と称する出展エリア（正面玄関前広場）にて、「帝京科学大学 動物ふれあい教室」を出展した。本学は、この期間のうち、5月3日及び同4日に出展した。出展時間は両日ともに10:00 開始、17:00 終了であった。

2.2 イベントの概要など

「渋谷 DE どーも 2016」は、NHK 主催による一般来場者向けの参加型イベントである。（なお、「渋谷 DE どーも」の初回開催は2005年である。）

子どもから大人まで多世代で楽しめる公共放送のテーマパークイベントとして構成されているが、NHK の人気番組等の各種特設ショーをはじめ、環境キャンペーンの一環として環境について学べるワークショップ（「体験！エコゾーン」）の展開などに特徴があり、例年、生放送にてイベントの魅力などが放映もされている。（参考：図1）

2.3 活動の主体

2016 年度の本活動の主体は千住・上野原両キャンパスの動物介在教育研究部及びドッグトレーナー研究部の部員たちを中心とする学生たち（26名）であった。なお、出展内容の一部については、関係する卒業生（社会人）（3名）の協力や助言を得ることができた。

3. 活動の経緯

本学の同イベント「体験！エコゾーン」エリアへの出展は、（NHK 環境キャンペーンイベント「ECO パーク」への同趣旨の出展を含め）今回で5回目を数え、本センターにおける継続性のある活動の一つとなっている。

わたしたちの生活における「環境やいのち」との関わりについての気づきやヒントを得ること、あるいは（特に、東日本大震災以降において）「ライフスタイル」を見直すきっかけづくりなどを大切にする同エリアの趣旨や展開は、本センター並びに参画学生一同にとっても、特に日頃の教育・研究、あるいは学修や地域活動等のあり方やスタイ

ルを見直しつつ、一般来場者へ向けてそうした大学の活動内容や知的資源の一部を社会的に還元する貴重な機会となってきた。



図1. イベント会場遠景

4. 出展内容の概要

4.1 出展のコンセプト

イベント公式案内に示した本出展のコンセプトは、「「どうぶつ」のいのちに触れ、いのちやそれを取りまく環境の大切さをたのしみながら学びませんか」である。

また、「出展を通して、わたしたちが身の回りのいのち（生きものたち）と取り結ぶ関係（環境）や人間のライフスタイルなどを見つめ直すきっかけとなる出会いの場を来場した方々と共に分かち合いたい、とのちいさな願いもこれに添えた。

4.2 出展内容の細目

出展内容の細目は、動物たちとのふれあい（ハムスター、モルモット、カイコ、ドッグほか）、ドッグショー（以上、5月3日実施）、クラフト（繭クラフト、どうぶつ塗り絵、どうぶつお面づくりなど）（以上5月4日実施）、及びいのち・環境・教育といったコンセプトに関わる、帝京科学大学の教育・研究・地域連携活動の一般来場者向けの紹介や活動照会対応（以上、両日実施）などであった。

出展のタイムテーブルについては、10:00 開始、17:00 終了のイベント開催時間において、両日とも、基本的に30分ごとに出展内容を展開する形式（ハムスター⇒モルモット⇒大学紹介等⇒カイコ⇒ドッグ（5月3日）、繭クラフト⇒どうぶつ塗り絵⇒大学紹介等⇒どうぶつお面づくり（5月4日））にて実施した。

4.3 出展の企画・運営

出展に関わる企画・運営・管理などについては、出展各期日のタイムテーブルや学生スタッフの担当シフト等の作成を含めて、参画した本学学生スタッフにおいて全て分担した。特に、現場における時間管

理や（主催者サイドとの連絡・報告を含む）状況判断、及び学生スタッフへの指示出しなどを含むマネジメントについては、企画の責任者である学生4名が担当した。なお、教員が従事した役割は、出展全体の責任・監修及び出展現場の安全管理などが主なものであった。

以下の図（図2 - 図6）は本出展の様子的一端を示したものである。また、大学のWebサイトには（例年の報告と合せて）活動報告や写真が掲載されている。ご参考頂ければ幸いである。



図2. 一般来場者向けに帝京科学大学を紹介する参画学生



図3. ドッグショーの一コマ



図4. ハムスター、カイク等の動物ふれあいの様子



図5. どうぶつクラフトの風景



図6. 来場したこどもたちへの声かけや交流の様子

5. 出展を終えて

5.1 イベントの側面から

主催者発表によると、イベント全体への来場者は3日間で6万2千人超を数え、（本学が出展した）3日・4日の来場者に限っても3万8千人を超えた。このような来場者数については、一般来場者の方々の本イベントへの関心や有効な宣伝による効果はもちろんのこと、主催者の優れた運営力などの条件なくして成立しないものである。結果として本学は、一般来場者に対して本学をアピールする貴重な機会を得ていることは確かであろう。（なお、来場者から主催者へ回答されたイベントや個別出展についてのアンケート結果等については、帰属に関する点などを考慮して本報告では直截には取扱わない。）

5.2 参画学生から見た成果と課題の側面から

参画した学生が示した成果と課題について、その概要を以下に示す（括弧内は、学年と所属キャンパス）。

【成果／良かった点】

- (1)入部してまもなく参加した活動が「渋谷DE どーも」だったので心配だった。しかし、千住・上野原両キャンパスの部員が多数参加していて、次第にうちとけられてよかった。（千住・1年）
- (2)小学校に訪問する地域活動と比べ、渋谷のNHKでの一般向けの地域活動はひと味違う雰囲気、面白みがあった。（2年・上野原）
- (3)休憩時間を利用して他の出展ブースやNHK内のショールームなどを廻ることができ、イベント全体を楽しむこともできてよかった。（2年・千住）
- (4)NHK職員の方々をはじめ、卒業生の先輩を含めたさまざまな社会

人の方々とイベントを通して一緒に仕事をするという経験ができた。自信がついたとおもう。(3年・上野原)

【課題／改善の余地がある点】

- (1)動物について詳しい来場者からの質問に対して、まったく答えられなかった。しっかり勉強しなければいけない。(1年・千住)
- (2)来場者からトイレの場所など訊かれてもすぐに答えられなかった。出展者はイベント主催側のスタッフであるという意識が足りなかったと思う。(2年・上野原)
- (3)長蛇の列が出来て来場者を待たせる場合に、順番を守れない小学生が生じてしまった。しっかりとした態度で整列を誘導しなければならぬだろう。(2年・千住)
- (4)気温が25度を超える場合など、動物たちの退避場所(冷暖房室)を確保したい。(3年・上野原)
- (5)子どもが動物のふれあいあいの体験を望んでいると見受けられる一方で、その保護者が体験を止めさせようとする(別の場所へ移動を促す)ケースが何度かあった。ハンドラーとして、このようなケースへの対応は難しい。(3年・上野原)

6. 活動総括

6.1 出展の企画・運営の観点からの評価

「渋谷 DE ども」における「体験！エコゾーン」への出展については、一般来場者向けの出展として、企画・運営面における精度や練度が高まっていることが窺える。ここには、過去5回(5ヵ年)における同出展の成果と改善点についての継承と発展を見て取ることができる。例えば、主催者のコンセプトと本出展のそれとのあいだにある「環境やいのち」や「ライフスタイル」などを通じた調和や共鳴関係の形成、あるいは、現役の参画学生と本学の卒業生(社会人)とのあいだに生じた世代をこえる協力関係などは、その一展開であると見てよいだろう。

他方、課題もある。一般来場者向けの出展の現場においては、例えば、子ども(幼児・小学生など)に同伴する保護者・関係者などがいることを配慮した対応やコミュニケーションに通じる必要もあるのだ。学生たちは、日頃、もう一つの文脈において小学校での教育支援活動のとしての動物介在教育活動などの経験を積んでいるが、そこで求められるものとは異なるコミュニケーションの広がり求められるというところであろう。上掲の「【課題／改善の余地がある点】」の「(5)」が、この課題の所在を指摘していたと思う。

6.2 学生間の交流の観点からの評価

学生間の交流の観点から本活動を評価することができる。このことは、同じく上掲の「【成果／良かった点】」の「(1)」が示すように、きわめてシンプルに述べることができるだろう。つまり、千住・上野原両キャンパスの部員(学生)同士が交流したり、意思疎通したり、関係を築いたりすることを必要とするとき、本活動は活用し得るものがあるということである。開催地が「渋谷」であるという地の利の面ももちろんあるが、開催の時期が「年度始めの連休」であることが学生同士や部員間における関係づくりには好都合にはたらく面もある。

あるいは、現活動の一部がそうであるように、部活動同士の交流や所属キャンパス・学科・学年という枠を超えた、学生間の関係づくり

に資する活動として本活動を展望することもできるのではないだろうか。

いずれにせよ、本活動はこのような総括や報告をふまえ、引き続きより優れた水準の社会貢献プログラムや活動を通して、本学の知的資源を社会的に還元できるよう努めてゆくことが求められていると考える。

謝辞

イベント主催者であるNHKの関係者の皆様、本活動の推進にご協力・ご助言くださった皆様へ、この場をお借りして御礼申し上げます。

資料

平成28年度地域連携推進センター構成員一覧

地域連携推進センター長	花園誠
-------------	-----

	コーディネーター	上野原・山梨市			コーディネーター	千住		
		氏名	学部	学科		氏名	学部	学科
教育連携・学生参画プロジェクト	○	並木美砂子	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	○	濱田淳	医療科学部	東京柔道整復学科
		佐藤光浩	医療科学部	柔道整復学科<山梨市>		杉本信	こども学部	幼児保育学科
		舟喜晶子	医療科学部	柔道整復学科<上野原>		小泉亜希子	生命環境学部	アニマルサイエンス学科
						東克己	生命環境学部	生命科学科
産・官・学等の連携プロジェクト	○	石井孝弘	医療科学部	作業療法学科	○	榎原健太郎	総合教育センター	
		森恭一	生命環境学部	アニマルサイエンス学科		江田慧子	こども学部	学校教育学科
		和田龍一	生命環境学部	自然環境学科		眞鍋克博	医療科学部	東京理療法学科
						加隈良枝	生命環境学部	アニマルサイエンス学科
社会貢献プロジェクト	○	小川家資	生命環境学部	アニマルサイエンス学科	○	岡村千鶴	医療科学部	看護学科
		田中和哉	医療科学部	理学療法学科		橋本慎治	生命環境学部	自然環境学科
		吉川和幸	こども学部	こども学科		宮下智	医療科学部	医療福祉学科
		岩瀬礼子	生命環境学部	生命科学科				

事務	上野原事務室長	村田正一
	管理係長	山口敬美

事務	企画評価・地域連携推進室長		岡本忠典
	地域連携係		畑山友梨
			佐藤仁紀

平成28年度 地域連携推進センター予算

大項目	中項目	小項目(活動名)
A 教育連携・学生参画プロジェクト	(1)教育連携プロジェクト	『羽村動物園 動物縁日(都内)』
		『夏休み親子教室』
		『科学の祭典(甲府)』
	(2)学生参画プロジェクト	『多摩動物公園遠足支援』
		『帝京めぐみ幼稚園(幡ヶ谷)』
	学生の課外活動活用	『学生の地域連携活動助成』
	動物維持費	『都市農業公園動物維持費』
		『上野原C動物維持費』
	都市農業公園環境整備	『都市農業公園環境整備費(動物関係除く)』
B 産学官等の連携プロジェクト	(1)地域社会連携プロジェクト	『地域乗馬活動、障害児乗馬活動支援』
	(2)地域産業連携プロジェクト (教職員の地域連携活動助成)	『共同開発商品・サービス』
		『受託研究共同研究』
		『特許ビジネス推進』
	(3)地域活性化プロジェクト	『上野原活性化事業①アニマルセラピー事業』
		『上野原活性化事業②環境教育事業』
		『情報配信』
	計画資料・実践記録・発表資料 印刷製本費、消耗品	『前年度活動記録要旨印刷』
C 社会貢献プロジェクト	(1)学生の社会貢献プロジェクト	『地域の教育支援事業』
	(2)教員の社会貢献プロジェクト	『NHK 渋谷DEどーも出展』
		『子育てプレイルーム事業』
	(3)大学の社会貢献プロジェクト	『障害者乗馬会』
		『ふれあいの日』
		『動物介在教育アドバイザー講習会』
		『ペット同行避難訓練』
D.国際化貢献プロジェクト	(1)国際化教育プロジェクト	『TEIKA English Day』
	(2)国際化産業プロジェクト	『地域産業国際化支援』
E 運営経費		『通信連絡費』
F 予備費		『予備費』

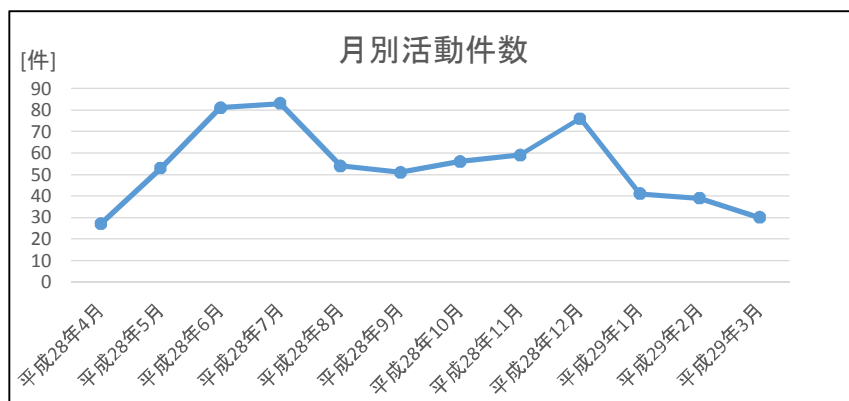
G 足立区教育連携事業		①動物ふれあい教室15回
		②小中学生を対象とした自然体験活動7回
		③小学生の大学生体験1回
		④中学生の大学生体験2回

合計	21,620,000
----	------------

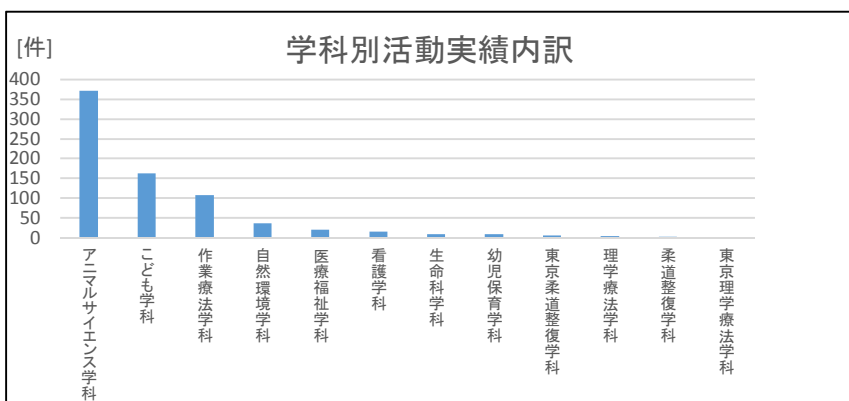
平成28年度共同研究・協定書取り交わし機関一覧

契約年度	摘要	契約先	本学担当教員(敬称略)、窓口
2016	共同研究契約	サントピア	横山草光、永沼充、木村龍平
2016	保育支援研究契約書	上野原市	木村龍平
2016	都市農業公園の鍵の借用について	アニマルシップ	帝京科学大学
2016	足立区教育委員会との連携事業「ふれあい動物教室」に係わる動物の飼育管理業務委託契約(平成28年度)	アニマルシップ	帝京科学大学
2016	委託契約書	足立区教育委員会	帝京科学大学
2016	旧桜井小学校使用に関する協定書	上野原市教育委員会	帝京科学大学
2016	建物使用貸借契約書	上野原市	帝京科学大学
2016	地域密着型介護老人福祉施設桜の里と帝京科学大学の高齢者施設訪問活動に関する総合提携協定書	桜の里	帝京科学大学
2016	契約書	ペティオ(旧・ヤマヒサ)	大辻一也
2016	相模原地域活性化プロジェクトに関する総合提携協定書	SMM企画、相模原商工会議所	帝京科学大学

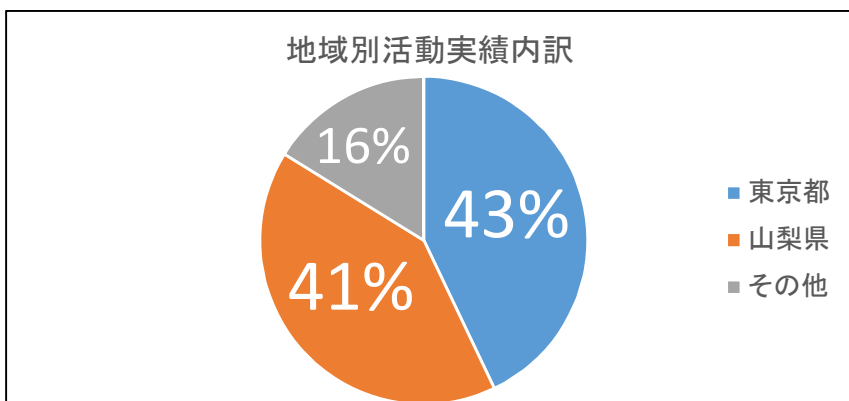
平成28年度地域連携推進センター活動統計



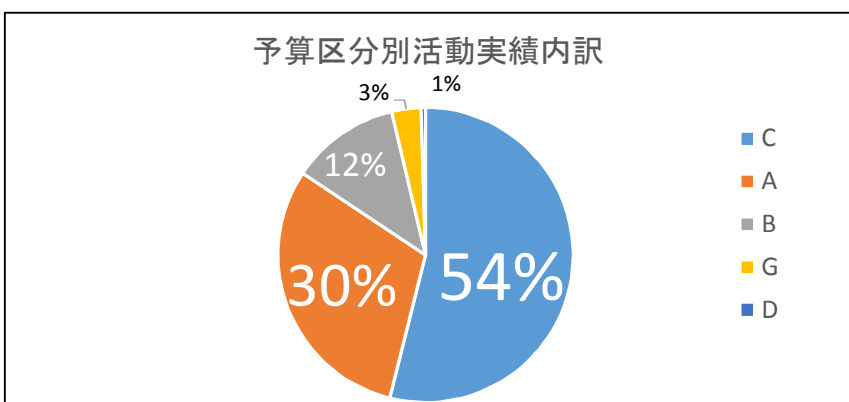
活動月	件数
平成28年4月	27
平成28年5月	53
平成28年6月	81
平成28年7月	83
平成28年8月	54
平成28年9月	51
平成28年10月	56
平成28年11月	59
平成28年12月	76
平成29年1月	41
平成29年2月	39
平成29年3月	30
総計	650



学科	件数
アニマルサイエンス学科	371
こども学科	162
作業療法学科	107
自然環境学科	36
医療福祉学科	19
看護学科	14
生命科学科	9
幼児保育学科	8
東京柔道整復学科	5
理学療法学科	3
柔道整復学科	1
東京理学療法学科	0
総計	735



場所	件数
東京都	279
山梨県	266
その他	105
総計	650



区分	回数
C	338
A	191
B	75
G	20
D	3
総計	627

- ＜予算区分＞
- A: 教育連携・学生参画プロジェクト
 - B: 産学官等の連携プロジェクト
 - C: 社会貢献プロジェクト
 - D: 国際化貢献プロジェクト
 - E: 運営経費
 - F: 予備費
 - G: 足立区教育連携事業
(足立区教育委員会助成事業)
 - ①ふれあい動物教室
 - ②大学遠足
 - ③夢の体験教室
 - ④体験！一日大学生

活動名別実施回数一覧

活動名	回数
ふれあい動物教室及び飼育体験支援	116
地域乗馬活動、障害児乗馬活動支援	50
野良猫調査隊	50
山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	47
児童デイサービスボランティア活動	31
金沢動物園ボランティア	29
上野原活性化事業①アニマルセラピー事業	27
子育て支援活動	18
学習支援活動	15
多摩動物公園おえかきっす！	12
上野原自然探検隊	11
地域連携を中心としたゼミナール活動	11
かいこや(上野原認知症カフェ)	10
せんじゅカフェ(認知症カフェ)	9
ふれあいの日	9
園行事体験活動	8
保育体験活動	7
七生特別支援学校 発達支援	6
高齢者施設における動物ふれあい活動	5
大学遠足	5
学習指導支援	4
子どもの生活の質向上有志の会	4
地域コミュニティ活動体験	4
特別支援ケース会議	4
特別支援学校における感覚統合勉強会	4
認知症カフェ会議(上野原市)	4
～食べて守る生物多様性～ オオルリジミとあか牛の秘密の関係	3
ロボット介在活動	3
介護初任者研修	3
関東作業研究会	3
桂川フェスティバル実行委員会	3
障害者支援施設イベントボランティア	3
上野原アドベンチャー	3
東日本大震災地域支援	3
特別支援学校 地域自閉症協会事業	3
特別支援学校外部専門家による夏季集中支援	3
特別支援学校外部専門家による支援	3
都市農業公園動物ふれあい	3
山梨県立富士湧水の里水族館 移動水族館補助	3
NHK渋谷DEどーも	2
いきいき百歳体操	2
うえのはら市民討議会	2
ロールプレイング	2
愛犬の健康診断	2
科学の祭典	2
県民カレッジ	2
公開研究会 会議	2
高齢者施設むけ動物ふれあい活動	2
子どもの生活の質向上有志の会(夏祭り)	2
飼育体験	2
児童観察	2
障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」	2
障害支援区分認定審査会	2
乗馬会	2
体験!!一日大学生	2
談合坂SAふれあい活動	2
中学生への生と性の教育	2
都市農業公園 桜まつり	2
都市農業公園収穫祭	2
動物・ロボット介在保育	2
日本大学病院看護師研修	2
認知症サポーター養成講座	2
幼児を対象とした造形ワークショップ	2
「明日の風」夏休み親子教室	1
6大学リレーイベント	1
カレー甲子園	1
ことぶき勸学院「若者との交流」	1

活動名	回数
こどもトピックス	1
タートルマラソン	1
のびのびプレイデイ	1
フレンドリーマラソン	1
ベット同行避難訓練	1
みんなのひろば おひさま 勉強会	1
わんフェス	1
羽村市動物公園ふれあい緑日	1
夏休み自由研究プロジェクト 山梨県立富士湧水の里水族館 移動水族館補助	1
街の保健室	1
学習支援の付帯活動(クリスマス昼食会)	1
環境保全活動の課題～人材・資金・ネットワーク～開催	1
宮城県作業療法士会 市民公開講座	1
教員の社会貢献プロジェクト「地域の清掃・ゴミ拾い」	1
現代の子どものゲームプレイ状況とその家庭環境要因の検討	1
現代の保護者の名付けに見る教育観の検討	1
江戸川区外部専門家による支援	1
国営アルプスあづみの公園もりの楽校	1
山梨県感覚統合勉強会	1
子どものためのクリスマスコンサート	1
子育て支援活動 クリスマス会	1
私立幼稚園教職員研究会懇談	1
児童養護施設の教育支援	1
七生特別支援学校 公開研究会	1
秋山ふるさと祭り	1
障害者支援施設春祭りボランティア	1
上野原市地域ケア会議	1
植栽イベント	1
神奈川県公立幼稚園教員研修会	1
生活習慣病関連講演会	1
盛岡市特別支援学校教員研修会	1
西多摩リハビリテーション研修会	1
足立区福祉施設指定管理者選定審査 現地視察	1
足立区福祉施設指定管理者選定審査会(足立区長諮問機関)	1
多摩動物公園遠足	1
体育館レク活動	1
大月東小学校大学遠足	1
第1回帝京科学大学こども学科 表現発表会	1
ふれあいキャンパスDay	1
地球環境フェア2016	1
中学生への性感染症予防教育	1
長野県Sing with Butterfly 夏の信州 自然体験キャンプ打ち合わせ会議	1
長野県文化・芸術・スポーツ団体新春会への参加	1
帝京科学大学presents「カブラであそぼう！」	1
帝京科学大学presents「スライム&アクセサリーづくり体験」	1
帝京科学大学presents「ふれあい歌あそび」	1
帝京科学大学presents「ボール入れ遊び」	1
帝京科学大学presents「絵本の読み聞かせと製作遊び」	1
帝京科学大学presents「魚つり大会」	1
帝京科学大学presents子育て講座「知っておくと嬉しい小学校で習う漢字基礎知識」(大人対象)	1
島田小学校遠足	1
特別支援教育 教員研修会	1
特別支援教育全体会議	1
脳活性化体操講義	1
発達障害の理解 研修会	1
富士湧水の里水族館	1
保育体験活動(動物・ロボット介在保育)	1
夢の体験教室	1
薬と健康の週間「薬物乱用防止キャンペーン」	1
薬物の乱用防止に関する講習会	1
薬物乱用防止教育検討会	1

連携機関一覧(一部抜粋)

連携機関
abn長野朝日放送
NEXCO中日本
NHK
NPO法人EPO
NPO法人さいはら
NPO法人地域ささえあい虹の会
NTT
あだち動物共生ネットワーク
アロマセラピー講師
ギャラクシティ
ことぶき勸学院
こども動物教室アニマルシップ
コモアしおつ3丁目集会所
デイサービスセンターほたる
デイサービスまゐむ
パイオニアキッズつつじヶ丘園
ホースパラダイス群馬
ミヤマシジミ研究会
ミヤマ株式会社
伊那市
羽村市動物公園
越谷市立大袋東小学校
横浜市立金沢動物園
河北総合病院
学校法人リズム学園恵庭幼稚園
宮城県作業療法士会
県立川越特別支援学校
江戸川区教育委員会
甲府支援学校
荒川区立第五中学校
国営アルプスあづみの公園(安曇野オオルリシジミ保護対策会議)
国分寺市福祉保健部
埼玉県自閉症協会
埼玉県立総合教育センター
山梨県コンソーシアム
山梨県私学教育振興会幼稚園部
山梨県立科学博物館
山梨県立精神保健福祉センター
山梨県立笛吹高等学校
山梨県立富士湧水の里水族館
私立上野原幼稚園
社会福祉法人かながわ黎明会くりのみ学園
社会福祉法人さつきの会藤野さつき学園
社会福祉法人ラファエル会藤野薫風
社会福祉法人調布白雲福祉会
社会福祉法人唐池学園
社会福祉法人宝山寮
社会福祉法人緑水会
秋山温泉
秋山青年会
獣医師会
上野原CATV
上野原ライオンズクラブ
上野原市(長寿健康課、福祉課、保険課)
上野原市NPOさいはら
上野原市立巖こども園
上野原市社会福祉協議会
上野原市母子寡婦福祉連合会
上野原市立小学校(上野原、上野原西、島田、秋山)
上野原市立沢松幼稚園
上野原日本青年会議所
上野原福祉作業所
上野原市立保育所(上野原第一、上野原第二、島田)
信州生物多様性ネットきずな
信州豊かな環境づくり県民会議
神奈川県教育委員会
盛岡市教育委員会

連携機関
西多摩リハビリテーション研修会
笛吹市立石和第五保育所
千住桜木町内会
千住地域公営団地自治会
千住地域自治会
千住地域町内会・自治会・商店街・社会福祉法人・NPO法人
相模原市商工会
相模原市立ふじの幼稚園
足立区(シティプロモーション課、福祉管理課)
足立区教育委員会
足立区社会福祉協議会
足立区生物園
足立区地域包括支援センター千住本町
足立区役所
足立区薬剤師会
足立区陸上競技協会
足立区立小学校(興本、栗原、江北、西伊興、西新井第二、中川北、東伊興)
足立区立竹の塚中学校
大月市立大月東小学校
大田区立志茂田中学校
長野県
帝京めぐみ幼稚園
都市農業公園
都立口腔センター
都立七生特別支援学校
東京都
東京都立東大和南高等学校
特別養護老人ホームサントピア
特別養護老人ホーム桜の里
南箕輪村
日本クレジット協会
日本タートル協会
日本感覚統合学会
日本自然保護協会
日本大学病院
日本典礼
富士、東部教育事務所
富士湧水の里水族館
鄙の会

平成28年度地域連携活動記録表

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
4/3	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名		石井孝弘	作業療法学科
4/3	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バクウイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜国立 金沢動物園	横浜国立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
4/5	子育て支援活動	「子育てブレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	8名	0名		木村龍平	こども学科
4/8	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園	在所児の 人数	18名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
4/9	飼育体験支援	子供向けの動物モチーフ工作のブースを運営	都市農業公園 こども動物教室 アニマルシブ	都市農業公園	140名	7名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
4/9	上野原自然探検隊	説明会・自己紹介・アイスブレイク・ハイキング	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
4/10	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	1名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
4/10	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター	93名	13名	うまセンター 委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
4/10	かいこや (上野原認知症カフェ)	認知症の方ご本人や、家族、地域住民や専門家が気軽に集まり、情報交換をするカフェを実施 認知症についての講義	上野原市 NPOさいはら	羽置きの里 ひりゅう館	3名	5名	Playing ココベリ	小橋一雄 近藤知子	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
4/10	都市農業公園 桜まつり	子供向けの動物モチーフ工作のブースを運営	都市農業公園 こども動物教室 アニマルシブ	都市農業公園	230名	9名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
4/12	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園				花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
4/16	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
4/16	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	西伊興小学生	84名	42名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
4/17	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
4/17	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
4/17	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
4/18	地域コミュニティ 活動体験	イベント企画会議	上野原 ライオンズクラブ 上野原市役所	上野原市役所		4名	大学祭 実行委員会 動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科 生命科学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
4/22	特別支援学校 外部専門家による 支援	知的障害児の障害アセスメントと教員指導	都立 七生特別 支援学校	東京都日野市	障害児 3名 教員			石井孝弘	作業療法学科
4/23	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科	病院 スタッフ 10名	1名	Playing	石井孝弘	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
4/24	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科	障害児 3名	1名	Playing	石井孝弘	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
4/24	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者に対するボランティア活動	上野原市	上野原市立 第1保育所	高齢者 2名	5名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
4/24	ロボット介在活動		特別養護老人 ホーム 「サントピア」	特別養護 老人ホーム 「サントピア」	入居 高齢者 30名	上2年 17名		木村龍平	こども学科
4/24	障害者支援施設 春祭りボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人 ラファエル会 藤野薫風	社会福祉法人 ラファエル会 藤野薫風		上4年 1名 2年 3名		吉川和幸	こども学科
4/25	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域 領域包括支援 センター千住本町 足立区薬剤師会	千住キャンパス 3号館	地域住民 30名	看護 学科 5名	看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科 医療福祉学科
4/26	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市	障害児 2名 スタッフ 15名	2名	Playing	石井孝弘	作業療法学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
4/26	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネット環境を通じてケース会議を行う	学校法人 リズム学園 恵庭幼稚園	学内 (教員研究室)	1名			吉川和幸	こども学科
4/26	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	10名	上2年 4名		木村龍平	こども学科
5/1	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、員毅工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
5/1	教員の 社会貢献プロジェクト 「地域の清掃・ゴミ拾い」	秋山の県道沿いの不法投棄粗大ごみの回収	秋山青年会	旧秋山村	30名	10名	動物介在 教育研究部	榊原健太郎 花園誠	アニマルサイエンス学科
5/1	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクケイズ、オリンピックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5/1	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	犬にはドッグダンスを披露してもらい、入居者さんがダンス場所を学生と囲む形で盛り鑑賞した。 フラフープを入居者さんに持ってもらい、その間を犬が飛ぶなど、参加型のダンスで盛りあげた。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	16名	動物介在 活動部 動物介在 教育研究部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
5/3	NHK渋谷DEども	動物のいのちに触れ、いのちやそれとよりまぐ環境の大切さを楽しみながら学んでもらう。	NHK	NHK放送センター内 特設会場	来場者	24名	動物介在 教育研究部	榊原健太郎 花園誠	アニマルサイエンス学科 総合教育センター
5/4	NHK渋谷DEども	動物のいのちに触れ、いのちやそれとよりまぐ環境の大切さを楽しみながら学んでもらう。	NHK	NHK放送センター内 特設会場	来場者	24名	動物介在 教育研究部	榊原健太郎 花園誠	アニマルサイエンス学科 総合教育センター

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
5/7	ロールプレイング	小動物を用いた動物介在教育を実施(練習会)		帝京科学大学 千住キャンパス 2号館		28名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/7	上野原自然探検隊	ハイキング・ネイチャージャーゲーム・自由遊び	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/8	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	3名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
5/10	子育て支援活動	「子育てブレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	0名	上2年 10名		木村龍平	こども学科
5/10	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園	在所児の 人数	27名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/10	地域コミュニティ活動体験	イベント企画会議	上野原 ライオンズクラブ 上野原市役所	上野原市役所		4名	大学祭 実行委員会 動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科 生命科学学科
5/11	日本大学病院看護師研修	同大学病院の看護研究のための研修会講師	日本大学病院	日本大学 病院研修室	看護師 40名			武政奈保子 野田義和	看護学科
5/12	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所 福祉課	第1/第2/上野原 幼稚園 蔵こども園	在所児の 人数	上1年 28名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
5/12	多摩動物公園遠足	上野原小2年生と多摩動物公園内を、学生が用意したクイズ等を楽しみながらまわる	上野原市立 上野原小学校	多摩動物公園	68名	40名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/13	特別支援学校 外部専門家による 支援	知的障害児の障害アセスメントと教員指導	都立 七生特別 支援学校	東京都日野市	障害児 3名 教員			石井孝弘	作業療法学科
5/14	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
5/14	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	寺地小学校	54名	27名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/14	金沢動物園ボランティア	ユーカリの葉っぱスタンプ	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	6名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5/15	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
5/15	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
5/15	地域コミュニティ 活動体験	上野原市内の地域イベントに参加し、イベント運営手伝い、舞台発表、動物体験、ロボット体験ブースの運営を行う。	上野原 ライオンズクラブ 上野原市役所	桂川河川敷	来場者 約1万人	上2年 37名 1年 34名		花園誠 木村龍平 大海由佳	こども学科
5/15	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクウイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
5/16	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
5/16	地域コミュニティ 活動体験	イベント後片付け	上野原 ライオンズクラブ 上野原市役所	桂川河川敷		20名	大学祭 実行委員会 動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
5/17	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	9名	上2年 8名		木村龍平	こども学科
5/17	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所	15名	上4年 6名		木村龍平	こども学科
5/18	山梨県感覚統合勉強会	山梨県内特別支援学校、小学校、児童発達支援施設、保護者対象の学習会	甲府支援学校	甲府 支援学校	40名			石井孝弘	作業療法学科
5/18	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	4名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
5/19	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所 福祉課	第1/第2/島田保育所 上野原幼稚園 蔵こども園	在所児の人数	上1年 32名		木村龍平	こども学科
5/19	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	打ち合わせ	足立区	西新井第二小学校		2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
5/20	江戸川区外部専門家による支援	発達障害児の障害アセスメントと保護者支援、教員指導	江戸川区 教育委員会	下鎌田小学校	児童2名			石井孝弘	作業療法学科
5/20	飼育体験	飼育体験をするにあたって子どもたちにグループワークをしてもらい動物の命の扱いについて考えてもらう	上野原市立 上野原小学校	上野原小学校	68名	18名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/20	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	8名	動物介在活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
5/21	金沢動物園ボランティア	ユーカリの葉っぱスタンプ	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	6名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5/22	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
5/23	上野原市地域ケア会議	多職種連携について協議	上野原市役所	上野原市役所	16名			花園誠	こども学科
5/24	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	0名	上2年 8名		木村龍平	こども学科
5/24	脳活性化体操講義	青梅市にあるデイサービスにて、昨今の脳機能活性化の体操を紹介し、実演した。	デイサービス センターほたる	デイサービス センター ほたる	5名	0名		小橋一雄 近藤知子	作業療法学科
5/24	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所	10名	上4年 6名		木村龍平	こども学科
5/25	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在の有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	4名	動物介在 活動部	横山寛光 花園誠	アニマルサイエンス学科
5/26	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所 福祉課	島田保育所	在所児の 人数	上1年 6名		木村龍平	こども学科
5/26	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 ハイオニアキッズ 菊野台園	46名	5名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
5/28	地球環境フェア2016	小動物のふれあい、工作		足立区役所			動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
5/28	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人さつきの会 藤野さつき学園	社会福祉法人さつきの会 藤野さつき学園	入所者の人数	上3年1名 2年2名 3年3名		吉川和幸	こども学科
5/29	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	6名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
5/29	かいこや(上野原認知症カフェ)	認知症の方ご本人や、家族、地域住民や専門家が気軽に集まり、情報交換をするカフェを実施 また本日は、認知症予防体操や、介護保険についての講義を行った	上野原市NPOさいはら	羽置きの里 びりゅう館	2名	3名	Playing ココベリ	小橋一雄 近藤知子	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
5/29	都市農業公園動物ふれあい	小動物のふれあい、チャボの展示、スナネズミの観察、動物モチーフ紙粘土工作を実施	都市農業公園こども動物教室 アニマルシッブ	都市農業公園	70名	8名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
5/29	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
5/30	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域包括支援センター千住本町水引講師 足立区薬剤師会	千住キャンパス3号館	地域住民35名	看護学科1名 薬剤師学生1名	看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科 医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
5/30	関東作業研究会	健康促進のための作業の活用のための情報、作業の探求方法の共有		八王子 生涯学習 センター	10名			近藤知子	作業療法学科
5/31	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	0名	上2年 8名		木村龍平	こども学科
5/31	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所	15名	上4年 6名		木村龍平	こども学科
6/1	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
6/1	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/1	私立幼稚園 教職員研究会懇談	山梨県私立幼稚園連合会と帝京科学大学こども学科が連携して行う、山梨県私立幼稚園教職員研究会について打ち合わせを行う。	山梨県私学教育振興 会幼稚園部	本学 (第一会議室)	3名			大槻千秋 大須賀隆子 吉川和幸 青木直樹	こども学科
6/1	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	3名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/2	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	第一・第二・島田保育園 蔵こども園 上野原幼稚園	第一・第二・島田保育園 蔵こども園 上野原幼稚園	150名	80名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/2	動物・ロボット介在保育	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、動物・ロボット介在保育を行う。	上野原市役所 福祉課	第1/第2/島田保育所 上野原幼稚園 蔵こども園	在所児の人数	上1年 24名		木村龍平 花園誠	こども学科
6/2	大学遠足	打ち合わせ	足立区	千寿小学校		2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/3	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	上野原幼稚園	上野原幼稚園	20名	8名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/4	ロールプレイング	小動物を用いた動物介在教育を実施(練習会)		帝京科学大学 千住キャンパス 2号館		28名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/4	障害者支援施設イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	社会福祉法人 かながわ黎明会 くりのみ学園	神奈川県立 藤野芸術の家	入所者の人数	上2年 9名		吉川和幸	こども学科
6/5	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
6/5	ロボット介在活動		特別養護老人ホーム 「サントピア」	特別養護老人ホーム 「サントピア」	入居高齢者 30名	上2年 17名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/5	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6/6	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市パイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/7	子育て支援活動	「子育てブレイク広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内(大学院棟保育実習室)		上2年		木村龍平	こども学科
6/7	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネット環境を通じてケース会議を行う	学校法人リスム学園恵庭幼稚園	学内(教員研究室)	1名			吉川和幸	こども学科
6/7	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園		上25名		花園誠	こども学科
6/7	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区立興本小学校 足立区立西新井第二小学校	足立区立興本小学校 足立区立西新井第二小学校		上60名		花園誠	こども学科
6/7	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市母子寡婦福祉連合会 上野原市社会福祉協議会	上野原市役所		上4年6名		木村龍平	こども学科
6/8	飼育体験	お世話の方法をパネル等を使って説明を行い動物を預ける。	上野原市立上野原西小学校	上野原西小学校	55名	14名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/9	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所 福祉課	第1/第2/島田保育所 上野原幼稚園	在所児の人数	上1年 34名		木村龍平	こども学科
6/10	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	秋山小学校	秋山小学校	10名	6名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/10	島田小学校遠足	馬とのふれあい、お世話体験、曳馬による乗馬、餌あげ(にんじん)	上野原市立 島田小学校	うまセンター	18名	9名	うまセンター 委員会	今野直人	アニマルサイエンス学科
6/11	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	興本小学校 西新井 第二小学校	70名 62名	26名 29名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/11	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科	病院 スタッフ 10名	2名	Playing	石井孝弘	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
6/11	上野原自然探検隊	カエルとホタルの観察・夜の森探索	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/12	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科	障害児 3名	1名	Playing	石井孝弘	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
6/12	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	5名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
6/12	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター	89名	26名	うまセンター 委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
6/12	多摩動物公園 おえかきっず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6/14	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)		上2年 5名		木村龍平	こども学科
6/14	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所		上4年 5名		木村龍平	こども学科
6/14	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者、高齢者家族を含む地域住民、学生、専門職などの交流の場。専門職による相談	NPO法人 さいはら 上野原市役所 保険課	羽置の里 ひりゅう館 (西原)		3年 9名	Playing 森のココペリ	小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
6/14	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	部内でのうさぎ飼育を検討するためのシミュレーションとして、教員の飼育しているうさぎをお借りし施設で介在活動を行った。うさぎが好きな入居者さんを対象に実施したが、餌をあげたり会話のきっかけになったりと良い印象だった。介在方法の検討としても参考になった。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	9名	動物介在 活動部 動物介在 教育研究部	横山寛光 花園誠	アニマルサイエンス学科
6/15	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/16	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所 福祉課	第1/第2/島田保育所 上野原幼稚園	在所児の人数	上1年 24名		木村龍平	こども学科
6/17	子どもの生活の質 向上有志の会(夏祭り)		上野原市立 沢松幼稚園	上野原市立 沢松幼稚園	在園児 全員	上3年 5名		木村龍平	こども学科
6/17	子どもの生活の質 向上有志の会		上野原市役所 福祉課	上野原市立 蔵こども園	在園児 全員	上3年 9名		木村龍平	こども学科
6/17	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
6/17	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/18	障害者支援施設 イベントボランティア	障害者支援施設での行事の運営サポート、利用者支援	上野原 福祉作業所	上野原市役所		上3年18名 2年1名		吉川和幸	こども学科
6/19	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	5名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
6/19	乗馬会	ぬりえ(モルモット、ワオキツネザル)		帝京科学大学		4人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/19	乗馬会	小動物を用いた動物介在活動を実施		帝京科学大学		8名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
6/19	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6/20	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
6/20	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/21	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)		上2年		木村龍平	こども学科
6/21	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所		上4年 5名		木村龍平	こども学科
6/21	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/21	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行事体験活動を行う。	私立 上野原 幼稚園	私立 上野原幼稚園	在所児の 人数(12)	上2年 11名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/21	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行事体験活動を行う。	上野原市役所福祉課	上野原市立第1保育所	在園児の人数(12)	上2年5名		木村龍平	こども学科
6/22	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市パイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/22	上野原活性化事業①アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在の活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人緑水会	桜の里	20名	4名	動物介在活動部	横山寛光 花園誠	アニマルサイエンス学科
6/23	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所福祉課	蔵こども園	在所児の人数	上1年9名		木村龍平	こども学科
6/23	大学遠足	足立区の小学生に自然学習体験を行ってもらう		旧桜井小学校			AQUASHIP動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/24	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市パイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/24	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年3名		吉川和幸	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
6/24	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	10名	動物介在活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
6/25	夢の体験教室	足立区小学校5.6年生400人を対象に学校教育学科が学外講座を開講	足立区 教育委員会	帝京科学大学	5.6年約400人	学校教育学科 1年 90人			学校教育学科
6/25	都市農業公園 動物ふれあい	小動物ふれあい、チャパボの展示、スナネズミ観察、動物モチャーフ袋作りの実施	都市農業公園 こども動物教室 アニマルジップ	都市農業公園	40名	8名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/25	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 2名		吉川和幸	こども学科
6/25	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行事体験活動を行う。	私立 上野原 幼稚園	私立 上野原幼稚園	在所児の 人数(12)	上2年 10名 3年 3名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/25	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	うさぎ介在スペースでは、生体のみでなく写真や名前を掲示する等の工夫も好評だった。 季節を感じてもらう事を目的にて、てるてる坊主を作るスペースも設けたが、てるてる坊主の歌を歌ってくれる人がいたり、手先の作業が難しくうまくできない人がいたりとした。 ヘビやトカゲはインパクトが強いようで、興味深そうに触れ合っているようだった。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	15名	動物介在活動部 動物介在 教育研究部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
6/26	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名	Playing	石井孝弘	作業療法学科
6/26	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の里 水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
6/26	かいこや (上野原認知症カフェ)	認知症の方ご本人や、家族、地域住民や専門家が気軽に集まり、情報交換をするカフェを実施 当日は、認知症予防とカラオケの効果について講義	上野原市 NPOさいはら	羽置きの里 びりゅう館	2名	3名	Playing ココベリ	小橋一雄 近藤知子	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
6/26	多摩動物公園 おえかきっず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
6/27	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓蒙		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
6/27	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援 センター千住本町 アロマセラピー 講師	千住キャンパス 3号館			看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科 医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/28	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市	障害児 2名 スタッフ 15名	2名	Playing	石井孝弘	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
6/28	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所		上4年 5名		木村龍平	こども学科
6/28	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
6/28	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	大月市立 大月東小学校	大月東小学校	43名	12名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/28	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 ハリオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/28	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 2名		吉川和幸	こども学科
6/29	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 ハリオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/29	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 2名		吉川和幸	こども学科
6/30	保育体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、保育体験活動を行う。	上野原市役所 福祉課	蔵こども園	在所児の 人数	上1年 9名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
6/30	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市ハイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
6/30	動物・ロボット介在保育	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、動物・ロボット介在保育を行う。	上野原市役所福祉課	第1/第2/島田保育所 上野原幼稚園	在所児の人数	上1年 24名		木村龍平 花園誠	こども学科
7/1	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市ハイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/2	認知症カフェ会議(上野原市)	NPO法人さいはら上野原市、大学教員、学生による連絡協議会	NPO法人さいはら上野原市役所保険課	上野原市役所				小橋一雄 花園誠	作業療法学科 こども学科
7/2	体験!!ー日大学生	模擬講義と大学生の学びについての実験「炭酸飲料のあま味を見る」を実施	足立区教育委員会	本学7号館	中学生			小林和生 山口十四文	アニマルサイエンス学科 自然環境学科 学校教育学科 東京柔道整復学科 生命科学学科
7/2	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年 4名		吉川和幸	こども学科
7/2	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行事体験活動を行う。	上野原市役所福祉課	上野原市立第1保育所	在所児の人数	上2年 4名		木村龍平	こども学科
7/3	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
7/3	ロボット介在活動		特別養護老人ホーム「サントピア」	特別養護老人ホーム「サントピア」	入居高齢者30名	上2年17名		木村龍平	こども学科
7/3	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
7/4	公開研究会 会議	特別支援学校の児童生徒に対する研究の補助と指導	都立七生特別支援学校	都立七生特別支援学校	20名			小橋一雄	作業療法学科
7/5	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内(大学院棟保育実習室)	13	上2年5名		木村龍平	こども学科
7/5	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市母子寡婦福祉連合会 上野原市社会福祉協議会	上野原市役所	3	上4年4名		木村龍平	こども学科
7/5	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園	在所児の人数	27名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
7/5	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年2名		吉川和幸	こども学科
7/5	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行事体験活動を行う。	上野原市役所福祉課	上野原市立島田保育所 蔵こども園	在所児の人数	上2年5名		木村龍平	こども学科
7/7	薬物の乱用防止に関する講習会	「平成28年度薬物関連相談事業：中学生の薬物乱用防止について」の講習会の講師	山梨県立精神保健福祉センター	大月市立猿橋中学校	生徒309名 教員30名			小島尚	生命科学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
7/7	西多摩リハビリテーション 研修会	テーマ:住宅改修のコツ 座長	西多摩リハビリテー ション研修会	福生病院	PT OT ST 他	約100名		長谷川辰男	作業療法学科
7/8	植栽イベント	ミヤマ株式会社本社でミヤマシジミ食草 コマツナギの植栽を開催	ミヤマ 株式会社	ミヤマ 株式会社					
7/8	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所 で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 4名		吉川和幸	こども学科
7/8	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さん について知る事を目的とした定期的な訪 問活動。動物は連れて行かず、その人 の思い出や今日の出来事等を自由にお 話する事で、入居者さん1人1人の話し方 や性格がより理解出来、その人その人 のための活動である事を意識している。 また、動物介在有りの活動時と普段の 様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	11名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
7/9	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア ア、スタッフへの障がい理解と実施方法 の指導	河北総合病院	長野県夢科					作業療法学科
7/9	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	六本木小学校 東伊興小学校	77名 104名	27名 37名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/9	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所 で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 2名		吉川和幸	こども学科
7/9	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教 員、学生が訪問し、園行事体験活動を行 う。	上野原市役所 福祉課	上野原市立 島田保育所 蔵こども園	在所児 の人数	上2年 5名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
7/10	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科
7/10	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	6名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
7/10	多摩動物公園 おえかきっす！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
7/11	介護初任者研修	「リハビリテーション専門職について知ろうー人の身体の見かたー」	東京都立東大和南高等学校	東京都立東大和南高等学校	高校生20名程度			安齋久美子	理学療法学科
7/11	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
7/11	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市ハイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/12	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内(大学院棟保育実習室)		上2年		木村龍平	こども学科
7/12	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市母子寡婦福祉連合会 上野原市社会福祉協議会	上野原市役所	4	上4年4名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
7/12	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
7/12	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/12	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
7/13	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/14	保育体験活動(動物・ロボット介在保育)	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、動物・ロボット介在保育を行う。	上野原市役所福祉課	上野原市立 蔵こども園	在園児4-5 歳対象	上3年 4名		花園誠 木村龍平	こども学科
7/14	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/15	子どもの生活の質 向上有志の会(夏祭り)		上野原市立 沢松幼稚園	上野原市立 沢松幼稚園	在園児 全員	上3年 4名		木村龍平	こども学科
7/15	子どもの生活の質 向上有志の会		上野原市役所福祉課	上野原市立 蔵こども園	在所児の 人数	上1年 10名		木村龍平	こども学科
7/15	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
7/15	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	9名	動物介在活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
7/16	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 4名		吉川和幸	こども学科
7/17	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名		石井孝弘	作業療法学科
7/17	第1回帝京科学大学 こども学科 表現発表会	こども学科学学生の音楽、造形、身体表現等の授業で培った成果を、地域の子どもたち、保護者、保育関係者を対象に発表を行う	上野原市役所 上野原CATV	上野原市役所 もみじホール		こども 学科 全学生		大海由佳 藤井志帆 望月崇博	こども学科
7/17	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
7/17	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター			うまセンター 委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
7/17	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バククイズ、オリンピックス物語(11/20～)	横浜国立 金沢動物園	横浜国立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
7/18	夏休み自由研究プロジェクト 山梨県立富士湧水の里水族館 移動水族館補助	水槽搬入搬出の補助、水槽解説、貝殻工作体験の進行	山梨県立富士湧水の里水族館	産業展示交流館	参加者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
7/19	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	8	上2年 5名		木村龍平	こども学科
7/19	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会 上野原市 社会福祉協議会	上野原市役所	2	上4年 4名		木村龍平	こども学科
7/20	特別支援学校における 感覚統合勉強会	特別支援学校教員及び地域の特別支援学級、通級指導学級の教員及び地域児童福祉関係施設職員の学習会講師	甲府支援学校	山梨県 甲府市	60名			石井孝弘	作業療法学科
7/20	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/20	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 4名		吉川和幸	こども学科
7/20	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その他のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	4名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
7/21	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
7/21	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がネット環境を通じてケース会議を行う	学校法人 リズム学園 恵庭幼稚園	学内 (教員研究室)	1名			吉川和幸	こども学科
7/21	愛犬の健康診断	犬の体脂肪を測定し栄養相談を実施	NEXCO中日本	談合坂SA 上り・下り	来客者	学生 9名	小動物 栄養学 研究室	大辻一也 小泉亜希子	アニマルサイエンス学科
7/22	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 ハイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/22	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
7/23	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
7/24	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市					作業療法学科
7/24	多摩動物公園 おえかきっず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
7/24	「明日の風」 夏休み親子教室	多摩動物公園、金沢動物園で行っている活動の簡易バージョンを実施(おえかきっず！、コアラになろう、動物のおしりクイズ)	富士、東部 教育事務所	帝京科学大学	親子55人	8名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
7/25	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市					作業療法学科
7/25	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/25	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援 センター千住本町	千住キャンパス 3号館			看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科
7/26	特別支援教育 教員研修会	特別支援教育に携わる教員に対する障害児の障害理解と支援に関する研修	埼玉県立総合教育セ ンター	埼玉県行田市	60名			石井孝弘	作業療法学科
7/26	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	19	上2年 2名		木村龍平	こども学科
7/26	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/27	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
7/27	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市ハイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/27	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年3名		吉川和幸	こども学科
7/28	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
7/28	高齢者施設むけ動物ふれあい活動	デイサービス利用者への動物ふれあい活動の実施。犬と小動物参加。	デイサービスまあむこども動物教室アニマルシブ	デイサービスまあむ川口前川(認知症対応型)	10名	1名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
7/29	認知症カフェ会議(上野原市)	NPO法人さいはら、上野原市、大学教員、学生による連絡協議会	NPO法人さいはら上野原市役所保険課	上野原市役所				小橋一雄 花園誠	作業療法学科 こども学科
7/29	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年3名		吉川和幸	こども学科
7/29	上野原活性化事業①アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人緑水会	桜の里	20名	5名	動物介在活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
7/30	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児20名	4名		石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
7/30	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
7/30	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
7/30	6大学リレーイベント	本学担当「蝶々のひみつ」	足立区 シティプロモーション 課	帝京科学大学	5.6年 約60人	こども 学部 数人			学校教育学科
7/31	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	1名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
7/31	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
8/1	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/2	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/2	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの日帰り遠足の引率支援、現地での遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
8/2	園行事体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行事体験活動を行う。	私立 上野原 幼稚園	私立 上野原 幼稚園	在所児の 人数(12)	上2年 2名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
8/3	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/5	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/5	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/6	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名		石井孝弘	作業療法学科
8/6	園行体験活動	上野原市内の保育所、幼稚園を本学教員、学生が訪問し、園行体験活動を行う。	私立 上野原 幼稚園	私立 上野原幼稚園	在所の 人数(12)	上2年 10名 4年 5名		木村龍平	こども学科
8/6	上野原アドベンチャー	自然体験と野外遊び、異世代間交流	秋山温泉	上野原市内 秋山	親子5組	10名		青木直樹	こども学科
8/7	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
8/8	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/9	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者、高齢者家族を含む地域住民、学生、専門職などの交流の場。専門職による相談	NPO法人 さいはら 上野原市役所 保険課	羽置の里 びりゅう館 (西原)			Playing 森のココベリ	小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
8/10	盛岡市特別支援学校 教員研修会	特別支援教育に携わる教員に対する障害児の障害理解と支援に関する研修	盛岡市 教育委員会	岩手県 盛岡市	150名			石井孝弘	作業療法学科
8/10	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	3名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
8/11	宮城県作業療法士会 市民公開講座	一般向け発達障害の理解に関する研修会	宮城県 作業療法士会	宮城県 仙台市	40名			石井孝弘	作業療法学科
8/12	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/12	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	2名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
8/12	秋山ふるさと祭り	事前準備	秋山青年会	秋山小学校 校庭		10名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/13	高齢者施設むけ 動物ふれあい活動	上野原市特別養護老人ホーム桜の里に おけるアニマルセラピー活動と学生と高 齢者の交流を目的とした活動	上野原市 特別養護老人 ホーム桜の里 こども動物教室 アニマルシブ	特別養護 老人ホーム 「桜の里」	15名	20名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/13	金沢動物園ボランティア	ユーカーリの葉っぱスタンプ	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	6名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
8/13	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	犬たちと触れ合う事で昔飼っていた犬の 事を思い出し涙する人もいた。 蚤は以前からふれあいスペースを設け ているが、今回も養蚕業をしていた人 には懐かしんでもらっていた。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	16名	動物介在 活動部 動物介在 教育研究部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
8/14	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進 行または補助、貝殻工作体験の進行、 常展示水槽や企画展示水槽の掃除また は給餌、バックヤード水槽の掃除または 給餌、ふれあいイベントの進行または補 助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	3名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
8/14	金沢動物園ボランティア	ユーカーリの葉っぱスタンプ	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	6名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
8/15	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活 動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/15	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 ハイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
8/16	発達障害の理解 研修会	歯科医師 特別支援学校教員等への発達障害の障害理解に関する研修会	都立 口腔センター	東京都文京区	50名			石井孝弘	作業療法学科
8/16	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/16	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/17	特別支援学校 外部専門家による 夏季集中支援	特別支援学校の児童生徒に対する動物介在活動と療育の提供	都立 七生特別 支援学校	都立 七生特別 支援学校	12名		ノー ウォーリーズ	小橋一雄 花園誠 石井孝弘	作業療法学科 こども学科 アニマルサイエンス学科
8/17	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/17	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	3名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
8/18	特別支援学校 外部専門家による 夏季集中支援	特別支援学校の児童生徒に対する動物介在活動と療育の提供	都立 七生特別 支援学校	都立 七生特別 支援学校	13名		ノー ウォーリーズ	小橋一雄 花園誠 石井孝弘	作業療法学科 こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
8/18	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介入 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/19	特別支援学校外部専門家による夏季集中支援	特別支援学校の児童生徒に対する動物介入活動と療育の提供	都立 七生特別 支援学校	都立 七生特別 支援学校	14名		ノー ウォーリーズ	小橋一雄 花園誠 石井孝弘	作業療法学科 こども学科 アニマルサイエンス学科
8/19	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介入 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/19	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの日帰り遠足の引率支援、現地での遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
8/19	上野原自然探検隊	キャンプ・野外調理・川探索・ネイチャーゲーム・自由遊び	上野原市 社会福祉協議会	北杜市	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
8/20	上野原自然探検隊	キャンプ・野外調理・川探索・ネイチャーゲーム・自由遊び	上野原市 社会福祉協議会	北杜市	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
8/21	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名		石井孝弘	作業療法学科
8/21	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	3名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科
8/21	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
8/23	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/24	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/24	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/25	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/25	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/26	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
8/26	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/29	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/29	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援 センター千住本町 水引講師	千住キャンパス 3号館			看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科 医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
8/30	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市					作業療法学科
8/30	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
8/31	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/1	特別支援学校 における感覚統合 勉強会	特別支援学校教員及び地域の特別支援学級、通級指導学級の教員及び地域児童福祉関係施設職員の学習会講師	甲府支援学校	山梨県 甲府市	60名			石井孝弘	作業療法学科
9/1	県民カレッジ	山梨県民に対する発達障害の理解に関する講演会講師	山梨県 コンソーシアム	山梨県 甲府市	70名			石井孝弘	作業療法学科
9/2	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在の有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	2名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
9/3	特別支援学校 地域自閉症協会事業	特別支援学校教員及び地域の特別支援 学級・通級指導学級の教員への発達理 解と支援方法の研修会	埼玉県 自閉症協会 県立川越 特別支援学校	埼玉県川越市	40名			石井孝弘	作業療法学科
9/4	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進 行または補助、貝殻工作体験の進行、 常展示水槽や企画展示水槽の掃除また は給餌、バックヤード水槽の掃除または 給餌、ふれあいイベントの進行または補 助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
9/4	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクケイズ、 オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
9/5	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活 動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
9/5	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/6	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/7	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/8	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/8	大学遠足	足立区の小学生に自然学習体験を行っ てもらう	足立区立 西伊興小学校	旧桜井 小学校	61名	48名	AQUASHIP 動物介在 教育研究部	榊原健太郎 花園誠	アニマルサイエンス学科 総合教育センター

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
9/9	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/10	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科
9/10	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	千葉県東小学校 大谷田小学校	113名 44名	32名 15名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/11	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科
9/11	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	3名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
9/12	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
9/12	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/12	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援センター千住本町水引講師	千住キャンパス 3号館			看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科 医療福祉学科
9/13	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
9/13	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園		上25名	動物介在教育研究部	花園誠	こども学科
9/13	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/14	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/14	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者、高齢者家族を含む地域住民、 学生、専門職などの交流の場。専門職 による相談	NPO法人 さいばら 上野原市役所 保険課	羽置の里 びりゅう館 (西原)		3年 4名	Playing 森のココペリ	小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
9/14	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さん について知る事を目的とした定期的な訪 問活動。動物は連れて行かず、その人 の思い出や今日の出来事を自由にお 話する事で、入居者さん1人1人の話し方 や性格がより理解出来、その人その人 のための活動である事を意識している。 また、動物介在有りの活動時と普段の 様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	4名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
9/15	県民カレッジ	山梨県民に対する発達障害の理解に関 する講演会講師	山梨県 コンソーシアム	山梨県 甲府市	70名			石井孝弘	作業療法学科
9/15	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活 動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
9/15	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と 動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
9/16	いきいき百歳体操	活き活きは百歳体操住民説明会に参加し、今後の上野原市内で開催される体操の援助助言を行う	上野原市役所 長寿健康課	上野原市役所	市内の高齢者 40名			小橋一雄	作業療法学科
9/18	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	7名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
9/18	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市長金沢動物園	横浜市長金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
9/20	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市パイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/20	大学遠足	足立区の小学生に自然学習体験を行ってもらう	足立区立栗原小学校	旧桜井小学校	76名	31名	AQUASHIP動物介在教育研究部	榊原健太郎 花園誠	アニマルサイエンス学科
9/23	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
9/23	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市パイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/23	高齢者施設における動物ふれあい活動	デイサービス利用者への動物ふれあい活動の実施。犬と小動物が参加。	こども動物教室アニマルシブ	デイサービスまあむ川口本町	8名	1名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/25	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 20名	4名		石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
9/25	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	6名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
9/25	街の保健室	葬儀会社と組んで看護師の看護相談会を行う予定	日本典礼	西新井日本典礼支社					
9/25	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター			うまセンター委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
9/25	羽村市動物公園ふれあい曜日	クイズラリー、動物ぬりえ、藁クラフトほか	羽村市動物公園	羽村市動物公園	来園者	86人	動物園研究部 sweethart 動物看護 動物介在教育研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
9/25	都市農業公園動物ふれあい	小動物ふれあい、チャボの展示、スナネズミ観察、動物モナーフ袋作りの実施	都市農業公園 こども動物教室 アニマルシブ	都市農業公園	60名	10名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/26	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
9/27	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
9/27	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
9/28	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/29	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	打ち合わせ	足立区	花畑西小学校		2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/29	生活習慣病関連講演会	平成28年度相模原から生活習慣病をなくすための講演会の講師	相模原市商工会	相模原市商工会館	市民			小島尚	生命科学科
9/30	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
9/30	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	3名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
10/1	特別支援学校 地域自閉症協会事業	特別支援学校教員及び地域の特別支援学級、通級指導学級の教員への発達理解と支援方法の研修会	埼玉県 自閉症協会 県立川越 特別支援学校	埼玉県川越市	40名			石井孝弘	作業療法学科
10/1	上野原自然探検隊	冒険ハイク・高原探索・ブラネタリウム・自由遊び	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
10/2	上野原自然探検隊	冒険ハイク・高原探索・ブラネタリウム・自由遊び	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
10/3	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/4	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/5	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/6	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
10/6	大月東小学校 大学遠足	馬・小動物とのふれあい、餌あげ(にんじまん)。	大月市立 大月東小学校	うまセンター			うまセンター 委員会 ヤギ世話 動物介在教育研究部	今野直人 花園誠	アニマルサイエンス学科
10/7	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/8	東日本大震災 地域支援	福島県伊達市在住の発達障害もしくはその傾向がある子供たちへの支援	日本感覚統合学会	山形県 山形市	30名	8名		石井孝弘	作業療法学科
10/8	東日本大震災 地域支援	福島県伊達市在住の発達障害もしくはその傾向がある子供たちへの支援	日本感覚統合学会	山形県 山形市	30名	8名		石井孝弘	作業療法学科
10/8	東日本大震災 地域支援	福島県伊達市在住の発達障害もしくはその傾向がある子供たちへの支援	日本感覚統合学会	山形県 山形市	30名	8名		石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
10/8	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター			うまセンター委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
10/8	山梨県立富士湧水の里水族館移動水族館補助	魚類だけではなく、カエルをはじめとし貝類やザリガニなど幅広い水生動物を展示。	山梨県立富士湧水の里水族館	上野原キャンパス	来場者	20名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
10/9	ペット同行避難訓練	ペットも同行した避難訓練を大学にて実施。避難中の動物の様子を別室にてモニタリングしながらの講義、しつけについて話す	千住桜木町内会 こども動物教室 アニマルシブ	帝京科学大学			ACC	小泉亜希子 川村和美 花園誠	アニマルサイエンス学科
10/9	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター			うまセンター委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
10/10	金沢動物園ボランティア	ユーカーリの葉っぱスタンプ	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者	6名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
10/11	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/12	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
10/13	いきいき百歳体操	生き活きは百歳体操の指導 評価の補助	コマアしおつ3丁目集会所	上野原市役所	地区の住民 15名			小橋一雄	作業療法学科
10/14	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
10/14	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
10/14	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	5名	動物介在活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
10/15	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科
10/16	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科
10/16	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	障害児 22名	6名		石井孝弘	作業療法学科
10/16	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	7名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
10/16	タートルマラソン	救護活動	日本タートル 協会	荒川 河川敷	参加者	35名		大石徹	東京柔道整復学科
10/16	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクワイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
10/17	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/18	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/18	うえのはら市民協議会	10月23日の講演会について事前会合	上野原 日本青年会議所	上野原 市役所	10名	0名		花園誠	こども学科
10/19	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
10/19	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/19	桂川フェスティバル 実行委員会	今年度の反省と来年度の桂川フェスティバル実行に向けた委員会会議	鄙の会	上野原 市役所	10名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/20	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者、高齢者家族を含む地域住民、学生、専門職などの交流の場。専門職による相談	NPO法人 さいはら 上野原市役所 保険課	羽置の里 びりゅう館 (西原)		3年 6名	Playing 森のココペリ	小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
10/21	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/21	ことぶき勸学院 「若者との交流」	動物とのふれあいを通して、動物の知識や学生との交流を深めてもらう	ことぶき勸学院	帝京科学大学	28名	9名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
10/21	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	6名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
10/22	薬と健康の週間 「薬物乱用防止 キャンペーン」	平成28年度薬物乱用防止キャンペーンの街頭活動に連携機関として参加	足立区 薬剤師会	北千住駅 オーブン デッキ他	区民	生命 科学科 学生 3名		小島尚	生命科学科
10/23	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	7名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
10/23	多摩動物公園 おえかきっず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
10/23	うえのはら市民協議会	上野原の地域資産について上野原市民を対象に講演	上野原 日本青年会議所	上野原 市役所	50名	0名		花園誠	こども学科
10/24	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/24	関東作業研究会	健康促進のための作業の活用のための情報、作業の探求方法の共有		八王子 生涯学習 センター	10名			近藤知子	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
10/24	上野原アドベンチャー	ハロウィンイベント	NPO法人EPO	上野原市内 秋山	親子5組	10名		青木直樹	こども学科
10/25	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導		静岡県富士宮市					作業療法学科
10/25	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
10/25	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/26	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	打ち合わせ	足立区	鹿浜五色桜 小学校		2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/26	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/27	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/30	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
10/30	富士湧水の里水族館	小動物を用いた動物介在教育を実施	富士湧水の里 水族館	富士湧水の里水族館	来場者	8名 11名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
10/30	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
10/30	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立 金沢動物園	横浜市立 金沢動物園	来園者	7名	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11/1	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/2	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/2	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/2	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事を自由に話す事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	2名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
11/4	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/4	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/5	上野原自然探検隊	ハイキング・自然観察	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/6	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
11/6	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11/8	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/8	公開研究会 会議	特別支援学校の児童生徒に対する研究の補助と指導	都立七生特別支援学校	都立七生特別支援学校	15名			小橋一雄	作業療法学科
11/9	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市バイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/11	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市バイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/12	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/12	障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」	近隣の障害児20名を招待しての活動。 本会内では乗馬以外の行事あり。		いこいの広場 本館			うまセンター 委員会 ヤギ世話 AAE UNION ドッグ トレーナー 研究部 動物園 研究部 ヤギ世話 AQUASHIP	小川家資 今野直人	作業療法学科 アニマルサイエンス学科 こども学科
11/12	山梨県立富士湧水の水族館移動水族館補助	水槽搬入搬出の補助、水槽解説、員数 工作体験の進行	山梨県立 富士湧水の里 水族館	小瀬 スポーツ 公園	来場者	1名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
11/12	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	鹿浜五色桜 小学校 関原小学校	小学1・2年生	42名 25名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/13	特別支援学校地域自閉症協会事業	特別支援学校教員及び地域の特別支援 学級・通級指導学級の教員への発達理 解と支援方法の研修会	埼玉県 自閉症協会 県立川越 特別支援学校	埼玉県川越市	40名			石井孝弘	作業療法学科
11/13	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	河北総合病院	長野県蓼科					作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/13	山梨県立富士湧水の水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	7名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
11/13	山梨県立富士湧水の水族館補助	水槽搬入搬出の補助、水槽解説、貝殻工作体験の進行	山梨県立富士湧水の里水族館	小瀬スポーツ公園	来場者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
11/13	多摩動物公園 おえかきず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11/14	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/15	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/16	特別支援学校における感覚統合勉強会	特別支援学校教員及び地域の特別支援学級・通級指導学級の教員及び地域児童福祉関係施設職員の学習会講師	甲府支援学校	山梨県 甲府市	60名			石井孝弘	作業療法学科
11/17	日本大学病院 看護師研修	同大学病院看護師の病院内の研究発表会の講師	日本大学病院	日本大学 病院研修室	看護師 40名			武政奈保子 方波見柳子	看護学科
11/17	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者、高齢者家族を含む地域住民、学生、専門職などの交流の場。専門職による相談	NPO法人 さいはら 上野原市役所 保険課	羽置の里 びりゅう館 (西原)		3年 4名	Playing 森のココペリ	小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/18	介護初任者研修	介護初任者研修講師 ところとからだの理解「介護に関するからだのしくみの基本的理解」	山梨県立 笛吹高等学校	山梨県立 笛吹 高等学校	高校生 20名程度			安齋久美子	理学療法学科
11/18	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/18	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	6名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
11/19	のびのびブレイディ	幼児とその保護者を対象にした遊びのブースを数箇所設け、学生が幼児や保護者を一緒に遊んだ		帝京科学大学 7号館	36人	90名		幼児保育学科教員	幼児保育学科
11/19	都市農業公園収穫祭	都市農業公園収穫祭にて子供向けの工作ブースを設置	都市農業公園 こども動物教室 アニマルジップ	都市農業公園	60名 250名	15名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/19	科学の祭典	来場者に科学とふれあってもらう	山梨県立 科学博物館	山梨県立 科学博物館	来場者	39名	動物介在 教育研究部	木村龍平 大須賀隆子 山田知代 青木直樹 花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/20	山梨県立富士湧水の水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の水族館	山梨県立富士湧水の水族館	来館者	5名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
11/20	都市農業公園収穫祭	都市農業公園収穫祭にて子供向けの工作ブースを設置	都市農業公園 こども動物教室 アニマルシブ	都市農業公園	60名 250名	15名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/20	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市長金沢動物園	横浜市長金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11/20	科学の祭典	来場者に科学とふれあってもらおう	山梨県立科学博物館	山梨県立科学博物館	来場者	39名	動物介在教育研究部	木村龍平 大須賀隆子 山田知代 青木直樹 花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
11/20	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話し方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在の有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	5名	動物介在活動部	横山寛光 花園誠	アニマルサイエンス学科
11/21	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/21	桂川フェスティバル 実行委員会	来年度の桂川フェスティバル実行に向けて た委員会会議	鄙の会	上野原市役所	10名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
11/22	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/22	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小学校にて小動物を用いた動物介在教育を実施	越谷市立大袋東小学校	大袋東小学校	90名	35名	動物介在教育研究部	榊原健太郎 花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
11/23	わんフェス	犬の体脂肪を測定し栄養相談を実施	足立区生物園	足立区生物園	来客者	学生6名	小動物栄養学研究室	大辻一也 小泉亜希子	アニマルサイエンス学科
11/23	野良猫調査隊	動物福祉の普及啓発	NPO法人EPO あだち動物共生 ネットワーク	足立区生物園		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/25	特別支援学校 外部専門家による 支援	知的障害児の障害アセスメントと教員指導	都立 七生特別 支援学校	東京都日野市	障害児 3名 教員			石井孝弘	作業療法学科
11/25	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
11/25	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/25	体験!!一日大学生	模擬講義と大学生の学びについての実験を実施	足立区 教育委員会	本学	中学生				アニマルサイエンス学科 自然環境学科 学校教育学科 東京柔道整復学科 生命科学学科
11/25	高齢者施設における動物ふれあい活動	デイサービス利用者への動物ふれあい活動の実施。	デイサービス まあむ こども動物教室 アニマルジップ	デイサービス まあむ 川口本町	8名	1名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/27	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/27	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
11/27	認知症カフェ会議(上野原市)	NPO法人さいはら、上野原市、大学教員、学生による連絡協議会	NPO法人さいはら 上野原市役所 保険課	上野原市役所				小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
11/27	多摩動物公園 おえかきっず!	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
11/29	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/29	談合坂SAふれあい活動	小動物を用いた動物介在活動を実施	NEXCO中日本	談合坂SA 上り・下り	来客者	15名	ドッグ トレーナー 研究部 動物介在 教育研究部	大辻一也 数田慎司 花園誠	アニマルサイエンス学科
11/29	高齢者施設における動物ふれあい活動	デイサービス利用者への動物ふれあい活動の実施。	デイサービス まあむ こども動物教室 アニマルシブ	デイサービス まあむ 川口前川	22名	1名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/29	愛犬の健康診断	犬の体脂肪を測定し栄養相談を実施	NEXCO中日本	談合坂SA 上り・下り	来客者	学生 6名	小動物 栄養学 研究室	大辻一也 小泉亜希子	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
11/30	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市ハイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
11/30	帝京科学大学presents 子育て講座「知っておくと嬉しい小学校で習う漢字基礎知識」 (大人対象)	小学校で習う漢字の基礎知識について分かりやすく知ることのできる講座	ギャラクシティ	ギャラクシティ	30人			鈿持勉	幼児保育学科
12/1	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年3名		吉川和幸	こども学科
12/1	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
12/2	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年1名		吉川和幸	こども学科
12/3	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
12/3	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年4名		吉川和幸	こども学科
12/3	カレー甲子園	学生が創作カレーを調理・提供し、地域住民をはじめ連携機関の方と交流をもった。 当日は34名のご出席をいただいた。	足立区役所 足立区社会福祉協議会 千住地域町内会・自治会・商店街・社会福祉法人・NPO法人	本館2階 カフェテリア	1年40名	千35名		医療福祉学科 教員	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
12/4	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
12/5	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
12/5	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市バイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/5	地域連携を中心としたゼミナール活動	住区センター見学、活動内容の検討	足立区役所	千住地域住区センター	1年 40名	千4名	相談援助演習1履修者	宮本佳子	医療福祉学科
12/6	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内(大学院棟保育実習室)	8名	上2年 4名		木村龍平	こども学科
12/6	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園	園児 150名	上30名		花園誠	こども学科
12/6	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市バイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/7	特別支援学校における感覚統合勉強会	特別支援学校教員及び地域の特別支援学級、通級指導学級の教員及び地域児童福祉関係施設職員の学習会講師	甲府支援学校	山梨県甲府市	60名			石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
12/7	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
12/7	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
12/7	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/7	帝京科学大学presents 「魚つり大会」	いろいろな材料でできた魚をつる魚つり大会を学生と親子が行う。つった魚の料理レシピをプレゼント。	ギャラクシティ	ギャラクシティ	親子 80組	18名		上田玲子 旦直子 木場有紀	幼児保育学科
12/8	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 4名		吉川和幸	こども学科
12/8	子どもの生活の質 向上有志の会		上野原市役所 福祉課	上野原市立 蔵こども園	在園 している 4歳児			木村龍平	こども学科
12/8	幼児を対象とした 造形ワークショップ	幼児を対象とした造形活動のワークショップを行う。	パイオニア キッズ つつじヶ丘園	パイオニア キッズ つつじヶ丘園	5歳児 12名	上3-4年 6名		藤井志帆	こども学科
12/8	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施		江東区 第七砂町小学校	183名	17名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/8	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会	上野原市役所	10名	上4年 3名		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
12/9	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 1名		吉川和幸	こども学科
12/9	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
12/9	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 パイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/9	地域連携を中心とした ゼミナール活動	住区センター見学、活動内容の検討	足立区役所	千住地域 住区センター	1年40名	千3名	相談援助 演習1 履修者	楠永敏恵	医療福祉学科
12/9	地域連携を中心とした ゼミナール活動	地域住民との交流、実施プログラムの検討	千住地域 公営団地自治会	千住地域 公営団地内 集会所	1年40名	千4名	相談援助 演習1 履修者	浅沼太郎	医療福祉学科
12/9	上野原活性化事業① アニマルセラピー事業	動物介在活動の対象である入居者さんについて知る事を目的とした定期的な訪問活動。動物は連れて行かず、その人の思い出や今日の出来事等を自由にお話する事で、入居者さん1人1人の話方や性格がより理解出来、その人その人のための活動である事を意識している。また、動物介在有りの活動時と普段の様子との比較もするようにしている。	社会福祉法人 緑水会	桜の里	20名	4名	動物介在 活動部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
12/10	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 1名		吉川和幸	こども学科
12/10	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	足立区	足立小学校 東栗原小学校	106名 109名	44名	動物介在 教育研究部	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
12/10	学習支援の付帯活動 (クリスマス昼食会)	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会	上野原市役所	16名	上4年 17名		木村龍平	こども学科
12/11	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
12/11	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	5名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
12/11	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター	23	16	うまセンター 委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
12/11	多摩動物公園 おえかきっず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学		8人	動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
12/12	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 2名		吉川和幸	こども学科
12/12	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 ハリオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/12	地域連携を中心とした ゼミナール活動	地域住民との交流、レクリエーションの実施	千住地域 公営団地自治会	千住地域 公営団地内 集会所	1年40名	千4名	相談援助 演習1 履修者	山田知代	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
12/12	桂川フェスティバル実行委員会	来年度の桂川フェスティバル実行に向けた委員会会議	鄙の会	上野原市役所	10名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/13	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市					作業療法学科
12/13	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	6名	上4年 3名		木村龍平	こども学科
12/13	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/13	かいこや (上野原認知症カフェ)	高齢者、高齢者家族を含む地域住民、学生、専門職などの交流の場。専門職による相談	NPO法人 さいはら 上野原市役所 保険課	羽置の里 ひりゅう館 (西原)		3年 4名	アニマルサイエンス学科3名 ココペリ2名 Playing2名	小橋一雄 花園誠	作業療法学科 アニマルサイエンス学科
12/14	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 3名		吉川和幸	こども学科
12/14	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/14	帝京科学大学 presents 「ボール入れ遊び」	身近にある用具や廃材を利用したボール投げ・ボール入れあそびを学生と親子が行う。	ギヤラクシティ	ギヤラクシティ	親子 15組	12名		林友子 呂曉彤	幼児保育学科
12/14	帝京科学大学 presents 「ふれあい歌あそび」	わらべ歌や手遊びを大学生が親子と楽しむ。	ギヤラクシティ	ギヤラクシティ	親子 15組	6名		田口直子	幼児保育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
12/14	帝京科学大学 presents 「カブラであそぼう！」	「カブラ」を使って学生が親子とあそぶ。	ギヤラクシティ	ギヤラクシティ	親子 10組	12名		鯨泉祐美子 杉本信	幼児保育学科
12/14	帝京科学大学 presents 「絵本の読み聞かせと製作遊び」	学生による絵本の読み聞かせと、身近な素材を使ってクリスマスのオーナメントづくり。	ギヤラクシティ	ギヤラクシティ	親子 50組	10名		新家智子	幼児保育学科
12/14	地域連携を中心とした ゼミナール活動	拠点見学、利用者との交流、実施プログラムの検討	運営NPO法人	就労継続 支援B型 事業所	1年40名	千3名	相談援助 演習1 履修者	三木良子	医療福祉学科
12/15	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 4名		吉川和幸	こども学科
12/15	幼児を対象とした 造形ワークショップ	幼児を対象とした造形活動のワークショップを行う。	石和第五保育所	石和第五 保育所	5歳児 12名	上3-4年 4名		藤井志帆	こども学科
12/15	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
12/15	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人 調布白雲福祉会	調布市 バイオニアキッズ 菊野台園	46名	2名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/16	児童デイサービス ボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人 宝山寮	上野原児童 デイサービス 事業所	利用児童 の人数	上3年 2名		吉川和幸	こども学科
12/16	介護初任者研修	介護初任者研修講師 社会福祉基礎「医療との連携とリハビリテーション」	山梨県立 笛吹高等学校	山梨県立 笛吹 高等学校	高校生 20名 程度			安齋久美子	理学療法学科
12/16	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
12/16	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施		朱生第一小学校			動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/16	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物(うさぎ)を用いた飼育体験支援と動物ふれあいを実施	社会福祉法人調布白雲福祉会	調布市ハイオニアキッズ菊野台園	46名	2名	動物介在教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/16	地域連携を中心としたゼミナール活動	地域住民との交流、レクリエーションの実施	千住地域公営団地自治会	千住地域公営団地内集会所	1年40名	千7名	相談援助演習1履修者	浅沼太郎	医療福祉学科
12/16	子育て支援活動クリスマス会	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通じて、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内(大学院棟保育実習室)	12名	上3年10名		木村龍平	こども学科
12/17	児童デイサービスボランティア活動	上野原市内の児童デイサービス事業所で、子どもたちの遊びの支援を行う。	社会福祉法人宝山寮	上野原児童デイサービス事業所	利用児童の人数	上3年4名		吉川和幸	こども学科
12/17	上野原活性化事業①アニマルセラピー事業	初めて動物介在活動に参加する方や、うさぎ好きの方へ向け実施。単に動物たちと触れ合うのみでなく、お話することが好きな方向けに談笑スペースも設け、話のきっかけとして12月にちなんだ物も設置する。	社会福祉法人緑水会	桜の里	20名	9名	動物介在活動部 動物介在教育研究部	横山章光 花園誠	アニマルサイエンス学科
12/18	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、員毅工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	3名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
12/18	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バククイズ、オリンピックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者	7名	動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
12/20	子どものためのクリスマスコンサート			練馬区立 区民活動 センター		上4年 3名		大海由佳	こども学科
12/21	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
12/21	帝京科学大学presents 「スライム&アクセサリーづくり体験」	ふしぎな手触りのスライムやすてきなアクセサリーづくりを学生と親子が体験。	ギャラクシティ	ギャラクシティ	親子 50組	22名		本多みどり 富岡麻由子 平野英史	幼児保育学科
12/21	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子家庭福祉 連合会	上野原市役所		上4年 3名		木村龍平	こども学科
12/22	高齢者施設における動物ふれあい活動	デイサービス利用者への動物ふれあい活動の実施。	デイサービス まあむ こども動物教室 アニマルシブ	デイサービス まあむ 川口本町	8名	1名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/23	フレンドリーマラソン	救護活動、コンディショニングブース設置	足立区 陸上競技協会	足立区 高砂野球場	参加者	55名		杉山渉 市毛雅之 二神弘子 濱田淳 佐藤勉 浅木健治	東京柔道整復学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
12/24	児童養護施設の教育支援	施設を訪問し、入所児童の教育支援及び交流活動(クリスマス会)を実施	社会福祉法人 唐池学園	箱根町 強羅町の星園	25名	4名	はこね サークル	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/25	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
12/26	高齢者施設における 動物ふれあい活動	デイサービス利用者への動物ふれあい活動の実施。	デイサービス まあむ こども動物教室 アニマルシブ	デイサービス まあむ 川口前川	22名	1名	動物介在 教育研究部	花園誠	アニマルサイエンス学科
12/31	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/2	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	1名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/3	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/6	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
1/8	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/8	多摩動物公園 おえかきっず！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学			動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
1/10	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)	6名	上2年 3名		木村龍平	こども学科
1/10	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会	上野原市役所	11名	上4年 3名		木村龍平	こども学科
1/11	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
1/13	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマル ライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
1/13	七生特別支援学校 発達支援	児童の評価と教員への指導	東京都	七生特別 支援学校	4名	0名		小橋一雄	作業療法学科
1/14	上野原自然探検隊	水鳥の観察・林間での自然体験	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
1/15	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/15	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者		動物園研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
1/16	こどもトピックス	講師の依頼を実施	日本クレジット協会	本学	児童教育学科3年次生200名		日本クレジット協会	石橋裕子	学校教育学科
1/17	長野県文化・芸術・スポーツ団体新春会への参加	信濃毎日新聞主催の交流会に参加	長野県	国際21				江田慧子	学校教育学科
1/17	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内(大学院棟保育実習室)	6名	上4年3名		木村龍平	こども学科
1/17	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園			動物介在教育研究部	花園誠	こども学科
1/18	認知症サポーター養成講座	認知症の予防やサポート方法を学び、地域住民の方40名とともに、平住で暮らし続けるための地域づくりをテーマに議論した	足立区役所	2号館2301・2302	1年40名	千35名		医療福祉学科教員	医療福祉学科
1/19	子どもの生活の質向上有志の会		上野原市役所福祉課	上野原市立蔵こども園	在園している5歳児童	上3年		木村龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
1/19	認知症サポーター 養成講座	認知症の予防やサポート方法を学び、 地域住民の方40名とともに、千住で暮ら し続けるための地域づくりをテーマに議 論した	足立区役所	2号館 2301・2302	1年 40名	千35名		医療福祉学科 教員	医療福祉学科
1/20	七生特別支援学校 発達支援	児童の評価と教員への指導	東京都	七生特別 支援学校	4名	0名		石井孝弘	作業療法学科
1/21	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する 意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
1/21	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する 意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
1/21	体育館レク活動	上野原市内及び大月市内の児童デイ サービス事業所の利用児童を対象に、 体育館での運動遊びの提供を行う。	社会福祉法人 宝山寮	本学体育館	利用児童 14名	上3年 7名		吉川和幸	こども学科
1/22	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する 意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
1/22	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する 意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
1/22	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する 意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	20名			石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
1/22	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/22	薬物乱用防止教育検討会	帝京情報に関する要求事項と帝京情報の確認、日薬大会への対策	足立区薬剤師会	上野東天紅	薬剤師会3名		生命科学科	小島尚	生命科学科
1/23	せんじゅカフェ(認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区地域包括支援センター千住本町	千住キャンパス3号館	地域住民25名	看護学科学生10名	看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科
1/24	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
1/24	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市母子寡婦福祉連合会	上野原市役所	12名	上4年5名		木村龍平	こども学科
1/25	野良猫調査隊	足立区内の野良猫の調査・地域猫活動・動物福祉の普及啓発		足立区内		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
1/25	神奈川県公立幼稚園教員研修会	身体表現を中心とした教員研修会	神奈川県教育委員会	かながわ県民センター	神奈川県内公立・私立幼稚園教員90名		神奈川県内各公立私立幼稚園	石橋裕子	学校教育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
1/25	～食べて守る生物多様性～オオルリジミとあか牛の秘密の関係	2月24日(金)開催予定の日本自然保護協会 & NTTグループ 初の連携企画である「～食べて守る生物多様性～オオルリジミとあか牛の秘密の関係」について打ち合わせを行った。本学は「協力」機関になることが決定。	日本自然保護協会 NTT	本学				江田 慧子	学校教育学科
1/27	七生特別支援学校 発達支援	児童の評価と教員への指導	東京都	七生特別支援学校	40名	0名		石井 孝弘	作業療法学科
1/27	七生特別支援学校 公開研究会	発達障害の児童に対する研究の補助	東京都	七生特別支援学校	20名	0名		小橋 一雄	作業療法学科
1/29	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里 水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀 谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
1/29	地域連携を中心とした ゼミナール活動	自治会主催の餅つき大会への参加、地域住民との交流	千住地域自治会	千住地域自治会 集会所	1年40名	千3名		山田 知代 坂野 憲司 楠永 敏恵 浅沼 太郎	医療福祉学科
1/29	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バクケイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者		動物園 研究部	佐渡 友陽一	アニマルサイエンス学科
1/31	学習支援活動	上野原市在住の母子家庭を中心とした、小・中学生を対象に学習支援活動を行う。	上野原市 母子寡婦福祉 連合会	上野原市役所	15名	上4年 5名		木村 龍平	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
2/3	七生特別支援学校 発達支援	児童の評価と教員への指導	東京都	七生特別 支援学校	2名	0名		小橋一雄	作業療法学科
2/4	上野原自然探検隊	ネイチャージャーゲーム・アウトドアクッキング	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
2/5	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	4名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
2/5	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター			うまセンター 委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
2/5	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜国立 金沢動物園	横浜国立 金沢動物園	来園者		動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
2/6	障害支援区分認定審査会	障害支援区分認定基準に照らして審査及び判定を行う。	国分寺市 福祉保健部	国分寺 市役所	0	0	無し	長谷川辰男	作業療法学科
2/7	子育て支援活動	「子育てプレイ広場」の企画、実施を通して、子育てにかかわる親同士のコミュニケーションを支援するとともに、子どもたちが楽しく遊べる時間と場所を提供する		学内 (大学院棟 保育実習室)		上2年 1名		木村龍平	こども学科
2/7	ふれあい動物教室及び 飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園	在園児 150名	上20名		花園誠	こども学科
2/7	地域連携を中心とした ゼミナール活動	地域住民との交流、レクリエーションの実施	千住地域 公営団地自治会	千住地域 公営団地内 集会所	1年 40名	千8名		三木良子 浅沼太郎	医療福祉学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
2/8	足立区福祉施設 指定管理者選定審査会 (足立区長諮問機関)	選定審査会会長として、足立区福祉施設指定管理者に応募した社会福祉法人の選定審査を実施	足立区福祉管理課	足立区役所	応募法人		社会福祉法人 審査会委員 審査会事務局	石橋裕子	学校教育学科
2/8	足立区福祉施設 指定管理者選定審査 現地視察	選定審査会会長として、足立区福祉施設指定管理者に応募した社会福祉法人の運営する施設へ視察	足立区福祉管理課	足立区内 当該施設	審査会委員		社会福祉法人	石橋裕子	学校教育学科
2/11	環境保全活動の課題 ～人材・資金・ネットワーク～ 開催	このフォーラムでは、自然資源を活かした地域づくりへの関わり方や長野県内での取り組みを市民団体と企業の連携による保全活動事例を学ぶとともに、企業・団体等の交流を通じ、様々な主体の協働による環境保全活動を発展させる機会とする。本学は「協力」機関になることが決定。	長野県 信州生物多様性ネットワーク すぎすな	塩尻総合文化センター 講堂	一般 70名		三菱UFJリサーチ&コンサルティング、楽天株式会社、ミヤマ株式会社、日本自然保護協会、ミヤマシジミ研究会、辰野いきものネットワーク、オオトリシジミ保護対策会議、NPO法人生物多様性研究所あーすわーむ	江田慧子	学校教育学科
2/12	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	3名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
2/12	多摩動物公園 おえかきっす！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学			動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
2/14	学習指導支援	学習に困難を抱える子どもが複数いる学級の観察と学級担任への指導	足立区立江北小学校	同左	担任教諭		当該学級担任管理職	石橋裕子	学校教育学科
2/14	～食べて守る生物多様性～オオルリジミとあか牛の秘密の関係	イベント打ち合わせ、季刊誌の原稿確認	日本自然保護協会NTT	日本自然保護協会事務局				江田慧子	学校教育学科
2/15	野良猫調査隊	報告会	足立区獣医師会	足立区保健所		21名	アニマルライフ	加隈良枝	アニマルサイエンス学科
2/17	特別支援教育全体会講師	協同学習による特別支援教育に関する講演	足立区立東伊興小学校	同左	教職員30名		管理職 学級担任 スクールソーシャルワーカー	石橋裕子	学校教育学科
2/17	学習指導支援	学習に困難を抱える子どもが複数いる学級の観察と学級担任への指導	足立区立東伊興小学校	同左	担任教諭		主幹教諭 養護教諭 担任教諭	石橋裕子	学校教育学科
2/19	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
2/19	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
2/19	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	20名			石井孝弘	作業療法学科
2/19	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
2/19	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカビの森、バククイズ、オリックス物語(11/20～)	横浜国立 金沢動物園	横浜国立 金沢動物園	来園者		動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
2/20	児童観察	クラス替えに向けた児童の実態を把握し、管理職等へ助言	足立区立 中川北小学校	同左	奇数 学年 各クラス		管理職 養護教諭	石橋裕子	学校教育学科
2/20	現代の保護者の名付けに見る教育観の検討	幼稚園・保育所・認定こども園に通う子どもの保護者を対象に、子どもの名付けと教育観に関するアンケート調査を実施し、分析・考察結果を提出	上野原市内 幼稚園・保育所 3園 八王子市内 幼稚園・保育所 2園 東京都23区内 認定こども園 1園	上野原市内 幼稚園・ 保育所3園 八王子市内 幼稚園・ 保育所2園 東京都23区 内認定こども園1園	園児 232名	上4年 1名		鳥越ゆい子	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
2/23	～食べて守る生物多様性～オオルリジミとあか牛の秘密の関係	イベント企画、講師を行った	日本自然保護協会 NTT	ABCクッキングスタジオ オ丸の内グラウンド	一般 70名		東日本電信電話株式会社、西日本電信電話株式会社、NTTコミュニケーションズ、NTTデータ、(株)NTTドコモ、NTTジーピー・エコ(株)、(株)ABCooking Studio、環境省、帝京科学大学、南阿蘇ビジターセンター、阿蘇草原保全活動センター、あか牛の館	江田 慧子	学校教育学科
2/24	特別支援ケース会議	幼稚園に在籍する特別な支援を要する幼児について、幼稚園と教員がケース会議を行う	学校法人 リスム学園 恵庭幼稚園	恵庭幼稚園				吉川和幸	こども学科
2/24	地域連携を中心としたゼミナール活動	地域住民との交流、レクリエーションの実施	千住地域 公営団地自治会	千住地域 公営団地内 集会所	1年 40名	千8名		楠永敏恵 松永美輝恵	医療福祉学科
2/25	ふれあいキャンパスDay			千住キャンパス				花園誠 榊原健太郎 前田康行 濱田淳 小泉亜希子	こども学科 アニマルサイエンス学科 総合教育センター 東京柔道整復学科 生命科学学科
2/26	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	21名			石井孝弘	作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
2/26	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
2/26	認知症カフェ会議 (上野原市)	NPO法人さいはら、上野原市、大学教員、学生のによる連絡協議会	NPO法人 さいはら 上野原市役所 保険課	上野原市役所				小橋一雄 花園誠	作業療法学科
2/26	多摩動物公園 おえかきっす！	バッタの観察とぬりえ		帝京科学大学			動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
2/27	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援 センター千住本町 居宅介護支援 センター	千住キャンパス 3号館	地域住民 15名		看護学科 医療福祉学科	定村美紀子	看護学科
2/27	現代の子どものゲームプレイ状況とその家庭環境要因の検討	小中学生を対象に、ゲームプレイ状況と家庭環境にかんするアンケートを実施し、その結果およびゲーム依存に陥る家庭環境要因について考察した結果を提出	山梨市内 小中学校 各1校	山梨市内 小中学校 各1校	小学生 135名 中学生 412名	1名		鳥越ゆい子	こども学科
2/27	関東作業研究会	健康促進のための作業の活用のための情報、作業の探求方法の共有		八王子 生涯学習 センター	10名			近藤知子	作業療法学科
2/28	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市					作業療法学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員(敬称略)	活動規模(全学・学部・学科等)
2/28	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児への乗馬療法の実施とボランティア、スタッフへの障がい理解と実施方法の指導	NPO法人EPO	静岡県富士宮市					作業療法学科
3/1	長野県 Sing with Butterfly 夏の信州 自然体験キャンプ打ち合わせ会議	・産学官民連携により生物多様性保全の啓発に向けた企画を展開(歌手と若手研究者の異色コラボによる企画) ・テレビ局との連携(必須)で活動成果を番組等で社会に発信 イベントに協力することが承認された。包括連携プロジェクトの一環。	信州生物多様性ネットワーク トギスナ・ミヤマシジミ研究会・長野県・信州豊かな環境づくり県民会議・ミヤマ株式会社・abn長野朝日放送・伊那市・南箕輪村	本学			長野県	江田 慧子	学校教育学科
3/4	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	60名	4名		石井 孝弘	作業療法学科
3/4	上野原自然探検隊	1年間の振り返り・卒団式	上野原市 社会福祉協議会	上野原市内	20名	15名	上野原 自然探検隊	花園 誠	こども学科 アニマルサイエンス学科
3/5	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホースパラダイス群馬	群馬県伊勢崎市	5名	5名		石井 孝弘	作業療法学科
3/5	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷 玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
3/5	金沢動物園ボランティア	コアラになろう、オカピの森、バククイズ、オリンピック物語(11/20～)	横浜市立金沢動物園	横浜市立金沢動物園	来園者		動物園 研究部	佐渡 友陽一	アニマルサイエンス学科
3/6	大学遠足		相模原市立ふじの幼稚園	上野原キャンパス	園児 20名	上10名		花園 誠	こども学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
3/6	障害支援区分認定審査会	障害支援区分認定基準に照らして審査及び判定を行う。	国分寺市 福祉保健部	国分寺市役所	0	0	無し	長谷川辰男	作業療法学科
3/7	ふれあい動物教室及び飼育体験支援	小動物を用いた動物介在教育を実施	帝京めぐみ幼稚園	帝京めぐみ幼稚園	在園児 150名	上20名		花園誠	こども学科
3/7	七生特別支援学校 発達支援	児童の評価と教員への指導	東京都	七生特別 支援学校	4名	0名		小橋一雄	作業療法学科
3/7	地域連携を中心とした ゼミナール活動	地域住民との交流、レクリエーションの実施	千住地域 公営団地自治会	千住地域 公営団地内 集会所	1年 40名	千7名		嵯崎京子 三木良子 浅沼太郎	医療福祉学科
3/7	学習指導支援	学習に困難を抱える子どもが複数いる 学級の観察と学級担任への指導	足立区立 江北小学校	同左	担任 教諭		当該学級 担任 管理職	石橋裕子	学校教育学科
3/8	中学生への性感染症 予防教育	中学3年生に対して、命の大切さと性感染症の実態と予防について講話する。	大田区立 志茂田中学校	志茂田 中学校 体育館	3年生 約120名	なし		齋藤益子	看護学科
3/9	中学生への生と性の教育	中学3年生に対して、命の大切さと生に関するグループ教育を行う。	足立区立 竹の塚中学校	足立区立 竹ノ塚 中学校 体育館	2年生 約140名	8名	看護学科 4年生有志	齋藤益子 富岡由美 志村智絵 岡潤子	看護学科
3/10	児童観察	クラス替えに向けた児童の実態を把握し、管理職等へ助言	足立区立 中川北小学校	同左	偶数 学年 各クラス		管理職 養護教諭	石橋裕子	学校教育学科
3/10	学習指導支援	学習に困難を抱える子どもが複数いる 学級の観察と学級担任への指導	足立区立 中川北小学校	同左	担任 教諭		当該 担任教諭	石橋裕子	学校教育学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
3/11	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
3/11	七生特別支援学校 発達支援	児童の評価と教員への指導	東京都	七生特別 支援学校	60名	7名		石井孝弘	作業療法学科
3/12	地域乗馬活動 障害児乗馬活動支援	障害児を持つ家族と乗馬療法に関する意見交換交流会、障害児の乗馬会支援	ホース パラダイス群馬	群馬県伊勢崎市					作業療法学科
3/12	山梨県立富士湧水の里 水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立 富士湧水の里 水族館	山梨県立 富士湧水の 里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
3/12	ふれあいの日	馬とのふれあい、引き馬による乗馬、餌あげ(にんじん)。	上野原市	うまセンター			うまセンター 委員会 ヤギ世話	今野直人	アニマルサイエンス学科
3/12	多摩動物公園 おえかきっす！	バツタの観察とぬりえ		帝京科学大学			動物園 研究部	佐渡友陽一	アニマルサイエンス学科
3/13	中学生への生と性の教育	中学3年生に対するいのちの大切さと性感染症予防教育を行う。	荒川区立 第五中学校	荒川区立 第五中学校 体育館	3年生 約100名	2名	看護学科 3年生 男子2名	齋藤益子 志村智絵 岡潤子	看護学科
3/14	みんなのひろば おひさま 勉強会	地域住民(山梨市)を対象とした足や腰の健康についての講義	NPO法人 地域ささえあい 虹の会	みんなの ひろば おひさま	30名		帝京科学 大学附属 帝京山梨 接骨院	戸部悠紀(付属 接骨院長)	柔道整復学科

月日	活動名	活動内容	連携機関	実施場所	対象者数	参加学生数	参加した課外活動団体	担当教員 (敬称略)	活動規模 (全学・学部・学科等)
3/18	上野原アドベンチャー	上野原市内の幼児、児童を対象に、野外での遊び活動の提供を行う		秋山温泉				青木直樹	こども学科
3/19	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	2名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
3/19	国営アルプスあづみの公園 もりの楽校	イベント講師	国営アルプスあづみの公園 (安曇野オオルリシンジミ保護対策会議)	国営アルプスあづみの公園 里山活性化ゾーン				江田慧子	学校教育学科
3/24	地域連携を中心としたゼミナール活動	地域住民との交流、レクリエーションの実施	千住地域 公営団地自治会	千住地域 公営団地内 集会所	1年 40名	千8名		宮本佳子 楠永敏恵	医療福祉学科
3/26	山梨県立富士湧水の里水族館ボランティア	二重回遊水槽エサやり体験イベントの進行または補助、貝殻工作体験の進行、常展示水槽や企画展示水槽の掃除または給餌、バックヤード水槽の掃除または給餌、ふれあいイベントの進行または補助、人工採卵や人工授精	山梨県立富士湧水の里水族館	山梨県立富士湧水の里水族館	来館者	1名	AQUASHIP	加賀谷玲夢	アニマルサイエンス学科 自然環境学科
3/27	せんじゅカフェ (認知症カフェ)	認知症をもつ人やその家族、学生、地域住民、専門職などが自由に交流できる場の提供	足立区 地域包括支援 センター千住本町	千住キャンパス 3号館	未定		看護学科 医療福祉学科	定村美紀子 糸井和佳	看護学科

地域連携研究投稿規程

本報告書は本学の地域連携活動に関する報告書として、帝京科学大学地域連携推進センターが発行する。本学の常勤及び非常勤の教職員（退職者を含む）および学生が投稿できる。投稿内容は、地域連携活動に関連する研究・教育・実践活動の報告、論文等とする。

1. 発 行

本誌は年 1 回発行する。

2. 投稿要領

- ・別ファイルで用意する Word のテンプレートを使用すること。
- ・報告本文の構成は、以下の構成を基本とする
タイトル
著者・所属
キーワード
はじめに
活動（研究）報告
結果と考察、まとめ
- ・写真や図表を Word に貼り付けた場合は、オリジナルのファイルも添付すること（例えば画像ファイルや Excel のファイル）。写真、図、表のファイルは、本文のどこに配置されるのか分かるようにファイル名を付け、フォルダに整理すること。
- ・使用するフォントは、MS 明朝と MS ゴシックを基本とする。
- ・その他、参考文献の記述の仕方などについては、本学紀要の投稿規程に準ずる。

3. その他

- ・地域連携推進センターの助成を受けた団体や個人は原則、本報告書に報告をすることとする。
- ・学生の投稿は、顧問の教員や指導教員等の閲読を受けてから投稿すること。
- ・地域連携推進センターの助成活動の報告については、ページ数を 2 ～ 6 ページの範囲とする。

以 上

編集委員

花園 誠、古瀬 浩史、石井 孝弘、和田 龍一、吉川 和幸
榊原 健太郎、小泉 亜希子、佐藤 仁紀

表紙デザイン

久保田 彩心（生命環境学部 アニマルサイエンス学科 4年）

地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 第1巻

発行日 平成 29 年 12 月 1 日

発 行 帝京科学大学

〒120-0045 東京都足立区千住桜木二丁目 2 番 1 号

TEL 03-6910-1010（代） URL <https://www.ntu.ac.jp>

編 集 帝京科学大学 地域連携推進センター 年報「地域連携研究」 編集委員会

印 刷 株式会社たけまる
